



TITLE:

『眞誥』 譯注稿(一)

AUTHOR(S):

「六朝道教の研究」 研究班

---

CITATION:

「六朝道教の研究」 研究班. 『眞誥』 譯注稿(一). 東方學報 1996, 68: 525-712

ISSUE DATE:

1996-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66768>

RIGHT:

## 『眞誥』譯注稿（一）

本號を第一回として數回にわたって分載する豫定の本稿は、京都大學人文科學研究所における共同研究班「六朝道教の研究」（一九八六年四月から一九九一年三月まで）、および「同（Ⅱ）」（一九九一年四月から一九九六年三月まで。班長はともに吉川忠夫）の成果報告の一部である。敢えて成果報告の一部と稱するのは、本研究班はそもそも『眞誥』の會讀と譯注の作成を主要な目的としたものの、すでに共同研究班員の執筆にかかる論文集として『中國古道教史研究』（同朋舎出版、一九九二年）を刊行しているからである。また、あらたに第二論文集の刊行を計畫しているからである。

周知のごとく、『眞誥』は、今日の南京市の東南の茅山を本據としたいいわゆる上清派遣教の宗師である陶弘景（四五六—五三六）の編纂にかかり、編纂が完了したのは五世紀の極末のことであったと推想されるが、その内容の中心をなすのは、『眞誥』なる者は眞人口授の誥なり」（『眞誥』卷一九「眞誥敘錄」とあるように、東晉の興

## 「六朝道教の研究」研究班

寧年間（三六三—六五）を中心に降臨した眞人たち、すなわち南嶽魏夫人をはじめとする道教の神々たちが、靈媒の楊羲を介して、許謐（一名は穆）と許翽父子に誥授した言葉の記録の集成にほかならない。護軍將軍の長史をつとめたことがあったが故に許長史とよばれる許謐、また丹陽郡から上計掾に推擧されたことがあったが故に許掾とよばれる許翽、この二人こそがいわば『眞誥』の主役なのであって、ごく簡約化すれば、神々が楊羲を介して與える誥授によって許謐と許翽を教育し、神仙の世界へと誘い導くというのが『眞誥』のメイン・テーマなのである。

ところで、それら誥授の記録は、許翽が太和五年（三七〇）に、ついで許謐が太元元年（三七六）にそれぞれ仙去すると、次第に散佚をはじめ、ある時にはその一部が焼き捨てられることすらあった。かく散佚の運命にあった記録の蒐集と編纂は、陶弘景に先立って、劉宋・南齊の道士の願歡によって手がけられ、それは『眞迹』と名

づけられた。『無上祕要』に『眞迹經』あるいは『道迹經』として引用されているのがそれである。しかしながら、顧歡による蒐集と編纂に少からざる不満を感じた陶弘景は、『眞迹』を基礎としつつも、江南の各地に散在する誥授の記録のさらに一層の蒐集につとめ、かくして「或いは五紙三紙一紙一片」（『眞誥鈔錄』）と表現されるそれらを、つまりごくごくの断片に至るまでを蒐集し集成してあらたに『眞誥』と名づけたのであった。

陶弘景がかくもそれらの蒐集に熱心であったのは、何よりも彼が所依とする上清經典が『眞誥』に登場する神々に由來するものであるからであって、そのことを彼は次のように述べている。「伏して上清眞經の出世の源を尋ぬるに、晉の哀帝の興寧二年（三六四）、太歲は甲子、紫虛元君・上眞司命・南嶽魏夫人下降し、弟子の瑯琊王司徒公府舍人の楊某（楊羲）に授け、隸字と作して寫出して以て護軍長史の句容の許某（許謐）并びに弟（弟）三息の上計掾の某某（許翹）に傳えしめしに始まる。二許（許謐と許翹）は又た更めて起寫し、修行して得道す。凡そ三君（楊羲と二許）の手書、今、世に見在する者、經傳は大小十餘篇、掾の寫多し。眞授は四十餘卷、楊の書多し」（卷一九「眞經始末」）。陶弘景をして誥授の記録の蒐集に驅り立てたのは、かかる宗教的情熱もさることながら、さらにまた自ら能書として知られ、書の鑑定にもすぐれた彼が、誥授を書寫した楊羲と許氏父子の書迹に魅せられていたからでもあった。とりわ

け彼が深く魅せられていたのは楊羲の書迹であり、次のような極めて高い評價を與えている。「三君の手迹を按ずるに、楊君の書最も工みにして、今ならず古ならず、大を能くし細を能くす。大較、都（都惜・都超）の法を祖效すと雖も、筆力規矩は二王（王羲之と王獻之）に並ぶ。而るに名の顯れざる者は、當に地（門地）微にして、兼ねて二王の抑うる所と爲るを以ての故なるべし」（『眞誥鈔錄』）。

『眞誥』は運象篇（翼眞檢篇によれば運題象）、甄命授、協昌期、稽神樞、闡幽微、握眞輔、翼眞檢の七篇をもつて構成され、今日のテキストでは、運象篇ないし運題象は四卷、甄命授は四卷、協昌期は二卷、稽神樞は四卷、闡幽微は二卷、握眞輔は二卷、翼眞檢は二卷のあわせて二十卷に分卷されている。七篇をもつて構成されるのは『妙法蓮華經』や『莊子』内篇の例にならうものであるという。また三言をもつて篇題とするのは緯書の例にならうものであるという。とするならば、第一篇の篇題は、翼眞檢の言うところに従って「運題象」とするのが正しいのであろう。これら七篇のうち、神々の誥授は運題象から闡幽微までの五篇であって、握眞輔篇には、楊羲と許氏父子による經典や世俗の書物の抄寫、彼らの夢の記録、あるいは彼らの尺牘などが集められている。また翼眞檢篇は、『眞誥』全體にわたる解題として陶弘景自らが撰述したものである。『眞誥』のテキストの隨處には注記が挿入され、それらはがんらい本文に屬するものと陶弘景によって施されたものとがあり、本文に屬する注

記は墨書細字、陶弘景によって施された注記のうち、「三君の手書や經中の雜事」を抄取したものは紫書大字、それ以外のものは朱書細字の區別があつたというが、今日のテキストではもはや墨書、紫書、朱書の區別がないのもとよりのこと、往々にして大字と細字の混同もあるようであつて、内容によって判別するよりほかに方法はない。

われわれが共同研究班の會讀のテキストとして『眞誥』を選んだのは、製作年代の定かではないものが少なくない道教文獻の中にあつて、『眞誥』の内容をなすのが四世紀の中葉における道教の神々の誥授であり、その編纂時期が五世紀の極末と明らかであつて、『眞誥』を読み解くことは、道教史研究にとつて、さらにひろげて言えば中國思想史研究にとつて、一つの確固たる橋頭堡を築き得ることが間違いないと考えたからである。しかしながら、『眞誥』は一人で読み解くにはなかなか手強いテキストである。『眞誥』に語られている教義や道術もさることながら、それらについて語る言葉ないし文章が難解なことに基づくところが大きい。「六朝通行のそれとは異種の文體。そのため、句讀を定めかねる場合すらけつして稀ではない。さらにまた特殊な言葉の使用。ある言葉の適確な意味をつきとめるべく他の使用例を検索するのはテキストを読むにあつての基本的にしてかつ常套的な方法であるが、しばしばの場合、この方法の適用を斷念せざるを得ない。恐らくは茅山で神降ろしが行

われた東晉期の口語・俗語を多くまじえるからであらう。それはあるいは茅山の神降ろしに参加した人たちの言語生活の反映でもあるのかも知れない。」かつて『中國古道教史研究』の序にこのように記したが、かかるテキストは、道教の專家はもとよりのこと、中國思想、歴史、文學の研究者がそれぞれに知識を總動員し、寄つてたかつて格闘するのがふさわしいであらう。共同研究班の参加者は出入りはあつたものの、常に二十名前後。隔週に開催される研究會では、擔當者が準備した譯注を素材として討議を行った。譯注を擔當したのは、赤松明彦、新井晉司、荒牧典俊、鵜飼光昌、愛宕元、釜谷武志、神塚淑子、龜田勝見、小南一郎、坂内榮夫、都築晶子、礪波護、原田直枝、深澤一幸、船山徹、松村巧、三浦國雄、三浦秀一、南澤良彦、釜谷邦夫、横手裕、吉川忠夫の二十二名である。ここにひとまず第一回として運題象篇の譯注を掲載するにあたっては、釜谷、横手、吉川の三人が再度の點檢を加え、整理を行った。

以下、本稿の凡例にかかわる事項を記しておく。

一、テキストには道藏本(『正統道藏』六三七—六四〇冊、「藏本」と略記)を用い、句讀を施す。その際、細字の注記はへくでくり、またがんらい本文に備わっていた「墨書細字」の注記と判斷されるものは《》でくくる。

二、關連の引用が他の文獻にある場合には、そのことを指示する。また、字句の異同のうち、兪安期本(「兪本」と略記)や學津討



原本〔學本〕と略記〕等によつて改めた場合には、その旨を注記する。

三、以上の後に現代日本語譯と注をならべる。注が既出されている場合には、煩を避けて繰り返し施すことはしない。

(吉川 忠夫)

眞話卷之一

運象篇第一

愕綠華詩<sup>(1)</sup>

神嶽排霄起、飛峯鬱千尋、寥籠靈谷虛、瓊林蔚蕭森、〔一〕〔此一字被墨濃黯、不復可識、正中抽一脚出下、似是羊字、其人名權〕生標美秀、弱冠流清音、棲情莊慧津、超形象魏林、揚彩朱門中、內有邁俗心。

我與夫子族、源冑同淵池、宏宗分上業、於今各異枝、蘭金因好著、三益方覺彌。

靜尋欣斯會、雅綜彌齡祀、誰云幽鑿難、得之方寸裏、翹想籠樊外、俱爲山巖士、無令騰虛翰、中隨驚風起、遷化雖由人、蓄羊未易擬、

所期豈朝華、歲暮於吾子。

愕綠華者、自云是南山人、不知是何山也、女子、年可二十、上下青衣、顔色絶整、以升平三年十一月十日夜降〔ムム〕〔剪缺此兩字、即應是羊權字〕、自此往來、一月之中、輒六過來耳、云本姓〔ム〕〔又剪除此一字、應是楊字〕、贈〔此〕〔此一字本是權字、後人黠作此字〕詩一篇、并致火澣布手巾一枚、金玉條脫各一枚、條脫乃太而異精好、神女語〔見〕〔此本是草作權字、後人黠作見字、而乙上之〕、「君慎勿泄我、泄我則彼此獲罪」、訪問此人、云「是九疑山中得道女羅郁也、宿命時、曾爲師母毒殺乳婦、玄州以先罪未滅、故令謫降於臭濁、以償其過、與〔權〕〔此權亦草作、故似前體而不被黯耳〕尸解藥、今在湘東山、〔本懸此中一寸〕此女已九百歲矣」。〔尋此應是降羊權、權字道興、忱之少子、後爲晉簡文黃門郎、即羊欣祖、故欣亦修道服食也、此乃爲楊君所書者、當以其同姓、亦可楊權相問、因答其事而疏說之耳、按升平三年是己未歲、在乙丑前六年、衆眞竝未降事〕

右三條楊君草書於紙上。

(1) この段、『雲笈七籤』卷九七粵綠華贈羊權詩三首並序、および『太平廣記』卷五七に見える。

眞誥卷一

運象篇第一

愕綠華の詩

神祕の嶽は天空をおし開いて聳え立ち、  
飛びたつ峰は千尋の空間にわだかまる。

ぼっかりと不思議な谷が空虚を開き、  
瓊の木々がひそやかに茂る。

「一」へこの一字は墨で濃く塗りつぶされていて、もう何の字かは分からなくなっているが、まん中に一本の足が長く下に延び出ていて、「羊」の字のようである。その人の名は權、生は際立ってすぐれた資質を備え、

若年にして清らかな評判が廣く傳えられております。

心を棲まわせているのは莊周と恵子とが問答をした水邊、  
政治の世界からは超越をして、

世に時めく一族の中にあつてひとときわ目立った存在ではあつても、  
胸中には俗世間を越えた心情を抱いておられます。

私はあなたとは同族であつて、

家系を遡れば同じ深い水源にたどりつきます。

大きな家系はすぐれた修行者に分かれたれて、

今ではそれぞれ異なった系譜に屬することになりました。

蘭のごとく香り金屬のように固い關係は二人のよしみによって明らかとなり、

三つの有益な友としての關係もいよいよ厚くなっていくようになります。

心の内に反芻しつつこうしてお會いできたことを喜び、

あなたとの結びつきがいつまでも長く續いてほしいものです。

ものごとの隠れた本質を見抜くのが困難だとはとんでもないこと、

心のあり方しだいではそれは感得できるのです。

閉じこめられた俗世のしがらみのかなたに心を馳せ、  
ともに山中に道を修する者となりましょう。

大空に羽ばたくべき翼が、  
中途で強風のために翻弄されるようなことになってはなりません。

超越的な世界に入るのは個々人の努力しだいとはいえ、

道を修することは羊が角を籬にひっかけるようになかなか困難なことなのです。

心に願っているのは朝の花のほかない美しさなどではありませ

ん。

末々まであなたと一緒にありたいと思うのです。<sup>(28)</sup>

愕綠華というのは、自ら言うところでは南山の人とのことであるが、それがどこの山であるのかは分からない。女性であって、年は二十歳ほど、上下ともに青い衣装<sup>(30)</sup>を着け、顔立ちはみごとに整っていた。升平三年(三五九)の十一月十日の夜に「ムム」へこの二字は切り取られているが、きつと「羊權」という字であろう」のもとに降った。それ以後、しばしばやって来て、一箇月のうちに六度も訪れた。もともとの姓は「ム」へこの一字も切り抜かれているが、きつと「楊」の字なのであらう<sup>(31)</sup>であると言ひ、「此」へこの「此」という字はもともと「權」の字であつたが、後の人が塗りつぶして「此」の字に作つた」に詩一篇を贈り、また火澣布の手巾一枚と、金と玉との條脫<sup>(32)</sup>それぞれ一つを與えた。條脫は、肉が厚くて特別に精巧なものであつた。神女は「見」へこの字は、もともと草書で「權」の字に書いてあつたのであるが、後の人が塗りつぶして「見」の字に作り、しかも倒置の印がついている」に語つた。「あなたは、くれぐれも私のことを人に漏らしてはなりません。私のことを漏らせば、もろとも罪せられることになりましょう」。

この神女のことをただしてみたところ、次のごとくであつた。「彼女は九疑山中にあつて道を得た女性の羅郁であつて、過去の世に、

師母<sup>(37)</sup>のために妊産婦<sup>(38)</sup>を毒殺したことがあつて、玄州の役所では、以前の罪が消えていないことから、臭濁の世界に島流しにして、その罪過を償わせたのである。<sup>(41)</sup>「羊」[權]へこの「權」の字も草書で書かれている。それで前の字體と似ているのであるが、ただ塗りつぶされてはいない」に尸解のための藥<sup>(42)</sup>を與えた。今は湘東山<sup>(43)</sup>にいる。へ元來、ここ<sup>(44)</sup>のところに一寸の間隔がある」彼女<sup>(45)</sup>はもう九百歳にもなる」。

へ考えてみるに、この記録は羊權のもとに降臨した時のものである。羊權の字は道輿、羊忱の末息子で、後に晉の簡文帝の黃門郎となつた。羊欣の祖父であつて、そうした關係から、羊欣も仙道を實修し服食を行つたのである。<sup>(46)</sup>この條が楊君(楊羲)によつて書かれているのは、(きつと愕綠華と彼が)同姓だからであらう。あるいは楊(羊)權がたずねたので、それでそのような事情を答えて、あらまし説いてきかせたのかも知れない。按ずるに、升平三年(三五九)は己未の歳であり、乙丑の歳(興寧三年、三六五)より六年前であつて、眞人たちは誰もまだ降臨することがなかつた

右の三條は、楊君が紙に草書體で書いたもの。

(1) 運象篇 藏本以外は運題象に作る。『眞誥』卷一九葉一表の「眞誥敘錄」にも「眞誥運題象第一」とあり、「此卷竝立辭表

- 意、發詠暢旨、論冥數感對、自相儔會、分爲四卷」と解説している。「運象」の語は、『關尹子』二柱「冥觀之以合彼之理、則象存矣、一運之象、周乎太空、自中而升爲天、自中而降爲地」。
- (2) 愕綠華 『眞誥』卷一九葉三表「愕綠華以升平三年降」。
- (3) 神嶽排霄起 曹植「遠遊詩」(『藝文類聚』卷七八)「靈輦戴方丈、神嶽儼嵯峨、仙人翔其隅、玉女戲其阿」。唐の用例であるが、劉長卿「登揚州西靈寺塔」(「稍登諸劫盡、若騁排霄翮」。
- (4) 飛峯鬱千尋 庾肅之「山贊」(『藝文類聚』卷七)「崑閬天竦五嶽雲停、飛峯紫蔚、辰秀太清」。孫綽「遊天台山賦」(『文選』卷一一)「建木減景於千尋、琪樹璀璨而垂珠」。
- (5) 寥籠靈谷虛 戴逵「山贊」(『藝文類聚』卷七)「蔚矣名山、亭亭洪秀、嵯峨積岨、寥籠虛岫」。『眞誥』卷三葉一二表「靈谷秀瀾榮、藏身栖巖京」。
- (6) 瓊林蔚蕭森 『眞誥』卷一三葉一〇裏「神虎洞瓊林、風雲合成一」。『上清僊府瓊林經』「玉珮金璫經曰、金璫九天之上、名曰虹映、一曰上清之館、色如白雲、形如玉山、有瓊林之宮」。潘岳「射雉賦」(『文選』卷九)「綠柏參差、文翮鱗次、蕭森繁茂、婉轉輕利」。
- (7) 羊權 『宋書』卷六二羊欣傳「羊欣、字敬元、泰山南城人也、曾祖忱、晉徐州刺史、祖權、黃門郎、父不疑、桂陽太守」。
- (8) 美秀 『左傳』襄公三十一年「子產之從政也、擇能而使之、
- 馮簡子能斷大事、子大叔美秀而文」、杜注「其貌美、其才秀」。
- (9) 弱冠流清音 『禮記』曲禮上「二十曰弱、冠」。陳琳詩(『藝文類聚』卷二八)「慙懷從中發、悲感激清音」。『眞誥』卷四葉六裏「妙唱不我對、清音與誰投」。
- (10) 棲情莊慧津 嵇康「養生論」(『文選』卷五三)「修性以保神、安心以全身、愛憎不棲於情、憂喜不留於意、泊然無感、而體氣和平」。『莊子』秋水「莊子與惠子遊於濠梁之上、莊子曰、鯈魚出遊從容、是魚之樂也、惠子曰、子非魚、安知魚之樂、莊子曰、子非我、安知我不知魚之樂、惠子曰、我非子、固不知子矣、子固非魚也、子之不知魚之樂全矣、莊子曰、請循其本、子曰、汝安知魚樂云者、既已知吾知之而問我、我知之濠上也」。劉孝標「廣絕交論」(『文選』卷五五)「想惠莊之清塵、庶羊左之微烈」。
- (11) 超形象魏林 『世說新語』文學「郭景純詩云、林無靜樹、川無停流、阮孚云、泓曄蕭瑟、實不可言、每讀此文、輒覺神超形越」。『周禮』天官大宰「正月之吉、始和、布治于邦國都鄙、乃縣治象之灋于象魏、使萬民觀治象、挾日而歛之」、鄭司農注「象魏、闕也」。
- (12) 揚彩朱門中 謝莊「月賦」(『文選』卷一三)「增華台室、揚采軒宮」。郭璞「遊仙詩」(『文選』卷二二)「京華遊俠窟、山林隱遯棲、朱門何足榮、未若託蓬萊」。『眞誥』卷三葉一裏「紫霞興朱門、香煙生綠窗」。

- (13) 遵俗 石崇「思歸引序」(『文選』卷四五)「余少有大志、夸邁流俗」。
- (14) 夫子 『世說新語』輕詆「孫長樂作王長史誄云、余與夫子、交非勢利、心猶澄水、同此玄味」。
- (15) 淵池 『抱朴子』嘉遜「摧高則峻極頽淪、竦卑則淵池嵯峨」。
- (16) 異枝 『三天內解經』卷上「蓋三道同根而異支者、無爲大道清約大道佛道、此三道同是太上老君之法、而教化不同」。
- (17) 蘭金 『周易』繫辭傳上「子曰、君子之道、或出或處、或默或語、二人同心、其利斷金、同心之言、其臭如蘭」。傅亮「爲宋公求加贈劉前軍表」(『文選』卷三八)「臣契闊屯夷、旋觀終始、金蘭之分、義深情感」。
- (18) 三益 『論語』季氏「益者三友、損者三友、友直、友諒、友多聞、益矣、友便辟、友善柔、友便佞、損矣」。盧諶「答魏子悌」(『文選』卷二五)「寄身蔭四嶽、託好憑三益」。
- (19) 靜尋 庾信「周大將軍開嘉公柳邕墓誌銘」(『文苑英華』卷九四八)「乃除永化縣令、靜尋欹案、或吟長安之遠、乍撫鳴琴、不以河陽爲陋」。
- (20) 幽鑒 竺道爽「檄太山文」(『弘明集』卷一四)「貴郎導師、勝子五百、幽鑒天命、來投王化」。
- (21) 得之方寸裏 『列子』仲尼「吾見子之心矣、方寸之地虛矣」。『周氏冥通記』卷二「得道悉在方寸之裏耳、不必須形勞神損也」。
- (22) 『真誥』卷四葉七表「靈遷方寸裏、一躍登太微」。
- (22) 翹想籠樊外 徐陵「與李那書」(『文苑英華』卷六七九)「脫惠箋繪、慰其翹想」。陶淵明「歸園田居」其一「久在樊籠裏、復得返自然」。『真誥』卷二葉一二裏「無祈盼於籠樊、哀樂所以長去」。
- (23) 山巖 『晉書』卷五一摯虞傳「河濱山巖豈或有懷道釣築而未感於夢兆者乎」。『真誥』卷二葉一五表「是以古之學者、握玄筌以藏領、匿穎鏡於紛務、凝神乎山巖之庭、頤眞於逸谷之津」。
- (24) 騰虛翰 『洞冥記』(『太平御覽』卷八九七)「脩彌國有馬如龍、騰虛逐日」。謝靈運「山居賦」(『宋書』卷六七)「觀騰翰之顛頤、視鼓鯢之往還」。
- (25) 驚風 司馬相如「上林賦」(『文選』卷八)「然後揚節而上浮、凌驚風、歷駭姦、乘虛無、與神俱」。
- (26) 遷化 曹丕「典論論文」(『文選』卷五二)「日月逝於上、體貌衰於下、忽然與萬物遷化、斯志士之大痛也」。『真誥』卷一六葉一裏注「有先爲地下主者乃進品者、有先經鬼官乃遷化者」。
- (27) 蕃羊 『周易』大壯九三「羝羊觸藩、羸其角」。
- (28) 朝華 王昶「戒子書」(『三國志』卷二七)「夫物速成則疾亡、晚就則善終、朝華之草、夕而零落、松柏之茂、隆寒不衰」。『真誥』卷七葉一三裏「朝華煥晨井、九蓋傾青雲」。
- (29) 歲暮於吾子 『漢書』卷三六劉向傳「今(周)堪年衰歲暮、

恐不得自信、排於異人、將安究之哉。『真誥』卷一葉一〇裏「吾子加之至慮、散蕩斯念、宜慎之耳」。

- (30) 青衣 『周氏冥通記』卷二「六月十一日夜、有一女人來嶺裏、形貌妍麗、作大髻、通青衣」。

- (31) 火幹布手巾 『三國志』齊王芳紀「景初三年二月、西域重譯獻火浣布、詔大將軍大尉臨試、以示百寮」、裴注引『搜神記』「崑崙之墟、有炎火之山、山上有鳥獸草木、皆生於炎火之中、故有火浣布、非此山草木之皮裘、則其鳥獸之毛也。『真誥』卷九葉三裏「先以手巾若厚帛、拭項中四面及耳後」。

- (32) 條脫 繁欽「定情詩」(『玉臺新詠』卷一)「何以致契闊、繞腕雙跳脫」。

- (33) 神女 宋玉「神女賦」(『文選』卷一九)「其夜王寢、果夢與神女遇、其狀甚麗。『真誥』卷一葉一一裏「紫微王夫人見降、又與一神女俱來」。

- (34) 訪問 『北史』卷五一齊趙郡王叡傳「年至四歲、未嘗識母、其母魏華陽公主也、其從母姊鄭氏戲謂曰、汝是我姨兒、何倒親游氏、叡因訪問、遂失精神」。

- (35) 九疑山中得道女羅郁 『山海經』海內經「南方蒼梧之丘、蒼梧之淵、其中有九疑山、舜之所葬、在長沙零陵界中」、郭注「山今在零陵營道縣南、其山九谿皆相似、故云九疑」。『抱朴子』對俗「夫得道者、上能竦身於雲霄、下能潛泳於川海」。『真靈位業

圖』第六左位地仙散位「九疑山女真羅郁」、注「今在湘東山」。

- (36) 宿命 『周氏冥通記』卷二「若生在中國、知有道德、人身完備、才明行篤者、皆宿命有福德也」。『真誥』卷三葉一七表「其勸獎也、標明得道之妙致、其檢戒也、陳宿命之本迹」。

- (37) 師母 『上清黃庭內景經』脾長章第十五(『雲笈七籤』卷一)「道父道母對相望、師父師母丹玄鄉」。

- (38) 乳婦 『抱朴子』遐覽「其經曰、家有三皇文、辟邪惡鬼溫疫氣、橫殃飛禍、若有困病垂死、其信道心至者、以此書與持之、必不死也、其乳婦難艱絕氣者持之、兒即生矣」。

- (39) 玄州 玄洲に同じ。『上清外國放品青童內文』卷下「北方去中國(分)五萬里外、名鬱單、下極朔陰鈎陳之庭、國名旬他羅之國、一名天鏡之國、國外則有玄洲、方七千二百里、四面是海、去岸三十六萬里、上有太玄都、仙伯眞公所治。『上清後聖道君列紀』「玄洲亦有黃金刻名之籍、不學而得尸解主者、若學得白日放尸之仙也」。『真誥』卷二〇葉一八裏「王仲甫亦白日升天、今在玄州受書爲中嶽眞人、領九玄之司」。

- (40) 謫降於臯濁 『雲笈七籤』卷二八二十四治并序「第一陽平治：少年曰、我陽平洞中仙人耳、因有小過、謫於人間、不久當去」。

- (41) 償其過 『老君音誦誡經』「若有罪重之者、轉生蟲畜、償罪難畢」。

(42) 尸解藥 『抱朴子』論仙「按仙經云、上士舉形昇虛、謂之天仙、中士遊於名山、謂之地仙、下士先死後蛻、謂之尸解仙」。

尸解については『眞誥』卷四、『雲笈七籤』卷八四などに詳しい。『眞誥』卷四葉一七表「其用他藥得尸解、非是用靈丸之化者、皆不得反故鄉、三官執之也」。

(43) 湘東山 注35参照。

(44) 欣亦修道服食 『宋書』卷六二羊欣傳「羊欣、字敬元、泰山南城人也、素好黃老、常手自書章、有病不服藥、飲符水而已、兼善醫術、撰藥方十卷」。『史記』卷六三老子傳「蓋老子百有六十餘歲、或言二百餘歲、以其修道而養壽也」。『文選』卷五三「呼吸吐納、服食養身、使形神相親、表裏俱濟也」。『華陽隱居本起錄』(『雲笈七籤』卷一〇七)「(陶弘景)父諱貞寶、字國重、善藥錄書、家貧、以寫經爲業、一紙直價四十、書體以羊欣蕭思話法」。

南嶽夫人與弟子言、書識如左、(弟子即楊君自稱也、此來眞似是集洞宮時、所以司命最在端、當爲主人故也、夫人向楊說次第位號如此、非降楊時也)

東嶽上眞卿司命君

東宮九微眞人金闕上相青童大君

蓬萊右仙公賈寶安(鄭人、自此後皆是稱諸眞人之字、非其人名也、氏族亦見世道書傳中也)

清虛小有天王王子登(案青童高尊、乃可不敢稱諱字、此清虛是南嶽之師、尙稱字、獨不顯茅司命字、亦爲難詳也)

桐柏眞人右弼王領五嶽司侍帝晨王子喬

青蓋眞人侍帝晨郭世幹(衛人)

戎山眞人太極右仙公范伯華(幽人)

少室眞人北臺郎劉千壽(沛人)

嶠冢眞人左禁郎王道寧(常山人)

大梁眞人魏顯仁(長樂人)

岷山眞人陰友宗

陸渾眞人太極監西郭幼度

九嶷山侯張上貴(楚人)

岱宗神侯領羅鄧右禁司鮑元節(東海人)

華山仙伯秦叔隱(馮翊人)

葛衍眞人周季通

陽洛眞人領西歸傳淳于太玄(西域人)

潛山眞伯趙祖陽(涿郡人)

句曲眞人定錄右禁郎茅季偉

鬱絕眞人裴玄人

白水仙都朱交甫

三官保命司茅思和

太和真人山世遠

右二十三真人坐、西起南向東行。〈此於禮乃是南向以西方爲上、而後女眞東向、則應起南、今反北者、當是以側近高眞故也〉

太和靈嬪上眞左夫人

北海六微玄清夫人

北漢七靈右夫人

太極中華右夫人

紫微左宮王夫人

滄浪雲林右英夫人〈案右英是紫微姊、今反在後、當位業有升降耳〉

上眞司命南嶽夫人〈此卽魏夫人也、自說故不稱姓〉

八靈道母西嶽蔣夫人〈案有數號者、竝以多爲高、西王母稱九靈、

則八靈宜在七靈前、而今返在後者、亦所未詳、又受讀黃庭事云、北

嶽蔣夫人、與今不同〉

上眞東宮衛夫人

方丈臺昭靈李夫人

紫清上宮九華安妃

朱陵北絕臺上嬪管妃

北嶽上眞山夫人

西漢夫人

長陵杜夫人

右十五女眞東向坐、北起南行。〈說此事時、雖不記月日、不知在何年、既是衆眞名位、故出以居前、按衆眞位號、前云以爲高者、猶今世之徽號也〉

南嶽夫人<sup>(1)</sup>が弟子のために語つて次のように書きつけさせられた。

〈弟子とは楊君の自稱である。この條は、真人たちが洞宮<sup>(2)</sup>(華陽洞天)に集まつた時のものようである。司命君が最も端にいるのは、彼がその席の主人であつたからであらう。南嶽夫人が楊君に説明した真人たちの順番、位と稱號とが以下のようなのであつて、楊君のもとに降臨した時のものではないのである〉

東嶽上眞卿の司命君<sup>(1)</sup>

東宮九微真人・金闕上相の青童大君<sup>(3)</sup>

蓬萊右仙公の賈寶安<sup>(4)</sup>・鄭の人。これより以後は、みな真人たちの字を稱している。その人の本名ではないのである。彼らの氏素姓については、世間の書物にも見えてゐる<sup>(1)</sup>

清虛小有天王の王子登<sup>(5)</sup>〈按ずるに、青童君は高貴な身分にあることからその諱と字を避けて稱しようとしなかつたのであらうが、この清虛真人は南嶽夫人の師でありながらもその字を稱している。ただ茅司命君の字だけを明らかにしていないのは、これもよく分から



ぬことである

桐柏真人・右弼王・領五嶽司・侍帝晨の王子喬<sup>(9)</sup>

青蓋真人・侍帝晨の郭世幹<sup>(10)</sup>〈衛の人〉

戎山真人・太極右仙公の范伯華<sup>(11)</sup>〈幽の人〉

少室真人・北臺郎の劉千壽<sup>(12)</sup>〈沛の人〉

嶠冢真人・左禁郎の王道寧<sup>(13)</sup>〈常山の人〉

大鑿真人の魏顯仁<sup>(14)</sup>〈長樂の人〉

岷山真人の陰友宗<sup>(15)</sup>

陸渾真人・太極監の西郭幼度<sup>(16)</sup>

九疑山侯の張上貴<sup>(17)</sup>〈楚の人〉

岱宗神侯・領羅酆右禁司の鮑元節<sup>(18)</sup>〈東海の人〉

華山仙伯の秦叔隱<sup>(19)</sup>〈馮翊の人〉

葛衍真人の周季通<sup>(20)</sup>

陽洛真人・領西歸傳の淳于太玄<sup>(21)</sup>〈西域の人〉

潛山眞伯の趙祖陽<sup>(22)</sup>〈涿郡の人〉

句曲真人・定錄右禁郎の茅季偉<sup>(23)</sup>

鬱絶真人の裴玄人<sup>(24)</sup>〈仁〉

白水仙都の朱交甫<sup>(25)</sup>

三官保命司の茅思和<sup>(26)</sup>

太和真人の山世遠<sup>(27)</sup>

右の二十三人の真人の坐席は、西から始まって南に向いて、東へ

順にならぶ。〈これは、禮において、南に面する場合には、西を上席とするからである。ただ、次の女眞たちは東を向いているのだから、南から始まって順にならぶはずであるのに、今ここでは逆に北から始まっているのは、そちらの方が高貴な真人に近いからなのであろう〉

太和靈嬪の上眞左夫人<sup>(30)</sup>

北海の六微玄清夫人<sup>(31)</sup>

北漢の七靈右夫人<sup>(32)</sup>

太極の中華右夫人<sup>(33)</sup>

紫微左宮の王夫人<sup>(34)</sup>

滄浪雲林の右英夫人<sup>(35)</sup>〈按ずるに、右英夫人は紫微夫人の姊である

のに、ここではかえって後に位置している。きっとその位と修業と

にランクの違いがあったものであろう〉

上眞司命の南嶽夫人<sup>(37)</sup>〈これが魏夫人である。自分が話しているの

で、姓を稱さないのである〉

八靈道母の西嶽蔣夫人<sup>(38)</sup>〈按ずるに、數を冠した稱號を持つ者は、

いずれもその數が多いほど高位なのであって、西王母は九靈と稱し

ている。そうだとすれば、八靈蔣夫人は七靈右夫人の前にあるべき

であるのに、ここではかえって後にあるのも、これまたよく分から

ぬ點である。また『黃庭經』の讀み方について教えを受けたところ

では、「北嶽蔣夫人」と言っていて、こと同じでない」

上眞・東宮の衛夫人<sup>(41)</sup>

方丈臺の昭靈李夫人<sup>(42)</sup>

紫清上宮の九華安妃<sup>(43)</sup>

朱陵北絶臺の上嶺の管妃<sup>(44)</sup>

北嶽上眞の山夫人<sup>(45)</sup>

西漢夫人<sup>(46)</sup>

長陵の杜夫人<sup>(47)</sup>

右の十五人の女の眞人たちは、東を向いて坐り、北から始まって順に南へとならぶ。このことを説いた時については、月日が記されておらず、何年のことであるか分からないが、ここに眞人たちの名と位とが示されているので、取り出してこの書物の初めの部分に置いた。按ずるに、眞人たちの位と稱號について、先に「數が多いほど」高位とみなす」と言っているのは、ちょうど今の世間の名譽稱號と同じなのである」

(1) 南嶽夫人 顏眞卿「魏夫人仙壇碑銘」「夫人諱華存、字賢安、

任城人、晉司徒劇陽文康公舒之女也、師于小有清虛眞人王褒。

『眞靈位業圖』第二女眞位「紫虛元君領上眞司命南嶽魏夫人」、

注「諱華存、字賢安、小有王君弟子、楊君師」。

(2) 洞宮 『無上祕要』卷四靈山品「太无天中有峨嵋山、上有洞

宮玉戶、諸得眞仙道者、名刊於其上、右出玉眞大洞眞經」。『眞

誥』卷一葉六裏「句曲之洞宮有五門」。

(3) 位號 『史記』卷九三韓王信傳「十一年春、故韓王信復與胡

騎入居參合、距漢、漢使柴將軍擊之、遣信書曰、陛下寬仁、諸

侯雖有畔亡、而復歸、輒復故位號、不誅也」。『無上祕要』卷五

○塗炭齋品「次晝則向西、夜則向北、各散髮泥頭、衆官復立、

各稱位號」。

(4) 東嶽上眞卿司命君 『眞靈位業圖』第二左位「司命東嶽上眞

卿太元眞人茅君」、注「大茅君、諱盈、字叔申」。『神仙傳』茅君

「茅君者、幽州人、學道於齊二十年」。『太元眞人東嶽上卿司命

眞君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「祚有三子、長子諱盈、字叔

申、次子諱固、字季偉、小子諱衷、字思和」。

(5) 東宮九微眞人金闕上相青童大君 『無上祕要』卷二・三界

宮府品「方諸青宮、右上相青童君治於其內、宮中北殿上有玉架、

架上有學仙簿錄及玄名年月日深淺、金簡玉札有十萬篇、領仙玉

郎典之、右出洞眞經及道迹眞迹經」。『眞靈位業圖』第二左位「東

海王青華小童君」。

(6) 蓬萊右仙公賈寶安 『眞靈位業圖』第四左位「蓬萊右公賈保

安」。『眞誥』卷五葉一五表「仙有左右府、而有左右公左右卿左

右大夫左右御史也、若得太極隱芝服之、便爲左右仙公及眞人

矣」。

- (7) 世道書傳 『列子』楊朱「世道之安危、人理之悔吝」。『後漢書』列傳三七班超傳「有口辯而涉獵書傳」。

- (8) 清虛小有天王王子登 『雲笈七籤』卷一〇六に『清虛真人王君內傳』(弟子南嶽夫人魏華存撰)あり。『眞靈位業圖』第二右位「右輔小有洞天太素清虛真人四司三元右保公王君」、注「諱褒、魏夫人師、下教矣」。『元始上眞衆仙記』「王子登爲小有天王、治王屋山」。『眞誥』卷五葉一四裏「王屋山、仙之別天、所謂陽臺是也、…陽臺是清虛之宮也」。

- (9) 桐柏真人右弼王領五嶽司侍帝晨王子喬 『列仙傳』(『雲笈七籤』卷八五)「王子喬者、周靈王太子晉也」。『元始上眞衆仙記』「王子喬爲金闕侍中、治桐柏山」。『眞靈位業圖』第二右位「右輔侍帝晨領五嶽司命右弼桐柏真人金庭宮王君」、注「諱晉、靈王太子、下教」。『眞誥』卷三葉二表「王子晉、父周靈王、有子三十八人、子晉、太子也、是爲王子喬」。

- (10) 青蓋真人侍帝晨郭世幹 『眞靈位業圖』第二左位「侍帝晨青蓋真人郭君」、注「名世幹」。

- (11) 戎山真人太極右仙公范伯華 『眞靈位業圖』第三右位「戎山真人右仙公范伯華」。

- (12) 少室真人北臺郎劉千壽 『眞靈位業圖』第四左位「少室山伯北臺郎千壽」。

- (13) 嶠冢真人左禁郎王道寧 『眞靈位業圖』第四左位「嶠冢真人右禁郎王道寧」。

- (14) 大梁真人魏顯仁 『眞靈位業圖』第四左位「大梁真人魏顯仁」。

- (15) 岷山真人陰友宗 『眞靈位業圖』第四右位「岷山真人陰友宗」。

- (16) 陸渾真人太極監西郭幼度 『眞靈位業圖』第三右位「陸渾真人太極監西郭幼度」。『紫陽真人內傳』「乃登陸渾山、潛入伊水洞室、遇李子耳、受隱地八術」。

- (17) 九疑山侯張上貴 『眞靈位業圖』第四左位「九疑仙侯張上貴」。

- (18) 岱宗神侯領羅鄴右禁司鮑元節 『眞靈位業圖』第六左位「岱宗神侯領羅鄴右禁司鮑元節」。羅鄴については、『眞誥』卷一五闡幽微篇に詳しい。

- (19) 華山仙伯秦叔隱 『眞靈位業圖』第四左位「華山仙伯秦叔隱」。

- (20) 葛衍真人周季通 『眞靈位業圖』第四左位「葛衍真人周季通」。『紫陽真人內傳』「紫陽真人、本姓周、諱義山、字季通、汝陰人也、漢丞相周勃七世之孫」。『清虛真人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一〇五)「西玄者、葛衍山之別名、葛衍有三山相連、西爲西玄、東爲鬱絕根山、中央名葛衍山、三山有三府、名曰三宮、西玄山爲清靈宮、葛衍山爲紫陽宮、鬱絕根山爲極眞宮」。

- (21) 陽洛真人領西歸傳淳于太玄 『眞靈位業圖』第三右位「陽谷真人領西歸傳淳于太玄」。『紫陽真人內傳』「乃登陽洛山、遇幼陽君、受青要紫書三五順行」。

- (22) 潛山眞伯趙祖陽 『眞靈位業圖』第四左位「潛山眞伯趙祖陽」。
- (23) 句曲眞人定錄右禁郎茅季偉 『太元眞人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「仙道成矣、後授紫素之書各百字、以付固衷、紫素文曰、太上有命、天載眞書、言咸陽牢固、家于南關、厥字季偉、受名當仙、位爲定錄、兼統地眞、治丹陽句曲之山、固其昃之、動靜察聞」。
- (24) 鬱絕眞人裴玄人 『雲笈七籤』卷一〇五に「清靈眞人裴君傳」あり。『眞靈位業圖』第三右位「鬱絕眞人裴玄仁」。
- (25) 白水仙都朱交甫 『眞靈位業圖』第六左位「白水仙都朱交甫」。
- (26) 三官保命司茅思和 『太元眞人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「又曰、盈固弟衷、挺業該清、雖晚反正、思微徹誠、斷鹹六天、才穎標明、今屈司三官保命、建名總括岱宗、領死記生、位爲地仙九宮之英、勸教童蒙、開道方成、教訓女官、授諸妙靈、蒞治百鬼、典崇校精、開察水源江海流傾、封掌金谷、藏錄玉漿、監植龍芝洞草夜光、治于良常之山、帶北洞之口、鎮陰宮之門也」。
- (27) 太和眞人山世遠 『眞靈位業圖』第四左位「太和眞人山世遠」。
- (28) 此於禮乃是南向以西方爲上 『禮記』曲禮上「席南鄉北鄉、以西方爲上、東鄉西鄉、以南方爲上」。
- (29) 高眞 『道教義樞』卷一位業義「太眞科云、小乘仙有九品、一者上仙、二者高仙、…中乘眞有九品、一者上眞、二者高眞、三者太眞、四者神眞、五者玄眞、六者仙眞、七者天眞、八者靈眞、九者至眞、大乘聖有九品、一者上聖、二者高聖…」。
- (30) 太和靈嬪上眞左夫人 『眞靈位業圖』第二女眞位「太和上眞左夫人」。
- (31) 北海六微玄清夫人 『眞靈位業圖』第二女眞位「北海六微玄清夫人」。
- (32) 北漢七靈右夫人 『眞靈位業圖』第二女眞位「北漢七靈右夫人」。
- (33) 太極中華右夫人 『眞靈位業圖』第二女眞位「太極中華右夫人」。
- (34) 紫微左宮王夫人 『眞靈位業圖』第二女眞位「紫微左宮王夫人」、注「諱清娥、字愈音、阿母第二十六女也」。
- 葉七表「南嶽夫人見告云、紫微左夫人王諱清娥、字愈意、阿母第二十女也、鎮羽野玄壟山、主教當得成眞人者」。

(35) 滄浪雲林右英夫人 『真靈位業圖』第二女眞位「滄浪雲林右英王夫人」。『真誥』卷二葉一一表「南眞說云、是阿母第十三女王媚蘭、字申林、治滄浪山、受書爲雲林夫人」。

(36) 位業 『真誥』卷一九葉一表注「稽神樞第四、測眞仙位業、領理所闕」。『道教義樞』卷一位業義「義曰、位業者、登仙學道、階業不同、證果成眞、高卑有別、釋曰、位是階序之名、業是德行之目」。

(37) 司命 張衡「思玄賦」(『文選』卷一五)「死生錯其齊兮、雖司命其不啻」、李善注「東方朔曰、司命之神、摠鬼錄者」。

(38) 八靈道母西嶽蔣夫人 『真靈位業圖』第二女眞位「八靈道母西嶽蔣夫人」。

(39) 西王母稱九靈 『真靈位業圖』第二女眞位「紫微元靈白玉龜臺九靈太眞元君」。

(40) 受讀黃庭事 『真誥』卷一五葉一〇表「山世遠受孟先生法、暮臥、先讀黃庭內景經一過乃瞑、使人魂魄自制鍊、但行此道二十一年、亦仙矣、是爲合萬過也、得三四過乃佳、北嶽蔣夫人云、讀此經亦使人無病、是不死之道也」。『後漢書』列傳七四班昭傳「時漢書始出、多未能通者、同郡馬融伏於閣下、從昭受讀」。

(41) 上眞東宮衛夫人 『真靈位業圖』第二女眞位「上眞東宮衛夫人」。

(42) 方丈臺昭靈李夫人 『真靈位業圖』第二女眞位「方丈臺昭靈

李夫人」。『真誥』卷三葉一表「北元中玄道君李慶賓之女、太保玉郎李靈飛之小妹、受書爲東宮靈照夫人、治方丈臺第十三朱館中」。

(43) 紫清上宮九華安妃 『真靈位業圖』第二女眞位「紫清上宮九華眞妃」、注「姓安、晉朝降於茅山」。『真誥』卷一葉一二裏「紫微夫人曰、此是太虛上眞元君金臺李夫人之少女也、太虛元君昔遣詣龜山學上清道、道成、受太上書、署爲紫清上宮九華眞妃者也、於是賜姓安名鬱嬪字靈籊」。

(44) 朱陵北絕臺上嬪管妃 『真靈位業圖』第二女眞位「朱陵北絕臺上嬪管妃」。

(45) 北嶽上眞山夫人 『真靈位業圖』第二女眞位「北嶽上眞山夫人」。

(46) 西漢夫人 『真靈位業圖』第二女眞位「西漢夫人」。

(47) 長陵杜夫人 『真靈位業圖』第二女眞位「長陵杜夫人」。

(48) 徽號 『晉書』卷二一禮志下「哀帝卽位、欲尊崇章皇太妃、尚書僕射江彪議曰、虞舜體仁孝之性、盡事親之禮、貴爲天王富有四海、而瞽叟無立錫之地、一級之爵、寧當忍父卑賤、不以徽號顯之、豈不以子無爵父之道、理窮道屈、靡所厝情者哉」。

六月二十一日夜、定錄問云、「許長史、欲云何尋道」、登答勸修眞

誠之意、定録又言、「昔有趙叔臺王世卿、亦言篤學、而竟不如人意、<sup>(1)</sup>遂爲北明公府所引」。へ此是乙丑年六月也、自此前唯有六月十五日定録授、是答長史書論茅山中事、此前又已有一授、不記何月日、竝在第四卷中、自餘無有先此者、北明公府、鄴都宮中官屬也」

昔扉廓天津、採華赤丘、是時聲穎靈袂、蒙塵華「喬」へ此即應是說初降華僑事、字少倚人、發煥秀山、高說延霄、自謂玄響所振、無往不豁、既濯以靈波、實望與物榮菴、既未能暢業駢羅、遊岫逐逸、然後知悟言之際、應玄至少、於是佛「音弗」駕而旋、偃靜葛臺、夫玄刃無親、流鑒通眞、若以雲壁一往、想齊獨邁、俯自啓灑、動應潛逸、始乃吾等竝有欣慨耳、往見況意、相知篤、末書云、「伏覽聖記、事跡淵妙、金策素著、青録玄定、遂跨塵俗、逍遙紫陽、何蕭蕭之清遠、眇眇之眞貴哉、若能者矣、請借來喻」、又云、「得道之階、錯厲精神、靖躬信宿、洗誠求矜」、如斯而言、道已邇也、然晝夜之間、宜篤經營、乃後得手結天維、足浮靈網、心遊太空、目擊洞房、不待久日也、若五情愆波、三魂越吝、於是三眞舞劍、黃闕捷關耳、可不力之、可不力之。

六月二十二日夜鷄鳴、喻書此、紫陽旨也。

右二條有長史寫。

(1) 『眞誥』卷一七葉一一表注の引用では、「如」を「知」に作る。

六月二十一日の夜、定録君がたずねられた。「許長史(許謐)よ、お前はどのようにして道を尋ね求めようとしておるのか。すぐさま、心をこめて眞誠を修めているとの旨を答えた。定録君が重ねて言われた。「昔、趙叔臺と王世卿という者がいた。彼らも心をこめて道を學んでいると言ってはいたが、結局は思いどおりにはならず、北明公の役所<sup>(1)</sup>に連れて行かれることとなってしまった」。へこれは乙丑の年(興寧三年、三六五)の六月のことである。これに先立つものとしては、六月十五日の定録君の誥授<sup>(2)</sup>があるだけで、それは許長史の手紙に答えて、茅山の洞天中のことを論じたものである。それより先に、さらにすでに誥授が一度あったが、何月何日のことであつたかは記されていない。これらはみな第四卷に收められている。<sup>(3)</sup>ほかに、これらより先立つ記事はない。北明公の役所とは、鄴都宮中の官僚組織である<sup>(4)</sup>。

かつて天の渡し場をからりと開き、赤丘に華を摘んでいたが、その時、評判高い天上の衣をもって華「喬」のもとに降つて俗塵にまみれへこれは、初めて華僑のもとに降つた時のことを説くものであ

るに違いない。「僑」の字は人偏を缺いている、すぐれた峰を輝かし、高い道理を説いて天空にひろがった。自ら考えるには、奥深い道理が世に伝えられる時、向かうところすべてからりと障害がないであろう。靈妙な流れで身を洗い、まこと、すべての者ととも十分に生命力を發揮したいと願った。しかしながら、あなたの神仙たるべき業を、私とならぶまでに十分に伸ばして、靈山に遊んでその楽しみをとすることはまだできず、そこで知ったのは、二人して楽しく語りあう時にも、深い道理に感應する者は極めて少いということ。そこで車を佛へ音は弗へらせて天上にもどり、葛臺において心靜かに過すこととした。そもそも心中に奥深い刃が得られるかどうかについては、特にえこひいきをすることはなく、隱遁者や眞人たちに遍く目を配るのだ。もし雲おく岩壁に一途に思いをかけ、ひとり神仙世界を目指して行ってしまった者たちの後をたどろうとしつつ、自ら心を開き洗い、その生活態度がすべてにわたって世捨て人としてふさわしい者であってはじめて、われわれは喜びと感動を分かちあうことができるのだ。先にお氣持をお傳えいだいたが、理解しあうこと深いと申せよう。その手紙の最後には、次のようにあった。「聖なる記録を拜見したところ、(あなたの)これまでになしてこられた行いは深く玄妙であって、黄金の策書にかねてその名が記され、青い名簿にも不思議な定めとして登録されており、かくて汚濁の俗世間を超越し、紫陽宮に逍遙はれることになりました。

なんと靜まりかえった天上世界は清らかで遙かであり、はてしなくひろがる大空は眞であり氣高いことか。もし、私にも可能であれば、これからお教えをいただけますように」。また次のようにもあった。「道を得るための階梯は、精神を研ぎすまし、四六時中おのれを清らかに保ち、誠を盡くして神仙たちから哀れみをかけられるのを求めることです」。このように言っておるのであれば、道はもう近くにあるのである。それならば、眞夜中であっても、修行のために心をめぐらすべきだ。そのようにしてはじめて手は天の維を握り、足を不思議な網の上に運んで(天へと昇り)、心は大空に遊んで、目の前にありありと洞房を見ることがも遠い先のことでないであろう。もし五情が止めどもなく波立ち、三魂が勝手氣ままに振舞うと、三眞は劍を振って息の根を斷ち、黄闕への道もまたたくまに閉ざされてしまうのだ。努力せずしてよいものだろうか。努力せずしてよいものだろうか。

六月二十二日の夜、鶏鳴の時に諭してこれを書かせられた。紫陽眞人のお言葉である。

右の二條は許長史の寫しがある。

(1) 眞誠 『周氏冥通記』卷四「世路多淫濁、眞誠不可搜」。『眞

- 誥』卷二葉一九裏「苟眞誠未一、道亦無私也」。
- (2) 趙叔臺 『眞靈位業圖』第七左位「趙叔臺」。
- (3) 王世卿 『眞靈位業圖』第七左位「王世卿」、注「未顯」。
- (4) 北明公府 『眞誥』卷一六葉一〇裏「夫有上聖之德、既終、皆受三官書爲地下主者、一千年乃轉補三官之五帝、或爲東西南北明公、以治鬼神」。
- (5) 六月十五日定錄授 『眞誥』卷一一葉一表「葉一七表の誥授のこと。葉一七表「右定錄中君答長史前書說句曲山事、訖此」。
- (6) 竝在第四卷中 第四卷とは七卷本の卷數であり、稽神樞篇のこと。
- (7) 鄴都宮中官屬 卷一五闡幽微篇に詳しい。
- (8) 扉廓天津 『眞誥』卷二葉二〇表「身扉得失之門」、注「凡作扉字者、皆是排音、非扉扇之扉也」。同卷二三葉一〇表「圓景煥明霞、九鳳唱朝陽、暉翮扇天津、菴藹慶雲翹」。
- (9) 採華赤丘 『眞誥』卷一葉一七表「同掇絳實於玉圃、併採丹華於閨園」。赤丘は丹丘と同じか。『楚辭』遠遊「仍羽人於丹丘兮、留不死之舊鄉」、王注「丹丘、晝夜常明也」。
- (10) 蒙塵華喬 『左傳』僖公二十四年「天子蒙塵于外、敢不奔問官守」。華喬(僑)は楊羲の前任の靈媒。『眞誥』卷二〇葉二三裏に事蹟が見える。
- (11) 秀山 『眞誥』卷二葉一五裏「爾何以不數看東山、鬱望三秀」、注「凡云三秀者、皆謂三茅山之峯、山頂爲秀、故呼三秀也」。
- (12) 高説 『後漢書』列傳三四徐防傳「臣以爲博士及甲乙策試、宜從其家章句、開五十難以試之、解釋多者爲上第、引文明者爲高説」。
- (13) 玄響所振 『眞誥』卷八葉六表「希遐遠曜、冥響凝玄、…玄聲八振、栖身五嶽」。同卷一二葉二表「靈觀四響、玄音合唱」。
- (14) 濯以靈波 祖台之「志怪」(『太平御覽』卷五七三)「招若人兮濯靈波、欣良運兮暢雲柯」。
- (15) 駢羅 揚雄「甘泉賦」(『文選』卷七)「駢羅列布、鱗以雜沓兮」。
- (16) 遊岫 『眞誥』卷二葉六表「共攜清響之外、同遊雲岫廣崖」。
- (17) 悟言之際 謝惠連「泛湖歸出樓中翫月」(『文選』卷二二)「悟言不治罷、從夕至清朝」、李善注「毛詩曰、彼美淑姬、可與晤言、鄭玄曰、晤對也、悟與晤同」。『眞誥』卷一六葉八表「悟言有無際、相與會濠梁」。
- (18) 應玄 陸機「演連珠」(『文選』卷五五)「臣聞、通於變者、用約而利博、明其要者、器淺而應玄」。
- (19) 佛駕 『禮記』曲禮上「水潦降、不獻魚鼈、獻鳥者佛其首」、鄭注「佛戾也」。
- (20) 偃靜葛臺 『眞誥』卷三葉四裏「偃息東華靜、揚駢運八方」。葛臺は葛衍山の洞臺か。『清靈真人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一



○五「葛衍有三山相連、…西玄山下有洞臺、方圓千里、金城九重、有玉堂蘭室、東西宮殿、中有四百二十真人處焉。」

(21) 無親 『老子』第七十九章「天道無親、常與善人」。

(22) 雲壁一往 唐代の例ではあるが、岑參「太白胡僧歌序」「太白中峯絕頂有胡僧、…雲壁迴絕、人跡罕到。」「真誥」卷六葉一四表「秀玄栖標者、雖山河崩潰而不昞、志道存眞者、雖寒熱飢渴猶不護、此一往之至也」。

(23) 潛逸 桓溫「薦譙元彥表」(『文選』卷三八)「訪諸故老、搜揚潛逸。」「真誥」卷一七葉一二表「許先生前潛景逸世、隱光九霄」。

(24) 聖記 『真誥』卷一四葉一四表「是後聖李君紀也」。同卷一四葉一九表注「七聖玄紀中云」。

(25) 金策 『漢書』武帝紀「上還、登封泰山」、注「孟康曰、王者功成治定、告成功於天、…刻石紀號、有金策石函金泥玉檢之封焉」。

(26) 青錄 『上清外國放品青童內文』卷上「採後學於金簡、校青籙於諸方。」「上清後聖道君列紀」此經所授、皆位爲真人、及領眞宮上監、封仙國侯伯也、各有次第品差、在方諸宮白簡青錄、具載其序」。

(27) 紫陽 『紫陽真人內傳』「子名上金書於方諸之宮、…必能乘雲駕龍、上造以紫陽太清、佩金眞玉光龍衣虎帶、拜爲真人」。

(28) 蕭蕭之清遠 『真誥』卷二葉二〇裏「虛和可守雄、蕭蕭可守雌、夫蕭蕭者單景獨往也。」「世說」德行「王戎云、太保居在正始中、不在能言之流、及與之言、理中清遠、將無以德掩其言」。

(29) 眇眇之眞貴 『真誥』卷三葉六裏「清淨雲中視、眇眇躡景遷」。同卷二葉一八裏「密言多儼福、沖淨尙眞貴」。

(30) 信宿 『世說』德行「郭林宗至汝南、造袁奉高、車不停軌、鸞不輟輓、詣黃叔度、乃彌日信宿」。

(31) 求矜 『真誥』卷一二葉一裏「求矜而誘之、引而致之」。

(32) 經營 『真誥』卷二葉九表「涉塵塗之役、在得失之津、信非眞人所得經營」。

(33) 天維 張衡「西京賦」(『文選』卷二)「爾乃振天維、衍地絡」。

(34) 足浮靈網 釋智靜「檄魔文」(『弘明集』卷一四)「今法王御世、十方思順、靈網方申、絃綱彌紐、大通有期、高會在近、不任翹想、竝書喻意耳。」「真誥」卷一葉一〇表「手維霄網、足陟玉庭、身升帝闕、披寶欽青」。

(35) 太空 『真誥』卷一葉一〇表「若夫仰擲雲輪、總轡太空」。

(36) 目擊洞房 『莊子』田子方「若夫人者、目擊而道存矣、亦不可以容聲矣。」「紫陽真人內傳」黃老君「曰、可還視子洞房中、君乃瞑目、內視良久、果見洞房之中有二大神、無英白元君也。」「真誥」卷二葉一九裏「凝心虛形、內觀洞房、抱玄念神、專守眞一者、則頭髮不白、禿者更軫」。

(37) 五情愆波 曹植「上責躬應詔詩表」(『文選』卷二〇)「形影

相弔、五情愧赧」、李善注「文子曰、昔者中黃子曰、色有五章、人有五情」、五臣劉注「五情、喜怒哀樂怨」。『周氏冥通記』卷二「三惡不離其心、五情不節於體、皆由先世種罪多故耳」。『真誥』卷三葉一四表「若由愆波不激、淫吝由出、雖百過試之、故亦昔之薛旅耶」。

(38) 三魂越客 『上清黃庭內景經』務成子注敘(『雲笈七籤』卷

一一)「使調和三魂、制鍊七魄」。『真誥』卷七葉一四表「違內負心、三魂失眞、眞既錯散、魄乘其間」。「吝」の字、『真誥』卷三葉一四表に「淫吝由出」、同卷七葉四表に「采艷之芬華矣、猶非眞也、能消而蕩之、則淫吝之心亡也、鄙滯之門閉矣」と使われており、越客は淫吝と意味が近いであらう。

(39) 三眞 『紫陽眞人內傳』「三眞者、乃身宅之帝君、混二十四

氣、分入太微、又分號二十四眞、能善斯道於三寸之間、則三宮眞人可見」。『上清黃庭內景經』若得章第十九(『雲笈七籤』卷一一)「三眞扶胥共房津」。『真誥』卷一七葉五表「倏忽之間、聞洞房中云、在丹幃帳中、有如人聲讀書如此」、注「此是存洞房三眞事」。

(40) 黃闕 『紫陽眞人內傳』「中央黃老君是太極四眞王之師老矣、

上攝九天、中遊崑崙、黃闕來其外、紫戶在其內」。『上清黃庭內景經』仙人章第二十八(『雲笈七籤』卷一二)「安在黃闕兩眉間」、

注「天庭一名黃闕、兩眉間是」。

清靈眞人說寶神經云云。〈抄此修行事、出在第三卷中、不復兩載〉

紫微夫人喻書如左云云。〈事亦在第三卷〉

興寧三年歲在乙丑、六月二十三日夜、喻書此、其夕先共道諸人多有耳目不聰明者、欲啓乞此法、即夜有降者、即乃見喻也。〈此楊君自記也、長史年出六十、耳目欲衰、故有咨請、楊不欲指斥、託云諸人〉

又告云、「道士有耳重者云云」。〈事亦在第三卷〉

右一條清靈眞人言。

眞人告云、「櫛頭理髮、欲得過多」。〈事亦在第三卷〉

右一條紫微夫人言。

其夜初降者、適入戶未坐、自言「今夕波聲如雷」、弟子請問其故、答云、「向見東海中大波耳」。〈弟子者、楊君自稱也〉  
右南嶽夫人言。

又告云、「汝憎血否」、答曰、「實憎之」、云、「血在路上、若汝憎之、當那得行」、又答曰、「當避之耳」、又云、「避之佳、故不如目不見乃佳」。

右南嶽夫人言。

自此後諸眞共語耳。

又云、「寶神經是裴清靈錦囊中書、侍者常所帶者也、裴昔從紫微夫人授此書也、吾亦有、俱如此、寫西宮中定本」、問西宮所在、答云、「是玄圃北壇西瑤之上臺也、天眞珍文、盡藏於此中」。

右南嶽夫人言。

裴眞人又言、「此書與隱書同輩、事要而即可得用也、一名七玄隱書」。へ右二十三日授訖此。

南嶽夫人見告云、「紫微左夫人王諱清娥、字愈意、阿母第二十女也、鎮羽野玄壟山、主教當得成眞人者」。

右一條先此一夕所授。へ此一條即是二十二日夜、與紫陽所諭同夕、當復大應有事、後云聲氣下、亦是此夕、楊後又追憶此一事、更疏在二十<sup>(1)</sup>へ三<sup>(2)</sup>日例中、故云先此一夕也。

右從清靈來凡十二條有長史寫。

(1) 兪本が「二」を「三」に作るのに従う。

清靈眞人が『寶神經』を説かれた、云云。へこの修行のことを第三卷に書き出したので、兩方に載せることはしない。

紫微夫人のお諭しの書は次のようである、云云。へこのこともやはり第三卷にある。

興寧三年、乙丑の歲(三六五)の六月二十三日の夜、諭して書かせられた。<sup>(3)</sup>この夕、これに先立って、人々の中には耳がよく聞こえず目がよく見えない者が多いので、申し上げてそのための方法を教えていたと話しあっていたところ、早速その夜、降臨される方があって、その場で諭されたのである。へこれは楊君が自ら記録したものである。許長史は六十歳を過ぎて耳と目が衰え始めていたので、問い求めたのである。楊君は(許長史の名を)名指しにしたくなかったので、かりに「人々」と言ったのである。

また、お告げがあった。「道士でありながら耳がよくきかない者がいるのは、云云」。(1)「このこともやはり第三卷にある」

右の一條は清靈眞人のお言葉。

眞人がお告げになった。「櫛を入れて髪をとかすことは、多すぎるぐらいなのがよろしい」。(2)「このこともやはり第三卷にある」(3)

右の一條は紫微夫人のお言葉。

その夜、初めて降臨された方が、戸口から入ったばかりでまだ席につかない時に、「今夜は波の音が雷のように騒々しい」とひとりごとを言われた。弟子がそのわけをたずねると、「さきほど東海の大波を見ました」と答えられた。(4)「弟子とは楊君の自稱である」

右は南嶽夫人のお言葉。

また、「あなたは血を憎みますか」と言われた。「本當に憎みます」と答えると、「血が路上にある時、もしあなたがそれを憎むのなら、通れないではありませんか」と言われた。さらに、「それを避けて通ります」と答えると、「避けて通るのはまあよいけれど、血を目にしないことの方がもっとよろしい」と言われた。(5)

右は南嶽夫人のお言葉。

これから後は眞人たち同士の言葉である。(6)

また言われた。「『寶神經』は清靈眞人裴君の錦の囊の中の書物で、おつきの者がいつも攜帶しているものです。裴君は昔、紫微夫人からこの書物を授けられました」。(7)「私も持っています。ほら、これも同じ。西宮の中の定本を寫しとったものです」。(8)「西宮がどこにあるのかたずねると、『玄圃の北壇の西の瑤宮の上臺にあります』」。(9)「天上の眞人の貴重な書物はすべてその中におさめられています」と答えられた。

右は南嶽夫人のお言葉。

裴眞人はさらに言われた。「この書物は隱書と同類のもので、書かれている事柄は簡要でただちに用いることができる。一名を『七玄隱書』という」。(10)「右、二十三日の誥授はここまで」

南嶽夫人がお告げになった。「紫微左夫人の王、諱は清娥、字は愈意は、阿母(西王母)の第二十番目の娘です。羽野の玄壠山を治所とし、眞人になれる者を教育することをつかさどっています」。

右の一條は、これより一日先の夕に授けられたものである。(11)「この一條は二十二日の夜のものであり、紫陽眞人のお諭しと同じ夕で

(17) ある。これ以外にもたくさんのがあったに違いない。後に「聲をひそめて」とあるのも、やはりこの夕のことである。楊君は後になってこの一事を思い出し、あらためて二十三日の事例の中に書き記したのである。だから、「これより一日先の夕」と言っているのである。

右、「清靈」以下のあわせて十二條は、許長史の寫しがある。

(1) 出在第三卷中 第三卷とは協昌期篇のこと。卷九協昌期第一葉六表以下に見える。

(2) 事亦在第三卷 卷九葉八表、葉九表に見える。

(3) 興寧三年… 同文が卷九葉九表に見える。

(4) 事亦在第三卷 『眞誥』卷九葉九表。

(5) 事亦在第三卷 『眞誥』卷九葉九表。

(6) 東海 『神仙傳』王遠「麻姑自說云、接待以來、已見東海三爲桑田、向到蓬萊、又水淺於往日會時略半耳、豈將復爲陸陵乎、遠嘆曰、聖人皆言海中將復揚塵也」。

(7) 汝憎血否… 『南嶽魏夫人傳』(『太平廣記』卷五八)「(魏夫人)以晉興寧三年乙丑降楊家、謂楊君曰、修道之士、不欲見血肉、見雖避之、不如不見」、『三洞珠囊』卷六立功禁忌品「太上

黃素四千方經云、凡道士存思上法及脩學太一事、皆禁見死尸血穢之物、當以眞朱一鉢、散內水中、因以洗目漱口、并洗手足、微祝曰…」。

(8) 共語 『周氏冥通記』卷二「衆仙自共語良久、似論子良事、不正了其旨」。

(9) 寶神經是裴清靈錦囊中書 『南嶽魏夫人傳』(『太平廣記』卷五八)「(魏夫人)又云、裴清靈眞人錦囊中有寶神經、昔從紫微夫人所受、吾亦有、是西宮定本、即是玄圃北壇西瑤之上臺、天真珍文、盡藏其中也」、『漢武帝內傳』「帝又見王母巾笈中有卷書、盛以紫錦之囊、…王母出以示之曰、此五嶽眞形圖也」。

(10) 裴昔從紫微夫人授此書也 前注參照。また、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩一十七首并序「紫微夫人…昔降授太上寶神經與裴玄仁」、『清靈眞人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一〇五)の「裴君所受眞書篇目」には「寶神經」は見えない。

(11) 西宮中定本 『眞誥』卷二葉八裏「妾自發玄下造、君自受書於西宮」、『北史』卷八一儒林上孫惠蔚傳「惠蔚既入東觀、見典籍未周、…請依前丞盧昶所撰甲乙新錄、欲裒殘補闕、損併有無、校練句讀、以爲定本、次第均寫、永爲常式」。

(12) 玄圃、上臺 『無上祕要』卷四靈山品「崑崙山、高平地三萬六千里、上有三隅、面方萬里、形似偃盆、其一隅正北、主于辰星之精、名曰閭風臺、一隅正西、名曰玄圃臺、一隅正東、名曰

崑崙臺、…右出洞真太霄隱書。『真誥』卷一三葉二表「第三等地下主者…出館易遷重初二府、入晏東華上臺」。

- (13) 天真 『周氏冥通記』卷一「得補吾洞中之職、面對天真、遊行聖府。」「一切道經音義妙門由起」序「道士立名、凡有七等、一者天真、二者神仙、三者幽逸、四者山居、五者出家、六者在家人、七者祭酒」。

- (14) 隱書 『無上祕要』卷三一遇經宿分品「凡有金髓紫臟、名題金札、得見隱書內文、…右出洞真七聖元紀經」。『真誥』卷四葉二表「昔未受上道之前、有欲索側人意、有稱說堪陶獎者、受隱書之後、此計都冥也」。

- (15) 阿母 『漢武帝內傳』「上元夫人謂帝曰、…今阿母迂天尊之重、下降蟪蛄之窟」。

- (16) 羽野玄壘山 『雲笈七籤』卷二三總敘日月「大丹隱書云、紫微夫人、姓王、諱清娥、字慙音、云是西王母第二十四女、紫微宮在北溟外羽明野玄壘山、山在崑崙之東北」。『無上祕要』卷二二·三界宮府品「紫微宮、右在北溟外羽明野玄壘山、紫微夫人之所居、…右出洞真經及道迹真迹經」。『紫陽真人內傳』「乃登玄壘羽野、遇玉童十人九氣丈人、得白羽紫蓋、服黃水月華法」。

- (17) 與紫陽所喻同夕 卷一葉五表、葉五裏。

- (18) 後云聲氣下 卷一葉一一表。

六月二十四日夜、紫微王夫人來降、因下地請問、「真靈既身降於塵濁之人、而手足猶未嘗自有所書、故當是卑高迹邈、未可見乎、敢諮於此、願誨蒙昧」、夫人因令復坐、即見授令書此以答曰「此楊君自述事也、例多如此」、「夫沈景虛玄、無塗可尋、言發空中、無物可縱、流浪乘忽、化遁不滯者也、此二行皆浮沈冥淪、條遷灼寂、是故放蕩無津、遂任鼓風施、存乎虛舟而行耳、故實中之空、空中之有、有中無象矣、至於書迹之示、則揮形紙札、文理曷注、蠹好外著、玄翰挺煥、而範質用顯、默藻斯坦、形傳塵濁、苟露有骸之物、而得與世進退、上玷逸真之詠、下虧有隔之禁、亦我等所不行、靈法所不許也、

今請陳爲書之本始也、造文之既肇矣、乃是五色初萌、文章畫定之時、秀人民之交、別陰陽之分、則有三元八會羣方飛天之書、又有八龍雲篆明光之章也、其後逮二皇之世、演八會之文、爲龍鳳之章、拘省雲篆之迹、以爲順形梵書、分破二道、〈壞〉「壞」真從易、配別本支、乃爲六十四種之書也、遂播之于三十六天十方上下也、各各取其篇類、異而用之、音典雖均、蔚跡隔異矣、校而論之、八會之書是書之至真、建文章之祖也、雲篆明光是其根宗所起、有書而始也、今三元八會之書、皇上帝極高真清仙之所用也、雲篆明光之章、今所見神靈符書之字是也、爾乃見華季之世、生造亂真、共作巧末、趣徑下書、皆流尸濁文淫僻之字、舍本效假、是實穢死迹耳、

夫眞仙之人、曷爲棄本領之文迹、手畫淫亂之下字耶、夫得爲眞人者、事事皆盡得眞也、奚獨於凡末之羈術、淫浮之弊作、而當守之而不改、玩之而不遷乎、夫人在世、先有能書善爲事者、得眞仙之日、外書之變亦忽然隨身而自反矣、眞事皆邇者、不復廢今已得之濁書、方又受學於上文、而後重知眞書者也、鬼道亦然、但書字有小乖違耳、

且以靈筆眞手、初不敢下交於肉人、雖時當有得道之人、而身未超世者、亦故不敢下手陳書墨、以顯示於字迹也、至乃符文神藻所求所佩者、自復始來而作耳、所以爾者、世人固不能了其端緒、又使吾等不有隱諱耳、冥中自相參解矣、内外自相關矣、又四極明科、高上禁重、亦自不聽我等復爲世間常書也、我既下手、子固不解、亦將何趣兩爲煩濫耶、此亦當闡其可否、殆不足嫌、想少暢豁於胸懷、盡不自書之流分矣」。

(1) 俞本が「壤」を「壤」に作るのに従う。

六月二十四日の夜、紫微王夫人が降臨された<sup>(1)</sup>。それで下に下りて質問した。

「眞靈はおんみずから穢れ多き人間のもとに降臨なさいますが、<sup>(2)</sup>ご自分で字をお書きになることはございません。これは卑しき者と

高貴なお方とでは、その文字に遙か遠い隔たりがあり、見るべきでないのでしょうか。敢えてこのことをおうかがい致します。どうか愚かな私にお教え下さいますように」。

夫人はそこで（私を）再び席に坐らせ、以下のことを書きとめるように命じてお答えになった（これは楊君が自ら述べた事柄である。體例はおおむねこのようである）。

「そもそも（眞人というものは）虚ろで奥深い空間に景を沈め、<sup>(3)</sup>尋ね求めるべき道すじもなく、その言葉は空中に發して跡をたどるべき物もなく、ふわふわと流れてつむじ風に乗り、<sup>(4)</sup>さまざまに變化して滞ることのないものです。この二つ（景と言葉）が巡り行くさまは、ともに目に見えない暗いところに浮沈しているかと思えば、たちまちのうちにきらきらと輝いたり静寂になったりするのです。それ故、氣ままに動いて決まった船着場もなく、風のかじが漕がれるのにまかせてただよい、からっぽの舟のように巡り行くのです。それ故に、實の中の空、<sup>(5)</sup>空の中の有、<sup>(6)</sup>有の中の象なきものののです。<sup>(10)</sup>しかし、書迹を示すということになれば、紙札の上に形を描き、文字のあやがはつきりと注がれますから、巧拙の差が外に表れ、みごとな筆跡は抜きん出て輝き、（そのために）模範たる形質が明らかに示され、奥深い美しさが表れ、形あるものを穢れ多い人間に傳えることになるのです。（眞人の書が）形骸を持った人間にあらわになり、世俗と動きをともにするようなことになれば、上はすぐれた

眞人の吟詠をけがし、下は(眞人と人間との間に)隔たりを設けた禁戒を損うことになります。<sup>(15)</sup> そのようなことは、われわれは行いませんし、眞靈の法が許さないので。

今、文字が作られたそもその始まりについて述べてみることにしましょう。文字が作られたそもその初めたるや、五色が初めて萌え、美しいあやが描き定められた時、人々の間の關係が際立ち、陰陽の別が分かると、三元・八會・群方・飛天の書が出現し、さらに、八龍・雲篆・明光の章が現れました。<sup>(16)</sup> その後、伏羲・神農の二皇の世になって、八會の文字をおしひろげて龍鳳の章を作り、雲篆の字體を曲げたり削ったりしてぐにやぐにやした形の梵書を作りました。<sup>(20)</sup> 二つの道(天書と地書)を分け、本物の書體をくずして書きやすい方に従い、もとのものと枝わかれしたものとを組み合わせたり分けたりにして、六十四種の書體になったのです。<sup>(21)</sup> そして、それを三十六天、十方上下に布きひろめました。<sup>(22)</sup> それぞれ一まとまりの文字體系を持ち、それぞれ分けて用いられています。發音の法則は同じですが、あやなす書體は大きく隔たっているのです。それらと比較して論じるならば、八會の書は文字の中でこの上なく眞實なるもので、文字の祖となるものです。雲篆・明光はその大本から生まれたもので、文字の始まりなのです。今、三元・八會の書は皇上太極高眞清仙が用いているものです。<sup>(23)</sup> 雲篆・明光の章は、今、目にする神靈符書の字がそれです。<sup>(24)</sup> しかし、うわべを飾る末の世の有様

を見てみますと、でっち上げで本物を亂し、<sup>(25)</sup> そろいもそろって瑣末な技巧に走り、下等な書體の方におもむいています。これらは皆、死すべき人間の汚濁の文字、淫らでかたよった文字なのであり、本を捨ててにせものをまねたもので、穢れた世俗の死の書迹です。<sup>(26)</sup>

そもそも眞仙である人が、どうしておのれの自分の書體を捨てて淫亂な下等な文字を自ら書いたりしましょうか。そもそも眞人となることができた者は、あらゆる事柄にすべて眞を得るのです。どうして卑しい人間の粗惡な手わざ、よこしまでうわついた者たちのつまらぬ創作においてだけ、それを保持して改めず、もてあそんで變えないなどということがありましょうか。そもそも、在世中もともと能書で上手に書いていた人は、眞仙となることができた日に、世俗の書體の變化も突然に身について起って、自然に(眞に)返るのです。眞仙世界の事柄が何事も身近にあるというのは、今すでに身につけている汚濁の文字を捨ててはじめて天上のすぐれた文字を學び、<sup>(28)</sup> その上で重ねて眞人の書體を知ることではありません。<sup>(30)</sup> 鬼道もやはり同じです。ただ文字に少しの違いがあるだけです。<sup>(31)</sup> かつまた、眞人の手によって書かれた靈妙なる筆跡は、世俗の人間に手渡されることは決してありません。道を得ることになっている人でその身はまだこの世から超越していない者が時たまおりますが、その場合でももとより、(眞人が)自ら手を下して墨の跡をならべ、文字をはっきりと示すことはしないのです。人々が求めて



腰に佩<sup>おび</sup>びる神秘的な符<sup>ふ</sup>の文様<sup>(34)</sup>について言えば、これはそもそも初めから作られているものです。そうである理由は、(たとえ書いても)世俗の人々はもととその絲口すら知ることができないし、また、われわれ眞人に祕密<sup>(35)</sup>がなくなってしまうからです。(眞人が文字を書かなくとも)冥々のうちに自ずから理解されるものであるし、内(眞人の世界)と外(人間の世界)は自ずから關連しあっているのです。また、四極明科<sup>(36)</sup>は尊いお方が定められた嚴重な禁戒<sup>(37)</sup>ですが、そこでもわれわれが世俗のありきたりの文字を書くことを許可してはおりません。(一方)私が手を下して書いたとしても、あなたはもとより理解することができません。なぜ、わざわざ雙方ともにわずらわしく餘計なことを致しましょうか。それがものの可否に暗い行爲であることは、疑うに足りません。あなたの心を少しひろげてあげようと思って、(眞人が)自分では文字を書かないことわりを説き盡くしてみただけです。

(1) 來降 顏眞卿「魏夫人仙壇碑銘」「忽有太極眞人安度明東華大神方諸青童扶桑碧阿陽谷神王景林眞人小有仙王清虛眞人王慶來降」。

(2) 眞靈、塵濁 『南嶽魏夫人傳』(『太平廣記』卷五八)「夫人因得冥心齋靜、眞靈累感、修眞之益、與日俱進」。『漢武帝內傳』

「是故我發閬宮、暫舍塵濁」。

(3) 虛玄 『肇論』般若無知論「夫般若虛玄者、蓋是三乘之宗極也」。

(4) 乘忽 『眞誥』卷三葉一五表「控晨揖太素、乘歛翔玉階」。

(5) 化遁不滯 『眞誥』卷一二葉一〇裏「教之以化遁、化遁、上尸解也」。道安「大十二門經序」(『出三藏記集』卷六)「不滯者、雖遊空無識、泊然永壽、莫足礙之、之謂眞也」。

(6) 風柂 『後漢書』列傳三九仲長統傳「抗志山栖、游心海左、元氣爲舟、微風爲柂、敖翔太清、縱意容治」。

(7) 虛舟 『淮南子』詮言訓「方船濟乎江、有虛船從一方來、觸而覆之、雖有忤心、必無怨色、有一人在其中、一謂張之、一謂歛之、再三呼而不應、必以醜聲隨其後、向不怒而今怒、向虛而今實也、人能虛己以遊於世、孰能害之」。『眞誥』卷三葉四表「釋輪尋虛舟、所在皆纏綿」。

(8) 實中之空 謝靈運「辯宗論」(『廣弘明集』卷一八)「滅累之體、物我同忘、有無一觀、伏累之狀、他已異情、空實殊見」。

(9) 空中之有 『後漢書』列傳七八西域傳論「詳其清心釋累之訓、空有兼遣之宗、道書之流也」。『眞誥』卷一六葉八表「空中自有物、有中亦無常、悟言有無際、相與會濠梁」。

(10) 有中之無象 『老子』第十四章「繩繩不可名、復歸於無物、是謂無狀之狀、無物之象、是謂惚恍」。『呂氏春秋』君守「故曰、

- 天無形而萬物以成、至精無象而萬物以化。『周氏冥通記』卷四「張理禁」答云、…夫有中之無、未若無中之無、空無之理、難可思議。『真誥』卷三葉一二裏「君安有有際、我願有中無」。
- (11) 書迹 『顏氏家訓』省事「文章無可傳於集錄、書迹未堪以留愛翫」。
- (12) 紙札 『南史』卷四三齊江夏王鋒傳「好學書、張家無紙札、乃倚井欄爲書、書滿則洗之、已復更書、如此者累月」。
- (13) 玄翰 『真誥』卷一〇葉一表「玄翰啓矇昧、顧景恩自新」。
- (14) 範質 『雲笈七籤』卷八四造劍戶解法「凡鐵亦皆可用也、所存在於範質而已」。
- (15) 虧有隔之禁 『漢武帝內傳』「夫眞形寶文、靈宮所貴、此子守求不已、誓以必得、故虧科禁、特以與之」。
- (16) 五色初萌 『太上靈寶諸天內音自然玉字』卷三「俄頃之間、天氣朗除、冥晦豁消、五色光明、洞徹五方、忽然有天書、字方一丈、自然而見空玄之上五色光中、文采煥爛、八角垂芒、精光亂眼、不可得看、天尊普問四座大眾、靈書八會、字無正形、其趣宛奧、難可尋詳」。『無上祕要』卷七六服五氣品「元始赤書五篇眞文生於太空之中、天地未光、開闢未明、潛結元根、三景成玄、五氣行焉、五色分彩、煥照五方、…右出洞玄元始赤書經」。
- (17) 文章 崔瑗「草書體」(『初學記』卷二二)「書體之興、始自頡皇、寫彼鳥跡、以定文章」。
- (18) 三元八會羣方飛天之書、八龍雲篆明光之章 『道教義樞』卷二·十二部義「今汎論古今變文、凡有六種、一者天書、陰陽初分、有三元五德八會之義、以成飛天之書、後撰爲八龍雲篆明光之章、陸先生解三才、謂之三元、三元既立、五行成具、以五行爲位、三五相合、謂之八會、爲衆書之元、又有八龍雲篆明光之章、自然飛玄之義、結空成文、字方一丈、鑒於未天之內、生立一切也」。『雲笈七籤』卷七「說三元八會六書之法」あり。
- (19) 二皇 『淮南子』原道訓「泰古二皇、得道之柄、立于中央、神與化游、以撫四方」、注「二皇、伏羲神農也」。
- (20) 拘省雲篆之迹、以爲順形梵書 『洞玄靈寶玄門大義』詳釋第六「又有雲篆明光之章、爲順形梵書、文別爲六十四種、播於三十六天、令經書相傳、皆以隸字解天書、相離而行也」。
- (21) 六十四種之書 前注參照。
- (22) 三十六天十方上下 『魏書』釋老志「又言二儀之間有三十六天、中有三十六宮、宮有一主」。『真誥』卷一六葉七表「振翠衣於九霄、舞玄翻於十方耳」。
- (23) 皇上帝極高眞清仙 『唯一玉檢五老寶經』「即通大洞眞經者、…且登太極金堂、暮遊太華玄中、刻定金書、得爲高眞、掌鎮仙文、役使萬神、位爲太極左卿小有仙王、入侍帝宸、出宴金庭」。『魏書』釋老志「今清德隱仙、不召自至」。
- (24) 神靈符書之字 『列子』湯問「神靈所生、其物異形」。『抱朴

子」遐覽「敢問符書之屬、不審最神乎、抱朴子曰、余聞鄭君言、道書之重者、莫過於三皇內文五嶽眞形圖也」。

(25) 亂眞 『眞誥』卷七葉二表「且哀聲亂眞、干忤正炁」。

(26) 羣穢 『眞誥』卷一〇葉二四裏「所以道士棲山林而幽身者、皆欲遠茲羣穢、絕放人間之業」。

(27) 眞事 『眞誥』卷一七葉一八表注「恐楊以呈司命、不許眞事宣行、因隱絕之也」。

(28) 上文 『眞誥』卷六葉二裏「神羽翼張、乃披空同之上文」。

(29) 眞書 『神仙傳』麻姑「王君亦有書與陳尉、多是篆文、或眞書、字廓落而大、陳尉世世寶之」。

(30) 鬼道 『元始無量度人上品妙經四註』卷三「人道眇眇、仙道莽莽、鬼道樂兮、當人生門、天道貴生、鬼道貴終、仙道常自吉、鬼道常自凶、嚴東注「鬼道在三界之內、導從鬼兵、遏人生命、枉暴殺人、以爲歡樂」。

(31) 眞手 『眞誥』卷一九葉二表「顧玄平謂爲眞迹、當言眞人之手書迹也」。

(32) 肉人 『神仙傳』壺公「(費)長房下座頓首曰、肉人無知積罪、却厚幸謬見哀憐、猶入剖棺布氣、生枯起朽、但恐臭穢頑弊、不任驅使、若見哀憐、百生之厚幸也」。

(33) 超世 『抱朴子』對俗「仙道遲成、多所禁忌、自無超世之志、斧以尸濁肉人、受聖恩濟拔、靈道高虛、肉人未達眞法」。

強力之才、不能守之。『周氏冥通記』卷二「寫此步塵穢、適彼超世君」。

(34) 符文 『抱朴子』遐覽「昔吳世有介象者、能讀符文、知誤之與否」。

(35) 隱諱 『元始無量度人上品妙經四註』卷二「三十二天、三十二帝、諸天隱諱、諸天隱名、天中空洞、自然靈章」、嚴東注「內名隱諱、皆多相類梵語難解」。

(36) 冥中 『無上祕要』卷二〇仙歌品「仙道本由運、冥中亦已判、右出洞眞四極明科」。

(37) 內外 『眞誥』卷七葉九裏「三官自有成事、憂惋亦無所解、自非齊達於內外者、將不得不懼悸」。

(38) 四極明科 『太眞玉帝四極明科經』卷一「爾時太上大道君授高聖太眞玉帝五色神官四極明科百二十條律、上檢天眞、中檢飛仙、下治罪人、如是玉文、皆出高聖上宰所注、藏於高上玉虛七映紫房、有得明科之身、不得妄與常學、談說經文、評論玄古、意通至眞、宣傳非所、泄露道源、妄示世人、殃及七祖、死魂充責、長補河源、形沒九幽、痛不可言」。

(39) 高上禁重 『眞誥』卷一葉一六表「昔初學眞於龜臺、受玉章於高上、荷虎錄於紫皇、秉瓊鉞於天帝」。また前注參照。『太眞玉帝四極明科經』卷五「太玄都四極明科曰、上清寶經、禁限甚

重」。

上眞司命南嶽夫人授令書如左、

「若夫仰擲雲輪、總轡太空、手維霄綱、足陟玉庭、身升帝闕、披寶歛青、上論九玄之逸度、下紀萬椿之天生、遂竦景電肅、千霞煥明、眞言玄浪、高談玉清、激朱脣之流徽、運日氣之零零、爰乃吐烽却煙、彈金奏瓊、鸞音荷榮、鳳唱嘉聲耳、若但應景下旋、廻靈塵埃、參輦弊宇、敖拂朝市、來成眞才、訓我弟子、則玉振落響、琳鐘內抑、周目五濁、契開窓室、神勞臭腥、填鼻斂氣、遂閉蘭音於中華之元、退案金聲之劣劣而發耳、夫神者言微於邇、萬里必接、奇韻雖觸〔錯〕〔鏡〕鑒無滯、故眞理之既分、聞遐則道高邈、璞不肆瑩、而致有卑微之聰也、今子乃有心覺之至、將致嫌似之思、外觀流俗之對、內有遲疑之悟乎、不運事宜、亦已邁也、望所營者道、研咏者妙耳、道妙既得、高下之音、必坦然矣、此非所謀、吾子加之至慮、散蕩斯念、宜慎之耳」。

右三條有楊書。

六月二十四日夜、南嶽夫人見授令書此、先是二十二日夕、有在別室共論講道、紫微南嶽二夫人、聲氣語音殊下、不解其趣、今故授書

此、以答所共講者之疑心也、初來見授時、色氣猶不平、授畢可爾、弟子唯覺色有不平、都無他可道。〔此一條亦是楊君自記論〕

南嶽夫人其夕語弟子言、「我明日當詣王屋山清虛宮、令汝知之所至也」。

其夕又言、「海東桐柏山西頭、適崩二百許丈」。

紫微王夫人云、「世人之思慮、何得事事眞審耶、可不事有答其心也」、南嶽夫人言、「戲之耳、欲建豎之也、瑩實之也」。

〔1〕 俞本が「錯」を「鏡」に作るのに従う。

上眞司命南嶽夫人が誥授して書きとらせられたお言葉は次のとおり。

「もし天上に向かつて雲の車輪を馳せ、<sup>①</sup>大空で手綱をさばき、手は天の大綱をつかみつつ足は玉の庭に蹈みのぼり、<sup>②</sup>わが身は天帝の宮闕に昇つて、青一色の世界で寶をひらき、<sup>③</sup>上は九玄の神々のなみ<sup>④</sup>はずれた度量を論じ、下は一萬年を春秋とする大椿の生のサイクル<sup>⑤</sup>

を記すと、そこで景はひそまり稻妻はおさまって、千もの霞が輝き  
 わたり、(そこで私は)玄妙な波浪にひたりつつ眞言を發し、玉  
 清天で高らかに道を語り、妙なる調子で朱い唇をふるわせて、零々  
 たる太陽の氣を運らすといった場合、その時にはのろしのような煙  
 を吐き出し、金玉の演奏を始め、鸞があざやかな音色を響かせ、鳳  
 がすばらしい歌聲で唱う。だがもし景に應じて下界に下り、塵埃の  
 巷に靈たる私をひきもどし、疲弊しきつた天下に車を驅り、朝市の  
 間に遊んで、眞人となるべき才能のある人間を育てあげ、わが弟子(た  
 るあなた)に教えを垂れるといった場合には、玉の演奏(のような  
 私の説教)は響きを弱め、すばらしい鐘の音(のような内容)は内  
 にこもることになり、目のまわりはすべて五濁の惡世、罪に満ちた  
 部屋で苦しみ、心は生臭い氣で疲れ、鼻がつまってむせかえる。そ  
 こで中華の根元の地では蘭のような香氣のある聲を閉ざし、くだら  
 ぬ鐘聲を發することになるのです。そもそも神というものは、その  
 言葉が近くで微かでも、萬里のかたても必ず受けとめられるもの、  
 すぐれた音は途中で邪魔されても、はつきりと通ってどこにおるこ  
 とはありません。だから、眞理がさまざまに分かれているからには、  
 遠くのを聞き分けるならば道は高遠なのですが、瑛が十分に磨  
 かれていないと、それで極めて低級な耳しか持てないのです。いま、  
 あなたは心にさとするものがありながら、疑いの氣持を抱こうとし、  
 外には世俗の對應をながめつつ、内には悟りをためらっているので

はありませんか。この機會をうまく使わないと、機會は遠くへ行っ  
 てしまいます。私が望むのは、あなたが「道」を修められ、「妙」  
 を唱いあげられることだけです。「道」と「妙」とが得られたなら  
 ば、高い音も低い音も必ず平心に聞くことができるでしょう。これ  
 はたくらんでできることではありません。あなたはよくよく思慮し  
 たらえ、そのような考えを一掃しなさい。よく慎むことです」。

右の三條は楊羲の書がある。

六月二十四日の夜、南嶽夫人が誥授され、これを書きとらせられ  
 たのである。これに先立つ二十二日の夕、別室で一緒に道について  
 議論なさることがあった。紫微・南嶽の二夫人は、その聲や言葉つ  
 きがとりわけ低く、(他のものは)その話の趣旨を理解できなかつ  
 た。今わざわざ誥授してこれを書きとらせられたのは、一緒に議論  
 した者たちの疑問に答えるためなのである。(南嶽夫人が)やって  
 來られて誥授をお始めになったばかりの時は、顔色はまだおだやか  
 でなかったが、授けおわられた時にはましになられた。弟子はただ  
 顔色がおだやかでないと感じただけで、ほかに言うべきことは何も  
 ない。(この一條も、楊君が自ら記し論じたものである)

南嶽夫人はその夕、弟子に語って言われた。「私は明日、王屋山

の清虛宮<sup>(16)</sup>に出かけるつもりです。あなたに行先を知らせておきます」。

その夕、また言われた。「海東の桐柏山<sup>(17)</sup>の西側がたまたま二百丈ばかり崩れました」。

紫微王夫人が言われた。「世俗の人の思慮では、どうしてあらゆることを眞に悟ることができましようか。事ごとに彼らの心に答えることはありませんよ」。南嶽夫人が言われた。「からかっただけです。たててやろうと思ったのですよ。磨きあげてやろうと思ったのですよ」。

- (1) 仰擲雲輪 『眞誥』卷一葉一六表「入冥七闕、出轡雲輪」。  
同卷三葉一一表「擲輪空同津、總轡儼綠軒」。
- (2) 總轡 『眞誥』卷三葉七裏「總轡高清闕、解駕佳人房」。
- (3) 霄綱 『雲笈七籤』卷二〇反行法「微祝曰、…忽登天綱、上步紫庭、北視雷房、南顧電城」。
- (4) 足陟玉庭 『眞誥』卷一葉一六裏「手掣景雲、足陟金庭」。
- (5) 九玄 陶弘景「水仙賦」「迎九玄於金闕、謁三素於玉清」。
- (6) 萬椿 『莊子』逍遙遊「上古有大椿者、以八千歲爲春、八千

歲爲秋」。『眞誥』卷三葉一五裏「條欬億萬椿、齡紀鬱巍巍」。

- (7) 眞言 『周氏冥通記』卷一「省疏、并見周氏遺迹、眞言顯然、符驗前誥、二三明白、益爲奇特」。

- (8) 玉清 『道教義樞』卷七混元義「唯此大羅生玄元始三炁、化爲三清天、一曰清微天玉清境、始氣所成」。

- (9) 日氣 『老子中經』下第四十二神仙「雲笈七籤」卷一九「日氣上出、如赤丹之精」。『眞誥』卷一四葉一三裏「後事季主、晚服日月炁、爲入室弟子」。

- (10) 眞才 『眞誥』卷二葉四裏「蕭邈眞才、內鏡外和」。

- (11) 五濁 『法華經』方便品「諸佛出於五濁惡世、所謂劫濁煩惱濁衆生濁見濁命濁」。『雲笈七籤』卷四上清經述「縱恣五濁、翻錯臭穢」。

- (12) 愆室 『眞誥』卷二葉二二表「穆德薄罪厚、端坐愆室、橫爲衆眞所見採錄」。

- (13) 萬里必接 『周易』繫辭傳上「出其言善、則千里之外應之、況其邇者乎」。

- (14) 流俗 『眞誥』卷二葉二二裏「穆沈滯流俗、豈忘拔迹」。

- (15) 所營 左思「吳都賦」(『文選』卷五)「闡闔閭之所營、采夫差之遺法」。

- (16) 王屋山清虛宮 『雲笈七籤』卷二七・十大洞天「第一王屋山洞、周廻萬里、號曰小有清虛之天、在洛陽河陽兩界、去王屋縣

六十里、屬西城王君治之。『眞誥』卷五葉一四裏「君曰、王屋山、仙之別天、所謂陽臺是也、諸始得道者、皆詣陽臺、陽臺是清虛之宮也」。

(17) 海東桐柏山 『雲笈七籤』卷二七·七十二福地「第四十四桐柏山、在唐州桐柏縣、屬李仙君所治之處。『眞誥』卷一四葉一

九表「桐柏山、高萬八千丈、其山八重、周廻八百餘里、四面視之如一、在會稽東海際」。

興寧三年歲在乙丑、六月二十五日夜。〈此是安妃降事之端、記錄別爲一卷、故更起年歲號首也〉

紫微王夫人見降、又與一神女俱來、神女着雲錦襪、上丹下青、文彩光鮮、腰中有綠繡帶、帶係十餘小鈴、鈴青色黃色、更相參差、左帶玉佩、佩亦如世閒佩、但幾小耳、衣服條幅有光、照朗室內、如日中映視雲母形也、雲髮髻〈此應是鬢字、鬢、黑髮貌也〉鬢、整頓絕倫、作髻乃在頂中、又垂餘髮至腰許、指着金環、白珠約臂、視之年可十三四許、左右又有兩侍女、其一侍女着朱衣、帶青草囊、手中又持一錦囊、囊長尺一二寸許、以盛書、書當有十許卷也、以白玉檢檢囊口、見刻檢上字、云玉清神虎內眞紫元丹章、其一侍女着青衣、捧白箱、以絳帶束絡之、白箱似象牙箱形也、二侍女年可堪十七八許、整飾非常、神女及侍者、顏容瑩朗、鮮徹如玉、五香馥芬、如燒香嬰氣者也

〈香嬰者、嬰香也、出外國〉、初來入戶、在紫微夫人後行、夫人既入戶之始、仍見告曰、「今日有貴客來、相詣論好也」、於是某即起立、夫人曰、「可不須起、但當共坐自相向作禮耳」、夫人坐南向、某夕先坐承床下西向、神女因見就同床坐東向、各以左手作禮、作禮畢、紫微夫人曰、「此是太虛上眞元君金臺李夫人之少女也、太虛元君昔遣詣龜山學上清道、道成、受太上書、署爲紫清上宮九華眞妃者也、於是賜姓安名鬱嬪字靈籀」、紫微夫人又問某、「世上曾見有此人否」、某答曰、「靈尊高秀、無以爲喻」、夫人因大笑、「於爾如何」、某不復答、紫清眞妃坐良久、都不言、妃手中先握三枚棗、色如乾棗、而形長大、內無核、亦不作棗味、有似於梨味耳、妃先以一枚見與、次以一枚與紫微夫人、自留一枚、語令各食之、食之畢、少久許時、眞妃問某、「年幾、是何月生」、某登答言、「三十六、庚寅歲九月生也」、眞妃又曰、「君師南眞夫人、司命秉權、道高妙備、實良德之宗也、聞君德音甚久、不圖今日得敘因緣、歡願於冥運之會、依然有松蘿之纏矣」、某乃稱名答曰、「沈湎下俗、塵染其質、高卑雲邈、無緣稟敬、猥虧靈降、欣踊罔極、唯蒙啓訓以祛其闇、濟某元元、宿夜所願也」、眞妃曰、「君今語不得有謙飾、謙飾之辭、殊非事宜」、又良久、眞妃見告曰、「欲作一紙文相贈、便因君以筆運我鄙意、當可爾乎」、某答「奉命」、卽襲紙染筆、登口見授、作詩如左、詩曰、

雲闕豎空上、瓊臺聳鬱羅、紫宮乘綠景、靈觀譔差錢、琅軒朱房內、上德煥絳霞、俯漱雲瓶津、仰掇碧柰花、濯足玉天池、鼓柁牽牛河、

遂策景雲駕、落龍轡玄阿、振衣塵滓際、褰裳步濁波、願爲山澤結、剛柔順以和、相攜雙清內、上眞道不邪、紫微會良謀、唱納享福多、某書訖、取視之、乃曰、「今以相贈、以宣丹心、勿云云也、若意中有不相解者、自有微訪耳」。

紫微夫人曰、「我復因爾作一紙文以相曉者、以示善事耳」、某又爰紙染筆、夫人見授詩云、

二象内外泮、玄氣果中分、冥會不待駕、所<sup>(2)</sup>其<sup>(2)</sup>「期」貴得眞、南嶽鑄明金、眇觀傾笈帙、良德飛霞照、遂感靈霄人、乘飆儔衾寢、齊牢攜絳雲、悟歎天人際、數中自有緣、上道誠不邪、塵滓非所聞、同日咸恆象、高唱爲爾因、

書訖、紫微夫人取視、視畢曰、「以此贈爾、今日於我爲因緣之主、唱意之謀客矣」、紫微夫人又曰、「明日南嶽夫人當還、我當與妃共迎之於雲陶間、明日不還者、乃復數日事」、又良久、紫微夫人曰、「我去矣、明日當復與眞妃俱來詣爾也」、覺下牀而失所在也、眞妃少留在後而言曰、「冥情未攄、意氣未忘、想君俱咏之耳、明日當復來」、乃取某手而執之、而自下牀、未出戶之間、忽然不見。

(1) この段、『雲笈七籤』卷九七・九華安妃贈楊司命詩二首并序に見える。

(2) 俞本が「其」を「期」に作るのに従う。

興寧三年、乙丑の歲(三六五)の六月二十五日の夜。へこれは九華安妃降臨のことの發端で、この記録は別に一卷とされている。だからここであらためて年歲を書き起こして最初の印としたのである。

紫微王夫人が降臨された。また一人の神女とともにやって來られた。神女は雲錦の長いワンピースを着け、上は丹<sup>あか</sup>で下は青、その文様色彩はあざやかに光り輝いている。腰には緑の刺繡の帶をしめ、帶には十あまりの小鈴が付いている。鈴は青色やら黄色やら、色々いりまじっている。左には玉の佩<sup>おび</sup>を着けている。佩も世間の佩と同様だが、わずかに小さい。衣服はきらきりと光を放ち、室内を明るく照らし、まるで日の光の中で雲母を透かしたようである。雲なす髪、髻<sup>くづり</sup>へこれはきつと「髻」の字であらう。髻は黒髪の形容である。とした髻はたぐいもなく整っており、髻は頭<sup>もと</sup>のてっぺんで結いあげ、また残りの髪を腰のあたりまで垂らしている。指には金環をはめ、白い眞珠(の腕輪)で腕をしめている。見たところ年は十三、四ばかり、左右にはまた二人の侍女がいる。そのうちの一人の侍女は、朱の衣を着、青い章囊<sup>あき</sup>を着けている。手の中にはさらに錦囊一つを持ち、囊の長さは一尺一、二寸ばかり、それに書物をいれている。



書物は十巻ばかりあるのだろう。白玉の封で囊<sup>(2)</sup>の口を封じてあり、封の上に刻まれた字を見ると「玉清神虎内眞紫元丹章」<sup>(3)</sup>とある。もう一人の侍女は、青い衣を着、白い箱を捧げ持ち、その箱を絳<sup>あか</sup>いリボンでくくっている。白い箱は象牙の箱のようである。二人の侍女の年格好は十七、八ばかり、非常にきつちりと飾っている。神女と侍女たちは、顔はつやつやと明るく、あざやかなこと玉のごとくであり、五香の香りが馥郁<sup>(4)</sup>とたちこめ、香嬰を焚いたにおいのようなのである。〈香嬰とは嬰香である。外國に産出する〉最初、戸口を入る時は、紫微夫人の後についてやって来た。夫人は戸口を入ったばかりで、こう告げられた。「今日は貴いお客がいらっしやいました。よしみを通じにやって來られたのです」。そこで某<sup>それ</sup>はただちに立ちあがった。夫人は言われた。「立ちあがる必要はありません。一緒に南を向かれた。某<sup>それ</sup>はその夕、前もって牀の臺のあたりに坐り、西を向いていた。神女はそこでそれを見ると同じ牀に坐り、東を向いた。おのおの左手で挨拶し、挨拶しおわると、紫微夫人が言われた。「この方は太虚上眞元君金臺李夫人の末の御息女です。太虚元君が以前に龜山<sup>(7)</sup>にやって上清の道<sup>(8)</sup>を學ばせられ、道が成就すると、太上の辭令<sup>(9)</sup>をお受けになり、紫清上宮九華眞妃に任命されたお方です。その際、安という姓、鬱嬪<sup>(10)</sup>という名、靈籙<sup>(11)</sup>という字を賜わったのです」。紫微夫人はまた某<sup>それ</sup>にたずねられた。「世間であつてこのようなお方

を見たことがありますか」。某<sup>それ</sup>は答えた。「尊い神靈は高く拔きん出られ、たとえようもございません」。夫人はそこで大笑いされ、(言われた。)<sup>(12)</sup>「あなたにとってはどうですか」。某<sup>それ</sup>はそれ以上は答えなかった。紫清眞妃はだいぶ長い間坐っておられたが、まったくものを言われなかった。妃は手中に前もって三つの棗を握っており、色は乾し棗のようであるが、形は長大、中には核<sup>こ</sup>がなく、また棗の味がせず、梨の味に似たところがあつた。妃はまず一つを(私に)お與え下さり、次に一つを紫微夫人に與え、自分に一つを残され、それぞれに食べるようにと言われた。食べおわってしばらくすると、眞妃は某<sup>それ</sup>にたずねられた。「年はおいくつ。何月生まれですか」。某<sup>それ</sup>はすぐさま答えて言つた。「三十六です。庚寅の歲(咸和五年、三三〇)の九月生まれです」。眞妃はまた言われた。「あなたの師の南眞夫人(南嶽夫人)は司命の神として權力を持ち、道は高く妙は備わり、まことに良徳の本源と言えるお方です。あなたのすばらしい評判はずっと以前から聞いていましたが、はからずも今日あなたとの因縁をかなえることができました。ひそかな運命のめぐりあわせで、親しく松と女蘿のからみあうような縁を心から願っておりま<sup>(13)</sup>す」。某<sup>それ</sup>はそこで名をなのり、答えて言つた。「下卑た俗界にどつぱりと沈み、この素質をすっかり汚してしまい、高貴なあなたと卑しい私とは雲泥の差、敬う氣持を申し上げるすべもありませんが、忝くも私のもとに降っていただき、飛びあがりたいほどの喜びは限

りありません。ただお教えを頂戴して、私の無知を取り除き、民  
たる私をお救いいただくことが、以前からの願いでございます」。

眞妃は言われた。「あなたの今ここの言葉は、謙遜し飾りたてることがあつてはいけません。謙遜し飾りたてた言葉は、まったく不  
似合いです」。またしばらくしてから、眞妃はお告げになられた。「一  
枚の文を書いてお贈りしようと思います。そこであなたに筆で私の  
つたない氣持を書き記してほしいのですが、かまいませんか」。  
某は「かしこまりました」と答えると、すぐさま紙を折りたたみ、  
筆に墨を含ませた。(そこで眞妃は) すぐさま口授され、次のごと  
く詩を作られた。その詩にいう。

雲の宮門が虚空の上にそそり立ち、<sup>(13)</sup>

瓊玉の樓臺が垂れこめた天空に聳え、<sup>(14)</sup>

紫の宮殿が緑の光の上に乘っかり、<sup>(15)</sup>

不思議な樓觀が高々とかすむ。<sup>(16)</sup>

琅玉の軒の朱い部屋の内には、<sup>(17)</sup>

すぐれた徳の神仙たちが絳い霞の中にまぶしく輝く。<sup>(18)</sup>

身をかがめては雲の瓶の中の津液をすすり、

ふり仰いで碧玉の奈の木の花を摘む。<sup>(19)</sup>

玉天の池で足を洗い、<sup>(20)</sup>

牽牛星の河で楫の音を響かせる。<sup>(21)</sup>

そしてそのまま光り輝く雲の馬車に鞭を振り、<sup>(22)</sup>

龍を下して不思議の山へと手綱をとり、<sup>(23)</sup>

汚れた下界で上着を拂い、<sup>(24)</sup>

袴の裾をからげて濁った川の波の上を歩む。<sup>(25)</sup>

山澤が氣を通じあうような交わりをあなたと結び、<sup>(26)</sup>

剛なるものと柔なるものとが睦じく親しみあいたいのです。<sup>(27)</sup>

二つの清らかな世界でともに手を攜えれば、

上眞の道にはまがごとはありません。<sup>(28)</sup>

紫微夫人はまことに立派な仲立ち、

はいと受け入れさえすれば、たくさん幸福を授かるでしょう。<sup>(29)</sup>

某が書きおわると、眞妃は手に取ってご覧になり、そして言われ

た。「今これをあなたに贈ります。これで偽りのない心を述べたの

です。あれこれ言わなくてもよろしい。もし腑に落ちない點があれば、こっそりたずねなさい」。<sup>(30)</sup>

ば、こっそりたずねなさい」。

紫微夫人が言われた。「私はさらにあなたの手を煩わせ、一枚の

文を作つて諭してあげましょう。と言うのも、善いことを教えてあげ

たいのです」。<sup>(31)</sup> 某はまた紙を折りたたみ、筆に墨を含ませた。紫微

夫人は次の詩を授けられた。<sup>(32)</sup>

陰と陽が内と外に分かれると、<sup>(33)</sup>

根元の一氣もついに二つに分かれた。<sup>(34)</sup>

不思議なめぐり會いは車に乗って出向くまでもありませんが、

要は眞を體得することこそが貴いのです。<sup>(33)</sup>

南嶽夫人が輝かしい黄金を鍛えているのを、<sup>(34)</sup>

遙かに眺めて文箱と頭巾を傾けて旅立ちました。<sup>(35)</sup>

すぐれた徳が霞を蹴ちらして輝き、<sup>(36)</sup>

かくて天界の神靈を感動させました。<sup>(37)</sup>

つむじ風に乗って袂をともし、<sup>(38)</sup>

一緒に食事をしてあかね色の雲のかなたで手を取りあいましょう。<sup>(39)</sup>

天界と人間世界との交わりには、<sup>(40)</sup>

定めの中に自ずと因縁が備わっていることに氣づいて感嘆するこ

とでしょう。

この上ない仙道は誠にまがごとくではなく、<sup>(41)</sup>

汚れた俗界では耳にできるものではありません。<sup>(42)</sup>

易の咸の卦と恆の卦が象徴している天地交感の道理にともに目を

向けましょう、

このように高唱するのもあなたの手蔓になろうと思うからなので

す。

書きおわると、紫微夫人は手に取ってご覧になり、ご覧になった

うえで言われた。「これをあなたに贈りましょう。今日ここに、私

は因縁の授け主、意向を伝える仲立ちとして來ているのです」。紫

微夫人は重ねて言われた。「明日、南嶽夫人が（王屋山から）もどっ

て來られることになっています。私は九華眞妃と一緒に雲中の丘で

お出迎えしなければなりません。明日、おもどりにならないければ、

さらに數日してからのことになりましょう」。さらにしばらくして、

紫微夫人は言われた。「私は歸ります。明日も再び眞妃と一緒にあ

なたのもとを訪ねることになるでしょう」。牀から下りたかと思

と、夫人の所在は分からなくなった。眞妃はしばらく後に残り、そ

して言われた。「暗く覆われた氣持がまだ晴れず、慕わしい氣持が

忘れられません。あなたが一緒に歌ってほしいものです。明日もき

つとまた來ます」。そこで某の手を取って握りしめ、自ら牀を下り

ると、まだ戸口を出て行かないうちにふっと見えなくなってしまう

た。

(1) 章囊 『眞話』卷二葉一〇裏「一人帶綠章囊」。

(2) 白玉檢 『漢書』武帝紀「上還、登封泰山」、注「孟康曰、

王者功成治定、告成功於天、刻石紀號、有金策石函金泥玉檢

之封焉。」「眞話」卷三葉一表「捧赤玉箱二枚、青帶束絡之、題

白玉檢曰太上章、一檢曰太上文」。

(3) 玉清神虎内眞紫元丹章 『無上祕要』卷二七上清神符品「佩

此符、可以經危冒嶮、越山跨海、召神制鬼、封掌靈嶽、所之所

向、千妖伏側、萬靈束形、羣仙侍衛、身生異光、右出洞眞神虎

内眞符」。

- (4) 五香 『雲笈七籤』卷四一沐浴「太丹隱書洞真玄經云、五香沐浴者、青木香也、青木華葉五節、五五相結、故辟惡氣、檢魂魄、制鬼烟、致靈跡、以其有五五之節、所以爲益於人耶、此香多生滄浪之東、故東方之神人名之爲青木之香焉」。
- (5) 論好 『真誥』卷一葉一七裏「紫微夫人曰、眞妃之辭盡矣、論好之緣著矣」。
- (6) 太虛上眞元君金臺李夫人 方丈臺昭靈李夫人のこと。
- (7) 龜山 『雲笈七籤』卷八釋九靈太妙龜山元錄「龜山在天西北角、周廻四千萬里、高與玉清連界、西王母所封也」、『真誥』卷一二葉一二裏「時或有龜山賓共集、高會眞仙之日」、注「龜山賓卽西王母」。
- (8) 上清道 『雲笈七籤』卷四上清源統經目註序「上清者宮名也、明乎混沌之表、煥乎大羅之天、靈妙虛結、神奇空生、高浮澄淨、以上清爲名、乃衆眞之所處、大聖之所經也」。
- (9) 太上書 『真誥』卷一四葉一五表「然未受太上書、猶未成眞焉」。
- (10) 冥運之會 『真誥』卷二葉二表「紫陽眞人授書曰、太虛遠逸、高卑同接、體賢之義、著之於冥運耳」。同卷一葉一四表「二象内外泮、玄氣果中分、冥會不待駕、所期貴得眞」。
- (11) 塵染 沈約「八關齋詩」(『藝文類聚』卷七六)「因戒倦輪飄、習障從塵染」。
- (12) 靈降 『真誥』卷二葉一裏「要而言之、貞則靈降、專則神使矣」。
- (13) 雲關豎空上 鮑照「代君子有所思行」(『藝文類聚』卷四一)「西出登舊臺、東下望雲闕」、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊眞人許長史詩「紫闕構虛上、玄館衝絕颺」。
- (14) 瓊臺 『真誥』卷四葉七表「上眞宴瓊臺、邈爲地仙標」。
- (15) 紫宮 『雲笈七籤』卷五〇金闕帝君三元眞一經訣「故三元君、各有眞炁、眞炁結成、自爲千乘萬騎、雲車羽蓋、常以內入紫宮、以登玉清」。
- (16) 靈觀 『雲笈七籤』卷九六太帝君讚大有妙經頌「太寂空玄上、寥朗二儀判、凝精抱空胎、結化孕靈觀」。
- (17) 琅軒朱房內 『雲笈七籤』卷四二存大洞眞經三十九眞法「奉符登霄、寢息玉軒、定錄瓊札、世爲天仙」。同卷二五昇斗法「我得飛仙、起浮崦峒、垂瓊太元、上造朱房、役使萬神」。
- (18) 上德煥絳霞 『老子』第三十八章「上德不德、是以有德、下德不失德、是以無德」、『真誥』卷一六葉一〇裏「夫有上聖之德、旣終、皆受三官書爲地下主者、一千年乃轉補三官之五帝」。同卷三葉一二裏「清晨捐絳霞、總氣霄上遊」。
- (19) 仰撥碧姦花 『真誥』卷四葉一表「人人往者皆得撥玄華而捐玉映、對天仙以散想也」。
- (20) 濯足玉天池 『孟子』離婁上「有孺子歌曰、滄浪之水清兮、

可以濯我纓、滄浪之水濁兮、可以濯我足。『雲笈七籤』卷三〇  
大洞迴風混合帝一之法「紫液流於胸中、絳炁結於百神、上升玉  
天、羽衣虎羣」。

(21) 鼓枻牽牛河 『楚辭』漁父「漁父莞爾而笑、鼓枻而去。班  
固『西都賦』(『文選』卷一)「集乎豫章之宇、臨乎昆明之池、  
左牽牛而右織女、似雲漢之無涯」。

(22) 遂策景雲駕 『太上飛行九神玉經』(『雲笈七籤』卷二〇)「嘯  
咤五帝、策駕景雲、上造北晨、朝謁皇君」。

(23) 落龍轡玄阿 『真誥』卷三葉一裏「落鳳控六龍、策景五嶽阿」。  
『無上祕要』卷九三昇上清品下「微呪曰、日景耀羅、綺合玄阿、  
…右出洞真黃氣陽精王道順行經」。

(24) 振衣塵滓際 『楚辭』漁父「新沐者必彈冠、新浴者必振衣」。  
『顏氏家訓』勉學「彼諸人者、竝其領袖、玄宗所歸、其餘桎梏  
塵滓之中、顯什名利之下者、豈可備言乎」。『真誥』卷二葉一八  
表「振衣尋冥嶠、迴軒風塵際、良德映靈暉、穎根榮華蔚」。

(25) 褰裳步濁波 『毛詩』鄭風褰裳「子惠思我、褰裳涉溱、子不  
我思、豈無他人」。陸機「擬青青陵上栢」(『文選』卷三〇)「人  
生當幾何、譬彼濁水瀾」、李善注「言濁水之波易竭也」。

(26) 山澤 『周易』說卦傳「天地定位、山澤通氣」。

(27) 剛柔順以和 『周易』說卦傳「立天之道、曰陰與陽、立地之  
道、曰柔與剛、立人之道、曰仁與義」。同「和順道德而理於義、

窮理盡性以至於命」。

(28) 上眞道 『雲笈七籤』卷六·三洞品格「八素眞經云、太上之  
道有三、上眞之道有七、中眞之道有六、下眞之道有八、今出如左、

…太上鬱儀奔日文、太上結璘奔月章、太上八素奔晨隱書、太微  
帝君飛行天綱上經、高上大洞眞經三十九章、金闕靈書紫文上經、  
黃老八道九眞中經、右上眞之道、總而行之其道、則爲上清上元  
眞人」。

(29) 享福 『後漢書』列傳二〇下郎顗傳「易曰、天道無親、常與  
善人、是故高宗以享福、宋景以延年」。

(30) 微訪 『真誥』卷一葉一八表「若有未悟者、宜微訪可否」。

(31) 二象内外泮 『晉書』卷七五王坦之傳「夫乾道確然、示人易  
矣、坤道隤然、示人簡矣、二象顯於萬物、兩德彰於羣生」。『眞  
誥』卷二葉九裏「夫陰陽有對、否泰反用、二象既羅、得失錯綜、  
此皆往來之徑陌耳」。『莊子』逍遙遊「定乎内外之分、辯乎榮辱  
之境」。

(32) 玄氣 『三天內解經』卷上「幽冥之中、生乎空洞、空洞之中、  
生乎太無、太無變化、玄氣元氣始氣三氣、混沌相因、而化生玄  
妙玉女」。『真誥』卷二葉六裏「晨飛陵清、玄氣赴霄、體邁玉虛、  
心遺艱鋒」。

(33) 得眞 『真誥』卷二葉九裏「夫處無用於羣塗、乃得眞之挺樸、  
任凡庸以內觀、乃靈仙之根始也」。

(34) 明金 『真誥』卷二葉一〇表「明金生穢於泥漬、寶玉投糞以招塵」。

(35) 眇觀 『真誥』卷四葉四表「玄清眇眇觀、落景出東溟、願得絕塵友、蕭蕭罕世營」。

(36) 良德 『真誥』卷二葉一八表「良德映靈暉、穎根繁華蔚」。

(37) 乘飄儔衮衮 『真誥』卷三葉三表「乘飄遡九天、息駕三秀嶺。同卷二葉一八裏「咸恆當象順、攜手同衮帶」。

(38) 齊牢攜絳雲 『真誥』卷一葉一七表「爲必抱衮均牢、有輕中之接、塵穢七神、悲魂任魄乎」。庾信「步虛詞」「北闕臨玄水、南宮生絳雲」。

(39) 天人際 『漢書』卷五六董仲舒傳「臣謹案春秋之中、視前世已行之事、以觀天人相與之際、甚可畏也」。

(40) 上道 『真誥』卷二葉一裏「此道在長養分生而已、非上道也」。

(41) 咸恆象 『周易』咸彖傳「咸、感也、柔上而剛下、二氣感應以相與、…天地感而萬物化生、聖人感人心、而天下和平」。同恆彖傳「恆、久也、剛上而柔下、雷風相與、巽而動、剛柔皆應」。

『真誥』卷二葉一八裏「咸恆當象順、攜手同衮帶、何爲人事閒、日焉生患害」、注「咸恆義出周易」。

(42) 高唱 陸機「演連珠」（『文選』卷五五）「絕節高唱、非凡耳所悲」。『真誥』卷三葉三表「高唱無逍遙、各興有待歌」。

六月二十六日夕、衆眞來、疏如左、

紫微王夫人

紫清上宮九華眞妃

上眞司命南嶽夫人、某師（凡此前後云某者、皆楊君自隱名也）

紫陽眞人

茅中君

清靈眞人

茅小君

又有一人、年甚少、整頓非常、建芙蓉冠、著朱衣、以白珠綴衣縫、帶劍、都未曾見、此人來、多論金庭山中事、與衆眞共言、又有不可得解者、揖敬紫微紫清南眞三女眞、餘人共言平耳、云是桐柏山眞人王子喬也、都不與某語、又前後初有眞人來見降者、時皆自不卽與某共語耳、

各坐良久、紫清眞妃曰、「欲復煩明君之手筆書一事、以散意忘言、可乎」、某又襲紙待授、眞妃乃徐徐微言而授曰、

「我是元君之少女、太虛李夫人愛子也、昔初學眞於龜臺、受玉章於高上、荷虎錄於紫皇、秉瓊鉞於天帝、受書於上眞之妃、以遊行玉清也、常數自手扉九羅、足躡玄房、雪形靈虛、仰歎日根、入宴七闕、出轡雲輪、攝三辰而俱升、散景霞以飛軒也、非不能採擇上室、訪搜紫童、求（王）<sup>①</sup>〔玉〕宮之良儔、偶高靈而爲雙、接玄引奇、友于帝郎

矣、直是我推機任會、應度歷數、俯景塵沫、參龍下邁、招冥求之雄、追得匹之黨耳、自因宿命相與、乃有墨會定名、素契玉鄉、齊理二慶、攜鴈而行、匏爵分味、醺衾結袞、顧儔中饋、內藏眞方也、

推此而往、已定分冥簡、青書上元、是故善鄙之心亦已齊矣、對景之好亦已域矣、得願而遊、歡兼昔旨、豈不冥乎自然、此復是二象大宗、内外之配職耳、實非所以變無反淡、凝情虛刃、靈刀七果、遣任太素、保眞啓玉、單景八空之謂也、秀寂高深、鬱興流霄、使鳳歌雲路、龍吟虎嘯、天皇雙景、遠升辰樓、飛星擲光、日月映軀、口吐冥煙、眼激電光、上寢瓊房、流行玉清、手掣景雲、足陟金庭、若自此之時、在得道之頃、爲當固盡内外、理同金石、情纏雙好、齊心幃幙耳、爲必抱衾均牢、有輕中之接、塵穢七神、悲魂任魄乎、蓋是妾求氏族於明君耳、非有邪也、今可謂得志懷眞、情已如一、方當相與結駟玉虛、偶行<sup>(2)</sup>此<sup>(1)</sup>「北」玄、同撥絳實於玉圃、併採丹華於閭園、分飲於紫川之水、齊濯於碧河之濱、紫華毛帔、日冕蓉冠、逍遙上清、俱朝三元、八景出落、鳳扉雲關、仰漱金髓、咏歌玉玄、浮空寢宴、高會太晨、四鈞朗唱、香母奏煙、齊首偶觀、攜帶交裙、不亦樂乎、不亦得志乎、明君其順運隨會、妾必無辭、且亦自不得背實反冥、苟任胸懷矣<sup>(3)</sup>、授畢、復自取視而言曰、「今以此書相詣、庶豁其滯疑耳」、言畢乃笑、良久、紫微夫人曰、「眞妃之辭盡矣、論好之緣著矣、爾亦不得復有所容也、玄運冥分、使之然耳」、

南嶽夫人見授書曰、「冥期數感、玄運相適、應分來聘、新構因緣、

此攜眞之善事也、蓋示有偶對之名、定内外之職而已、不必苟循世中之弊穢、而行淫濁之下迹矣、偶靈妃以接景、聘貴眞之少女、於爾親交、亦大有進業之益得、而無傷絕之慮耳、千神於是可使、試觀不得復陳矣、眞旌必可剋往、雲駟必可俱駕也、吾往曾因紫微夫人、爲汝構及此意、今遂如願、益使我欣欣、愼復疑矧於心胸矣、我昨見金臺李夫人於清虛中、言爾尙有疑正之心、色氣小有〔眼〕〔眼〕〔謂應作恨恨字〕、汝違此舉、誤人不小、眞妃有神虎內眞丹青玉文、非爾所有者輩、良才求寫、故當不爲隱耳、今日相攜、何但文章而已、將必乘景<sup>(3)</sup>王<sup>(2)</sup>〔玉〕霄乎、若有未悟者、宜微訪可否、眞妃見夫人書言、乃笑而言、「攜手雙臺、娛歡良會、景駟同机、於此齊乎」、

- (1) 俞本が「王」を「玉」に作るのに従う。
- (2) 俞本が「此」を「北」に作るのに従う。
- (3) 俞本が「王」を「玉」に作るのに従う。

六月二十六日の夕、眞人たちがやって來られた。以下のとおり書きつける。

紫微王夫人

紫清上宮の九華眞妃

上眞司命の南嶽夫人、某<sup>それがし</sup>の師。へおよその前後で「某」とあるのは、すべて楊君が自ら名をふせたものである。

紫陽眞人

茅中君

清靈眞人

茅小君

さらにまた一人がいた。年はとても若く、服裝がひとときわきちんと整っている。芙蓉冠<sup>(1)</sup>をかぶり、朱色の上着を着け、白い眞珠を着の縫い目に連ね、劍を帯びている。これまでにまったく見たことのない人である。この人はやって来ると、金庭山<sup>(2)</sup>の山中のことばかり論じていた。眞人たち同士で語りあっている時には、一層意味の分からぬ點があつた。彼は紫微夫人、紫清眞妃、南眞夫人の三人の女眞には敬禮していたが、他の仙人と語りあう時には普通のままであつた。彼は桐柏山眞人の王子喬であるということだそうだが、某<sup>それがし</sup>にはまったく語りかけなかった。またこの前後、初めて眞人たちが降臨された際、その時にもすべてすぐには某<sup>それがし</sup>に直接語りかけられなかった。

それぞれ坐ってしばらくすると、紫清眞妃が言われた。「またあなたの手を煩わせて一事を筆寫してもらい、氣持を晴らしてすっきりした氣分になりたいのです。よろしいでしょうか<sup>(3)</sup>」。某<sup>それがし</sup>はまた紙を折りたたんで誥授を待った。眞妃はそこでゆっくり微かな聲で誥

授された。

「私は(太虚上眞)元君の末娘、太虚李夫人の愛娘です。昔、最初龜臺で神仙の道を學び、高上君から玉章を授かり、紫皇から虎録を肩に掛けていただき、天帝から瓊玉の斧を受け取り、上眞の妃となる辭令を授かつて、玉清境<sup>(4)</sup>に旅立ちました。いつもしばしば手で九重の天の扉を開き、足は天界の宮室に踏み入りました。雲氣からなる肉體は靈妙にして虚<sup>(5)</sup>、仰いでは太陽の精を飲み、七重の宮門の内に入っていくつろぎ、外に出ては雲の車を駕し、日・月・星の三辰を手執つて一緒に登り、輝く霞<sup>(6)</sup>を蹴ちらして車を飛翔させました<sup>(7)</sup>。上眞たちが集う宮室を選んでは、紫童<sup>(8)</sup>を訪ね、玉宮のすぐれた仲間を求め、貴い神靈<sup>(9)</sup>と連れあいになり、すぐれた者たちとつきあい、天帝の若様たちと交友することができないわけではありません。ただ、私は時の運りを推しはかつてそれに身を委ね、定まった運命のままにそれを履み行い、塵俗を下に見ながら、龍をそえ馬にして下界に下り、幽冥の理法を追求するすぐれた人物を招き、私の連れあひとなる人を求めているのです。もともと前世からの運命が味方していればこそ、人知れぬめぐりあわせによって神仙の名稱に名が備わり、もともと神仙界にびたりとかなっているのです。ともに二人の婚儀をととのえて、結納の雁を攜えて出かけ、ひょうたんの杯の美酒を分かちあい、しとねをともしして契りを結び、あなたの奥方<sup>(10)</sup>となつて、眞仙の方術を内に保ちましょう。



これから推しはかれれば、幽冥の簡策にすでに分限が定められており、上元（天界）において青録に記されているのです。<sup>(17)</sup>だから、かけ離れた二人の心もすでに一つになりました。二人の互いのよしみもすではつきりと定まりました。願いがかなって旅立てば、その喜びは昔の思いをも包みこむほど、自然に冥合したということにはかなりません。これも陰と陽との根本的なあり方、仙界と俗界との割り当てられた役割なのです。<sup>(18)</sup>まことに、無に變化して静かな境地に返り、虚なる刃に氣持を凝止させ、七つの煩惱を靈刀でばざりと切り捨て、太素の氣にすべてを委ね、眞實を大切に守って玉室を開き、<sup>(19)</sup>八空でただ一人ぼっちというわけではありません。ひとときわ靜寂な天空、<sup>(20)</sup>もくもくと流れる雲氣、そこにおいて鳳は雲間の道に歌い、龍は吟じ虎は吠え、天皇大帝と景をならべ、遙か遠く日月星辰の高殿に登り、流星は光を投げかけ、日や月はわが身を照らし、口には不思議な煙を吐き、眼は電光を激しく放ち、瓊玉の部屋に登って憩い、玉清界を巡り歩き、手には光る雲をつかみ、足は黄金の庭を歩きまわるとしましょう。このような時は、仙道成就ももう間近いのです。仙界と俗界の區別はまったくなくなり、金石のようにゆるぎなく、二人のよしみに氣持は纏綿とし、帳の内<sup>(21)</sup>で心をつににするのでしょうか。それとも、必ずしとねを抱き食事をともにして、いかがわしい交わりをもち、七神を穢し、三魂を悲しませて七魄をほしのままに振舞わせるのでしょうか。私はあなたに一族になつてもら

いたいです。邪な下心があるものではありません。今こそ、志を實現し眞實の道を懷き、氣持はすでに一つになったと言えるでしょう。あい攜えて四頭立ての馬車を天界に走らせ、二人連れだつて北玄を巡り、一緒に玉の園で絳い木の實を拾い、ともに閼圃の園で丹い花を摘み、紫の川の水を分かち飲み、二人ならんで碧の河の岸邊で水浴び。紫の花のうちかけ、日の光の芙蓉冠のいでたちで、上清界を氣のむくままに歩きまわり、一緒に三元君にお目にかかる。八景の車は下つて鳳は雲の門の扉を開き、仰いで黄金の精髓を飲み、玉京玄都で歌を唱い、虚空に浮かんだまま安らかに憩い、天界で盛大に集い、四方から起る天上の音楽にあわせて高らかに唱い、香母が煙を吐き出す。その有様を頭をならべて二人して眺め、愛情を深めるならば、楽しくはないでしょうか。望みどおりではないでしょうか。あなたが運命のめぐりあわせに従われるならば、私は何も申しはしません。ともあれ、自分から眞實に背を向け幽冥の理法に背き、自分の思いのままにすることはなりません」。

誥授しおわると、再び自分で手に取つてご覧になって言われた。「今、この書を差し上げましょう。どうかご自分の疑いの氣持を晴らして下さい」。

そう言いおわると、ほほえまれた。しばらくして、紫微夫人が言われた。

「眞妃の言葉はすべて盡くされています。よしみを結ぼうとする

機縁は明らかになりました。あなたももう、ほかの相手を受け入れることはできません。不思議な運命<sup>(38)</sup>、幽冥の定めがそうさせるのです」。

南嶽夫人が次の書きつけを授けられた。

「幽冥の定め<sup>(39)</sup>の理法がはたらき、不思議な運命がびたりとかなって、私たちは定めに従ってあなたを招きに來降し、あらたに因縁を結びました。これは、眞人と連れた<sup>(40)</sup>ためのすばらしい出來事なのです。一對の名というものが、仙界と俗界との役割が決められているということを示したのです。必ずしも世俗のくだらぬ穢れに従い、淫らで汚れた行いをすることはありません。神靈の眞妃と一緒に<sup>(41)</sup>景をならべ、貴い眞人の末娘をもらい、あなたと親しい交わりを結ぶならば、大いに修業を進めるうえに利益があり、心を痛める心配はなくなるのです。もろもろの神々もかくて使役できるように<sup>(42)</sup>なり、試練と監視<sup>(43)</sup>が繰り返されることははやありません。眞仙の旗のもとには必ず前進できるのであり、雲の車には必ず二人して乗ることができるのです。私はさきほど、紫微夫人の口から、あなたのためにこのような氣持を表現してもらいました。今、このまま思いどおりになれば、一層私は大喜びです。もう二度と心の中で思い惑うのはやめなさい。私は先日、清虛宮で金臺李夫人にお目にかかりましたところ、あなたがまだ疑いの心を抱いているとおっしゃり、表情に少し「眼」<sup>(44)</sup>「眼」<sup>(45)</sup>へきつと「恨恨」の字であろう」を示されま

した。あなたが今回の推舉に背けば、私の立場はまるつぶれです。

眞妃は『神虎内眞丹青玉文』を持っています。あなたの持っているようなものではありません。すぐれた才能の持主が書き寫したいのなら、もともと隠したりはしないでしょ。今日、攜えて來たのは文章だけではありません。きつと天界に昇れるでしょう。<sup>(46)</sup>もしまだ分らない點があれば、その可否についてこっそりたずねなさい。

眞妃は南嶽夫人の書きつけの言葉を見ると、ほほえみながら言われた。

「手を攜えて二人して高殿にならび、よき集いを楽しみ、景<sup>(47)</sup>の車をともにならべて、さあご一緒しましょう」。

(1) 芙蓉冠 『眞誥』卷二葉三表「又有一人、甚少、整頓、建美

蓉冠、朱衣帶劍、未曾見也」。『清虛眞人王君内傳』(『雲笈七籤』

卷一〇六)「(太上丈人)著流霞羽袍、冠芙蓉之冠」。

(2) 金庭山 『眞誥』卷一四葉一九表「金庭有不死之鄉、在桐柏之中、方圓四十里、上有黃雲覆之」。

(3) 忘言 『莊子』外物「荃者所以在魚、得魚而忘荃、蹄者所以在兔、得兔而忘蹄、言者所以在意、得意而忘言」。

(4) 受玉章於高上 『雲笈七籤』卷四九金闕帝君五斗三元眞一經口訣「西元太上宮、宮中有白素少女、授子玉章虎書也」。『眞靈

位業圖』第一左位「五靈七明混生高上道君、東明高上虛皇道君、西華高上虛皇道君、北玄高上虛皇道君、南朱高上虛皇道君」。同右位「紫虛高上元皇道君、…虛明紫蘭中元高上崑皇道君、…高上玉帝」。

(5) 荷虎錄於紫皇 『上清黃庭內景經』高奔章第二十六(『雲笈七籤』卷一二)「腰帶虎錄佩金璫、駕欵接生宴東蒙」。『雲笈七籤』卷一〇「上清高聖太上玉晨大道君紀」洞真大洞真經云、上清高聖太上大道君者、…誕於西那天鬱察山浮羅嶽丹玄之阿、於是受籙紫皇、受書玉虛」。

(6) 玉清 『雲笈七籤』卷三道教三洞宗元「其三清境者、玉清上清太清是也、亦名三天、其三天者、清微天禹餘天大赤天是也、天寶君治在玉清境、即清微天也、其氣始青、靈寶君治在上清境、即禹餘天也、其氣元黃、神寶君治在太清境、即大赤天也、其氣玄白」。

(7) 玄房 『淮南子』主術訓「天氣爲魂、地氣爲魄、反之玄房、各處其宅、守而勿失、上通太一」。『真誥』卷九葉一二表「萬響入百關、驕女坐玄房」。

(8) 靈虛 『真誥』卷一八葉一〇表「於是靜心一思、逸憑靈虛、登巖崎嶇」。

(9) 日根 『真誥』卷一一葉六表「其內有陰暉夜光日精之根、照此空內、明竝日月矣」。

(10) 七闕 『真誥』卷一八葉一〇裏「偶真重幽、心觀靈元、炁陶太素、登七闕之巍我、注「飛天堦也」。

(11) 飛軒 『真誥』卷一七葉二裏「吾子飛軒結駟、駕昞林薄」。

(12) 紫童 『無上祕要』卷九二昇上清品上「微呪曰、…靈同天人德、皇上升紫童、運我凌九虛、上造朱月宮、…右出洞真黃氣陽精經」。

(13) 高靈 『真誥』卷四葉一〇表「恭誠高靈者、當得世功相及、禍惡不遘」。

(14) 墨會定名 『真誥』卷四葉一四裏「自古及今、死生有津、顯默異會、藏往滅智、與世同之者、皆得道之行也」。同卷四葉一二表「蓋爾不復受考於三官、已定名於不死之錄矣」。

(15) 攜鴈 『儀禮』士昏禮「昏禮、下達、納採用鴈、主人筵于戶西、西上、右几、…賓執鴈、請問名、主人許、賓入授如初禮、…納吉用鴈、如納采禮、…請期用鴈、主人辭、賓許、告期、如納徵禮」。

(16) 中饋 『周易』家人六二「無攸遂、在中饋、貞吉」、孔穎達疏「婦人之道、巽順爲常、无所必遂、其所職主在於家中饋食供祭而已」。

(17) 青書上元 『雲笈七籤』卷四三存帝君法「死錄、黑簡白書也、生錄、白簡青書也」。同卷四二存大洞真經三十九真法「迴風脫死、帝一相連、五通七合、俱生上元」。『無上祕要』卷二二・三

界官府品「玉京玄臺南極上元宮、右玄明恭華天中內音書於其上、  
…右出洞玄經」。

- (18) 昔旨 『真誥』卷一二葉二表「子建志有年、今因以反子昔旨耳」。

- (19) 內外之配職 『真誥』卷一葉一七裏「蓋示有偶對之名、定內外之職而已」。

- (20) 凝情虛刃 『真誥』卷三葉一三表「斧子乃潛晨密煥、秀霄空上、託心玄宅、神栖入領、心標寂刃、歸形太初」。

- (21) 太素 『易緯乾鑿度』「故有太易、有太初、有太始、有太素、太易者、未見氣也、太初者、氣之始也、太始者、形之始也、太素者、質之始也、氣形質具而未相離、謂之混沌」。

- (22) 保眞啓玉 『真誥』卷八葉九裏「夫觀物適任、內順明靈、託性命於高眞、委形氣於神攝者、亦剋疆以永遐、迴秋齡以保眞」。  
同卷二葉五裏「長歌靈幙、煥啓玉扉」。

- (23) 單景八空 『真誥』卷二葉二〇裏「虛和可守雄、蕭蕭可守雌、夫蕭蕭者單景獨往也」。同卷三葉六裏「解輪太霞上、歛轡造紫丘、手把八空炁、縱身雲中浮」。

- (24) 高淸 『雲笈七籤』卷四一沐浴吉日「洞玄二十四生圖經云、  
…體香萬神降、乘景登高淸」。

- (25) 天皇雙景 『無上祕要』卷六帝王品「天皇主氣、地皇主神、人皇主生、三合成德、萬物化焉、故天皇起於甲子元建之始、治

於太元三玄空天、…右出三皇經」。『雲笈七籤』卷四五祕要訣法  
常存識己形第二十二「元胎上眞、雙景二玄」。

- (26) 瓊房 『雲笈七籤』卷八釋曲素訣辭五行祕符「結自然鳳氣、而成瓊房玉室」。

- (27) 七神 『雲笈七籤』卷二五奔辰飛登五星法「凡人身中亦有七神、七神見之、亦爲泄漏、不可不深慎也」。『真誥』卷三葉五表「養形靜東岑、七神自相通」。

- (28) 悲魂任魄 『雲笈七籤』卷五四說魂魄「魄者陰也、常欲得魂不歸、魂若不歸、魄即與鬼通連、魂欲人生、魄欲人死、魂悲魄笑曰、歸無我舍、五鬼侵室、三魂絕而不歸、即魄與五鬼爲徒、令人遊夢恠惡、謂之遊魂、身無主矣」。

- (29) 玉虛 『真誥』卷二葉六裏「晨飛陵清、玄氣赴霄、體遇玉虛、心遣艱鋒」。

- (30) 北玄 『無上祕要』卷三星品「太上大道君北極眞公曰、吾昔遊於北天、策駕廣寒、足踐華蓋、手排九元、逸景雲宮、遨戲北玄、…右出洞眞迴元九道飛行羽經」。『真誥』卷一四葉八表「霍山中  
有學道者鄧伯元王玄甫、…今在北玄圃臺、受書位爲中嶽眞人」。

- (31) 同撥絳實於玉圃、併採丹華於閭圃 『雲笈七籤』卷一〇四太  
和眞人傳「或酌碧海之津、挹玄丘之雲、採丹華於閭苑、撥絳實  
於玉圃」。

- (32) 紫華毛幘 『真誥』卷二葉一一裏「司命君形甚少於二弟、著

青錦繡帔紫毛帔、巾芙蓉冠」。『無上祕要』卷一七衆聖冠服品上「白素右元君上著龍文白錦帔、下著白錦華裙、頭建紫華芙蓉冠、…右出洞真玉晨明鏡雌一寶經」。

- (33) 三三 『無上祕要』卷二七上清神符品「高聖帝君曰、太素瓊簡金書隱文、知者飛昇太素宮、上朝三元君、…右出洞真七聖元紀經」。『真誥』卷二葉九表「先詣上清西宮、北朝玉皇三元、然後乃得東軫執事矣」。

- (34) 八景 『真誥』卷三葉四裏「控飄扇太虛、八景飛高清」。

- (35) 金髓 『無上祕要』卷七八玉清藥品「絳津金髓、日精月華、…此玉清之所服、太上之所寶、…右出道迹經」。

- (36) 玉玄 『雲笈七籤』卷二一·四梵三界三十二天「梵行之上、則是上清之天、玉京玄都紫微宮也、乃太上道君所治、眞人所登也」。

- (37) 香母奏煙 『真誥』卷三葉七裏「香母折腰唱、紫煙排棟梁」。『雲笈七籤』卷三八大戒上品「是時雲龍踊躍、諸天散華、飛香奏煙、山海靜波」。

- (38) 玄運 『真誥』卷三葉一一裏「幸遭玄運、靈啓其會」。

- (39) 冥期數感 『無上祕要』卷四二修學品「七玄散幽夜、反胎順沈浮、冥期苟潛凝、陽九无娛憂、…右出洞玄九天經」。『真誥』卷一九葉一表注「此卷竝立辭表意、發詠暢旨、論冥數感對、自相儔會」。

- (40) 攜眞 『真誥』卷四葉八表「攜眞造靈阿、虛景盤瓊軒」。

- (41) 偶靈妃以接景 『真誥』卷三葉一五表「十二月十七日夜、方諸宮東華上房靈妃歌曲。同卷一〇葉一八裏「雖復接景飡霞、故未爲身益」。

- (42) 千神於是可使 『真誥』卷七葉六裏「君自受命、當能治滅萬鬼、羅制千神」。

- (43) 試觀 『真誥』卷五葉五表「今既語子以得道之方、又悟汝以試觀之法」。

- (44) 乘景玉霄 『真誥』卷一四葉一八裏「至人焉在、朕曜南辰、含靈萬世、乘景上旋、化成三道、日月爲隣、實玄實師、號曰元人」。同卷九葉一五表「登玉霄琳房、四眇天下有志節遠遊之心者」。

# 真誥卷之二

## 運象篇第二

清虛眞人授書曰、「黃赤之道、混氣之法、是張陵受教施化、爲種子之一術耳、非眞人之事也、吾數見行此而絕種、未見種此而得生矣、百萬之中、莫不盡被考罰者矣、千萬之中、誤有一人得之、得之遠至

於不死耳、張陵承此以教世人耳、陵之變舉亦不行此矣、爾慎言濁生之下道、壞眞霄之正氣也、思懷淫慾、存心色觀、而以兼行上道者、適足明三官考罰耳、所謂抱玉赴火、以金棺葬狗也、色觀謂之黃赤、上道謂之隱書、人之難曉、乃至於此」。

紫微夫人授書曰、「夫黃書赤界、雖長生之祕要、實得生之下術也、非上宮天真流駢晏景之夫所得言也、此道在長養分生而已、非上道也、有懷於淫氣、兼以行乎隱書者、適足握水官之筆、鳴三官之鼓耳、玄挺亦不可得恃、解謝亦不可得賴也、要而言之、貞則靈降、專則神使矣」。

「夫眞人之偶景者、所貴存乎匹偶、相愛在於二景、雖名之爲夫婦、不行夫婦之迹也、是用虛名以示視聽耳、苟有黃赤存於胸中、眞人亦不可得見、靈人亦不可得接、徒劬勞於執事、亦有勞於三官矣」。

鷄鳴時、南嶽夫人授書曰、「鷄既鳴矣、論好之緣篤也」。

紫陽眞人授書曰、「太虛遠逸、高卑同接、體賢之義、著之於冥運耳、慎心係於黃赤之疑也」。

茅中君授書曰、「玄標觸景、俯和塵謫、玉振愆房、清風逸邁、可

不勗之也」、言畢、諸眞人去。

眞妃少留在後曰、「又煩明君爲一辭也」、而授書曰、

「忘懷蘭素、暉心齊契、方當數親虔清宇、德與流景合、宜歡會理髮領秀、伏度明君高尚靈映、縱滯忘鄙耳」、言畢、持手而下牀、未至戶之間、忽失所在。

#### 眞話卷二

#### 運象篇第二

清虛眞人が書を授けて次のように言われた。「黄赤の道、混氣の法（房中術）<sup>(1)</sup>は、張陵<sup>(2)</sup>が教えを受けて教化を施し、子種の種つけをするための一術に過ぎぬ。眞人が行う事柄ではない。私はこの術を實行しながら子種を絶やすのをしばしば目にしたが、これで種つけをして長生<sup>(3)</sup>がなかった者を見たことがない。（この術を行う）百萬の人々は、ことごとく懲罰<sup>(4)</sup>を受けるが、一千萬人中ともなると、間違つてその中の一人がこの術を體得することがあり、體得すれば遠く不死に至ることができるのだ。張陵はこの術を受けついで世人に教えたに過ぎないのである。張陵の仙化に際してもこの術を行つてはいない。汝は汚れた人間の下道<sup>(5)</sup>について語り、仙界の正しい氣を壞

さないように氣をつけるように。淫欲に思いを致し、色觀に心を殘しながら、あわせて上道を行ったりすると、三官(8)の懲罰は靦面であらう。いわゆる玉を抱いて火に赴き、金の棺桶で狗を葬るといふものだ。色觀とは黃赤の道のことを言い、上道とは隱書のことを言うのである。人々の物分かりの悪いことは、こんなにまでひどいのだ。」

紫微夫人が書を授けて次のように言われた。「そもそも黃書赤界は長生の祕法要訣(7)ですが、長生を獲得するためにはまことに下等な術なのです。上宮の天眞で車を走らせ、景(9)に憩う男子が口にすべき言葉ではありません。この黃赤の道は、分として與えられた生命を長く養うだけであつて、上道ではありません。淫亂な氣を心に懷いて、そのうえ同時に隱書の教えを實行すれば、それこそ水官(8)に筆を握つて取り調べを行わせ、三官に鼓を鳴らして罪を責めさせることにならう。そうなれば、どんなにすぐれた資質(9)も恃むに足りず、解謝(10)して神に祈つても頼りにすることができません。つまるところ、貞節であれば眞靈が降り、專一であれば神は使者となつてやつて來るのです。」

「そもそも眞人が連れあいとなつて二つの景(9)をならべるのは、貴ぶべきは連れあいとなること、愛くしみあうのは二つの景(10)をならべる點にあるのです。これを夫婦と名づけはしますが、實際に夫婦の

營みを行うわけではありません。假の名をもって目に見、耳に聞けるようにしているだけなのです。かりそめにも黃赤の道を胸中にとどめるようであれば、眞人を見ることができませんし、靈人に接觸することもできません。いたずらに執事(11)に骨を折らせ、三官をわずらわすばかりです。」

鶏鳴の時、南嶽夫人が書を授けて、「鶏がすでに鳴きました。よしみを論ずる縁は篤くなりました」と言われた。

紫陽眞人が書を授けて次のように言われた。「太虚は遙かに遠く、位の高い者も低い者も等しく接する。賢者であるそなたを近づけることわりは、ひそやかな運命に現れているのだ。偽りの黃赤に心をかけないように用心せよ。」

茅中君が書を授けて次のように言われた。「奥深く高くすぐれていつも輝きながら、俗界に下つて汚れた露(12)と調子を合わせ、罪に満ちた部屋で玉を振つても、清風は遙かに遠く吹いている。しっかりとやるがよい。」

言いおわると、眞人たちは去っていった。

九華眞妃はしばらく後に留まつて、「もう一度あなたを煩わせて

一言述べましよう」と言い、書を授けて次のように言われた。

「蘭のような飾り氣のなきに心を奪われ、二人の契りに心は浮きたちます。今こそきつとしばしば清らかな住まいで親しみかしこまり、徳は流れる景と一緒になることでしょう。喜びを盡くして秀でた嶺で髪を整えるのにうってつけ。思いますにあなたは志を高くし心を輝かせ、凝り固まった下品な心とき放ち忘れ去ることでしょう」<sup>(1)</sup>。そう言いおわると、手を取って牀から下り、戸口まで行き着かないうちにたちまち所在が分からなくなった。

(1) 黃赤之道、混氣之法 『老君音誦誡經』「房中之教、通黃赤

經契、有百二十之法。『眞誥』卷五葉二表「君曰、道有黃書赤

「界」長生之要。甄鸞『笑道論』道士合氣三十五〔廣弘明集〕

卷九「臣笑曰、臣年二十之時、好道術、就觀學、先教臣黃書

合氣三五七九男女交接之道、四目兩舌正對、行道在于丹田、有

行者、度厄延年、教夫易婦、惟色爲初、父兄立前、不知羞恥、

自稱中氣眞術、今道士常行此法、以之求道、有所未許」。『洞眞

黃書』「以漢安元年七月七日中時、太上老君授與張陵、口要長

生度世尸解白日昇天、子孫係世、過度諸災、道陵以二年歲在癸

未正月七日日中時、授與趙升王長王稚王英等、施行黃書契令」。

(2) 張陵 『後漢書』列傳六五劉焉傳、『神仙傳』張道陵を參照。

(3) 考罰 『眞誥』卷一二葉九表「俊修之道成、今在洞中、兼北

河司命、主水官之考罰。同卷一三葉四表注「岱宗又有左火官

右水官及女官、亦名三官、竝主考罰、今三茅君通掌之、大君爲

都統、保命爲司察矣」。

(4) 下道 『眞誥』卷一九葉一二裏注「榮買善行下道之教、於上

經不甚流傳也」。

(5) 正氣 『眞誥』卷二葉一三裏「隱嘿沈閑、正氣不虧」。

(6) 三官 『後漢書』列傳六五劉焉傳注「典略曰、初、熹平中、

妖賊大起、漢中有張脩、〔角〕爲太平道、〔脩〕爲五斗米道、

〔請禱〕之法、書病人姓字、說服罪之意、作三通、其一上之天、

著山上、其一埋之地、其一沈之水、謂之三官手書。『眞誥』卷

一三葉四表「二天宮立一官、六天凡立爲三官、三官如今刑名之

職、主諸考罰、常以眞仙、司命兼以總御之也」。同卷一六葉一

○裏「夫有上聖之德、既終、皆受三官書爲地下主者」。

(7) 祕要 『眞誥』卷九葉三表「太上眞人撰所施行祕要」。

(8) 水官 『眞誥』卷七葉六表「僑於是得有死罪、故名簡早削奪、

尋輪頭皮於水官也」。

(9) 玄挺 『無上祕要』卷三三輕傳受罰品「太上道君曰、夫有宿

命應得見此文者、皆玄挺開會、必有神仙定分、此之神經不傳於

世、又妄說之者、則三天刺姦上聞帝君、告子之罪、以爲宣漏之

愆、右出洞眞黃素四十四方經」。



(10) 解謝 『論衡』解除「世間繕治宅舍、鑿地掘土、功成作畢、解謝土神、名曰解土」。『真誥』卷四葉一一裏「解謝太上」。

(11) 偶景 『真誥』卷二葉九裏「至於內冥偶景」。

(12) 二景 『真誥』卷九葉一八表「東卿司命曰、先師王君、昔見授太上明堂玄真上經、若不修存之時、今日月還住面明堂中、

日居左、月居右、令二景與目童合炁相通也」。

(13) 執事 『真誥』卷二葉九表「然後乃得東軫執事矣」。同卷九葉二二表注「楊君亦云、東軫執事、不知當在第幾住耳」。

(14) 體賢之義 『禮記』學記「就賢體遠、足以動衆」、注「體猶親也」。

(15) 塵謁 『真誥』卷二葉九裏「輕輪塵謁、參形世室」。

(16) 領秀 『真誥』卷三葉六裏「吐納洞領秀、藏暉隱東山」。同卷二葉二〇裏「擬駕東岑人、停景招隱靜、仁德乘波來、俱會三秀嶺」。

(17) 縱滯忘鄙 『真誥』卷七葉四表「鄙滯之門閉矣」。

六月二十六日夜、降八真人、

紫微左夫人一

紫清上宮九華真妃二

上真司命南嶽夫人三

紫陽真人四

清靈真人五

茅中君六

茅小君七

又有一人、甚少整頓、建芙蓉冠、朱衣帶劍、未曾見也、意疑是桐柏山真人王子喬、多論金庭山中事、言多有不可解者、恭敬紫微上真九華妃也、皆禮揖稱下官。〈此條重出而小異者、前所書是楊君自記九華降事、隱之不出、從此後是更疏說長史事、以示長史、故此一片兩本也〉

上真云、「昨與叔申詣清虛宮、校爲仙真得失之事耳、近頓除落四十七人、都復上三人耳、并復視爾輩之名簡、如今佳耳、許某乃得在伯札中」。〈許某即長史名也、楊君疏呈、故不載名耳〉

吾初不悟其如此、益好也、其洗心懃邁、宗注理盡、心丹意竭、如履冰火、若久如此者、真人亦不得逃矣、仙道亦不得隱矣、但當杜絕其淫色之念、吾等亦即可得見、可疏示之。

此南嶽夫人言。〈此即是前二十四日所道「明日當詣王屋山」事也〉

中君曰、「伯舉在於下官耳、大老子將復可念」、江東未見有如此而懃道者、然勿恃伯而忘道也、虛妄者德之病、華銜者身之災、滯者失

之首、恥者體之簡、遣此四難、然後始可以問道耳、於是靈軫鳴轅、日有彷彿也、有淫愆之心、勿以行上眞之道也、昨見清虛宮正落除此輩人名、而方又被考罰、以度付三官、推之可不慎乎。

右南嶽夫人言。

許長史愼臨尸弔喪年內耳、示許仙侯如此。《小君言、言畢大笑》

吝心既忘、得亦不同、鄙恥不除、生籍不書、許長史雖已翫除、當復曾除而復除之。《此清靈言》

東卿司命甚知許長史之慈肅、小有天王昨問、「此人今何在、修何道」、東卿答曰、「是我鄉里士也」《鄉里者、謂句容與茅山同境耳、非言本咸陽人也》、內明眞正、外混世業、乃良才也、今修上眞道也、「此語乃稱人意、略有伯形也。《此南嶽夫人言》

右從六月二十四日來、<sup>(1)</sup>《凡二十四條並有楊書》

(1) これは大字の注の誤りであらう。

六月二十六日の夜、八人の眞人が降臨された。

一、紫微左夫人

二、紫清上宮九華眞妃

三、上眞司命南嶽夫人

四、紫陽眞人

五、清靈眞人

六、茅中君

七、茅小君

さらにまた一人がいた。とても若く、端正で、芙蓉冠をかぶり、朱色の上着に劍を帶び、これまでに見たことがなかった。思うに桐柏山眞人の王子喬ではないだろうか。金庭山の山中のことばかり論じていたが、その言うことには理解できない點が多かった。紫微夫人、上眞夫人、九華眞妃に敬意を示していた。すべてに揖の禮をして下官と稱していた。<sup>(1)</sup>《この條は、重出しながらいささか違うのは、前に書したのは楊君が自分で九華眞妃の降臨した事を記し、これを隠して人目につかないようにしたのである。これから後は、あらためて許長史について説いたことを書き記し、それを許長史に示したのである。それでこの一段は二種類のテキストがあるのである》

上眞(司命南嶽夫人)が次のように言われた。「昨日、叔申(司命君)と清虛宮に赴き、仙眞となるべき者の行いの得失を調べまし

た。最近、一氣に四十七人の名を削除<sup>(2)</sup>、あらたに合計三人を載せました。ついでにあなたたちの名簿を見たところ、今のところはすばらしい。許某はなんと伯の位の札の中に見つかりました。へ許某とは許長史の名である。楊君が書いて示したので、名を載せなかったのである」

私はこれほどまでだとはまったく気がつきませんでした。益々結構なことです。心を洗<sup>(3)</sup>って邁進<sup>(4)</sup>し、根本に心を注いで理を盡くし、眞心をもって意を盡くし、冰や火を履むように注意深くする。もし長らくこのようにすれば、眞人として逃れるはずはありません。仙道として隠れるはずはありません。ただその淫色<sup>(5)</sup>の氣持を閉ざし絶てば、私たちにもすぐに會うことができます。書いて示してやりなさい」。

これは南嶽夫人のお言葉。へこれはつまり前の二十四日の條に、「明日、王屋山に出かけるつもりです」と言っていることなのである」

茅中君は次のように言いました。「伯として擧げられるのは下官<sup>(6)</sup>です。親分<sup>(7)</sup>、私にもちよつとばかり心をかけて下さい」。江南ではいまだかつてこれほど道に勤めた人はいません。けれども、伯の位を待んで道を忘れてはなりません。嘘<sup>(8)</sup>いつわりは徳の病、飾りたてて自分をひけらかすのは身の災い、凝り固まるのは失敗の始まり、恥は體にかけられた簞<sup>(9)</sup>です。この四難を取り去ったうえで、初めて

道を問うことができるのです。そうして靈妙なる車が轅<sup>(10)</sup>を鳴らして、日々にさながらに現れてきます。淫佚で罪深い心のままで、上眞の道を行つてはなりません。昨日、清虛宮でこの様な輩の名前を削除したうえ、さらに彼らが懲罰を被つて三官に身柄を引き渡されるのを見ました。このことから推せば、愼み深くしなくてもよいものでしょうか。

右は南嶽夫人のお言葉。

許長史は年内は屍に臨んだり喪を弔<sup>(11)</sup>ったりしないよう用心すべきだ。許仙侯にこのように示しなさい。《茅小君のお言葉。言いおわつて大いに笑われた》

いやしい心<sup>(12)</sup>を忘れたからには、色々なものが手に入る。野卑な心が除かれなければ、生者の籍<sup>(13)</sup>に名を書いてもらえない。許長史はしばらく野卑さが除かれたところだが、除いたうえにもさらに一層除かねばならぬ。《これは清靈眞人のお言葉》

東卿司命君は、許長史は慈しみの心があつて愼み深いことをとてもよく知っておられます。小有天王が昨日、「この人は今どこにいますか。何の道を修行していますか」とたずねると、東卿君は「彼は私の郷里の男ですへ郷里とは、句容が茅山と境域を同じくしてい

ることを言っているのである。本貫の咸陽の人というわけではない。<sup>(14)</sup>  
内面は眞正で、<sup>(15)</sup>外見は世俗の務めに交わっておりすが、<sup>(16)</sup>すばらしい才能の人物です。今は上眞の道を修めています」と答えられました。この言葉はいかにも私の心にびつたりで、長史が伯となる様子がほぼ備わっています。《これは南嶽夫人のお言葉》

右、「六月二十四日」以下のあわせて二十四條は、すべて楊羲の書がある。

(1) 此條重出而小異者 卷一葉一五表二行、葉一五裏四行。

(2) 近頓除落四十七人 關連する内容のものとしては次の記述がある。『周氏冥通記』卷三「定錄又曰、昨東華集諸司命及土地神靈典司之徒、檢課簡錄、…其中功夫已成而復落除者亦不少、…見東華上簿紫錄內格中有上上眞錄者五人、已落二人、補地解、無復進補者、上中眞者二十八人、一落七人、二人補下仙、五人復還人中、唯上一人補耳、…上下仙者四百三人、一落七十八人、二十人爲鄠都所引、四人被考三官、五十四人還民間、復上十九人耳、始今月標落此諸人、須至分節、當上言太極、更記死錄於太山」。

(3) 洗心 『眞誥』卷三葉一七表「自奉教以來、洗心自勵、沐浴

思新」。

(4) 淫色 『眞誥』卷九葉一一表「仙眞之道、以耳目爲主、淫色則目闇、廣憂則耳閉」。

(5) 大老子 『宋書』卷五四沈慶之傳「常謂子弟曰、吾處世無才能、政圖作大老子耳、世以長者稱之」。

(6) 勸道 『眞誥』卷九葉二裏「仙人一日一夕行千事、初不覺勞、明勸道之至、生不可失矣」。

(7) 虛妄 『眞誥』卷一七葉一九表「然此逼左道虛妄之說」。

(8) 靈軫鳴轅 『眞誥』卷一二葉一裏「是以雲車靈軫、相適猶遐」。

(9) 慎臨尸帛喪 『修真旨要』殯穢忌(『雲笈七籤』卷四五)「科曰、忌臨屍產婦喪家」。「眞誥」卷一〇葉二四裏「道士求仙、不欲見死人尸」。

(10) 許仙侯 『眞誥』卷二〇葉二裏「許仙侯許卿者、得眞位也」。

(11) 小君言… 元來のテキストにあった注であろう。『眞誥』卷一九葉九表「又眞誥中凡有紫書大字者、…又此六篇中有朱書細字者、悉隱居所注、以爲誌別、其墨書細字、猶是本文」という墨書細字に當たると考えられる。

(12) 吝心 『眞誥』卷二葉一五裏「夫爲道者、精則可矣、有情不勸、則無所能爲也、勸而不專、亦不能有成也、要當令吝心消豁、穢疾開散」。

(13) 生籍 『雲笈七籤』卷三〇帝一混合三五立成法「五神奉我生

籍、司命塞我死門」。

(14) 本咸陽人 『太元真人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷

一〇四)「眞人姓茅諱盈字叔申、咸陽南關人」。

(15) 眞正 『眞誥』卷二葉一九表「仁侯體未眞正、穢念盈懷、恐此物輩不肯來也」。

(16) 外混世業 『眞誥』卷二〇葉八表「(長史)雖外混俗務、而內修眞學」。

蕭邈眞才、內鏡外和、曾參出田、丹心同<sup>(1)</sup>丹、「丹」、素糸三遷、來底方頭。〈此四句是離合作思玄字、即長史之字也〉

錄名太極、金書東州、蹇裳七度、耽凝洞樓、內累既消、魂魄亦柔、守之不倦、積之勿休、五難既遣、封伯作侯。〈七度、飛步事也、洞樓、洞房事也〉

右紫微王夫人所喻、令示許長史。  
右一條有長史寫。

紫微夫人喻曰、「披華蓋之側云云」。〈此事出在第三卷中〉  
六月二十七日夜、喻書此。  
右一條有楊書。

積精所感、萬物盡應、妙誠未匝、則形華不盡、形華不盡、則洞房之中、難即分明也、吾昔受此法、常向西北存之耳、西北存如小爲易見、可明示如此。〈西北爲天地之爽、內照之玄門也〉  
六月二十七日、紫陽所喻。〈此二十七日衆眞復降、其事亦應甚多、竝不出〉

右一條有長史寫。

二君各有六僮、裴君從者持青髦之節、一僮帶繡囊、周君從者持黃髦之節。〈無囊〉

右二條是甲手書。

(1) 俞本が「丹」を「舟」に作るのに従う。

氣高くも眞人となるべき才能<sup>(1)</sup>、  
内は鏡の如く澄み外は和柔。<sup>(2)</sup>  
曾參から田を引き出し、<sup>(3)</sup>  
丹心もて舟をともし、

素糸の三畫を移し、

それを持って来て方の頭を庇とする。

へこの四句は、離合する――分離して組み換える――と、思と玄の字となる。つまり、許長史の字である。

太極の名簿に記録され、<sup>(5)</sup>

東州の金簡に名を書され、<sup>(6)</sup>

袴の裾をかかて七度のステップを蹈み、<sup>(7)</sup>

洞樓に思いを凝らす。

内なるわずらいは消え去ったうえ、

魂魄もまた柔和となる。

倦まずこれを守り、

休まずこれを積み重ねれば、

五難は取り去られ、<sup>(8)</sup>

伯に封ぜられ侯となる。

へ七度とは歩虚のこと、洞樓とは洞房のことである。

右は紫微王夫人が諭して許長史に示されたもの。

右の一條は許長史の寫しがある。

紫微夫人がお諭しになられた。「華蓋を開いた傍に、云云」。へこのことは第三卷に記されている。<sup>(10)</sup>

六月二十七日の夜、諭してこれを書かせられた。

右の一條は楊羲の書がある。

精神を集中してはたらきかければ、萬物がみな應えてくれるが、

眞心が不十分であると、みせかけの偽りの肉體がなくなるならない。み

せかけの偽りの肉體がなくならないと、洞房の中はすぐにははつき

りと見えない。私は昔、この法を授けられてより、常に西北の方角

を向いて存思してきた。<sup>(11)</sup> 西北を向いて存思すると、いくらか(神々

の姿が)見やすいように思われる。このようにはつきりと示すがよ

い。へ西北とは天地がからつと開け、内を照らす衆妙の門である。<sup>(12)</sup>

六月二十七日に紫陽眞人が諭されたもの。へこの二十七日には、

あまたの眞人がまた降臨され、とても多くの事があつたはずだが、

すべては書き出されていない。

右の一條は許長史の寫しがある。

二君はおのおの六人の僮僕を伴っておられた。裴君(裴玄仁)の

従者達は青旄の符節を持ち、一僮は刺繡のある囊を腰にさげていた。

周君(周季通)の従者達は黃旄の符節を持っていた。へ囊をさげた

者はいない。

右の二條は某甲の筆の書。<sup>(13)</sup>

- (1) 蕭遊真才 『真誥』卷一六葉一一表參照。
  - (2) 內鏡 『太清金液神丹經』(『雲笈七籤』卷六五)「乃遵淵人、玄朗內鏡、卓然先拔、鑽研所通、殆則上聖之奧」。
  - (3) 曾參出田：『真誥』卷二〇葉一二表「按真誥中有云、鳳巢高木素衣衫然者、配況長史名也、曾參出田云云者、離合長史字也」。
  - (4) 離合 『文心雕龍』明詩「至三六雜言、則出自篇什、離合之發、則明於圖讖」。
  - (5) 錄名太極 『真誥』卷四葉一一裏「錄名太上」。
  - (6) 金書東州 『真誥』卷一〇葉一八裏「雖復玄挺玉錄金書太極者、將亦不可解於非生乎」。
  - (7) 七度 『真誥』卷五葉三表「君曰、仙道有天關三圖七星移度」。
  - (8) 五難 『漢武帝內傳』「汝胎性暴、胎性淫、胎性奢、胎性酷、胎性賊、五者恆舍於榮衛之中、五藏之內、雖獲良鍼、固難愈也、暴則使氣奔而攻神、是故神擾而氣竭、淫則使精漏而魂疲、是故精竭而魂消、奢則使真離而魄穢、是故命逝而靈失、酷則使喪仁而自攻、是故失仁而眼亂、賊則使心鬪而口乾、是故內戰而外絕、此五事者、皆是截身之刀鋸、剗命之斧斤矣、雖復志好長生、不能遺茲五難、亦何爲損性而自勞乎」。
  - (9) 飛步 『太上飛行九神玉經』(『雲笈七籤』卷二〇)「九晨真人曰、行飛步之道、先一日沐浴齋淨、是日於中庭布星圖、隨斗建也、北向長跪燒香、於玄冥星下、叩齒三十六通、…微呪曰、二十八宿、覆絡我身、乘空步虛、飛昇自然」、『真誥』卷五葉三表「君曰、仙道有飛步七元天綱之經、在世」。
  - (10) 此事出在第三卷中 『真誥』卷九葉一〇表。
  - (11) 常向西北存之 『真誥』卷五葉六裏「君曰、昔在莊伯微漢時人也、少時好長生道、常以日入時、正西北向、閉目握固、想見崑崙」。
  - (12) 玄門 『老子』第一章「玄之又玄、衆妙之門」。
  - (13) 甲手書 『真誥』卷一九葉六表「又按三君手書、今既不摹、則混寫無由分別、…今竝撰錄、注其條下、以甲乙丙丁各甄別之」。
- 六月二十九日、九華真妃授書曰、「景應雙桀、雲會玄落、龍秀五空、採瓊閭臺、長歌靈幙、煥啓玉扉、眇矣遺事、與世長辭、霞軫絳波、電赴紫栖、共攜清響之外、同遊雲岫廣崖、豈不善乎、豈不樂哉、日者霞之實、霞者日之精、君唯開服日實之法、未見知餐霞之精也、夫餐霞之經甚秘、致霞之道甚易、此謂體生玉光霞映上清之法也、眼者身之鏡、耳者體之牖、視多則鏡昏、聽衆則牖閉、妾有磨鏡之石、決牖之術、卽能徹洞萬靈、眇察絕響、可乎、面者神之庭、髮者

腦之華、心悲則面焦、腦滅則髮素、所以精元内喪、丹津損竭也、妾有童面之經、還白之法、可乎、精者體之神、明者身之寶、勞多則精散、營竟則明消、所以老隨氣落、耄已及之、妾有益精之道、延明之經、可乎、此四道乃上清内書立驗之眞章也、方欲獻示以補助君之明照耳、授畢、取以見與、某口答「唯唯」、乞請之也。

六月二十九日、九華眞妃が書を授けて次のように言われた。

「光は二人の輝きに應え、雲は天空に集り會す。龍は五空に際立ち、瓊玉を閭臺に採る。朗々と仙界の帳に歌えば、玉の扉は輝きを放って開かれる。俗世の事どもを遙かに捨て去り、俗世とは永遠に訣別しましょう。霞の車は絳き波間を巡り、電光は紫の住まいへと赴く。清らかな響きに満ちた外でともに手を攜え、一緒に雲のかかる高嶺で遊びましょう。すばらしいことではありませんか。楽しいことではありませんか。太陽は霞の實體、霞は太陽の精髓なのです。<sup>(1)</sup> あなたは太陽の實體を服する法を聞き知るのみで、霞の精髓を食らう法はまだご存じありません。霞を食らう法を説く經典は最高の秘密ですが、霞を招く方法は至って容易なのです。これを體は玉光を生じ、霞は上清に映するの法と言います。<sup>(2)</sup>

眼は身體の鏡であり、耳は肉體の窗です。<sup>(3)</sup> 視ることが多ければ鏡はくもり、聞くことが多ければ窗は閉ざされます。私にはくもった

鏡を磨く砥石、閉ざされた窗を開け放つ手立てがあり、ただちに萬靈を見透し、遙か遠くの聲をも聞きとることができるのです。よろしいか。顔は精神の庭、髪は腦の華、心に悲しみがあると顔はやつれ、腦が衰弱すると髪は白くなります。だから、精氣の根源が内であつて、丹い津液が枯渇するのです。私には若々しい童顔を保つ經典、白髪を黒髪にもどす方法があります。よろしいか。精氣は肉體の神、視力は身體の寶です。苦勞が多ければ精氣は消散し、あくせくし過ぎると視力も消散してしまいます。だから、氣力が衰えるにつれて老いが訪れ、ついで耄碌してしまうのです。私には精氣を増益する法、視力を長持ちさせる經典があります。よろしいか。この四つの方法が上清の内書、たちどころに效果のある眞人の眞章なのです。今ここに教示して、あなたの聰明さをさらに増してあげようと思ひます。<sup>(4)</sup>

授けおわると、手に取って(ご覽になつてから)お與えになった。某はただ「はいはい」とお答えして、教示を乞うた。

(1) 日者霞之實、霞者日之精 『雲笈七籤』卷五一玉珮金鑑「經

曰、欲求長生、宜先取諸身、月華月精、日霞日精」。

(2) 餐霞 『眞誥』卷一〇葉一八裏「雖復接景餐霞、故未爲身益」。

(3) 體生玉光霞映上清之法 『雲笈七籤』卷五三太清玉霞紫映觀



上法「紫書訣云、修上清玉霞紫映內觀之道、常以月生一日、取西流水三升、盛之以銅器、」。

- (4) 眼者身之鏡、耳者體之隔 『世說新語』賢媛「至於眼耳、關於神明、那可便與人隔」。

- (5) 絕響 『雲笈七籤』卷五三·三素靈法「行之一年、則耳聽目明、久爲之徹視千里、羅映神靈、聽之於絕響也」。

- (6) 面者神之庭 『上清黃庭內景經』上有章第二注(『雲笈七籤』卷一一)「太上玄一九皇、吐精三五七變、洞觀窈冥、日月垂光、下徹神庭」。同若得章第十九(『雲笈七籤』卷一一)「面部魂神皆相存」、注「內外星神自相應也」。

- (7) 髮者腦之華 『上清黃庭內景經』膽部章第十四(『雲笈七籤』卷一一)「腦髮相扶亦俱鮮」、注「人之震怒、髮上衝冠」。

- (8) 精元 『雲笈七籤』卷七〇還丹內象金鑰匙「黑鉛者、非是常物、是玄天神水生於天地之先、作衆物之母、是真一之精元、是天地之根」。

- (9) 童面之經、還白之法 『雲笈七籤』卷四三思修九宮法「太上眞皇中黃紫君、厥諱規英、字曰化玄、金牀玉帳、紫繡錦裙、腰帶火鈴、斬邪滅奸、手把星晶、項生日眞、正坐吐氣、使我咽吞、與我共語、同晏玄丹、練灌七魄、和柔三魂、神靈奉衛、使我飛仙、五藏自生、還白童顏、受書上清司命帝官、所願所欲、百福惟新」。

- (10) 精者體之神、明者身之寶 『雲笈七籤』卷三三服氣療病「服氣經曰、道者氣也、保氣則得道、得道則長存、神者精也、保精則神明、神明則長生、精者血脉之川流、守骨之靈神也、精去則骨枯、骨枯則死矣」。同卷五九墨子閉氣行氣法「老子曰、生不再來、故遵之以道、道者氣之寶、寶氣則得道、得道即長生矣。神者精也、寶精即神明、神明則長生」。

- (11) 勞多則精散 『史記』卷二三〇太史公自序「凡人所生者神也、所託者形也、神大用則竭、形大勞則敝、形神離則死、死者不可復生、離者不可復反、故聖人重之」。

- (12) 耄已及之 『左傳』昭公元年「劉子歸以語王曰、諺所謂老將知而耄及之者、其趙孟之謂乎」、注「八十曰耄、耄、亂也」。

- (13) 益精 『漢武帝內傳』「太仙眞經所謂行益易之道、益者益精、易者易形、能益能易、名上仙籍、不益不易、不離死厄、行益易者、謂常思靈寶也、靈者神也、寶者精也」。

- (14) 眞章 吳筠「神仙可學論」(『雲笈七籤』卷九三)「若乃諷天帝之金書、研洞眞之玉章」。

六月二十九日夜、桐柏真人同來降、復諭授、令某書曰、「夫八朗四極、靈峯遼遐、奇言吐穎、瓊音餐振、晨飛陵清、玄氣赴霄、體邁玉虛、心遺銀鋒、沈滯於眇羅之外、凝和于叔波之表、若此人者、必能旋

騰玄漢、周灝眞庭矣、三元可得而見、絳名可得而立耳、如其心併愆浪、目擊色袂、動與罔罟共啓、靜與爭競之分者、此乃適仙路邈、求生日闊也、子其慎之、某書畢、取視乃以見與。へ此前是桐柏辭也、既同一夕、安妃授竟、桐柏次啜、故云「復授」耳、卒看如似猶是安妃、故顯注之

六月二十九日の夜、桐柏眞人（王子喬）がともに來降され、また諭し誥授して、<sup>それがし</sup>某に次のように書きとらせられた。

「八朗四極の天地のはてに、遙かに靈峰がそそり立つ。才氣あふれる言葉をかわし、玉の音が響きわたる。光の乗物で天に昇り、根元の一氣は雲の上に赴く。肉體は玉虛宮へと近づき、心中から苦しみの刃は忘れ去られる。遙かなる天空のあなたに身を沈め、靜寂な雲の波の彼方にやすらかに憩う。このような人物こそが、必ずや天上にかけ上り、眞人の宮庭を清めることができるのである。<sup>(1)</sup>かくて、三元宮を眼のあたりにし、<sup>(2)</sup>絳い名簿に名を連ねることができ、<sup>(3)</sup>もし心が罪の波と一つになり、色なす衣裝に目をとめ、その行動は罪網とともに起こり、内心では他人との競争にしのぎをけずるような者、彼らには昇仙への道は遙かに遠く、長生を求めても日々に空しい。汝はこのことをよく慎まねばならぬ」。

<sup>それがし</sup>某が書き終えると、手に取ってご覧になったうえでとお與えになら

れた。へ以上は桐柏眞人の言葉である。同日の夕に九華安妃が授け終わって、次に桐柏眞人が授けられたので、「また（諭し）誥授して」と言うのである。卒然と讀むと、これも安妃の言葉であるかのようであるので、はつきりと注記した

(1) 八朗 『雲笈七籤』卷二三總敘日月「秋分之日、月宿東井之地、上廣靈之堂、乃沐浴於東井之池、以鍊日魂、明八朗之芒、受陽精日暉、吐黃氣於玉池」。

(2) 晨飛 『眞誥』卷五葉四裏「君曰、仙道有曲晨飛蓋、御之體自飛」。

(3) 玉虛 『雲笈七籤』卷八釋三十九章經「第二十三章、九皇上眞司命君曰、九皇上眞者、玉虛之元君也」。

(4) 三元 『眞靈位業圖』玉清三元宮上第一左位「玉清上元宮四道君、玉清中元宮紫清六道君、玉清下元宮高清四元君」。

(5) 絳名 『眞誥』卷四葉一三裏「傳佐上德、列書絳名」。

六月三十日夜、九華眞妃與紫微王夫人南嶽夫人同降、眞妃坐良久、乃命侍女發檢囊之中、出二卷書以見付、令寫之、題如左、

上清玉霞紫映內觀隱書

上清還晨歸童日暉中玄經

右二卷名目。〈此題本應是三元八會之書、楊君既究識眞字、今作隸字顯出之耳〉

六月三十日の夜、九華眞妃が、紫微王夫人・南嶽夫人と一緒に降臨された。眞妃はしばしお坐りになってから、侍女に命じて封をした囊の中を開かせ、二卷の書を取り出して授け、書寫させられた。その題目は次のとおりである。

上清玉霞紫映内觀隱書

上清還晨歸童日暉中玄經

右は二卷の書の題目である。〈この題目は本來は三元八會の書であつたに違いない。楊君は眞書がよく分かるので、今ここでは隸書で書き、はつきりと示したのである〉

七月一日夜、

紫微王夫人

南嶽夫人

九華眞妃

紫陽

桐柏

清虛三眞人

茅二君同降、良久、某乃自陳於衆靈、求安身之術、欲知貴賤之分、年命之會、多少定限、於是眞妃乃笑、良久、見授書此曰、

「明君夷質虛閑、祕構玉朗、蘭淵高流、清響金宮、可謂能珍寶藏奇、幽眞内煥、標拂靈篇、乘數順生、素德神園、丹錄玉清、興煙拔景、冥鼓遐聲也、必三事大夫、侍晨帝躬、高佐四輔、承制聖君、理生斷死、賞罰鬼神、攝命千靈、封山召雲、主察陰陽之和氣、而加爲吳越鬼神之君也、

妾將挺命凝觀、憑華而生、靈飛九天、虛音飄房、因運四覺、玄梯同象、紫名太上、清文八景、神映西暉、德明内隸、乃受書乘氣、得爲眞妃之任矣、

又當助君、總括三霍、綜御萬神、對命北帝、制救鄧山、又應相與攜袂靈房、乘煙七元、嘉會希林、内據因緣也、是故君姓於楊、我得爲安、妾自發玄下造、君自受書於西宮、從北策景、乘駟東轅、握〔髦〕〔施〕秉鉞、專制東蕃、三官奉賀、河山啓源、天丁獻武、四甲衛輪、當此之時、實明君之至貴、眞仙之盛觀也、三官中常有謠謠云、『楊安大君、董眞命神』、正我等之謂耳、蓋聖皇之方駕、於今有二十八年也、復二十二年、明君將乘龍駕雲、白日昇天、先詣上清西宮、北朝玉皇三元、然後乃得東軫執事矣、此自是君玉朗紫微、金音虛領、爲太極所旌、乃玄德上挺、不復用勸學劬勞、陟足山川矣、若爲精勵

之者、當小神清瑩鮮耳、亦不甚今日不勞之舉也、

世俗縈網貴賤之間、涉塵塗之役、在得失之津、信非眞人所得經營、乃自坦乎艱泰之用、任乎遇否之頃耳、見明君之逸、誠欣然也、親明君之否、誠感顔也、此二感發於顔色之上也、復未足以致遠悲抱長感矣、

至於内冥偶景、併首玄好、輕輪塵藹、參形世室、妾豈以愆累浮卑少時之滯、而虧辱於當眞之定質耶、夫陰陽有對、否泰反用、二象既羅、得失錯綜、此皆往來之徑陌耳、

今人居風塵之休盛者、乃多罪之下鬼、趣死之考質也、夫處無用於蠶塗、乃得眞之挺樸、任凡庸以內觀、乃靈仙之根始也、蓋富貴淫麗、是破骨之斧鋸、有似載罪之舟車耳、榮華矜世、爭競傲時、適足以誨愆要辱、爲伐命之兵、非佳事也、

是故古之高人、覽罪咎之難豫知、富貴之不可享矣、遂肥遯長林、栖景名山、咀嚙和氣、漱濯清川、欲遠此惡迹、自求多福、超豁絕聘、保全至素者也、君亦奚足汲汲於人間之貴賤、投身於榮辱之肆哉、且方交兵日會、三災向臻、神風驅除、臭氣參天、明金生穢於泥瀆、寶玉投糞以招塵、褰衣振血、濁精虧眞、玄通遠逸、是其時也、君若其不耐風火之煙、欲抱眞形於幽林者、可且尋解劍之道、作告終之術乎、自盡出嘿之會、隱顯之迹、臨時分處、有任於明君矣、冥數上感、有命而交、靈書玉臺、眞契合景、是以言單於辭、心訖於筆、妾豈獨歎於一人乎、蓋示名分之判例也、書訖、取以與某、復曰、「君省此當

少愈不」。

右從六月二十九日來凡十四條、竝楊君自記書。

(一) 俞本が「髻」を「旄」に作るのに従う。

七月一日の夜、

紫微王夫人

南嶽夫人

九華眞妃

紫陽

桐柏

清虛の三眞人

茅中君と茅小君の二君が一緒に降臨された。しばらくしてから、<sup>そな</sup>某は神靈たちに身體を安らかにする術を問ひ、<sup>(1)</sup>私の貴賤の分際とわが身に集まった壽命がどれほどの限度のものなのかを知りたいと申し上げた。すると九華眞妃はお笑いになり、しばらくして誥授して次のことを書きとらせられた。

「あなたは性格は穩やかでさっぱりしており、玉のような明朗さ

を内に秘め、蘭が氣高い流れにひっそりと香るように、その清らかな評判は天上の黄金の宮殿にも響きわたっています。すぐれたものを珍寶として秘藏し、幽冥の眞理が内部に輝いて、神靈の書物を使いこなし、定めのままに随順して生き、汚れない徳は神靈の園に知られ、玉清宮の名簿に朱書され、煙をあげてひとときわ光を輝かせ、遙かなる名聲を幽冥界にとどろかせておられます。必ずや三公や大夫となつて帝晨に侍され、四輔を立派に輔佐して、聖君から制敕を受けられ、生死を處斷し、鬼神に賞罰を與え、千靈に指圖し、山を封じこめ雲を召し、陰陽の調和した氣を觀察する責任者となられるばかりか、吳越の鬼神の支配者となられることでしょう。

私の方は、すぐれた運命のもとに心を集中して存思し、五臓の華が花開くことによつて神仙界に生まれ、九天に靈飛してつむじ風の部屋にひっそりと音もなく、四覺を運らすことによつて玄界に至る階梯と一つになり、太上界においては紫の名簿に、八景宮においては清らかな文書に名を記され、精神は西方にまばゆく照りはえ、徳は内面で明るく輝き、そこで辭令を授かつて氣に乗り、眞妃の任に就くことができたのでした。

そのうえ、私はあなたが三霍山を統括され、萬神を遍く統御され、北帝の下命を受けて酆山に制敕を出されるののお手傳いをするのでしよう。また、一緒に神靈たちの部屋に連れだち、七元で煙に乗り、希林宮で會合し、ひそかに二人の因縁をうちとけたものにな

ければなりません。そういうわけで、あなたは楊という姓であり、私の方は安という姓となることができたのです。私の方は眞仙界から下界に降り、あなたの方は西宮より辭令を受けとり、北から光に鞭打ち、車に乗つて東方に向かい、旄を握り鉞を取つて、東方の地域を專制することでしょう。三官は笏を捧げ持ち、河と山とは源を開き、天丁は武卒を獻じ、四甲は私たちの車を護衛することでしょう。そのような時には、それこそあなたは高貴の極み、眞仙の盛觀というものです。三官の中ではいつも「楊・安の大君、眞人を治め神靈に命ず」という謠諺がありますが、これこそ私たちのことを言っているのに違いありません。思いますに、聖皇と馬車をならべられますまでには、今はまだ二十八年あります。さらに二十二年たちますと、あなたは龍に乗り雲に駕して白日昇天され、まず上清天の西宮に出向き、北のかた玉皇や三元君にお目通りし、そのうえで東軫の執事となることができます。それはつまり、あなたが紫微宮で玉のように輝き、天空の嶺に黄金のような名聲がとどろき、太極が旌表なされて、あなたの玄徳がとび抜けたからであります。もはや仙道の勉強に苦勞して山川をかけめぐる必要はありません。もし精勵なされるならば、いささか精神に磨きをかけるだけでよろしい。今すぐ苦勞せずに天界に昇ることとてたいした問題ではありません。

俗世間では貴賤のしがらみにとらわれ、俗塵のつとめにかかわり、

得失の渡し場に身を置くことは、決して眞人がすべきことではありませぬから、困難だとか泰平だとかいうことには坦然とされ、運が良かったとか悪かったとかということにすればよいのです。あなたがゆったりしておられるのを見ると、本當にうれいしいのです。あなたがふさいでおられるのを見ると、本當に哀しくなります。うれいしか哀しいかの二つの感情は、顔色にはつきりと表れます。もはやいつまでも悲しみ、いつまでも憂いを抱かれるには及びませぬ。

冥々の定めとして景をならべ、二人そろって眞仙同士のよしみを深め、俗界の霧の中を軽やかに車を走らせ、世俗の部屋に身を運ぶその際には、私は(あなたが)くだらぬ罪とわずらいに暫時滞っていたからといって、眞人となるべく定められたあなたの本質をないがしろにしたりは致しません。そもそも陰と陽とは一對、否の卦と泰の卦とは作用が逆、二象が連なるとそこに得失が錯綜するのは、すべて互いに往還する道筋なのです。

現今の人たちで俗塵の中で大いに榮えている者は、罪深い下鬼であり、死に赴く懲罰を受ける素質をもった者なのです。そもそも俗世間で無用の立場に身を置く者こそ、眞人になりうるすぐれた素材であり、凡庸のままに内観することこそ、神靈眞仙となるための根本なのです。つまり、富貴と淫らな美とは骨をうち砕く斧や鋸であり、罪を載せる舟や車のようなものなのです。榮華で世に時めき、人と争って時代の先端を走っても、罪を教え恥辱を招き、生命を

損う武器になるだけのことに過ぎず、立派なことではないのです。

そのようなわけで、古の高士たちは、罪咎の豫測しがたく、富貴の享受すべきでないことを見てとって、奥深い林に逃れ、名山に景を憩わし、和氣をかみしめ、清川で嗽ぎ洗い、このような悪の行跡から遠ざかり、自ら多福を求め、衣冠への招聘にも超然として目をくれず、この上ない淳朴さを保持しようと欲したのです。あなたも、どうして人間世界での貴賤なんぞに汲々として、榮辱の巷に身を投ぜられる必要がありましょう。そのうえ、いまや戦争が日々起こり、三つの災難が訪れようとし、神風が追い拂っても臭氣は天にまで届き、きらきら輝く黄金は泥溝の中で汚され、寶玉は糞のなかに投ぜられて塵埃を招き、着物を振り拂えば血が飛び、精氣は濁り眞氣は缺けています。玄遠なる眞仙世界に抜け出せるのは、今こそその時なのです。あなたが、もしも四大の風火の煙に耐えきれないで、幽玄なる林の中で眞人の姿をわがものとしたのでしたら、ひとまず刀劍によって尸解する道を探求し、俗世に最後の別れを告げる方策とされるのがよいでしょう。世に出るかそれとも沈黙を守るかのきっかけ、隠れるかそれとも現れるか、それらのことを自分で見極め、その時に臨んで判断することは、あなたにお任せします。私たちは冥界での定めが天上に感じられ、運命によって交わるわけで、玉臺に靈書され、眞人の契として景を合體させるのです。かくして、言は辭に盡くされ、心は筆に述べ盡くされました。私はどうして一

人である孤獨を嘆息しましょう。つまりは、あなたの名前と分限とについてのはっきりとした例を示したのです」。

書き終えると、眞妃は手に取って（ご覧になって）から某に與えられ、そのうえで、「あなたはこれをご覧になると、きっと少しは癒されるのではないでしょうか」と言われた。

右、「六月二十九日」以下のあわせて十四條は、すべて楊君が自分で書き記したものだ。

(1) 安身之術 『眞誥』卷九葉五表「安身微氣」。

(2) 幽眞 『雲笈七籤』卷八〇洞玄靈寶三部八景二十四住圖「默念招幽眞、專靜神自歸」。

(3) 靈篇 『雲笈七籤』卷四上清源統經目註序「上清者宮名也、道君以中皇元年九月一日、於玉天瓊房金闕上宮、命東華青宮、尋俯仰之格、棟校古文、撰定靈篇、集爲寶經傳、至漢武帝時、得經起栢梁臺以貯之」。

(4) 三事大夫 『尚書』周官「王曰、嗚呼、三事暨大夫、敬爾有官、亂爾有政、以佑乃辟、永康兆民」。

(5) 侍晨帝躬 『眞誥』卷一五葉一一裏「侍帝晨有八人、徐庶、龐德、爰愉、李廣、王嘉、何晏、解結、殷浩、竝如世之侍中」。

(6) 四輔 『眞誥』卷一六葉一二裏「諸有英雄之才、彌羅四海、

誅暴整亂、拓平九州、建號帝王、臣妾四海者、既終、受書於三官四輔、或爲五帝上相、或爲四明公賓友、以助治百鬼、綜理死生者、此等自奉屬於三官、永無進仙之冀、坐斂伐積酷害生死多故也」。「上清後聖道君列紀」「後聖李君上相方諸宮青童君、後聖李君上保太丹宮南極元君、後聖李君上傳白山宮太素眞君、後聖李君上宰西城宮總眞王君、右四輔大相」。

(7) 千靈 『雲笈七籤』卷四八寶照法「大明寶鏡、分形散化、鑒朗元神、制御萬魔、飛行上清、披雲巾羅、役使千靈、封山召河、畢、常能行之、災害不生而位登仙」。

(8) 封山召雲 『太元眞人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「今故報盈以紫毫之節、藕敷華冠、使盈招驅萬靈、封山召雲、君棄家獨往、離親樂仙、契闊嶮巖、多祖山川」。

(9) 吳越鬼神之神 『眞誥』卷一六葉七裏注「楊君既爲吳越司命、董統鬼神」。

(10) 憑華而生 『上清黃庭內景經』上有章第二(『雲笈七籤』卷一一)「灌漑五華植靈根」。

(11) 四覺 『眞誥』卷八葉六表「飛步四覺、內觀七緣者」。

(12) 八景 『太上洞淵神呪經』卷五「已在八景宮中、九合之室、端坐思惟」。

(13) 北帝 『眞誥』卷一三葉三裏「鬼官之太帝者、北帝君也、治

第一天宮中、總主諸六天宮。

(14) 鄧山 『真誥』卷一五葉一表「羅鄧山在北方癸地」。

(15) 七元 『真誥』卷三葉一〇表「左把玉華蓋、飛景躡七元」。

(16) 希林 『真誥』卷二葉一七表「習適榮辱域、罕躡希林宮」。

(17) 天丁 『真誥』卷一〇葉一〇裏「天丁力士」。

(18) 蓋聖皇之方駕、於今有二十八年也 『上清後聖道君列紀』「到

壬辰之年三月六日、聖君來下、光臨於兆民矣」。

(19) 復二十二年 『真誥』卷一九葉三裏「又按乙丑歲、安妃謂楊

君曰、復二十二年、明君將乘雲駕龍」。

(20) 白日昇天 『抱朴子』至理「河南密縣有卜成者、學道經久、

乃與家人辭去、其始步稍高、遂入雲中不復見、此所謂舉形輕飛、

白日昇天、仙之上者也」。

(21) 下鬼 『上清黃庭內景經』務成子注敘「『雲笈七籤』卷一二」

「皆奉有經之師、散之寒棲、違盟負約、七祖受考於陽谷河源、

身爲下鬼、考於風刀」。「雲笈七籤」卷五一「八道祕言」「違科負

盟、七祖父母、受拷於玄都地獄、身死下鬼、如四極明科」。

(22) 內觀 『真誥』卷二葉一九裏「內觀洞房」。

(23) 伐命之兵 『漢武帝內傳』「此五事者、皆是截身之刀鋸、剗

命之斧斤矣」。

(24) 三災 『太上洞淵神呪經』卷一「三災垂及、三災者水火刀兵

也」。

(25) 神風 『雲笈七籤』卷四二存大洞真經三十九真法「左廻靈曜、

右扇神風」。

(26) 臭氣 『雲笈七籤』卷三三攝養枕中方「凡耳中忽聞啼呼及雷

聲鼓鳴、若鼻中聞臭氣血腥者、竝凶兆也」。

(27) 風火 『維摩經』入不二門「或作日月天、梵王世界主、或時

作地水、或復作風火」。

(28) 解劍之道、告終之術 『真誥』卷二〇葉一一裏「楊君名義、

……按真誥云、應以太元十一年丙戌去、又云、苦不奈風火、可

修劍解之道、作告終之術、如此恐以早逝、不必丙戌也」。同卷

一四葉一六裏注「王君昔用劍解、非龍胎諸丹、恐瓊精即是曲晨

耳」。

東卿大君昨四更初來見降、侍從七人、入戶、一人執紫旛節、一人

執華幡、一名十絕靈幡、一人帶綠章囊、三人捧牙箱、一人握流金鈴、

乃年少於二弟、二弟昨竝倚立、東卿命坐乃坐耳、良久、言語委曲。

先昨神女來降、意本疑是王母女、昨又來、定是也、南真說云、「是

阿母第十三女王媚蘭字申林、治滄浪山、受書爲雲林夫人」。此兩事

竝是七月五日夜略記、後更復委曲重數在後、如此則右英夫人始以七

月三日四日頻夕降也」。



右二條有楊自記。

東卿大君（大茅君）<sup>(1)</sup>が昨日の四更の時に初めて降臨された。おつきの者は七人。戸口に入った。一人は紫の旒の符節を持ち、一人は一名「十絶靈幡」という華幡<sup>(2)</sup>を持ち、一人は緑色の章囊を身につけ、三人は象牙の箱を捧げ持ち、一人は流金の鈴を手に握っている。なんと年格好は二人の弟君より若く見える。二人の弟君は昨日はともに（東卿大君の）傍に立ち、東卿大君が坐るようお命じになるとやっとお坐りになった。しばらくしてから、細々と話された。

一昨日、神女が降臨された。初めからこれは王母の娘ではないかと思っていたが、昨日再びやって來られた。やはりまさしくそうであった。南眞（南嶽夫人）がおっしゃられた。「これは阿母の第十三番目の娘である王媚蘭、字は申林、滄浪山を治所とする方です。辭令を授かつて雲林（右英）夫人とられました」。へこの二事はいずれも七月五日の夜に簡略に書きつけられたものである。後にあらためて事細かに書きなおしたものが次にある。そうであれば、右英夫人は、初めて七月三日と四日の毎夕に降臨されたわけである。

右の二條は、楊羲自身が記したものである。

(1) 東卿大君 『眞誥』卷一葉二裏「東嶽上眞卿司命君」。『太元眞人東嶽上卿司命眞君傳』（『雲笈七籤』卷一〇四）において、彼のシンボルである玉鉞綠旌、八威之策、紫髦之節、藕敷華冠、繡羽紫帔、丹青飛翬、斑龍之輿、素虎之輶、曲晨寶蓋、瓊幃綠室、流金火鈴、雙珠月明、錦旌繡幡、白羽玄竿、鳳鸞之簫、金鐘玉磬、紫琳之腴、玉漿金嬰が、彼に授けられるに至った九事が述べられている。

(2) 華幡 『眞誥』卷三葉七裏「錦旌召猛獸、華幡正低昂」。『雲笈七籤』卷四上清經述「凡四眞人：瓊藥寶帶、體佩虎文、項有圓光、手把華幡」。

乙丑歲管輅事三年七月四日夜、司命東卿君來降、侍從七人、入戶、其一人執紫旌之節、其一人執華幡、一名十絶靈幡、一人帶綠章囊、其三人捧白牙箱、箱中似書也、其一人握流金鈴、侍人竝朱衣、司命君形甚少於二弟、著青錦繡裾紫毛帔、巾芙蓉冠、二弟竝同來倚立、命坐乃坐耳、言語良久。

七月六日夜、司命君又降、良久、喻書曰、

「若必範玄秉象、清淨平時、遂拔羣幽藻、戢翼高栖、感味上契、淵淳嶽峙、蕭寥玉篇、翫寶神生、遺放俗戀、調彈清靈、澄景虛中、五道發明、色絕化浪、愆與淡并、空同冥衢、無視無聽、爾乃遠齊妙眞、重起玄覺、明德內圓、靈標外足矣、終能策雲輶以赴霄、書司命之丹錄耳、若精散萬念、爲生不固、罔隨塵波、心不眞合、適足勞身神於林〔廻〕〔謂應作廻字〕、實有誤於來學也、其道微而易尋、其道艱而難得乎」、亦令示許長史。〔此二條又有長史寫〕

「許長史欲山居」、

「宗道者貴無邪、栖眞者安恬愉」、

「至寂非弘順之主、惔然非教授之匠、故當因煩以領无耳、意云爾不、代謝奚必四時、氣如呼吸、千齡如寄、趙子可憂不、信而未疑、其心亦已醺矣」。

司命君與南嶽夫人言。

爲道者常淵淡以獨處、每栖神以遊閑、安飲啄以自足、無〔旂〕〔謂應作祈字〕晒於籠樊、哀樂所以長去、天闕何由而臻者乎。

稟志各有所宅、資性咸有其韻、豈可履逐物之邪蹤、矯我之正業乎。

① 何不肆天標之極縱、適求眞之内娛、從幽淨以熙心、綏所託以栖意、處東山以晦跡、握玄筌於妙領、保隨珠以含照、遣五難於胸次耶。〔此三條亦似是東卿言〕

(1) この段、『上清三眞旨要玉訣』に見える。

(2) この段、『無上祕要』卷四二修學品に見える。

乙丑の歳の晉の興寧三年(三六五)、七月四日の夜、司命東卿君が降臨された。おつきの者は七人。戸口に入った。その一人は紫の旂の符節を持ち、その一人は一名「十絶靈幡」という華幡はたを持ち、一人は緑色の章囊を身につけ、三人は白い象牙の箱を捧げ持ち、その箱の中は書き物のようである。一人は流金の鈴を手に握っている。おつきの者はみな朱色の上衣を着ている。司命君はその姿が二人の弟君よりずいぶん若く見え、青い錦織りに刺繍したスカートに紫の羽毛のマントを着、芙蓉冠をかぶっておられる。二人の弟君ともにやって来てその傍に立たれたが、(東卿君が)坐るようお命じになるとやつとお坐りになった。しばらくの間、話しておられた。

七月六日の夜、司命君が再び降臨された。しばらくしてから、諭

して次のように書きとらせられた。

「もし必ず幽玄な象を範にとり、清淨なることは世にも稀、その結果、俗世から幽玄な境地へとひとときわ抜きん出、翼をおさめて志高く生き、<sup>(2)</sup>仙界の契を玩味し、<sup>(3)</sup>淵のごとく静かで大山のごとく泰然とし、<sup>(4)</sup>神仙の書によってさびさびとし、<sup>(5)</sup>神仙の生を寶として弄び、世俗への戀情を捨て去り、音楽を清靈宮で奏で、光を虛空の中に澄まし、五道は輝き現れ、形質は生死變化を超越し、欲望はさっぱりとなくなり、ぼっかり開いた幽冥の世界では、<sup>(6)</sup>視ることもなく聴くこともない。そのようにするならば、そこで初めて、遙けくも靈妙なる眞理とひとしくなり、何度となく奥深い悟りを起こし、明徳が内に圓成し、<sup>(7)</sup>靈妙な標が外に充足する。そして最後には、雲の幌馬車に鞭打って天空のかなたへと向かい、司命の丹い名簿に名を記されることになるのだ。もし、精がよろずの妄想の内に散亂して、生命を治めることが確固としたものでなくなり、氣が俗塵の流れに隨い、心が眞理と合一できないならば、ただ身體と精神を人里離れた林や「<sup>(8)</sup>咀」へきつと「<sup>(9)</sup>咀」の字であろう」の中で疲れさせるだけのこと。それはまこと、將來の修行者を誤らせるものなのだ。道はつまらなくて尋ねやすいものなのであろうか。それとも、道は險しくて手にすることが困難なものなのであろうか」。

これも許長史に示させたものである。へこの二條はまた許長史の寫しがある。

「許長史が山に隱棲しようとしています」。

「道を根本とする者は邪惡な心のないことを貴び、眞理に心を棲まわす者は恬淡として和らいだ境地に安住します」。

「絶對的な靜寂は道を弘め道に順ううえでの第一のものではありません。悵然たることは道を教授するうえの導き手ではありません。まさに（心や身を）煩わせることによって無を支配すべきなのです。そう思われませんか。移ろうのはなにも四時に限ったことではないのです。氣は呼吸のように瞬時に交替し、<sup>(10)</sup>千年の壽命も假の宿りのようなもの。<sup>(11)</sup>趙子はあわれな奴。信じながら後になって疑い、彼の心はもうすでにすえてしまいました」。

（これは）司命君と南嶽夫人との會話。

道を修める者は、常に心靜かに淡然として一人で暮し、常に精神をひそかに棲まわせてゆつたりのんびりとし、適度に飲食してそれで満足し、俗世のしがらみを「<sup>(12)</sup>旂」へきつと「<sup>(13)</sup>祈」の字であろう」つたり目をくれたりすることはない。喜怒哀樂などというものは、だから永遠に捨て去られ、心をくじく障害など一體どうしてやって來ることがあろうか。

生まれながらの心にはそれぞれに住みかがあり、生まれつきの性

質にはすべてそれぞれの響きがある。どうして外的なものを追いかける邪道を歩み、自分の正しい行いをねじ曲げてよいものであろうか。

天上のはての最高の自由をほしのままにし、眞を求める内的な樂しみに自適し、幽玄清淨な境地に従つて心を喜ばせ、身を託したところにあんじて精神を棲まわせ、東山<sup>(15)</sup>(茅山)に隱棲して行跡をくらませ、靈妙なる山嶺で玄妙なはたらきのある筈<sup>(16)</sup>を手にし、隨侯の珠を身に保つて輝きを體の中に含み、五難を胸中から追いはらう、こうしたことを一體どうしてしないのか。へ以上の三條もやはり東卿司命君の言葉のようである。

(1) 範玄 『眞誥』卷八葉一〇裏「徳匠既凝、玄範自天、安危之事、未宜問也」。

(2) 高栖 『眞誥』卷二葉一三裏「精心高栖、隱嘿沈閑」。

(3) 上契 『雲笈七籤』卷一〇二太微天帝君紀「仍採納上契、條暢純和、吐納冥津、遂降靈生之胎」。

(4) 玉篇 『上清黃庭內景經』務成子注敘「雲笈七籤」卷二「一」黃庭內景者、一名東華玉篇、注「刻玉書之、爲玉篇」。

(5) 清靈 『清靈眞人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一〇五)「西玄山

爲清靈宮」。

(6) 空同 『眞誥』卷三葉七裏「綠蓋入協晨、青軒擲空同」。

(7) 靈標 『眞誥』卷二葉一三表「勸精者味玄之靈標也」。

(8) 無邪 『論語』爲政「子曰、詩三百、一言以蔽之、曰、思無邪」。

(9) 恬愉 『莊子』盜跖「慘怛之疾、恬愉之安、不監於體、怵惕之恐、欣懼之喜、不監於心」。

(10) 代謝 『淮南子』兵略訓「凡物有朕、唯道無朕、所以無朕者、以其無常形勢也、輪轉而無窮、象日月之運行、若春秋有代謝、若日月有晝夜、終而復始、明而復晦、莫能得其紀」。

(11) 氣如呼吸 『列子』天瑞「天、積氣耳、亡處亡氣、若屈伸呼吸」。

(12) 千齡如寄 魏文帝「善哉行」(『文選』卷二七)「人生如寄、多憂何爲」。

(13) 趙子 趙叔臺のことか。

(14) 天閑 『莊子』逍遙遊「而後乃今培風、背負青天而莫之夭闕者、而後乃今將圖南」。

(15) 東山 『眞誥』卷一七葉一二表注「先生初入東山時、楊始年十六」。

(16) 玄筌 『眞誥』卷二葉一五表「是以古之學者、握玄筌以藏領」。

『莊子』外物「筌者所以在魚、得魚而忘筌」。

七月十五日夜、紫微王夫人授書曰、

「勲精者味玄之靈標也、擬安者拘眞之寢衾矣、子勲澡丹心、競赴高嶺、可謂務道之柄勲甚至也、然道柔眞虛、守淡交物、安靜任栖、神乃啓煥耳、要而言之、躁疾非盡理矣、違之者亦取勞乎」。

與許玉斧。

七月十五日の夜、紫微王夫人が誥授して次のように書きとらせられた。

「勤め勵むのは玄を味得するためのすぐれた標<sup>しるし</sup>であり、精神を集中し心を落ち着かせるというのは、眞をとらえて離さないための安らいどころです。あなたは誠の心を一心に磨きあげ、高嶺に赴こうと心をはやらせています。まことに道の端緒をつかもうと勵み、その努力はたいしたものだと言えましょう。しかし、道は柔弱、眞は虚、恬淡を内に守つて外物と交わり、心を靜かに落ち着け、おのれの立場のままに委ねてこそ、精神は輝きを發するのです。かいつまんで言うと、あくせくするのは十分理にかなったことではありません。これに違ふならば、苦勞するだけのことです」。

許玉斧<sup>(1)</sup>に與えられたもの。

(1) 許玉斧 『眞誥』卷二〇葉九裏「(長史)小男名翻字道翔、

小名玉斧、正生、幼有珪璋標挺」。

七月十五日夜、清靈眞人授詩、

企望人飛、若感若成、威不内接、驕女遠屏、三四縱横、以入帝庭、歷紀建號、得爲太齡、亦必秀映、四司元卿、翻然縱羽、遂登上清。

〈此離合掾大名<sup>(1)</sup>名<sup>(1)</sup>翻字也〉

與許玉斧。〈此夕又有中君授書與許卿、答欲知洞天中之事、今載在第四卷中〉

鳳巢<sup>(2)</sup>高木、素衣衫然〈此八字是作長史小名穆字也〉、

履順思眞、凝心虛玄〈仍取此思字玄字、即成長史字也〉、

五公石映、彼體所便、急宜服之、可以少顏、三八令明、次行玄眞、解駕偃息、可誦洞篇。

瓊刃應數〈此瓊刃字即是掾小名玉斧也、與外傳青錄義同、故云應數〉、精心高栖、隱嘿沈閑、正氣不虧、尤散除疾、是爾所宜、次服飴飯、兼穀勿違、益髓除患、肌膚充肥、然後登山、詠洞講微。

寅獸白齒〈此四字卽是云虎牙也〉、亦能見機、遂得不死、過度壬辰、偃息盛木、玩執周書〈此八字卽是作楊字也〉。

太極植簡、金名西華、學服可否、自應靈符、理異契同、神洞相求。

定錄中候告。《道樂事是定錄言也》

〈此竝離合譬喻四人姓名、各詮所宜修行服御事、尋辭意皆相貫次、不知云何得兩人共說〉

① 寓言必可用、不用是無情、焉得駕歛迹、尋此空中靈、微音良有旨、

當用慎勿輕、事事應神機、保爾見太平。

右右英吟此。

茅定錄言良箴也、可記之、仙才不用心煩曲故、能得也。《保命言》

八月中、彼人必束秀鬢看、燒香必也。《保命臨去言》

右從乙丑歲來凡十五條、竝有楊書。

(1) この「名」一字は衍字であらう。

(2) この詩、『雲笈七籤』卷九七中候王夫人詩四首并序に見える。

(3) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊真人許長史詩に見える。

七月十五日之夜、清靈真人が詩を授けられた。

つまだち(企)して望むことは、あなた(人)が空高く飛び、

仙界との結びつきを感じるようであり登仙が成就できるようであること。

もし心の中に尊嚴さ(威)がないなら、

嬌女は遠くへ退いてしまうだろう。

何度も縦横に飛んで、

や々と天帝の宮庭に入り、

無限永劫の時間の中で、

永遠の生命を授けられるだろう。

そうすればきつと他の者に抜きん出て光り輝き、

四つの役所の長官になる。

羽を翻してひらひら飛び、

そうして上清宮に登って行くのだ。

〈これは、許掾(許翹)の成人後の名である「翹」の字を離合し

たものである

許玉斧に與えられた。へこの夕にはまた、茅中君が誥授し書きとらせて許卿<sup>(4)</sup>に與え、華陽洞天の内部のことを知りたいという彼の願いに答えられた。それは今、第四卷に載録してある<sup>(5)</sup>

鳳が高い木に巢を作り、

白絹の上着は衫然として袖のないはたのよう。

へこの八字は許長史の幼名である「穆」の字になるのである

まことを履み行ない道に従って眞を思い、

虚玄に心を集中せよ。

へそのままこの「思」の字と「玄」の字を取れば、許長史の字になるのである

五公石の腴<sup>(7)</sup>は、

彼の身體によいものだ。

急ぎそれを服用するがよい。

そうすれば顔立ちを若返らせることができる。

三八景二十四神を存思して輝かせ、<sup>(8)</sup>

次に行うは玄眞の法。<sup>(9)</sup>

世俗の仕事をやめて安らかに憩い、

『大洞眞經』を唱えなさい。

瓊<sup>(10)</sup>の刃は命運の數とあい應じた、

へこの「瓊刃」の字は、つまり椽の幼名の「玉斧」のことである。<sup>(11)</sup>

外傳や青録にいうのと同じ意味であるから、數とあい應ずと言っている

心を清くして世俗を棄てて生きよ。

沈黙と閑靜の中に侘び住まいすれば、

正氣<sup>(13)</sup>が損なわれることはない。

尤の散藥<sup>(14)</sup>は惡疾をとり除き、

おまえにびったり。

その次に服用するのは餓飯<sup>(15)</sup>、

あわせて五穀に關するきまりにも違つてはならぬ。

骨髓が強くなつて病氣は除かれ、

肌はつやつや生きいきとよみがえるだろう。

そのうえで山に登り、

洞天に歌い微言を講ぜよ。

寅<sup>(16)</sup>という獸は白い齒をしていてへこの四字は、つまり「虎牙」<sup>(17)</sup>

というものである、微妙なきざしを見てとることもでき、そうし

て不死を獲得して、壬辰の年（太元十七年、三九二）を過ぎて度脱

するだろう。<sup>(18)</sup> さかんに茂る木に安らかに憩い、周の書（易）をしつくり手にとって味わうへこの八字は、つまり「楊」という字になる

のである。

(これらの四人は) 太極に記録が置かれ、西華宮にその名が金字で記されている。<sup>(19)</sup> 服用すべきか否かを學び、靈妙な符に合致するであろう。それぞれに理は異なっているが(神仙の道に) びたりとかない、神仙の住まう洞天から探しにやって来るだろう。

定録君と中候夫人のお告げ。《仙藥について言っているのは定録君のお言葉である》

へこれらはいずれも離合の詩文で、四人の姓名をたとえている。それぞれ修行して服用すべき事柄を説きあかしている。言葉の意味を考えてみると、いずれも筋が通っていて、どうして二人が一緒に言ったのであろうか。

寓言は必ず活用すべきであり、活用しないのはやる氣がないから。

どうしてつむじ風の跡に車を走らせ、<sup>(20)</sup>

虚空の中の靈妙なものを探し求めることができましょうか。

微かな言葉の中にこそ教えがあるもの、

ぜひとも活用し、くれぐれも輕視してはなりません。

何事もすべてが靈妙なきざしと一致すれば、

間違ひなくあなたは太平聖君にお目にかかれましょう。<sup>(21)</sup>  
右は右英夫人がこれを歌われた。

茅定録君の言葉はよき戒めである。心に銘記すべきである。登仙の才は、偽りに心<sup>(22)</sup>を奪われなければ手に入れることができるのである。《保命君のお言葉》

八月中に、彼の人にはきつと東の頂でしばらくお目にかかれるだろう。燒香すれば間違ひなしだ。《保命君の立ち去りぎわのお言葉》

右、「乙丑の歲」以下のあわせて十五條は、すべて楊羲の書がある。

(1) 驕女 『眞話』卷九葉一二表「萬響入百關、驕女坐玄房」。

(2) 四司元卿 『太上玄靈北斗本命延生眞經註』卷一「三官五帝九府四司」、注「四司者、天曹四司則司命司錄司非司危、地府四司則司命司錄司功司殺、與三官五帝九府同檢察人間之罪福也、四司者、四肢也、人能降制九竅、攝養三魂、調順五臟、保運四肢、不著邪境、自戒俗情、斷絕人我、屏去是非、漸入眞道、豈不快哉。『雲笈七籤』卷八釋三十九章經「第二十三章、九皇



上眞司命君曰、九皇上眞者、玉虛之元君也、四司者、天帝之禁宮也」。

(3) 據大名 『眞誥』卷二〇葉一二裏「企望人飛云云者、即離合據官名也」。

(4) 許卿 『眞誥』卷二〇葉一二裏「許仙侯許卿者、得眞位也、給事常侍者、在世官也」。

(5) 洞天中之事… 『眞誥』卷一二に見える。

(6) 長史小名 『眞誥』卷二〇葉一二表「按眞誥中有云鳳巢高木素衣衫然者、配況長史名也」。

(7) 五公石腴 『眞誥』卷一七葉一六表「願以寫白石耳、願勿以見人」、注「此當是煮石方、或是五公腴法」、『雲笈七籤』卷七四太上巨勝腴煮五石英法にも見える。

(8) 三八令明 『眞誥』卷九葉二表「三八景二十四神、以次念之、亦可一時頓存三八、亦可平旦存上景、日中存中景、夜半存下景、在人意爲之也、…案苞玄玉籙白簡青經云、不存二十四神、不知三八景名字者、不得爲太平民、亦不得爲後聖之臣」。

(9) 玄眞 『眞誥』卷九葉一八表「東卿司命曰、先師王君、昔見授太上明堂玄眞上經、…太上玄眞經、先盟而後行、行之、然後可聞玉佩金璫之道耳、季偉昔長齋三年、始誠竭單思、乃能得之、於是神光映身、然後受書耳、此玄眞之道、要而不煩」、『登眞隱訣』卷下「存神別法、清虛眞人曰、凡修黃庭內經、應依帝君壇

神混化玄眞之道、…不修此法、雖誦萬遍、眞神不守、終無感效、亦損氣疲神、無益於年命也」。

(10) 瓊刃 『眞誥』卷一三葉一九裏「方嶠遊瓊刃、華陽棲隱居」。

(11) 據小名 『眞誥』卷二〇葉一二裏「有云瓊刃者、譬訓據小名也、即青錄所載若鋒者矣」。

(12) 青錄 『眞誥』卷一九葉二裏「南嶽夫人傳載青錄文云、歲在甲子、朔日辛亥、先農饗旦、甲寅羽水、起安啓年、經乃始傳、得道之子、當修玉文」。

(13) 正氣 『養性延命錄』(『雲笈七籤』卷三二)「外乏筋肉、血氣將無、經脈便壅、內裏空疏、惟招衆疾、正氣日衰、邪氣日盛矣」。

(14) 朮散 『眞誥』卷一〇葉四裏「又法、朮散五斤、茯苓煮三沸、搗取散五斤」。

(15) 餽飯 『眞誥』卷一四葉一七裏注「青精亦出彭傳及王君傳餽飯方中」。

(16) 寅獸白齒 『眞誥』卷二〇葉一二裏「有云寅獸白齒者、是虎牙也」。

(17) 虎牙 『眞誥』卷二〇葉九表「(長史)中男名聯、字元暉、少名虎牙」。

(18) 過度壬辰 『上清後聖帝君列紀』「壬辰之年三月六日、聖君來下、光臨於兆民矣」。

(19) 太極植簡 『眞誥』卷八葉六表「太玄植簡、太素刊名」。

(20) 金名西華 『雲笈七籤』卷四四紫書存思九天眞女法「若有金名書字紫簡、得見祕文、骨挺應仙、寶而密修、計日成仙」。『眞誥』卷三葉四表「駕欻發西華、無待有待聞」。『無上祕要』卷二・三界官府品「西華宮、右諸學眞人、得受以素眞經者、則未生之前、已書名於此宮」。

(21) 中候 『眞誥』卷一八葉一二裏注「王眉壽之小妹、卽中候夫人也」。

(22) 服御 『眞誥』卷六葉三表「服御之致合神、吉凶之用頓顯也」。同卷一九葉一表「眞誥協昌期第三」、注「此卷竝修行條領、服御節度」。『登眞隱訣』卷中「右前至此凡九事、竝服御吐納存注煙霞之道也」。

(23) 駕欻迹 『眞誥』卷三葉四表「駕欻發西華、無待有待聞」。

(24) 保爾見太平 『眞誥』卷一一葉一三裏「辟兵水之災、見太平聖君」。

(25) 曲故 『淮南子』修務訓「若吾所謂無爲者、私志不得入公道、嗜欲不得枉正術、循理而舉事、因資而立權、自然之勢、而曲故不得容者」、注「曲故、巧詐也」。

(26) 八月中… 『眞誥』卷一一葉一六表「八月八日書云」以下を参照。

欽想風流、託心靡景、愧以愆昧、鄙吝素彰、思自策勵、沐浴陶冶、濟否之階、幸垂眷逮耳、許玄惶恐再拜。長史大名謚、字思玄、今此直云玄、其意未允、詣賈先生。此是長史聞楊宣周紫陽說賈玄道等主知試校事、故有此書、賈卽以呈司命、司命後所答云「賈生近以此書來」者也、周君說事在第四卷中也。

右一條是長史自書本也。

太元眞人以此書見與、因授令書如左、

若夫能眇邈於當世、則所重唯身也、罕營外難者、則無死地矣、是以古之學者、握玄筌以藏領、匿穎鏡於紛務、凝神乎山巖之庭、頤眞於逸谷之津、於是散髮高岫、經緯我生、暉暉景曜、採吸五靈、遊躡九道、登元濯形、投思絕空、人事無營、閉存三氣、研諸妙精、故能迴日薄之年、反爲童嬰耳、苟事累沙會、交軒塞路、但所守之不能勗也、何試校之能停耶、物物相要、觸類興患、天人之眊、豈時漏哉、所司賞於修業、所試在於不日新矣、賈生近以此書來、託向臺臺、可謂有情、然無逝我梁、有似逆詐耳。

謹んで偉大な教えに想いを致し、美しい光に心を馳せておりますものの、恥ずかしいことに罪深く愚かで、さもしいい心がかねてから

目立ちがちです。自ら鞭撻し、身を清めては陶冶していききたいと思  
います。なるかならぬかの分かれ目ですから、どうか私に目をおか  
け下さい。許玄、恐れながら再拜しへ許長史の成人後の名は諡で字  
は思玄であるのに、今ここで「玄」としか言っていないのは、その  
わけが納得いかない、賈先生のもとにお届けします。へこれは許長  
史が楊義から周紫陽の話に賈玄道たちが登仙の試験を司っているのだ  
という<sup>(1)</sup>ことを聞いたので、この書簡があるのである。賈玄道はすぐ  
にそれを司命君に差し出した。司命君は後でそれに答えて、「賈先  
生は近ごろこの書簡を持ってやって来た」と言っている。周君の話  
というのは第四卷にある。

右の一條は許長史が自ら書きつけたテキストである。

太元真人(司命君)は、この書簡を與えられたので、誥授して次  
のように書き取らせられた。

もしそもそもこの世を遙かに超えられるとするならば、重要な  
はただ自分自身だけである。世間の難儀と關わらなければ、生命を  
落とす羽目に陥ることはないのだ。そこで、古の道を學ぶ者は、玄  
妙な筈を手にとって山中に隠れ、すぐれて澄んだ心を俗世の雜事か  
ら遠ざけて、險しい山中の廣場で精神を集中し、人里離れた溪谷の  
水邊で眞を養ったのである。そして高い峰で髪をふり亂し、自らの  
生命を調べて、きらきらと光輝く中で五靈を體内に取り入れ、九道

の上をステップを踏みつつ、根元の世界に登り、身體を洗い清め、  
虚空のなかに思いを馳せて、俗事とは關わらず、青白赤の三氣を體  
内に閉じこめて存思し、それをこまやかに磨きあげたからこそ、たそ  
がれ時の齡を幼年にもどすことができたのである。もしかりに俗事  
が砂のごとく累々と集まり、車を連ねて路をふさぐほどになれば、  
大切にしているものにつとめ勵むことすらできず、考試を止めさせ  
るわけにはいかない。あらゆる外物がおし寄せて来て、何事につけ  
災いを引き起こし、天人の目は片時たりとも見逃すことはない。修  
業しているのをはめるのが役目であり、日々に新たにつとめている  
可否かを調べるのだ。賈先生は近ごろこの書簡を持ってやって来た  
が、お前の姿勢は一所懸命であって、本當にやる氣があると言えよ  
う。ところで、「私のしかけた梁へ近づくな」という言葉があるが、  
それは餘計な警戒のし過ぎ<sup>(2)</sup>というものだ。

(1) 賈先生：『眞誥』卷一二葉四表「賈玄道李叔升言城生傳道  
流往竝受東卿君之要也、玄道河東人、周威王之末年生、諸來  
作試者、非一律而往矣、或亦因人犯者、此最難了也、於斯之際、  
可不慎乎」、注「此四人隸司命、主察試學道者、所以長史有書  
與賈、賈即呈司命、司命亦答之、竝以在上卷、此諸人名位小、  
不顯外書」。『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「賈玄道、李叔勝、

言成生、傳道流」、注「四人竝隸司命、主察試學道者、在太山」。

- (2) 採吸五靈 『真誥』卷一二葉一裏「末書云、廁聞要旨、當修五靈、自謂西造閭圃、東遊玄洲、不爲邈絕、求矜而誘之、引而致之、是爲言貫于心、良可啓矣、恭攸五靈、亦復至耳」。

- (3) 遊躡九道 『雲笈七籤』卷八釋迴元九道飛行羽經「迴元者、運星元之綱輪也、輪空洞之大輻、調四氣之長存、九道者、北斗九星也」。

- (4) 閉存三氣 『真誥』卷一〇葉一表「范幼沖、遼西人也、受胎化易形、今來在此、恆服三氣、三氣之法、存青炁、白氣、赤氣各如縱、從東方日下來、直入口中、搥之九十過、自飽便止、爲之十年、身中自有三色氣、遂得神仙」。

- (5) 迴日薄之年、反爲童嬰 『雲笈七籤』卷四二存大洞真經三十九眞法「命與月母俱、年隨日帝生、累玄保仙籍、迴老更童嬰」。
- (6) 無逝我梁 『毛詩』小雅小弁「無逝我梁、無發我笱、我躬不閱、遑恤我後」。

- (7) 逆詐 『論語』憲問「子曰、不逆詐、不億不信、抑亦先覺者、是賢乎」。

七月十六日〈此一條又有據書、省所諮、有心哉、子望對山嶺、增懷遠想、欣然稟向、常見此意、夫爲道者、精則可矣、有情不懃、則

無所能爲也、懃而不專、亦不能有成也、要當令吝心消豁、〔穢〕〔此後人驢作穢字、不可復識〕疾開散。〔此亦似東卿告長史〕

爾何以不數看東山、鬱望三秀、徘徊畢宇、目擊林水〔平〕〔乎〕、彼人往、殆無所復益耳。〔凡云三秀者、皆謂三茅山之峯、山頂爲秀、故呼三秀也〕

右南嶽夫人與弟子言。

夫言者性命之全敗也、信者得失之關鍵也、張良三期、可謂篤道而明心矣。

右南嶽夫人與弟子言。

性甚寬仁、而所聞急、而應物速者、更違旨耳、火棗事未宜問也。

〔論火棗事在後〕

右九華眞妃言。

右從太元來凡五條竝楊書。

(1) 「平」を「乎」に讀む。

七月十六日へこの一條はまた許掾の書がある、問うてきた書簡を見ると、見どころがあるようだ。そなたは山の峰々を前に見て、

いよいよ高遠な思いをつのらせ、嬉々としてあこがれを抱き、いつもこのような氣持を示している。そもそも道を修めるといふことは、精進すればよいのだ。やる氣があつても實際につとめなければ、何もなすことはできないのである。つとめても專一にやらなければ、やはり成就できないのである。いやしい心をきっぱりと捨て、〔穢〕へこれは後人が塗りつぶして「穢」の字にしたもので、もとの字はもう分らない、た疾を解消しなければならない。へこれもまた東卿司命君が許長史に告げたものようである

あなたは どうして東山を何度も見て、その三つの秀でた山頂を望みやり、いばらの生えた野を歩き回って、林や川をしかと見ようとしないのですか。彼の人々が往つてしまえば、ほとんど何のためにもなりません。〔三秀〕というのは、すべて三茅山の峯のことである。山頂が秀でているから、三秀と呼ぶのである

右は南嶽夫人が弟子に言われたもの。

そもそも言葉は人間の生命を完全に損なうものであり、信は得失の關鍵です。張良が三度も待ち合わせをしたのは、道に熱心で眞心

を明らかにしたものと いえます。

右は南嶽夫人が弟子に言われたもの。

生まれつき心が廣く情け深くても、せっかちに聞きたがったり、やたらと素早く物事に對處するのは、一層教えに背くだけです。火棗のことは今はまだたずねるべきではありません。へ火棗についての議論は後にある

右は九華眞妃のお言葉。

右、「太元」以下のあわせて五條は、すべて楊羲の書。

(1) 張良三期 『史記』卷五五留侯世家「留侯張良者、其先韓人也、...良嘗閒從容步游下邳圯上、有一老父、衣褐、至良所、直墮其履圯下、顧謂良曰、孺子、下取履、良鄂然、欲殿之、爲其老、彊忍、下取履、父曰、履我、良業爲取履、因長跪履之、父以足受、笑而去、良殊大驚、隨目之、父去里所、復還、曰、孺子可教矣、後五日平明、與我會此、良因怪之、跪曰、諾、五日平明、良往、父已先在、怒曰、與老人期、後、何也、去、曰、後五日早會、五日鷄鳴、良往、父又先在、復怒曰、後、何也、去、曰、後五日復早來、五日、良夜未半往、有頃、父亦來、喜曰、

當如是、出一編書、曰、讀此則爲王者師矣、後十年興、十三年孺子見我濟北、穀城山下黃石即我矣、遂去、無他言、不復見、旦日視其書、乃太公兵法也、良因異之、常習誦讀之。

(2) 火棗事 『眞誥』卷二葉一九表「玉醴金漿、交梨火棗」以下に詳しい。

〔1〕 轡景落滄浪、騰躍清海津、絳煙亂太陽、羽蓋傾九天、雲輿浮空洞、儵忽風波間、來尋冥中友、相攜侍帝晨、王子協明德、齊首招玉賢、下眇八阿宮、上寢希林顙、漱此紫瓊腴、方知穢塗辛、佳人將安在、慙之乃得親。

七月十八日夕、雲林右英王夫人授詩。〈此詩與長史、兼及掾事〉

高興希林虛、遐遊無員方、蕭條象數外、有無自冥同、臺臺德韻和、颺颺步太空、盤桓任波浪、振鈴散風中、內映七道觀、可以得兼忘、何必反覆酬、待此世文通、玄心自宜悟、嘿耳必高蹤。

七月二十六日夕、紫微夫人喻作、令與許長史。

絳闕扉廣霄、披丹登景房、紫旗振雲霞、羽晨撫八風、停蓋濯碧谿、採秀月支峯、咀嚼三靈華、吐吸九神芒、椿數無絕紀、協日積童蒙、攜袂明眞館、仰期无上皇、北鈞唱羽人、玉玄粲賢衆、云〔河〕〔何〕

波浪宇、得失爲我鍾、引領羈庭內、開心擬穢衝、習適榮辱域、罕躡希林宮、一靜安足苦、試去視滄浪。

右右英夫人所喻。

右從轡景來三篇竝有長史寫。

(1) この詩、『太清金液神氣經』卷下、『雲笈七籤』卷九八雲林右英王夫人授楊真人許長史詩に見える。

(2) 兪本が「河」を「何」に作るのに従う。

光の手綱をとって滄浪山に降り、  
清らかな海の水邊に躍り上がる。

絳いもやは太陽の光を混亂させ、

羽飾りのついた車の蓋は天を傾ける。

雲の車はぼっかり開けた空間に浮かび、

風と波の間をあつという間に飛んでゆく。

見えない絲で結ばれた友を捜しに來た私、

私と一緒に帝晨でお仕えしましょう。

王子喬は明德のあるあなたにふさわしいお方、

みんなして玉のようにすぐれた人を招きましよう。<sup>(7)</sup>

八阿宮を眼下に眺め、

上は希林宮の上で休みましよう。

この紫の玉の腴<sup>(8)</sup>を口に含んでみて初めて、

汚れた俗界の辛さが分かるのです。

わが佳き人はいったどこにいますのでしうか、<sup>(9)</sup>

あなたがつとめ勵むならば私と親しくなることができますのです。

七月十八日の夕、雲林右英王夫人が誥授された詩。へこの詩は許

長史に與えられ、あわせて許掾のことに言い及んでいる。

希林の岡に心はずませ、<sup>(10)</sup>

遠く遙かに圓方のない世界に遊ぶ。<sup>(11)</sup>

さっぱりとした現象世界の外、<sup>(12)</sup>

そこでは有と無とが神祕的に合一する。

さらさらと徳のしらべは調和し、<sup>(13)</sup>

ふわりふわりと天空を歩む。<sup>(14)</sup>

たちもとおって波に身を任せ、<sup>(15)</sup>

さっさと吹き過ぎる風の中に鈴を振り、

心の内に北斗七星がきらめけば、<sup>(16)</sup>

完全なる忘却を得ることができる。<sup>(17)</sup>

どうして繰り返し應酬し、

俗世の文字で意思を通じあう必要がありませんか。

玄妙な境地は自ずと悟れるはず、<sup>(18)</sup>

沈黙を守っていればきつと高尚な世界を歩むことができます。<sup>(19)</sup>

七月二十六日の夕、紫微夫人が諭して作り、許長史に與えさせられた。

絳<sup>(20)</sup>い宮門は太空に向かつて開き、

丹<sup>(21)</sup>い霞をかき分けて景<sup>(22)</sup>の部屋へと登ってゆく。

紫の旗は雲や霞のたなびく中に振られ、

羽晨<sup>(23)</sup>の車は八方の風を打つ。

車を停めて碧<sup>(24)</sup>の谷川で身をきよめ、

花を月支の峯で摘む。

三靈<sup>(25)</sup>(日月星)の花をかみしめ、<sup>(26)</sup>

九神の光芒を呼吸する。

大椿<sup>(27)</sup>の齡は絶える時がなく、<sup>(28)</sup>

良き日にめぐりあつていつまでも子供であることを繰り返す。<sup>(29)</sup>

明眞<sup>(30)</sup>の館に袂を攜え、<sup>(31)</sup>

目指すところは無上皇。<sup>(32)</sup>

北天の音楽は仙人の歌聲に唱和し、

玉玄宮<sup>(33)</sup>はすぐれた人々で燦然と輝く。<sup>(34)</sup>

波浪の逆巻くところでは、

得失が集って来るのをどうしよう。

騒々しい庭に首を伸ばし、<sup>(29)</sup>

心はひたすら不淨の巷に向かつて開かれる。

榮華と恥辱<sup>(30)</sup>の世界に馴れきってしまったば、

希林宮にたどり着くことなどめったにない。

いったん心が静まれば何も苦しみことはない、

さあ、滄浪山を見に出かけるのです。

右は右英夫人が諡されたもの。

右、「戀景——光の手綱をとって——」以下の三篇はすべて許長史の  
寫しがある。

(1) 戀景落滄浪 『眞話』卷四葉三裏「戀景登霄晨、遊宴滄浪宮」。

同卷一四葉一九裏「八淳山高五千里、周巾七千里、與滄浪方山  
相連比、……在滄浪山之東北、蓬萊山之東南」。

(2) 騰躍 『莊子』逍遙遊「我騰躍而上、不過數仞而下、翱翔蓬  
蒿之間、此亦飛之至也」。

(3) 羽蓋傾九天 『眞話』卷三葉七表「八輿造朱池、羽蓋傾霄柯」。

(4) 雲輿浮空洞 阮籍「清思賦」「載雲輿之奄露兮、乘夏后之兩  
龍」。『雲笈七籤』卷二空洞「道君曰、元氣於眇莽之内、幽冥之

外、生乎空洞、空洞之内、生乎太無、太無變而三氣明焉」。

(5) 倏忽風波閒 『楚辭』招魂「雄虺九首、往來倏忽」。同九章  
哀郢「順風波以從流兮、焉洋洋而爲客」。

(6) 明德 『尚書』君陳「黍稷非馨、明德惟馨」。

(7) 玉賢 許玉斧(掾)を指す。

(8) 紫瓊腴 『太元真人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷一  
〇四)「今故賜盈紫琳之腴、玉漿金甕、可以壽同三光、刻簡丹  
瓊也」。

(9) 佳人 『楚辭』九章悲回風「惟佳人之永都兮、更統世而自貶」。

(10) 高興 支遁「善思菩薩讚」(『廣弘明集』卷一五)「登臺發春  
詠、高興希遐蹤」。

(11) 遐遊無員方 摯虞「思游賦」(『晉書』卷五一摯虞傳)「將澄  
神而守一兮、奚颺颺而遐遊」。張衡「思玄賦」(『文選』卷一五)「俗  
遷渝而事化兮、泯規矩之員方」。

(12) 蕭條象數外 『楚辭』遠遊「山蕭條而無獸兮、野寂漠其無人」。  
『左傳』僖公十五年「韓簡侍曰、龜、象也、筮、數也、物生而  
後有象、象而後有滋、滋而後有數」。

(13) 臺臺 左思「吳都賦」(『文選』卷五)「玄蔭耽耽、清流臺臺」。

(14) 颺颺步太空 『史記』卷一一七司馬相如傳「相如既奏大人之  
頌、天子大說、飄飄有凌雲之氣」。『關尹子』二柱「一運之象、  
周乎太空」。



- (15) 盤桓 『真誥』卷四葉四表「盤桓聳議內、衍累不當多。『漢書』卷一〇〇上敘傳上「承靈訓其虛徐兮、竚盤桓而且俟」。
- (16) 七道觀 『真誥』卷三葉一七表「嗟彼之小宿、難以則七元之靈觀」。
- (17) 兼忘 『莊子』天運「兼忘天下易、使天下兼忘我難」。
- (18) 玄心 『真誥』卷三葉四裏「玄心空同間、上下弗流停」。
- (19) 高蹤 『漢書』卷八七上揚雄傳「軼五帝之遐迹兮、躡三皇之高蹤」。
- (20) 絳闕 顏延之「赭白馬賦」(『文選』卷一四)「簡偉塞門、獻狀絳闕」。
- (21) 羽晨撫八風 『太平御覽』卷六七八傳授上「(茅君傳曰)又還西城、太上遣賜繡羽晨蓋、雙珠月明、素羽瓊干丹鸞、錦旌太素」。
- 『淮南子』墜形訓「何謂八風、東北曰炎風、東方曰條風、東南曰景風、南方曰巨風、西南曰涼風、西方曰飀風、西北曰麗風、北方曰塞風」。
- (22) 咀嚼三靈華 『真誥』卷二葉一〇表「咀嚼和氣、漱濯清川」。
- 『漢書』卷八七上揚雄傳「方將上獵三靈之流、下決醴泉之滋、師古注「如淳曰、三靈、日月星垂象之應也」。
- (23) 椿數 『莊子』逍遙遊「楚之南有冥靈者、以五百歲爲春、五百歲爲秋、上古有大椿者、以八千歲爲春、八千歲爲秋」。
- (24) 協日積童蒙 『周禮』秋官鄉士「獄訟成、士師受中、協日刑殺、肆之三日」、注「協、合也、和也、和合支幹善日」。
- 『真誥』卷一七葉八表「石慶安甚童蒙、年可十三四」。
- (25) 明眞館 『清靈眞人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一〇五)「登明眞之臺、坐希琳之殿」。
- (26) 无上皇 『太平經』卷四八・三合相通訣第六十五「今天師書辭、常有上皇太平氣且至、今是何謂爲上、何謂爲皇、何謂爲太、何謂爲平、何謂爲氣、…然上爲字者、一畫也、中央復畫一直、上行復抱一、一而上得三一、上行而不止、不復下行也、故名爲上者、迺其字無復上也、反上爲下、下者、一畫也、亦中央復畫直、下行復抱一、其行遂下、不得復上、故名爲下也、夫志常欲下行者、久久最下、無復下也、比若濁者、樂下爲地、故地最下、無復下也、上爲字者、常上行、不得復下、比若清者、樂上行爲天、天乃無上也」。
- (27) 羽人 『楚辭』遠遊「仍羽人於丹丘兮、留不死之舊鄉」。
- (28) 玉玄 『無上祕要』卷六帝王品「天寶君者、是大洞太元玉玄之首元」。
- (29) 引領 『左傳』襄公二十六年「引領南望曰、庶幾赦余、亦弗圖也」。
- 『孟子』梁惠王上「天下之民皆引領而望之矣」。
- (30) 榮辱 『莊子』則陽「莫爲盜、莫爲殺人、榮辱立、然後覩所病」。

弱喪<sup>①</sup>潤漑、篤靈未盡、倚伏異因、雲梯未抗、雖有懷於進趣、猶未淵於至理矣、君才實天工以清瀾、凝浪於高韻、志栖神乎太玄、期紫庭而步空矣、有心洞於飛滯、柔翰蔚乎冥契也、動合規矩、等圓殊方、靜和眞味、吐納興音、可謂縱誕德挺、良爲欽然矣、然穢思不豁、鄙吝內固、淫念不漸、靈池未澄、將未得相與論內外之期、汎二景之交耳、夫失機者、貴在能改、相釋有情、今無妨矣、雖暫弭羣聽、故克和也、前塗「一」へ謂應作攸字、邈、此比非一、漏緒多端、當恆戰密、苟情有愆散、得隨事失、悟言微矣、將何以遏之、將何以遣之。

右七月二十六日夜、雲林右英王夫人諭書、見與勿答。

(1) この段、『雲笈七籤』卷九八雲林右英王夫人喁楊眞人許長史詩の序に見える。

年若くして流亡<sup>①</sup>してあてどもなく、神靈に對するねんごろな關係も十分に盡くされず、禍が福によりそい、福が禍に潜む<sup>②</sup>その原因はさまざまであつて、天界に至る雲の梯子はまだ高くかけられてはいません。心の中に向上心を抱いてはいるものの、まだ至高の眞理に

沈潜していません。あなたの才能は本當に天が授けた巧みさにして清らかなさざ波、それは高尚な調べの大浪となり、太玄<sup>③</sup>に心を棲ませようと志し、紫庭<sup>④</sup>を目指して空を歩まれる。滯りを振り拂おうとからりと心を開き、しなやかな筆は幽冥での契合に浮きたちます。動いては規矩そのままに、等しい圓、さまざまな方形を描くことができ、靜まれば眞理の味わいと調和し、吐納するままに言葉となり、思いのままにやって徳高しと言うべく、誠によるこばしいことです。しかし、穢らしい思いは除かれず、いやしい心は内に凝り固まり、淫らな考えはそそがれず、靈池はまだ澄まず、ともに仙界と俗界との契りを論じ、二つの景<sup>⑤</sup>の交わりをおし廣めることはできません。そもそも時機を失つた者は、態度の改められることこそが大切なです。有に對する感情を捨てるなら、今や何の妨げもありません。しばらくさまざまな雑音を耳から絶つたとて、もとより十分に調和できるでしょう。前塗は「一」へきつと「攸」の字であろう、邈く、こういうためしは一つではありません。しくじりの絲口はさまざま、いつもびりびりしていなければなりません。かりにも感情が罪で散漫になると、得たしりから失われます。二人の會話には機微が含まれています。さてどのようにして防ぎとどめますか、どのようにして拂いのけますか。

右は七月二十六日の夜、雲林右英王夫人が諭された書。與えられましたが答えがない。

右の一條は許長史の寫しがある。

(1) 弱喪 『莊子』齊物論「予惡乎知惡死之非弱喪而不知歸者邪」、注「少而失其故居、名爲弱喪」。

(2) 倚伏 『老子』第五十八章「禍兮福之所倚、福兮禍之所伏」。

(3) 雲梯 郭璞「遊仙詩」(『文選』卷二二)「靈谿可潛盤、安事登雲梯」、注「雲梯、言仙人昇天、因雲而上、故曰雲梯」。

(4) 太玄 『真誥』卷四葉九表「登軒發東華、扇歛儻太玄」。

(5) 紫庭 『真誥』卷九葉一五表「上詣紫庭、役使萬神」。

世珍芬馥交、道宗玄霄會、振衣尋冥嶠、迴軒風塵際、良德映靈暉、  
穎根榮華蔚、密言多儼福、沖淨尙眞貴、咸恆當象順、攜手同衾帶、  
何爲人事間、日焉生患害、

七月二十八日夕、右英王夫人授書此詩、以與許長史。(後十二月  
長史答書云咸恆之喻、卽是酬此詩也、咸恆義出周易)  
右一篇有長史寫。

世にも珍かな馥郁たる交わり、

道の根元と小暗い大空で出會いましょう。<sup>(1)</sup>

衣を振って幽冥の友を探し求め、  
車を俗世へと差し向ける。

すぐれた徳は靈妙な光に照りはえ、  
すばらしい資質は粲然と輝く。

内緒の言葉には思いがけぬ幸福がどっさりあり、  
心はきれいさっぱり、眞にして貴いものをたつとぶ。

咸の卦と恆の卦は順序だったシンボル、  
手を攜えてベッドをともしましょう。

どうして人の世の中で、  
日ごとに災いを生みだすのですか。<sup>(4)</sup>

七月二十八日の夕、右英王夫人が誥授してこの詩を書かせ、それを許長史に與えられた。(後の十二月の條の許長史の返書に、<sup>(5)</sup>「咸の卦と恆の卦のたとえ」とあるのは、この詩に答えたものである。咸の卦と恆の卦の意味は『周易』に基づく)

右の一篇は許長史の寫しがある。

(1) 道宗玄霄會 『真誥』卷三葉六表「雙德秉道宗、作鎮眞伯審」。  
僧順「答道土假稱張融三破論」(『弘明集』卷八)「釋聖得道之  
宗、彭聃居道之末、得道宗者、不待言道而道自顯、居道之末者、

常稱道而道不足。『真誥』卷三葉一七表「旨諭有咸恆之順、宗期則玄霄之會」。

(2) 靈暉 王儉「楮淵碑文」(『文選』卷五八)「公稟川嶽之靈暉、含珪璋而挺曜」。

(3) 咸恆 『周易』序卦傳「有天地、然後有萬物、有萬物、然後有男女、有男女、然後有夫婦、……(注「言咸卦之義也」)……夫婦之道、不可以不久也、故受之以恆、恆者、久也」。

(4) 患害 『史記』卷一一三南越傳「漢十一年、遣陸賈因立佗爲南越王、與剖符通使、和集百越、毋爲南邊患害、與長沙接境」。

(5) 後十二月長史答書 『真誥』卷三葉一七表「君惶恐言、仁德流映、……」注「此長史答右英前七月二十八日喻詩世珍芬馥交者、并酬前書論薛旅事、猶恐是十二月中」。

清響散空、神風灑林、身超冥衢、志詠靈音、仁侯其人也、欲以裴真人本末示都者可矣、其必克諧不、善誘之心亦內彰也、裴亦何人哉、  
〈都即情也、小名方回、裴真人本末卽是清靈傳也、有謝過及七經之士、故令示之〉

八月七日夜、右英王夫人授書、令與許長史。  
右一條楊書、又有長史寫。

守眞一篤者、一年使頭不白、禿髮更生、夫內接兒孫、以家業自羈、外綜王事朋友之交、耳目廣用、聲氣雜役、此亦道不專也、行事亦無益矣、夫眞才例多隱逸、栖身林嶺之中、遠人聞而抱淡、則必嬰顏而玄鬢也。

玉醴金漿、交梨火棗、此則騰飛之藥、不比於金丹也、仁侯體未眞正、穢念盈懷、恐此物輩不肯來也、苟眞誠未一、道亦無私也、亦不當試問。

火棗交梨之樹、已生君心中也、心中猶有荆棘相雜、是以二樹不見、不審可剪荆棘出此樹單生、其實幾好也。

雖云問也、其欲希之近也、當爲君問主領者、三年更相問、以卽日始。

丑年〈此二字長史後益上〉八月七日夜、雲林右英王夫人授答許長史。

凝心虛形、內觀洞房、抱玄念神、專守眞一者、則頭髮不白、禿者更「軫」(軫字亦應是「琴」)<sup>3</sup>「鬢」(鬢字亦應是「髮」)<sup>4</sup>「夫」有以百思纏胸、寒熱破神、營此官務、當此風塵、口言吉凶之會、身「扉」(凡作扉字者

皆是排音、非扉扇之扉也。得失之門、衆憂若是、萬慮若此、雖有眞心、固爲不篤。

抱道不行、握寶不用、而自然望頭不白者、亦希聞也、玉醴金漿、交生神梨、方丈火棗、玄光靈芝、我當與山中許道士、不以與人閑許長史也。

八月七日夜、紫微王夫人授答許長史。

右六條有掾寫。

(1) この段、『雲笈七籤』卷九八雲林右英王夫人授楊眞人許長史詩の序に見える。

(2) この段、『雲笈七籤』卷九八雲林右英王夫人授楊眞人許長史詩の序に見える。

(3) 俞本が「琴」を「鬢」に作るのに従う。

(4) 『雲笈七籤』卷九二衆眞語録が「未」を「夫」に作るのに従う。

清らかな響きは空に散って神風は林にそそぎ、身體は幽冥の世界

に超越して心は神靈の旋律を唱おうとするのは、あなたこそその人です。裴眞人の一代記<sup>(1)</sup>を都に示そうとするのはよいことです。きつと、びつたりなのではないでしょうか。あなたが人を善導しようとする氣持も、心中に明らかです。裴眞人だつてどれほどの人間でもありません。へ都とは都情のことである。<sup>(2)</sup>幼名は方回。裴眞人の一代記とは『清靈傳』のことである。その中に、罪過をわびることと、七回の試験を経験する人物のことが見えているので、<sup>(3)</sup>それでこれを示させた。

八月七日の夕、右英王夫人が誥授して書かせ、許長史に與えさせられた。

右の一條は楊羲の書。また許長史の寫しがある。

眞一<sup>(1)</sup>を守ることに熱心な者は、一年たてば頭を白くなくさせ、禿げ頭に再び毛を生えさせる。いったい、家庭では子や孫の相手をして、なりわいで自分を縛り、家庭の外ではお上の仕事や友人とのつき合いで手一杯、耳や目をさんさんに使い、聲はあれこれつまらぬ事で行った。こういうことでは道は專一ではありません。ものごとを行つてもだめです。そもそも眞人の才のある者は、おおむね隱逸し、身を林や山中に住まわせ、俗世間から遠く離れて淡泊な心を抱くから、必ず赤子のような顔になって鬢も黒くなるのです。

玉醴・金漿・交梨・火棗、これらは昇仙のための薬であつて、金丹とは比べものになりません。あなたは身體はまだ本物になつておらず、穢らわしい思いが心にみちています。恐らくこれらのものはやつては來ますまい。かりそめにもひたむきな心が專一でなければ、道もえこひいきはしますまい。やはり、試みに問うべきではありません。

火棗・交梨の樹は、もうすでにあなたの心の中に生えています。だが、心の中にはまだいばらが混生しています。それで、二本の樹はまだ現れないのです。そのいばらを刈り取つて、この樹だけを生え出させることができるでしょうか。そうなれば本當にすばらしい。

あれこれ質問をされるが、どうやら近い將來に（火棗・交梨の生ずることを）期待しているようです。ひとつ、あなたのために嶺を治めている者にたずねてみましょう。三年たつたらもう一度たずねなさい。今日からすぐに始めることです。

丑年へこの二字は許長史が後に書き加えたの八月七日の夜、雲林右英王夫人が口授して許長史に答えられたもの。

心を集中し體を虚しくして洞房宮を存思し、玄妙な眞理を抱いて

神々を思念し、ひたすら眞一を守るならば、髪の毛も白くならず、禿げ頭もあらためて「軫」へこの「軫」の字もやはりきつと「擡」であらうしてきます。さまざまな雑念が心にまとわりつき、暑さ寒さが精神を破壊するような状態で、役人の仕事に従事して浮世の風に當たり、吉凶が身に集るような言葉を口にし、體には得失が訪れる門を「扉」へおおよそ「扉」の字に作っているのは、すべて「排」の音である。扉扇の扉ではないといっている。さまざまな憂いがこのようであり、多くの雑念がこのようであれば、眞仙を願う心があるとはいつても、必ずやまだひたむきではないのです。

仙道を心に抱いていても實行せず、寶物を手に握つていても使用せず、それで自然と頭が白くならないことを願つても、（そんなことは）めつたに聞いたことがあります。玉醴、金漿、交梨の神梨、一丈四方の火棗、不思議な靈光を放つ靈芝、私はこれらを山中の許道士には與えますが、人間界にいる許長史には與えません。八月七日の夜、紫微王夫人が誥授して許長史に答えられた。

右の六條は許掾の寫しがある。

(一) 裴眞人本末 『清靈眞人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一〇五)。

(2) 郝惜 『晉書』卷六七に傳あり。

(3) 有謝過及七經之士… 『清靈真人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一

○五)「常以八節日夜半日中、謝七世祖父母及身中罪過、罪過自除也」。七經のことは見えないが、『眞誥』卷三葉一三裏に「經七試而不過」とあるようなことか。

(4) 守眞一 『抱朴子』地眞「到峨眉山、見天真皇人於玉堂、請問眞一之道、皇人曰、…夫長生仙方、則唯有金丹、守形却惡、則獨有眞一、…守一存眞、乃能通神、…守之不失、可以無窮、陸辟惡獸、水却蛟龍、不畏魍魎、挾毒之蟲、鬼不敢近、刃不敢中、此眞一之大略也、…守玄一復易於守眞一、眞一有姓字長短服色、此玄一但自見之、…」。

(5) 玉體金漿 『抱朴子』金丹「朱草狀似小棗、栽長三四尺、技葉皆赤、莖如珊瑚、喜生名山巖石之下、刻之汁流如血、以玉及八石金銀投其中、立便可丸如泥、久則成水、以金投之、名爲金漿、以玉投之、名爲玉醴、服之皆長生」。

(6) 抱玄念神 『西昇經』卷上邪正章第七「吾本棄俗、厭離世間、抱元守一、過度神仙」。『上清黃庭內景經』肝部章第十一(『雲笈七籤』卷一一)「垂絕念神死復生、攝魂還魄永無傾」。『太微帝君二十四神回元經』「閉目內視、忘體念神、燒香盟練、存神守眞」。

(7) 眞心 『眞誥』卷一〇葉六表「受書則師、乃恥之耶、眞心既

有不盡、獲考者非一人」。

(8) 靈芝 『眞誥』卷六葉二表「御六氣者定壽、服靈芝者神逸」。

擬駕東岑人、停景招隱靜、仁德乘波來、俱會三秀嶺、靈芝信可食、使爾無終永、喻眞獻金漿、不待百丈井。

八月十六日夕、清靈真人授。  
右一篇有長史寫。

(1) 東山の人のもとへ車を差し向け、  
景をとどめて隱棲の人を招く。(2)

仁と德(ある眞人)は波に乗ってやって来て、  
一緒に三つの秀でた嶺に集まる。

靈芝は本當に食べることができる、  
そなたを永えに不死にさせることだろう。

眞氣を吸い金漿をすすめるのに、  
百丈の深さの井戸は必要ない。

八月十六日の夕、清靈真人が誥授された。  
右の一篇は許長史の寫しがある。

(1) 東岑 『眞誥』卷三葉五表「養形靜東岑、七神自相通」。

(2) 停景招隱靜 傅玄「雜詩」(『文選』卷二九)「良時無停景、

北斗忽低昂、常恐寒節至、凝氣結爲霜」。『三國志』卷四十二杜微傳「評曰、杜微脩身隱靜、不役當世、庶幾夷皓之槩」。

(3) 仁德 『淮南子』繆稱訓「善之由我與其由人、若仁德之盛者也」。

(4) 無終 『莊子』則陽「冉相氏得其環中、以隨成、與物無終無始、無幾無時」。

(5) 百丈井 『神異經』東南荒經「東南有石井、其方百丈」。

虛和可守雌、蕭蕭可守雌、夫蕭蕭者單景獨往也、君絳宮中〔渠〕  
〈謂應作詎字〉能仰飛空同上上雲玄之涯不、道易聞而患不眞、書易  
得而患不行、若專如此、大天之中盡眞仙比肩也、我亦無咎於不能爲  
者。

心不定而欲書、將欲沾之哉、意不往而求眞、似欲銜之也、願告。

八月十七日夜、右英王夫人授書此、與許長史。〈似答心求守雌之  
眞一也〉

肇祖植德、華條翁〔隊〕〈即謂七世祖許肇也、隊字應作墜〉、頓足  
懸車、無早晚也、但心堅注眞、微密靈機則可矣、至於高逸長嶺、寢  
冥林澤、縱時事之難鄙、遺九親而味神、實美舉也、心苟不專、愆念  
填胸、雖躡閭山以遊步、造圓龍以朝冥、然亦必敗也、若必空空、我  
自當相告有可動之時也、今且未可議耶。

八月十七日夜、保命仙君小茅口授、與許長史。

含仁守慈、發拔幽憂、單心慈誘、栖神靈鏡者、許長史其人也、所  
恨在於應物速、招眞急耳、夫浩挺虛映、乃可守雌、已求、故當能守  
之、守之蓋易、恐亦宜無不可耶、

八月十八日夜、紫微王夫人授、示許長史。

右四條有楊書。

虛しく和やかであつてこそ雄一の神を守ることができるのです。  
蕭々としていてこそ雌一の神を守ることができます。蕭々とは  
たった一人ぼっちで出かけることなのです。あなたは絳宮中から、  
〔渠〕へきつと「詎」の字であろう、ぽっかり開けた空間の上の上  
の雲のはてまで飛翔することができるでしょうか。仙道は耳にする



ことはたやすいけれども眞實でないのが困りもの、仙書は手に入れたことはたやすいけれども實行されないのが困りもの。もしもつばらそんなことなら、大空の下どこもかしこも眞仙だらけになるでしょう。私にだって出来ない者に責任はないのです。

心が一定していないのに仙書をほしがるのは、賣るつもりなのでしょうか。氣持が一途に深まっていないのに眞仙を求めるのは、見せびらかそうとしているようなものです。願いごとを告げなさい。

八月十七日の夜、右英王夫人が誥授してこれを書かせ、許長史に與えられた。へ心に雌眞一を守る法を求めようとしているのに答えたもののようである。

肇基の祖は徳を植えたので、華や枝はこんもりと〔隊〕<sup>たれさか</sup>へつまり七世の祖の許肇のことをいうのである。「隊」の字はきつと「堅」であろう。致仕することに足ぶみするとしても、遅かれ早かれいつかそうなるであらう。ただ、心をしつかりと眞人に集中させ、神靈のはたらきにびったり身を寄せるならば、それでよいのだ。連なる峰に隠れ棲み、奥深い林や澤に憩い、世の中の困難やいやらしさを振り拂い、親族を捨てて神々の境地を味おうとするのは、本當に見上げた行爲である。心がもしも集中せず、罪に満ちた雜念が心に

渦巻けば、閼山<sup>(1)</sup>に登って歩きまわり、圓壘に出かけて神仙に謁見したとしても、必ずや失敗する。もしも誠實そのものであれば、私は自ら行動を起こすべき時を知らせよう。今はひとまずまだ議論すべき段階ではないのではなからうか。

八月十七日の夜、保命仙君小茅君が口授して許長史に與えられた。

仁篤の心を持ち、慈愛の氣持を守り、深い憂いから抜け出ようとの志を立て、ひたすら慈愛深い神仙の誘いを待ち、精神を靈妙な境地に棲まわせているのは、許長史その人です。ただ殘念なのは、せっかちにものごとに応じ、眞仙の招來にあくせくしていることです。そもそも廣々として抜きん出て澄みわたった境地になってこそ、雌眞一を守ることができます。すでに〔雌眞一を〕求めたのなら、しつかりと守らなくてはなりません。(雌眞一を)守るのは、思うに容易なこと、恐らく不可能なことではないはずです。

八月十八日の夜、紫微王夫人が誥授して許長史に示された。

右の四條は楊羲の書がある。

(1) 守雄、守雌 『登眞隱訣』卷上注にこの一節を引いて説明するくだりがあるのを参照。『老子』第二十八章「知其雄、守其

雌、爲天下谿」。

(2) 絳宮 『抱朴子』地眞「一有姓字服色、…或在心下絳宮金闕中丹田也」。

(3) 注眞 『眞誥』卷六葉一一表「若攝氣營神、苦辛注眞、將得道久、道成則同與天地共寄寓在寂寂中矣」。

(4) 閨山 『眞誥』卷一葉一七表「同撥絳實於玉圃、併採丹華於閨園」。同卷五葉一五表「君曰、閨野者、閨風之府是也」。

(5) 空空 『論語』子罕「有鄙夫、問於我、空空如也」。

(6) 應物 『莊子』知北遊「其用心不勞、其應物無方、天不得不高、地不得不廣」。

(7) 招眞 『上清金眞玉光八景飛經』「微祝曰、…監總帝靈、招眞制魔、我道威明、上致太和」。

穆奉被音告、頻煩備至、仰銜恩潤、光華彌煥、披覽欣慶、感荷罔極、穆沈滯流俗、豈忘拔迹、輒已誓之中心、思爲階漸、考室東山、栖景林壑、此志必也、此舉決也、方當憑庇靈宗、諮稟神規、若此之心、揆亦鑒之、

眞一之雌、其道玄遠、妙出祕領、穆愆穢未蕩、俗累未拔、胸心滓濁、精誠膚淺、未敢預聞、南眞哀矜、去春使經師授以方諸洞房步綱之道、八素九眞以漸修行、不敢〔恪〕〔謂應作怠字〕懈、

九眞至須幽靜、人事雜錯、患在未專耳、昔人學道、尋師索友、彌積年載、經歷山嶽、無所不至、契闊險試、備嘗勞苦、然後授以要訣、穆德薄罪厚、端坐愆室、橫爲衆眞所見採錄、鑒戒繼至、啓悟非一、古人有言、非知之難、其行之難、夫人垂恩所賜、自可徐徐、〔須〕〔此須字長史自儻〕移東山、然後親授、

道之來也、不計遲速、恩之隆也、何限早晚、命使願告、敢不上答、謹白。〔此長史答前右英論雌一事者、掾爲書之、既被儻更寫、故此本得存焉〕

<sup>そがし</sup>穆 神仙のお告げを頂戴すること頻繁にして周到、仰いでは恩愛の恵みをかみしめ、眞理の光はいよいよ輝き、お告げを披閱してはうれしくも喜ばしく、その感激は限りがありません。穆は世俗の中に沈溺しておりますもの、どうしてそこから足を抜くことを忘れてたり致しましょうか。軽々しくも心中に誓い、第一步を踏み出そうと、居室を東山に構え、林谷の中に隠棲しようと思ひます。この志はきつぱりとしております。この行動は決然としております。今こそ神々におすがりし、神々の御旨に従わねばなりません。このような心をお見そなわし下さると思ひます。

雌眞一の道術はとも奥深く、そのすばらしさは神祕の嶺にもまさるほです。穆は罪の穢れもまだなくならず、世俗のわずらいか

らもまだ抜け出られず、心の中は濁ったままで、ひたむきな心は浅薄、まだ雌眞一の道を聞き知るような段階ではありません。南眞（南嶽夫人）は不憫に思ひ召され、昨春、經師を遣わして方諸・洞房・步綱の道をお授け下さり、（それがしは）八素・九眞の教えを段階をおって修行し、〔悋〕へきと〔怠〕の字であろうけおこたりは致しませんでした。

九眞の道は、何よりも奥深く静かな場所を必要とするのですが、俗界の雑務に忙殺され、修行に専念できないことを憂えております。昔の人が仙道を學ぶには、師を尋ね友を求めて何年もの歳月を費やし、名山名嶽を遊歴して足跡を残さない所はなく、厳しい試験に苦しみ、辛酸をなめ盡くした後、やっと祕要の口訣を授けられました。しかるに穆は、徳は薄く罪は重く、罪に満ちた部屋に坐っているだけで、はしなくも多くの眞仙によつて取り上げられる結果となり、戒めが過ぎに届けられ、はっと氣付いたことは一度や二度ではありません。昔の人は言っています。知ることが難しいのではない、實行することが難しいのであると。南嶽夫人が恩愛を垂れて賜わる教えは、もとよりゆっくりしておりますが、東山に居を移した〔須〕へこの「須」の字は、許長史が自分でぬりつぶしているで、親しく授けられるのでありましょう。

仙道の訪れは、遅いか早いかは問題ではありません。恩愛の深さは、早いか遅いかにかわりはありません。願いを告げるよう命ぜ

られたものですから、どうしてお答えせずにおられましょうか。謹んで申し上げます。へこれは、前に右英王夫人が雌眞一のことを論じたのに對して許長史が答えたもの。許掾がそのために書寫した。塗りつぶされたので、もう一度書寫した。それでこのテキストは傳わることができたのである。

(1) 愆穢 『眞誥』卷三葉八表「豈似愆穢中、慘慘無聊生」。

(2) 經師 『大洞金華玉經』「不審其人無齋而傳付者、經師當死、受者失兩明焉」。

(3) 方諸洞房步綱之道 『眞誥』卷九葉二裏「有服日月芒法、雖已得道爲眞、猶故服之、…右此方諸眞人法、出大智慧經上中篇」。『洞眞太上素靈洞元大有妙經』（また『登眞隱訣』卷上）「洞房中有三眞、左爲无英公子、右有白元君、中爲黃老君、三人共治洞房中、此爲飛眞之道、自別有經、事在金華經中」。『眞誥』卷五葉三表「君曰、仙道有飛步七元天綱之經、在世」。

(4) 八素九眞之道 『眞誥』卷五葉二表「君曰、道有八素眞經、太上之隱書也、在世、君曰、道有九眞中經、老君之祕言也、在世」。

(5) 要訣 『抱朴子』極言「黃帝及老子、奉事太乙元君、以受要訣、況乎不逮彼二君者、安有自得仙度世者乎」。『眞誥』卷五葉

一〇表「叔期知是神人、因拜叩頭、就請要訣」。

（6）採錄 『真誥』卷一一葉一六表「謹操身詣大茅之端、乞特見採錄、使目接溫顏、耳聆玉音、此語爲求道之甚急也」。

（7）古人有言、非知之難、其行之難 『尚書』說命中「非知之艱、行之惟艱」。『抱朴子』極言「故曰、非長生難也、聞道難也、非聞道難也、行之難也、非行之難也、終之難也」。

（8）徐徐 『周易』困九四「來徐徐、困于金車、吝有終」。

真誥卷之三

運象篇第三

北元中玄道君李慶賓之女、太保玉郎李靈飛之小妹、受書爲東宮靈照夫人、治方丈臺第十三朱館中、夫人著紫錦衣、帶神虎符、握流金鈴、有兩侍女、侍女年可二十許、夫人年可十三四許。

聞呼一侍女名隱暉、侍女皆青綾衣、捧赤玉箱二枚、青帶束絡之、題白玉檢曰太上章、一檢曰太上文。〔此記織〕〔識〕檢上文、亦同前九華也。

夫人帶青玉色綬、如世人帶章囊狀、隱章當長五丈許、大三四尺許。

臨去、授作一紙詩、畢乃吟歌。

雲幄帶天構、七氣煥神馮、瓊扇啓晨鳴、九音絳樞中、紫霞與朱門、香煙生綠窗、四駕舞虎旂、青軒擲玄空、華蓋隨雲倒、落鳳控六龍、策景五嶽阿、三素昞君房、適聞腴穢氣、萬濁蕩我胸、臭物薰精神、羣塵互相衝、明〔王〕〔玉〕皆摧爛、何獨盛德躬、高揖苦不早、坐地自生蟲。

八月二十二日夜、靈照夫人授作此詩。〔此長史書作靈照夫人、而楊君書多其〕〔云〕照靈〕

臨去、吟曰、「心勿欲亂、神勿淫役、道易不順、災重不逆、永喪其眞、遂棄我適」。

復生許家不。

我方當復來、爾勤之而已。

右從北元來八條有長史寫。

- (1) 兪本が「織」を「識」に作るのに従う。  
 (2) 兪本が「王」を「玉」に作るのに従う。  
 (3) 兪本が「其」を「云」に作るのに従う。

眞話卷三

運象篇第三

北元中玄道君李慶賓の娘、太保玉郎李靈飛の末の妹が、辭令を授かつて東宮靈照夫人となり、方丈臺の第十三朱館を治所とした。夫人は紫の錦の上着を身に着け、神虎の符を帶び、流金の鈴を握り、二人の侍女を従えていた。侍女の年齢は二十歳くらい、夫人の年齢は十三、四歳くらいであった。

一人の侍女を呼ぶのが聞えたが、その名は隱暉といった。侍女はいずれも青い綾の上着を着、赤い玉の箱を二つ捧げ持ち、青い帶でそれを縛っていた。白玉の封印は「太上章」と題され、もう一つの封印は「太上文」という。へこれは封印の上に書かれた文字を記したのであり、やはり前の九華眞妃の場合と同じである。

夫人は青玉色の綬を帯びており、世の中の人が草囊を帯びている姿のようであった。隠されている(太上)章は、恐らく長さは五丈くらい、幅は三四尺くらいなのであろう。

立ち去るに臨んで、授けて一篇の詩を作り、作り終わると歌を吟詠された。

雲の城壁は天を取り巻いて構えられ、  
 七つの氣は神を輝かして盛ん。

瓊玉の扉は鳳の夜明けの鳴き聲にひらき、  
 九音は絳い樞の中。

紫の霞が朱の門に立ち昇り、  
 香わしい煙が緑の窓に生ずる。

四頭立ての馬車が虎の旗をなびかせ、  
 青い覆いの幌車が玄空に舞い上がる。

華蓋は雲とともに傾き、

下降する鳳が六頭の龍の御者をつとめる。  
 景を五嶽の山で鞭打ち、

三色の氣の雲で君の住まいを見に行けば、  
 ただ、生臭く穢れた臭いを嗅ぎ、

ありとあらゆる濁りが私の胸に注ぎ、

惡臭を放つ物が精神を焚きしめ、

囂々たる塵が互いにぶつかり合っているだけだった。

明玉もすべて碎け散るのだ、

どうしてあなただけがそうでないことがあるう。

俗界を離れることは早くないため、

居ながらにして蟲がわいてきますよ。

八月二十二日の夜、靈照夫人が誥授して、この詩を作られた。へここの許長史の書は、「靈照夫人」に作っているが、楊君の書ではしばしば「照靈」にしている。

立ち去るに臨んで、吟詠された。

心は欲望で掻き亂してはなりませんし、

精神はむやみと使役してはなりません。

仙道は思い通りにならなくなりがちで、

災厄は逆われないことが大切。

永遠にその眞性を喪失し、

その結果、私のおめがねから外れましょう。

もう一度許の家に生まれるのかどうか。

私はきつともう一度やって来るでしょう。あなたはただただ励み

なさい。

右、「北元」以下の八條は許長史の寫しがある。

(1) 北元中玄道君李慶賓之女 『雲笈七籤』卷九七方丈昭靈李夫人詩「方丈臺東宮昭靈李夫人者、即北元中玄道君李慶賓之女、

太保玉郎李靈飛之妹也。』眞靈位業圖」第二女眞位「方丈臺昭靈李夫人。『壩城集仙錄』卷二および『歷世眞仙體道通鑑』卷三に傳あり。

(2) 亦同前九華也 『眞誥』卷一葉一一裏。

(3) 晨鳴 『說苑』辨物「夫鳳、鴻前麟後、蛇頸魚尾、…晨鳴曰發明、晝鳴曰保長、飛鳴曰上翔、集鳴曰歸昌」。

(4) 九音 『眞誥』卷三葉一〇表「九音朗紫空、玉璫洞太無」。

(5) 紫霞 『眞誥』卷三葉一五裏「落鳳控紫霞、矯鸞登晨岸」。

(6) 香煙 『眞誥』卷六葉三表「靈姬抱衾、香煙溢窗」。

(7) 四駕舞虎旂 『眞誥』卷八葉六表「朱軒四駕、嘯命衆精」。

同卷四葉五表「龍旂啓靈電、虎旗徵朱兵」。

(8) 玄空 沈約「遊沈道士館」(『文選』卷二二)「所累非外物、爲念在玄空」、李善注「廣雅曰、玄、道也、然道體無形、故曰空」。

(9) 華蓋隨雲倒 『眞誥』卷三葉八表「左徊青羽旗、華蓋隨雲傾」。  
 (10) 落鳳控六龍 『眞誥』卷三葉一五裏「落鳳控紫霞、矯轡登晨岸」。「周易」乾象傳「時乘六龍、以御天」。

(11) 五嶽阿 『眞誥』卷三葉三裏「龍旂舞太虛、飛輪五嶽阿」。

(12) 三素 『眞誥』卷五葉一裏「君曰、太極有四眞人、老君處其左、佩神虎之符、帶流金之鈴、執紫毛之節、巾金精之巾、行則扶華晨蓋、乘三素之雲」。同卷九葉一一裏「使兩掌俱交會於項中三九過、存目中當有紫青絳三色氣出目前、此是內按三素雲、以灌合童子也」。

(13) 臊穢 『阮籍』答伏義書「勞玉躬以役物、守臊穢以自畢」。

(14) 蠶塵 『左傳』昭公三年「初景公欲更晏子之宅曰、子之宅近市、湫隘囂塵、不可以居」。

(15) 盛德 『眞誥』卷一八葉一二裏「願與盛德遊、驂駟騁因緣」。

(16) 高揖 謝靈運「述祖德詩」(『文選』卷一九)「高揖七州外、拂衣五湖裏」。

(17) 坐地 『周氏冥通記』卷二「徐仍指鄧曰、此君學道來已數百年、始今得任、子坐地獲之、故知功夫久有在」。

王子晉父周靈王有子三十八人、子晉太子也、是爲王子喬、靈王第三女名觀香(自)「字」衆愛、是宋姬子、於子喬爲別生妹、受子喬飛

解脫網之道、得去入「緜」(外書作維字)氏山中、後俱與子喬入陸渾、積三十九年、觀香道成、受書爲紫清宮內傳妃、領東宮中候眞夫人。(此卽中候王夫人也)

子喬弟兄七人得道(五男二女)、其眉壽是觀香之同生兄、亦得道。〈此似別有眉壽事、今不存、而據書中有夢見人云、「我是王眉壽之小妹」、疑此或當是相答也〉

右二條有楊書。

(1) 俞本が「自」を「字」に作るのに従う。

王子晉の父である周の靈王には、子供が三十八人いた。子晉は太子である。これが王子喬である。靈王の第三女は、名を觀香、字を衆愛という。宋姬の子であり、子喬にとっては、腹違いの妹である。子喬から飛解脫網の道を授かり、(俗界を)去って「緜」(世俗の書は「維」の字に作る)氏山の中に入ることができた。その後、子喬とともに陸渾山に入り、三十九年の歳月が経つと、觀香は仙道が成就し、辭令を授かつて紫清宮内傳妃・領東宮中候眞夫人となった。

〈これがつまり中候王夫人である〉

子喬の兄弟七人が得道した〈五男、二女〉。眉壽<sup>(5)</sup>は觀香の同腹の兄であり、やはり得道した。〈ここには別に眉壽の事があつたようだが、現存しない。しかし許掾の書の中には、夢に人が現れて、「私は王眉壽の末の妹です」と言つたという記述がある。ここの記事は多分きつとそれに應えあうものなのであらう〉

右の二條は楊羲の書がある。

(1) 飛解脱網之道 『眞誥』卷六葉四裏「若以道交接、解脱網羅」。

(2) 外書 『漢書』卷四四淮南王安傳「招致賓客方術之士數千人、作爲內書二十一篇、外書甚衆、又有中篇八卷」。『眞誥』卷一二葉四裏注「此諸人名位小、不顯外書」。

(3) 緱氏山 『眞誥』卷一六葉六裏「志願憑子晉於緱岑、侶陵陽於步玄」。

(4) 陸渾 『眞誥』卷一四葉一五裏「王魯連者、魏明帝城門校尉范陽王伯綱女也、亦學道、一旦忽委壻李子期、入陸渾山中」。

(5) 眉壽 『眞誥』卷一八葉一二裏に見える。

駕欵敖八虛、徊宴東華房、阿母延軒觀、朗嘯躡靈風、我爲有待來、故乃越滄浪。

右英王夫人歌。

乘飄遡九天、息駕三秀嶺、有待徘徊眇、無待故當淨、滄浪奚足勞、孰若越玄井。

右紫微夫人答英歌。

寫我金庭館、解駕三秀畿、夜芝披華<sup>(3)</sup>〔鋒〕〈謂應作峰字〉、咀嚼充長飢、高唱無道遙、〈冬〉〔各〕與有待歌、空同酬靈音、無待將如何。右桐柏山真人歌。

朝遊鬱絕山、夕偃高暉堂、振轡步靈〔鋒〕〈謂應作峰字〉、無近於滄浪、玄井三切際、我馬無津梁、儻欵九萬間、八維已相望、有待非至無、靈音有所喪。

右清靈真人歌。

龍旂舞太虛、飛輪五嶽阿、所在皆逍遙、有感興冥歌、無待愈有待、相遇故得和、滄浪奚足遼、玄井不爲多、鬱絕尋步間、俱會四海羅、豈若絕明外、三劫方一過。



右中候夫人歌。

(5) 縱酒觀羣惠、憐忽四落周、不覺所以然、實非有待遊、相遇皆歡樂、不遇亦不憂、縱影玄空中、兩會自然疇。

右昭靈李夫人歌。

(6) 駕欬發西華、無待有待間、或眇五嶽峯、或濯天河津、釋輪尋虛舟、所在皆纏綿、芥子忽萬頃、中有須彌山、小大固無殊、遠近同一緣、彼作有待來、我作無待親。

右九華安妃歌。

(7) 無待太无中、有待太有際、大小同一波、遠近齊一會、鳴絃玄霄顛、吟嘯運八氣、奚不酣靈液、眇目娛九裔、有無得玄運、二待亦相蓋。右太虛南嶽真人歌。

偃息東華靜、揚軒運八方、俯眇丘垤間、莫覺五嶽崇、靈阜齊淵泉、大小互相從、長短無多少、大椿須臾終、奚不委天順、縱神任空同。右方諸青童君歌。

(8) 控纛扇太虛、八景飛高淸、仰浮紫宸外、俯看絕落冥、玄心空同間、上下弗流停、無待兩際中、有待無所營、體無則能死、體有則攝生。

東賓會高唱、二待奚足爭。

命駕玉錦輪、僊轡仰徘徊、朝遊朱火宮、夕宴夜光池、浮景清霞杪、八龍正參差、我作無待遊、有待輒見隨、高會佳人寢、二待互是非、有無非有定、待待各自歸。

右南極紫元夫人歌。〈按此諸歌詩、竝似初降語、而嫌衆眞多高唱、上清重紫元太虛未嘗有雜降處、恐或遺失耳、有待之說竝是指右英事、非安妃也〉

(1) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英王夫人授楊真人許長史詩に見える。

(2) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。

(3) 僉本が「多」を「各」に作るのに従う。

(4) この詩、『無上祕要』卷二〇仙歌品および『雲笈七籤』卷九七中候王夫人詩に見える。

(5) この詩、『雲笈七籤』卷九七方丈臺昭靈李夫人詩に見える。

(6) この詩、『無上祕要』卷二〇仙歌品および『雲笈七籤』卷九七・九華安妃贈楊司命詩に見える。

(7) この詩、『無上祕要』卷二〇仙歌品に見える。

(8) この詩、『無上祕要』卷二〇仙歌品に見える。

つむじ風を驅つて八虚に遊び、<sup>(1)</sup>

車をめぐらして東華の住まいに安らぐ。<sup>(2)</sup>

西王母が高い樓觀に招いてくれ、

高らかに歌い靈なる風を蹈んだ。<sup>(3)</sup>

私は有待の立場でやつて来た、<sup>(4)</sup>

だからこそ治所の滄浪山を越えてやつて来たのです。

(右は) 右英王夫人の歌。

つむじ風に乗って九天を遡り、

馬車を三秀の峰(茅山)に休息させた。<sup>(5)</sup>

有待の者はうろろしてあちこち見るが、

無待の者はもとより清淨。

滄浪山などどうして苦勞なものですか、

玄井を越えるのに比べてみれば。

右は紫微夫人の右英夫人への返歌。

わが金庭の館を去って、

馬車を三秀の地にとどめる。

夜光芝は華〔鋒〕へきつと〔峰〕の字であろうに披き、<sup>(6)</sup>

それをかみしめて長い間の飢えを充たす。<sup>(7)</sup>

高らかに歌ってあちこちさまようことなく、

それぞれ有待の歌を唱う。

ぼっかり開いた空間で神々の言葉に應酬する、

無待の方々さあどうですか。

右は桐柏真人の歌。

朝に鬱絶山に遊び、

夕べに高暉山の堂に休む。<sup>(8)</sup>

手綱を振って靈なる〔鋒〕へきつと〔峰〕の字であろうを歩  
めば、<sup>(9)</sup>

滄浪山より近いものはない。

玄井はたったの三仞、

私の馬には渡し橋などいらぬ。<sup>(10)</sup>

忽ちのうちに九萬閭、<sup>(11)</sup>

八維はもう見渡した。<sup>(12)</sup>

有待は至無ではないのだから、<sup>(13)</sup>

神々の言葉を聞き漏らすことがある。

右は清靈真人の歌。

交龍の旗が太虚に舞い、  
車を五嶽の山に飛ばす。

あらゆるところをすべてさまよい、

感慨深く幽冥なる歌を唱う。

無待は有待にまさるが、

出會えばもとより和を得るのだ。

滄浪山などどうして遼遠なものか、

玄井もたいしたことではない。

鬱絶山も一尋一步の間、

ともに四海の羅網の中に集まる。

どうして比べられよう、絶明の外を、

三劫かけてやっと一巡りすることに。

右は中候夫人の歌。

ほしいままに酒を飲んですぐれた人たちを見ているうちに、  
忽ちにして四方のはてを巡る。

なぜそうなのかは分からないが、

本當に有待の遊ではない。

出會えば皆で歡樂するが、

出會わなくても憂えはしない。

影を玄空に解き放てば、

兩者は會す自然な連れあい。  
右は昭靈李夫人の歌。

つむじ風の馬車を驅つて西華の山を出發、

無待と有待の世界へと。

あるいは五嶽の峰を眺め、

あるいは天の河の岸邊で水浴び。

車を捨てて虚舟を尋ね、

どこにもかしこにも心はひかれる。

芥子粒は忽ち一萬頃の大きさにひろがり、

その中に須彌山が現れる。

小さなものと大きなものとはもともと違いはなく、

遠いものと近いものとはともに一連なりのもの。

あの人は有待の立場でやって來ますが、

私は無待としてのおつきあい。

右は九華安妃の歌。

絶對の無の中の無待、

絶對の有の境における有待。

大きなものと小さなものとはともに一つの波となり、

遠いものと近いものとはひとしく一つに會しよう。

玄妙な雲氣の巔で琴をかき鳴らし、  
吟じ嘯きつつ八氣を運らす。

なぜ靈妙な液體の酔い心地の中で、

目を遊ばせて九つのはての眺めを楽しまぬのか。

有と無とは玄妙に運るのだ、

(有待と無待の) 二待も互いに相手を包みこむのだ。

右は太虚南嶽眞人の歌。

東華宮の静けさの中で憩っていたわれは、

幌車を高く飛ばして八方を運る。

丘陵のあたりを見おろせば、

五嶽が高いとも思われぬ。

靈山も深い泉と等しなみ、

大きなものと小さなものとは互いに連なりあっている。

長い短といったってどれほどの違いもなく、

大椿とてたまゆらの生命。

なぜ自然の調和のままに、

心ものびやかにぼっかりと開けた空間に身をまかせぬのか。

右は方諸青童君の歌。

つむじ風の手綱をひかえて太虚に翻り、

八景の車は高く清んだ天に飛ぶ。

ふり仰げば紫晨の外にぼっかり浮かび、

下はさいはての小暗きさまを見おろす。

心はぼっかりと開けた空間に玄妙となり、

上へまた下へと停まることはない。

無待とて二者對立の立場、

有待とて思い悩むことはない。

無を體得すれば立派に死ねよう、

有を體得すれば生命が養われよう。

東の嶺のまろうどはともに會して高らかに歌唱する、

(有待と無待の) 二待は何もいさかう必要はないのです。

支度はできた、玉錦の車、

手綱を舞わしてふり仰ぎつつあちらこちらを徘徊する。

朝には朱火宮への旅、

夕には夜光池で安らぐ。

景の車を浮かべるのは清き霞の頂、

八頭立ての龍の車は次々に續く。

私は無待の旅を續け、

有待がいつも後からついて来る。

佳き人の御殿で盛大な宴會、

(有待と無待の) 二待が互いに是非を競いあう。<sup>(50)</sup>  
有と無とは一つのところに落ち着くわけではない、  
有待と無待それぞれに自分の立場。

右は南極紫元夫人の歌。<sup>(51)</sup> へ按ずるに、これらもろもろの歌詩は、  
いずれも最初に降臨した時の言葉のようであるが、眞人たちがお  
むね高らかに歌唱している點が疑わしい。上清童(方諸青童君)、  
紫元夫人、太虚眞人が一緒になって降臨したという箇所はない。恐  
らく遺漏があるのであらう。有待というのはいずれも右英夫人のこ  
とを指しているのであって、九華安妃のことではない。

- (1) 駕欵敖八虚 『眞誥』卷三葉四表「駕欵發西華、無待有待間」。  
『眞誥』卷六葉一四表「精散八虚、魂遊萬涂」。
- (2) 東華房 『眞誥』卷三葉五裏「宴酣東華」。『雲笈七籤』卷八  
釋三十九章經「第三十四章、東華方諸宮高晨師玉保仙王曰青童  
君、東華者、仙眞之州也、在始暉之間、高晨玉保王所治也、東  
華眞人呼曰爲紫曜明、或曰圓珠、青童君乘雕玉之軒、御圓珠之  
氣、登雲波之山、入東華之堂」。
- (3) 靈風 『眞誥』卷三葉七裏「丹雲浮高晨、逍遙任靈風」。
- (4) 有待 『莊子』齊物論「罔兩問景曰、曩子行、今子止、曩子

坐、今子起、何其无特操與、景曰、吾有待而然者邪、吾所待又  
有待而然者邪、吾待蛇蚺蜺翼邪、惡識所以然、惡識所以不然、  
注「言天機自爾、坐起無待、無待而獨得者、孰知其故、而責其  
所以哉」。『世說新語』文學注「向子期郭子玄逍遙義曰、夫大鵬之  
上九萬、尺鷃之起榆枋、小大雖差、各任其性、苟當其分、逍遙  
一也、然物之芸芸、同資有待、得其所待、然後逍遙耳、唯聖人  
與物冥而循大變、爲能無待而常通、豈獨自通而已、又從有待者  
不失其所待、不失則同於大道矣」。

- (5) 息駕 『列子』說符「孔子自衛反魯、息駕乎河梁而觀焉」。
- (6) 夜芝 『眞誥』卷一三葉八表「華陽洞亦有五種夜光芝」。
- (7) 長飢 『三國志』卷二七王昶傳「若夫山林之士、夷叔之倫、  
甘長飢於首陽、安赴火於縣山、雖可以激貪勵俗、然聖人不可爲、  
吾亦不願也」。
- (8) 高暉堂 『清靈眞人裴君傳』(『雲笈七籤』卷一〇五)「西玄  
者、葛衍山之別名、葛衍有三山相連、西爲西玄、東爲鬱絕根山、  
中央名葛衍山、西玄山下有洞臺、方圓千里、金城九重、有玉  
堂蘭室東西宮殿、中有四百二十眞人處焉、距崑崙七萬里、其  
間有高暉山、上有洞光如日」。
- (9) 振轡步靈峰 陸機「擬古詩十二首」擬青陵上栢(『文選』  
卷三〇)「方駕振飛轡、遠遊入長安」。『太元眞人東嶽上卿司命  
眞君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「遂隱通華山、盤桓靈峯、逍

遙幽岫、靜念神仙」。

- (10) 津梁 『國語』晉語二「豈謂君無有、亦爲君之東游津梁之上、無有難急也」、注「津、水也、梁、橋也」。

- (11) 儵歎 『真誥』卷三葉一二表「手攜紫皇袂、儵歎八風驅」、『無上祕要』卷四八靈寶齋宿啓儀品「汎此不死舟、儵歎濟大有」。

- (12) 八維 『楚辭』七諫怨思「引八維以自道兮」、注「天有八維、以爲綱紀也」。

- (13) 至無 裴頠『崇有論』(『晉書』卷三五)「夫至無者無以能生、故始生者自生也」。

- (14) 龍旂 『毛詩』周頌載見「載見辟王、曰求厥章、龍旂陽陽、和鈴央央、肇革有鷁、休有烈光」、『真誥』卷四葉五表「龍旂啓靈電、虎旗徵朱兵」。

- (15) 飛輪 『抱朴子』交際「莫不飛輪兼策、星言假寐」。

- (16) 所在 『後漢書』列傳五六陳蕃傳「今二郡之民、亦陛下赤子也、致令赤子爲害、豈非所在貪虐、使其然乎」。歐陽建「臨終詩」(『文選』卷二三)「苟懷四方志、所在可遊盤」。

- (17) 縱酒 枚乘「七發」(『文選』卷三四)「列坐縱酒、蕩樂娛心」。

- (18) 歡樂 『孟子』梁惠王上「文王以民力爲臺爲沼、而民歡樂之」。

- (19) 或眇五嶽峯 『太上飛行九晨玉經』「徒有玄名帝錄、超卓高騰、正可得策駕雲龍、遊眇五嶽、但不死而已」。

- (20) 天河 『毛詩』大雅雲漢「倬彼雲漢、昭回于天」、鄭箋「雲

漢謂天河也」。

- (21) 纏綿 『無上祕要』卷二〇仙歌品「徘徊二无際、內觀自纏綿、右出太上真人八素陽歌九章」。

- (22) 芥子忽萬頃、中有須彌山 『維摩經』不思議品「維摩詰言、唯舍利弗、諸佛菩薩有解脫名不可思議、若菩薩住是解脫者、以須彌之高廣內芥子中、無所增減、須彌山王本相如故、而四天王

- 忉利諸天、不覺不知己之所入、唯應度者乃見須彌入芥子中、是名住不思議解脫法門」。

- (23) 一緣 『大方等大集經』卷三八日藏分定品「若心不動、行住坐臥、同係一緣」。

- (24) 太无 『雲笈七籤』卷一總敘道德「葛仙公五千文經序曰、老君體自然而然、生乎太無之先」、『真誥』卷一三葉一一裏「無者大有之宅、小有所以生焉、積小有以養小無、見大有以本大無」。

- (25) 鳴絃 庾信「榮啓期三樂讚」(『藝文類聚』卷三六)「雅琴雖古、獨有鳴絃」。

- (26) 吟嘯運八氣 『世說新語』雅量「太傅神情方王、吟嘯不言、舟人以公貌閑意說、猶去不止」、『河圖括地象』(『太平御覽』卷三六)「天有五气、地有五嶽、…天有八氣、地有八風」。

- (27) 靈液 郭璞「遊仙詩」(『文選』卷二二)「圓丘有奇草、鍾山出靈液」、李善注「靈液謂玉膏之屬也」。

- (28) 眇目 『真誥』卷三葉六裏「八臺可眇目、北看乃飛元」。

- (29) 太虛南嶽真人 『真靈位業圖』第二左位「左聖南極南嶽真人左仙公太虛真人赤松子」、注「黃老君弟子、裴君師」、『真誥』卷五葉五表「(裴)君曰、我之所師南嶽松子、松子爲太虛真人左仙公、谷希子爲右仙公」。
- (30) 八方 司馬相如「難蜀父老」(『文選』卷四四)「是以六合之內、八方之外、浸淫衍溢、懷生之物、有不浸潤於澤者、賢君恥之」。
- (31) 俯昞丘垤間 『真誥』卷三葉八表「仰超綠闕內、俯昞朱火城」。
- 『孟子』公孫丑上「麒麟之於走獸、鳳凰之於飛鳥、泰山之於丘垤、河海之於行潦、類也」。
- (32) 靈阜齊淵泉 『莊子』田子方「其神經乎大山而無介、入乎淵泉而不濡、處卑細而不憊、充滿天地、既以與人、己愈有」。同天下「天與地卑、山與澤平」。
- (33) 少多 『宋書』卷六〇范泰傳「夫貨存貿易、不在少多」。
- (34) 大椿 『莊子』逍遙遊「上古有大椿者、以八千歲爲春、八千歲爲秋」、『真誥』卷一葉一〇表「上論九玄之逸度、下紀萬椿之大生」。
- (35) 委天順 『莊子』知北遊「生非汝有、是天地之委和也、性命非汝有、是天地之委順也」。
- (36) 縱神 『續高僧傳』法融傳「融縱神挹酌、情有所緣」。
- (37) 八景飛高淸 『真誥』卷五葉四裏「君曰、仙道有八景之興、以遊行上淸」、『雲笈七籤』卷四一沐浴吉日「洞玄二十四生圖經云、冠帶濯玉津、鍊度五仙形、體香萬神降、乘景登高淸」。
- (38) 紫晨 『雲笈七籤』卷一〇「太上道君紀」洞玄本行經云、我濯紫晨之流芳、蓋皇上之青胤、我隨劫死生、世世不絕」。
- (39) 絕落冥 『真誥』卷三葉六裏「領略三奇觀、浮景翔絕冥」。
- (40) 兩際 『真誥』卷七葉二表「真人歸心於一正、道炁標任於永信、心歸則正神和、信順則利貞兆、此自然之感對、初無假於兩際也」。
- (41) 體無 『世說新語』文學「弼曰、聖人體無、無又不可以訓、故言必及有、老莊未免於有、恆訓其所不足」。
- (42) 體有則攝生 韓康伯「辯謙」(『晉書』卷七五)「體有而擬無者、聖人之德、有累而存理者、君子之情」、『老子』第五十章「蓋聞善攝生者、陸行不遇兕虎、入軍不被甲兵、兕無所投其角、虎無所措其爪、兵無所容其刃、夫何故、以其無死地」。
- (43) 東賓 『雲笈七籤』卷九七南極王夫人授楊羲詩引注「東賓、東嶽上卿大茅君也」。
- (44) 命駕玉錦輪 陸機「君子有所思行」(『文選』卷二八)「命駕登北山、延佇望城郭」、『儀禮』聘禮「皆奉玉錦束請覲」、注「玉錦、錦之文織繡者也」。
- (45) 朝遊朱火宮 『真誥』卷三葉三表「朝遊鬱絕山、夕偃高暉堂。同卷一六葉一裏「其中宿運先世有陰德惠救者、乃時有徑補仙官、或入南宮受化、不拘職位也、在世之罪福多少、乃爲稱量處分耳、

大都行陰德、多恤窮厄、例皆速詣南宮爲仙」、注「在世行陰功密德、好道信仙者、既有淺深輕重、故其受報亦不得皆同、有既身地仙不死者、有託形尸解去者、有既終得入洞宮受學者、有先詣朱火宮煉形者」。

(46) 夕宴 『真誥』卷四葉四表「夕宴鬱絕宇、朝採圓景華」。

(47) 浮景 『真誥』卷三葉六裏「領略三奇觀、浮景翔絕冥」。

(48) 八龍 沈約「齊武帝謚議」(『藝文類聚』卷一四)「方當垂七曜之旗、駕八龍之乘」。

(49) 佳人寢 『真誥』卷四葉六表「解轡佳人寢、同恁自相招」。

(50) 是非 『莊子』盜跖「搖脣鼓舌、擅生是非、以迷天下之主」。

(51) 南極紫元夫人 『真靈位業圖』第二女眞位「後聖上保南極元君紫元夫人」、『清虛真人王君內傳』(『雲笈七籤』卷一〇六)「詣南極紫元夫人、一號南極元君、授以九道迴玄太丹綠書」。

騰躍雲景輶、浮觀霞上空、霄軒縱橫儗、紫蓋託靈方、朱煙纏旌旄、羽帔扇香風、電嘯猛獸攫、雷吟奮玄龍、鈞籟昆庭響、金笙唱神鍾、採芝滄浪阿、掇華八淳峯、朱顏日愈新、劫往方嬰童、養形靜東岑、七神自相通、風塵有憂哀、隕我白鬢翁、長冥遺遐歎、恨不早逸縱。  
九月三日夕、雲林王夫人喻作、令示許長史。

停駕望舒移、迴輪反滄浪、未覩若人遊、偶想安得康、良因俟青春、以敘中懷忘。

右右英吟此再三。

龜闕鬱巍巍、墉臺絡月珠、列坐九靈房、叩璫吟太无、玉簫和我神、金醴釋我憂。

宴酣東華內、陳鈞千百聲、青君呼我起、折腰希林庭、羽帔扇翠暉、玉珮何鏗零、俱指高晨寢、相期象中冥。

右紫微歌此二篇。

超舉步絳霄、飛飄北壘庭、神華映仙臺、圓曜隨風傾、啓暉抱丹元、屏景淩月精、交袂雲林宇、〔浩〕〔軫〕〔謂應作皓髮〕還童嬰、蕭蕭寄无宅、是非豈能營、陣上自擾競、安可語養生。

右玄龍紫微作。

控晨浮紫煙、八景觀派流、羽童捧瓊漿、玉華餞琳腴、相期白水涯、揚我萎蕤珠。

滄房煥東霞、紫造浮絳辰、雙德秉道宗、作鎮眞伯菴、八臺可眇目、



北看乃飛元、清淨雲中視、眇眇躡景遷、吐納洞領秀、藏暉隱東山、久安人事上、日也無虛閑、豈若易翁質、反此孩中顏。

九月六日夕、雲林喻作、與許侯。

解輪太霞上、歛轡造紫丘、手把八空炁、縱身雲中浮、一眇造化剛、再視索高疇、道要既已足、可以解千憂、求眞得眞友、不去復何求。

九月六日夕、紫微夫人喻作、示許長史、并與同學。〈同學謂都回也〉

晨闕太霞構、玉室起霄清、領略三奇觀、浮景翔絕冥、丹空中有眞、金映育挺精、八風鼓錦被、碧樹曜四靈、華蓋蔭蘭暉、紫轡策綠駟、結信通神交、觸類率天誠、何事外象感、須覩瑤玉瓊。

九月九日、雲林右英夫人喻作。

紫空朗明景、玄宮帶絳河、濟濟上清房、雲臺煥嵯峩、八輿造朱池、羽蓋傾霄柯、震風迴三辰、金鈴散玉華、七轡絡九垓、晏昞不必家、借問求道子、何事坐塵波、豈能栖東秀、養眞收太和。

九月九日、紫微夫人喻作、因許示都。〈都猶是方回也〉

二景秀鬱玄、霄映朗八方、丹雲浮高晨、逍遙任靈風、鼓翮乘素飄、疎昞瓊臺中、綠蓋入協晨、青輶擲空同、右揖東林帝、上朝太虛皇、玉賓剖鳳腦、嗽酣飛藥漿、雲鈞迴曲寢、千音何琅琅、錦旌召猛獸、華幡正低昂、香母折腰唱、紫煙排棟梁、總轡高清闕、解駕佳人房、昔運挺未兆、靈化順氣翔、心眇玄涯感、年隨積椿崇、形甘垢臭味、動靜失滄浪、我友實不爾、榮辱昨已忘。

九月十八日夜、雲林右英夫人作、喻曰、「吾辭訖此」。

絳景浮玄晨、紫軒乘煙征、仰超綠闕內、俯昞朱火城、東霞啓廣暉、神光煥七靈、翳映汜三燭、流任自齊冥、風纏空洞宇、香音觸節生、手攜「熾」〈謂應作織字〉女儻、併衿匏瓜庭、左徊青羽旗、華蓋隨雲傾、晏寢九度表、是非不我營、抱眞栖太寂、金恣「姿」愈日嬰、豈似窳穢中、慘慘無聊生。

九月二十五日夜、雲林右英夫人授作。

三轡抗紫軒、傾雲東林阿。

右英吟此道。

右從騰躍來凡十三篇並有楊書、又雜有掾寫。

- (1) この詩、『太清金液神丹經』卷下に見える。
- (2) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。
- (3) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。
- (4) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。
- (5) 以下四句、『上清道類事相』卷四宅宇靈廟品に見える。
- (6) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。
- (7) 『雲笈七籤』が「剛」を「綱」に作るのに従う。
- (8) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。
- (9) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊真人許長史詩に見える。
- (10) 俞本が「恣」を「姿」に作るのに従う。

雲と光の輦を高く躍らせ、

霞こもる天空の上をふわりふわり眺める。

雲氣の幌車は自由自在に舞い、

紫の車蓋は神靈の世界へと向かう。

朱の煙はのぼり旗の飾りにまとい、

羽毛のマントは香風にひるがえる。

電光は吼えたとて猛獸はつかみかかり、

雷鳴はうなりをあげて玄龍を奮い立たせる。

リズムミカルな笛の音は昆庭のドラムと共鳴し、  
黄金の笙の音は神祕の鐘と唱和する。

芝を採るのは滄浪山の山かげ、

花を摘むのは八渟の峰。

朱に輝く顔は日ごとにますます新鮮、

一劫の時間が過ぎればいまし童子。

肉體を養って東の峰に静かに憩えば、

七神は互いに通いあう。

浮世に身を置けばそこにあるのは憂いと悲しみ、

白い鬢づらのじじいになってしまう。

常闇の世に残るのは長い長いため息、

もっと早くに自由を目ざさなかったことが悔まれる。

九月三日の夕、雲林王夫人が諭して作り、許長史に示させられた。

馬車を停めているうちに月の御者は移動しました、

車を返して滄浪山へともどりましょう。

そのお人がやって来られるのを目にしないので、

あなたに對する思いは安らぐわけにはゆきません。

良縁には青春の季節が必要なのです、

そのうえで何もかも忘れた心の中をうち明けあいましょう。

右、右英夫人はこの歌を二度、三度繰り返し吟詠された。

龜山の城闕はこんもりと高くそびえ、  
 壙城の臺にからみつくのは月の眞珠。

九靈の小部屋に席をならべ、

雲璈の樂器をたたきつつ吟詠するのは太无の歌。

玉の簫の音は私の心をなごませ、

黄金のリキュールは私の憂いを洗い流す。

東華宮の中で宴はたけなわ、

千、百のリズムが次々に演奏される。

青童君は私にさあ起ちあがれと呼びかけられ、

腰を折って舞うは希林の庭。

羽毛のマントは翠の光にひるがえり、

玉の佩びものはいかにもからからと音をたてる。

二人して目ざすは高晨の御殿、

形象の中での神祕的冥合を互いに期待しつつ。

右、紫微夫人はこの二篇の詩を歌われた。

遙かに遙かに上昇して絳き雲氣の中を歩み、  
 つむじ風の車を北壘の宮廷に飛ばす。

神祕の花は仙人の臺に照りはえ、  
 圓い太陽は風とともに傾く。

朝日を開いて丹元を手にする、  
 光をかきわけて月の精を食らう。

袂を交えるのは雲林の屋敷、

「浩」い「軫」へきつと「皓」であらうは童子の姿にもどる。

さびさびと無の館に身を寄せれば、

是非によって心を悩まされることはない。

俗世はとかく騒々しく、

とても養生について語りあうことはできません。

右、玄壘の紫微夫人の作。

星辰の手綱をひかえて紫の煙に浮かび、

八景の車から川の流れを眺める。

羽人の童子は瓊玉のジュースを捧げ、

玉華の乙女は琳玉の肉のお給仕。

ともに目ざすは白水の水際、

私の菱蕤の眞珠を高くかかげつつ。

滄浪山の小部屋は東方の霞に輝き、

紫の舟は絳き星に浮かぶ。

二人そろって道の本源をつかみ、  
鎮めとなるは眞人の世界の諸侯。

八つの臺が眺められ、

北を見やればそれぞ飛元の都。

清淨なるかな雲中の眺め、

遙けくも景を蹈みつつ移りゆく。

呼吸を調えて秀でし嶺に至り、

光を隠して東山に隠棲しよう。

俗世にながらく身を置いていたのでは、

日ごとのんびりすることはない。

そんなことより、じいさんの肉體を取り換え、

子供の顔を取りもどすにこしたことはありません。

九月六日の夕、雲林（右英）夫人が諭して作り、許侯（許謚）に  
與えられた。

太霞の上で車を停め、

手綱をひきしめて紫の丘に行く。

その手に八空の氣をつかみ、

身體を投げ出して雲間に浮かぶ。

造化の太綱をちらりと見やり、

さらに目を凝らしてすばらしいパートナーを探す。

道の根本が十分備わっていれば、

千々の憂を解くことができる。

眞を求めてこそ眞人の友が得られるのに、

出かけようともせずといった何を求めているのですか。

九月六日の夕、紫微夫人が諭して作り、許長史に示された。あわ

せて、ともに仙道を學ぶ者にも與えられた。へとも仙道を學ぶ者

とは都回のことをいうのである。

星々の城闕が太霞に構えられ、

珠玉の住まいは青空に建つ。

三つのすばらしい眺めを心におさめ、

景の車を浮かべてはてしない闇の中を翔ける。

丹い空はその中に眞を備え、

金色に輝く天はとびぬけた精靈を育む。

八方からの風が錦のマントを打ち、

碧玉の樹木が四方の靈獸を照らす。

華やかな車蓋に蘭の輝く光がこもり、

緑色の幌車に紫の手綱をあてる。

まごころを結んで神仙と交感し、

ものすべて天の誠實さに従うのです。

どうして外物に心を動かされるのですか、

美しいさまさまの玉を見つめなければなりません。

九月九日、雲林右英夫人が諭して作られた。

紫空は明るい光に輝き、<sup>(74)</sup>

神仙のおわす宮殿を絳い河がとりまく。<sup>(75)</sup>

神仙がたぐさんおわす上清境の小部屋、<sup>(76)</sup>

雲の臺がまばゆく聳える。<sup>(77)</sup>

八頭立ての輦輿で朱池に出かけ、<sup>(78)</sup>

羽毛の車蓋は雲氣の枝先に傾く。<sup>(79)</sup>

疾風が太陽や月や星々の間を巡れば、<sup>(80)</sup>

流金の鈴の首が玉華の御殿にこぼれ落ちる。<sup>(81)</sup>

七本の手綱を世界のはてにからみつけ、<sup>(82)</sup>

ゆつたりと見渡せば家など要らなくなる。

さても道を求める者よ、<sup>(83)</sup>

なぜ俗界に居すわろうとするのですか。

東方の秀でた峯に住まって、

眞を養い大いなる調和を獲得することができないのですか。<sup>(84)</sup>

九月九日、紫微夫人が諭して作られ、許長史を介して都に示され

た。〈都とやはり方回のことである〉

二つの景（日月）はこんもりとした小暗き世界に秀で、

その雲氣の輝きは八方に映える。<sup>(85)</sup>

丹い雲は空高く浮かび、<sup>(86)</sup>

ゆらゆらと不思議な風のままに流れる。<sup>(87)</sup>

翼を羽ばたかせて白いつむじ風に乗り、<sup>(88)</sup>

つまさきだつて瓊玉の臺の中を眺める。<sup>(89)</sup>

緑色の車蓋は協晨宮に入り、<sup>(90)</sup>

青い幌車をぽっかりと開けた空間に捨てる。

右のかた東林の帝に會釋をし、<sup>(91)</sup>

上座の太虚の皇に御目見えする。<sup>(92)</sup>

やんごとなき客人達は鳳凰の腦みそにナイフを入れ、<sup>(93)</sup>

がやがやと宴はたけて玉の花しべのジュースの杯が飛びかう。<sup>(94)</sup>

雲のように湧きおこるリズムはうねうねと續く屋敷をかけ巡り、<sup>(95)</sup>

そのさまさまな音色のなんと琅々たることか。<sup>(96)</sup>

錦の旗を振って猛獸を呼びよせ、<sup>(97)</sup>

艶やかな幟はまさに低くまた高くひるがえる。

香母は腰をかがめて唱い、<sup>(98)</sup>

紫のもやの中から御殿の棟木が現れ出る。<sup>(99)</sup>

手綱をとつて高清の城闕に向かい、

馬車を停めるのは佳き人の小部屋。<sup>(100)</sup>

その昔の運數は形もきざぬ先からずばぬけてすぐれ、<sup>(101)</sup>

不思議にも變化して氣に乗って翔びあがった。<sup>(98)</sup>

心は微妙にもほの暗い世界のはてまで感應しあい、

大椿が盛衰を繰り返すほど歳月を積み重ねた。

肉體が垢にまみれた俗臭<sup>(99)</sup>にひたるならば、

何事につけ滄浪山への道を見失ってしまうでしょう。

わが友は本當にそんなことはありませんまい、

榮譽や恥辱<sup>(100)</sup>はとうの昔に忘れているはずです。

九月十八日の夜、雲林右英夫人の作。「私の言葉はここまです」と諭された。

絳<sup>(101)</sup>い景が小暗い雲氣に浮かぶ中、

紫色<sup>(102)</sup>の車<sup>(103)</sup>がもやに乗って旅立つ。

綠色の城闕へと遙かに上昇し、

朱火城を眼下に見おろす。

東方の霞から廣々とした光がぱっとさしそめると、

神々しい輝きが七靈<sup>(104)</sup>の臺<sup>(105)</sup>を照らし出す。

その影もまばゆく、太陽や月や星が空一面にひろがり、

流れに身を委ねれば自然に奥深い世界と一體化する。

風が空洞<sup>(106)</sup>の宇宙を巡ると、

匂わんばかりの音楽がそのリズムにつれて生ずる。<sup>(107)</sup>

手に「熾」へきと「織」の字であろう女<sup>(108)</sup>を攜えて舞い、

匏瓜<sup>(109)</sup>の庭で衿と衿とを寄りそわす。

青い羽飾りの旗を左の方に運らせば、

華やかな車蓋が雲につれて傾く。

九重の天上でゆったりとくつろげば、<sup>(110)</sup>

是非のはからいも私を煩わせはしない。

眞を身に保ち大いなる寂漠<sup>(111)</sup>のうちに住まえば、

輝く御姿<sup>(112)</sup>はますます日ごとに若々しい。

罪や穢れの世の中で、

みじめに無聊に生きるのとは似ても似つかない。<sup>(113)</sup>

九月二十五日の夜、雲林右英夫人が誥授し作られた。

三本の手綱をとって紫の車を上昇させ、

雲を東林<sup>(114)</sup>の山かげに傾けましよう。

右英夫人がこの詩を吟じて言われた。

右、「騰躍—雲と光の轅を高く躍らせ—」以下のあわせて十三篇はすべて楊羲の書があり、また許掾の寫しもまじっている。

(1) 雲景 『漢書』禮樂志二「安世房中歌、…芬樹羽林、雲景杳冥」、師古注「言所樹羽葆、其盛若林、芬然衆多、仰視高遠、

如雲日之杳冥也。

- (2) 紫蓋 鮑照「河清頌」(『藝文類聚』卷八)「黃旗西映、紫蓋東暉」。

- (3) 朱煙纏旌旄 『真誥』卷四葉五表「晨風鼓丹霞、朱煙灑金庭」。張正見「從軍詩」(『藝文類聚』卷五九)「欲知客心斷、旄旌萬里懸」。

- (4) 羽帔扇香風 『周氏冥通記』卷三「乙未年七月二日夜、七人來、一人姓王、衣服似周、服紫羽帔、佩流金鈴」。梁昭明太子「採蓮曲」(『玉臺新詠』卷九)「蓮疎藕折香風起、香風起、白日低、採蓮曲、使君迷」。

- (5) 玄龍 『河圖』(『藝文類聚』卷九六)「黃金千歲生黃龍、青金千歲生青龍、赤白龍、玄金千歲生玄龍」。

- (6) 鈞籟昆庭響 『漢武帝內傳』「酒觴數過、王母乃命侍女王子登彈八琅之璫、又命侍女董雙成吹雲璈之笙、又命侍女石公子擊昆庭之鐘、又命侍女許飛瓊鼓震靈之簧、…侍女段安香作九天之鈞」。

- (7) 採芝 『抱朴子』勤求「凝霜雪於神爐、採靈芝於嵩嶽」。

- (8) 八溟峯 『真誥』卷一四葉一九裏「八溟山高五千里、周帀七千里、與滄浪方山相連比、其下有碧水之海、山上有乘林真人鬱池玄宮、東王公所鎮處也、此山是琳瑯衆玉青華絳實飛聞之金所生出矣、在滄浪山之東北、蓬萊山之東南」。

- (9) 朱顏日愈新 王康珞「反招隱」(『文選』卷二二)「凝霜凋朱顏、寒泉傷玉趾」、李善注「楚辭曰、…容則秀稚朱顏」。『周易』大畜象傳「大畜、剛健篤實、輝光日新其德」。

- (10) 劫往方嬰童 『真誥』卷四葉六表「椿期會足衰、劫往豈足遼」。『真誥』卷四葉三裏「俱挹玉醴津、儵歎已嬰童」。

- (11) 養形靜東岑 『莊子』達生「世之人以爲養形足以存生、而養形果不足以存生、則世奚足爲哉」。『真誥』卷四葉九表「東岑可長淨、何爲物所纏」。

- (12) 七神 『真誥』卷八葉一三表「太上有玄機之道、煥落七神枕中之要」。

- (13) 風塵有憂哀 『世說新語』賞譽「王戎云、太尉神姿高徹、如瑤林瓊樹、自然是風塵外物」。『真誥』卷七葉一裏「復使愆痾填籍、憂哀塞抱」。

- (14) 白鬢 吳質「答魏太子牋」(『文選』卷四〇)「今質已四十二矣、白髮生鬢、所慮日深」。

- (15) 長冥 『琴操』(『藝文類聚』卷九四)「甯戚飯牛車下、叩角而商歌曰、南山矸、白石爛、生不逢堯與舜禪、短布單衣裁至胷、長夜冥冥何時旦」。

- (16) 逸縱 嵇康「與山巨源絕交書」(『文選』卷四三)「又縱逸來久、情意傲散、簡與禮相背、嬾與慢相成」。

- (17) 停駕望舒移 潘岳「哀永逝文」(『文選』卷五七)「停駕兮淹」

留、徘徊兮故處。『楚辭』離騷「前望舒使先驅兮、後飛廉使奔屬」、王逸注「望舒、月御也」。

- (18) 迴輪 張協「七命」(『文選』卷三五)「臨重岫而攬轡、顧石室而迴輪」。

- (19) 若人 『論語』公冶長「子謂子賤、君子哉若人」。

- (20) 良因侯青春 王融「淨住子斷絕疑惑門頌」(令名且云重、豈若樹良因)。「楚辭」大招「青春愛謝、白日昭只」、王逸注「青、東方春位、其色青也」。

- (21) 中懷 陶淵明「遊斜川」(念之動中懷、及辰爲茲游)。

- (22) 壙臺絡月珠 『無上祕要』卷二二·三界官府品「壙城金臺、右在崑崙山、西王母治於其所、壙臺壙宮西瑤上臺、右在崑崙山上、西王母所居、右出洞真經及道迹真迹經」。『真誥』卷三葉一二表「冠軒煥崔嵬、珮玲帶月珠」。

- (23) 列坐九靈房 王羲之「蘭亭序」(晉書)卷八〇「又有清流激湍、映帶左右、引以爲流觴曲水、列坐其次」。『雲笈七籤』卷八釋三十九章經「第三十九章、西元龜山九靈眞仙母青金丹皇君曰、崑崙山有九靈之館、又有金丹流雲之宮、上接璇璣之輪、下在太宮之中、乃王母之所治也、西元龜山在崑崙之西、太帝玉妃之所在」。

- (24) 叩璫 『真誥』卷三葉一五裏「彈璫南雲扇、香風鼓錦披」。

- (25) 玉簫 段龜龍「涼州記」(『藝文類聚』卷四四)「呂纂咸寧三

年、胡人發張駿冢、得玉簫」。

- (26) 金醴 『神仙傳』老子「是以所出度世之法、九丹八石金醴金液」。

- (27) 宴酣 應璩「與滿公琰書」(『文選』卷四二)「徒恨宴樂始酣、白日傾夕、驪駒就駕、意不宜展」。

- (28) 陳鈞 顏眞卿「魏夫人仙壇碑銘」(各命侍女、陳曲成之鈞、九雲合節、八音零粲、於是西王母擊節而歌、歌畢、馮雙禮珠彈雲璈而答歌)。

- (29) 青君 『真誥』卷九葉二一表「大方諸宮、青君常治處也」。

- (30) 折腰 『真誥』卷三葉七裏「香母折腰唱、紫煙排棟梁」。

- (31) 鏗零 『真誥』卷六葉三表「天籟駭虛、晨鍾零鏗」。

- (32) 高晨 『真誥』卷三葉七裏「丹雲浮高晨、逍遙任靈風」。

- (33) 超舉步絳霄 『真誥』卷一九葉一一表「以爲仙道必須丹藥鍊形、乃可超舉」。梁武帝「直石頭」(翠壁絳霄際、丹樓青霞上)。

- (34) 北壘 『無上祕要』卷一五衆聖本迹品「五靈玄老君、道言、北方洞陰朔單鬱絕五靈玄老君者、本姓浩、字敷明、敷明屍落貝渭邪源初默天鬱單之國北壘玄丘、至開明元年、於北壘玄丘、改姓節、諱靈會、元始錫會洞陰朔單鬱絕五靈玄老帝君號」。

- (35) 神華映仙臺 『雲笈七籤』卷六五太清金液神丹陰君歌「以葦火炊其下及左右、四日四夜、小猛之、神華霜雪上著。庚信「周趙國夫人紇豆陵氏墓誌銘」「況復仙臺永別、無復簫聲、傳母長



歸、惟留琴曲」。

(36) 圓曜 『真誥』卷四葉七裏「圓曜映南軒、朱鳳扇幽室」。

(37) 啓暉挹丹元 陶弘景「太平山日門館碑」「日門館者、東霞啓暉、開巖引燭、以爲名也。」「清靈真人裴君傳」《雲笈七籤》卷一〇五「次南向瞑目、陰呪曰、赤庭絳雲、上有高真、三氣歸心、是我丹元、太微綠字、書名神仙」。

(38) 月精 『漢書』卷一〇〇下敘傳下「元后娠母、月精見表」。『淮南子』覽冥訓「譬若羿請不死之藥於西王母、恆娥竊以奔月」、注「恆娥、羿妻、羿請不死之藥於西王母、未及服之、恆娥盜食之得仙、奔入月中爲月精也」。

(39) 雲林宇 『無上祕要』卷二二·三界官府品「雲林宮、右在東海滄浪山、右英王夫人所居」。

(40) 是非豈能營 『真誥』卷三葉八表「晏寢九度表、是非不我營」。

(41) 擾競 『真誥』卷六葉四裏「又頃者末學互相擾競、多用混成及黃書赤界之法」。

(42) 養生 嵇康「養生論」《文選》卷五三「縱聞養生之事、則斷以所見、謂之不然」。

(43) 控晨浮紫煙 『真誥』卷三葉一五表「控晨揖太素、乘歛翔玉階」。郭璞「遊仙詩」七首之三《文選》卷二二「赤松臨上遊、駕鴻乘紫煙」、李善注「古白鴻頌曰、茲亦耿介、矯翮紫煙」。

(44) 羽童捧瓊漿 『雲笈七籤』卷四二存大洞真經三十九真法「乃

又召益元之羽童、列于綠室之軒。」「楚辭」招魂「華酌既陳、有瓊漿些」。

(45) 玉華饒琳腴 『雲笈七籤』卷五一流金火鈴「飛龍毒獸翼其側、紫雲玄暉蓋其巔、玉華之女、金真之童、各三百人、典衛靈文、散香虛庭。」「真誥」卷三葉一五表「鳳精董華顏、琳腴充長肌」。

(46) 白水 『楚辭』離騷「朝吾將濟於白水兮、登閭風而縹馬」、王逸注「淮南子言、白水出崑崙之山、飲之不死」。

(47) 萎蕤 『無上祕要』卷七八地仙藥品「太上道君曰、其下藥有松柏陰脂、…萎蕤黃連、…靈飛水桂、右其類繁多、略舉一端、服之爲能小益、不能永申、高可七百年、下可三四百歲、恐不便長享无期、上昇清天也、亦能身生光澤、還白童顏、役使千神、得爲地仙、陸行五嶽、遊浪名山、故曰不辟、其必使也、…右出洞真太上智慧經」。

(48) 東霞 『真誥』卷三葉八表「東霞啓廣暉、神光煥七靈」。

(49) 紫造浮絳辰 『雲笈七籤』卷九六高仙盼遊洞靈之曲「玉室煥東霞、紫輦浮絳晨」。

(50) 作鎮眞伯蕃 潘岳「爲賈謐作贈陸機」《文選》卷二四「藩岳作鎮、輔我京室。」「晉書」卷六七郗恢傳「恢身長八尺、美鬚髯、孝武帝深器之、以爲有藩伯之望」。

(51) 飛元 『無上祕要』卷一五衆聖本迹品中青靈始老君「道言、東方安寶華林青靈始老君、…七百年中、火劫數極、青氣運行、

隨元始滅度、以開光元年、於彌梵羅臺青絕寥丘飛元雲根之都、滄霞九雲之墟、元始又錫安寶華林青靈始老帝君號。

- (52) 躡景 嵇康「贈秀才入軍」(『文選』卷二四)「風馳電逝、躡景追飛」、李善注「七啓曰、忽躡景而輕驚」。

- (53) 藏暉 陸雲「登臺賦」(『藝文類聚』卷六二)「於是精疲遊倦、白日藏暉、鄙春登之有情、惡荆臺之忘歸」。

- (54) 虛閑 陶弘景「上梁武帝啓」「自無射以後、國政方殷、山心歉默、不敢復以虛閑塵觸、謹於此題事、故遂成煩曠」。

- (55) 解輪太霞上 曹植「當來日大難」「闔門置酒、和樂欣欣、遊馬後來、轅車解輪」。「真誥」卷三葉一〇裏「仰眎太霞宮」。同葉一二表「擲神太霞庭」。

- (56) 欽轡 陶淵明「讀史述九章」張長公「欽轡竭來、獨養其志」。

- (57) 手把八空烝 『真誥』卷九葉一二表「手把八雲氣」。

- (58) 縱身 『列仙傳』赤松子「縱身長風、俄翼玄圃」。

- (59) 造化 『莊子』大宗師「今一以天地爲大鑪、以造化爲大冶、惡乎往而不可哉」。

- (60) 道要 『雲笈七籤』卷八四水解「王進賢者、遇嵩山女仙韓西華出遊、見而愍焉、西華即將入嵩高山、授以道要」。

- (61) 求真得眞友 『大還丹秘圖』(『雲笈七籤』卷七二)「用曉求真之士、將傳志道之人耳」。「論語」述而「求仁得仁」。

- (62) 都回 『真誥』卷二葉一八裏「都即惜也、小名方回」。「真誥」

卷八葉五裏「都回父無辜戮人數百口」以下參照。『晉書』卷六七に都惜傳あり。

- (63) 玉室起霄清 『雲笈七籤』卷九六高仙盼遊洞靈之曲「玉室煥東霞、紫輦浮絳晨」。張衡「思玄賦」(『文選』卷一五)「涉清霄而升遐兮、浮蟻矇而上征」、李善注「霄、微雲也、善曰、楚辭曰、涉青雲而汎濫兮、甘泉賦曰、騰清霄而軼浮景」。

- (64) 領略 江淹「雜體詩」張廷尉(『文選』卷三一)「領略歸一致、南山有綺皓」、李善注「王文度贈許詢詩曰、吾生挺奇幹、領略摠玄標」。

- (65) 浮景翔絕冥 『太上飛行九神玉經』(『雲笈七籤』卷二〇)「上升九天、浮景自然」。孫綽「遊天台山賦」(『文選』卷一一)「跨穹隆之懸磴、臨萬丈之絕冥」、李善注「天台山石橋路逕、臨絕冥之澗、冥幽深也」。

- (66) 丹空 『真誥』卷四葉一三表「澄形丹空、擢標霄領」。

- (67) 金映 『雲笈七籤』卷四一朝太素三元君「圓輪擲崆峒、金映冠天精」。

- (68) 八風鼓錦披 『真誥』卷三葉一二表「手攜紫皇袂、幢欬八風驅」。「真誥」卷三葉一五裏「彈璫南雲扇、香風鼓錦披」。「雲笈七籤」卷五二昇玄行事訣「又存斗中玉妃名密華、字璚荷、披錦帔鳳光鸞裙中紫芙蓉冠」。

- (69) 碧樹曜四靈 『淮南子』地形訓「禹掘昆侖虛以下地、」

碧樹瑤樹在其北。『禮記』禮運「何謂四靈、麟鳳龜龍謂之四靈」。

(70) 緣輯 『真誥』卷三葉一一表「擲輪空同津、總轡儼緣輯」。

(71) 結信通神交 『左傳』襄公元年「凡諸侯即位、小國朝之、大國聘焉、以繼好結信」。王延壽「魯靈光殿賦」(『文選』卷一一)「非夫通神之俊才、誰能剋成乎此勳」。

(72) 天誠 『莊子』徐无鬼「吾與之乘天地之誠、而不以物與之相櫻」。

(73) 瑤玉瓊 『衆眞戒』(『上清道類事相』卷四)「大方諸山對會稽之東、上有天仙宮室、以金玉瓊瑤雜爲棟宇也」。

(74) 紫空朗明景 『雲笈七籤』卷八釋三十九章經「第二十章、紫空者、內景之山名也」。同卷五三太上隱書八景飛經八法「乃微祝曰、明景道宗、總統九天」。

(75) 玄宮帶絳河 『黃庭內景經』若得章第十九「雲笈七籤」卷一一「玉堂絳宇盡玄宮」、梁丘子注「絳宮明堂、上下相應、皆宮室也」。同卷七九王母授漢武帝眞形圖「弟子柯昌言、向奉使絳河、攝南眞七源君、檢校群龍猛獸」。

(76) 濟濟上清 『尚書』大禹謨「濟濟有衆」、傳「濟濟、衆盛之貌」。『雲笈七籤』卷四上清源統經目註序「上清者、宮也、明乎混沌之表、煥乎大羅之天、靈妙虛結、神奇空生、高浮澄淨、以上清爲名、乃衆眞之所處、大聖之所經也」。

(77) 雲臺 『金華玉女說丹經』(『雲笈七籤』卷六四)「時六玄宮

主悉以天衆會於雲臺觀、龍軒鶴騎、仙杖森列、駐于空界」。

(78) 八輿 『雲笈七籤』卷五三太上隱書八景飛經八法「司錄道君乘八輿之輪、飛龜玄雲之車」。

(79) 羽蓋 『雲笈七籤』卷八〇元覽人鳥山形圖「能讀此書萬遍、修行不負文言、天帝君即遣使雲車羽蓋來迎」。

(80) 震風 『法言』問明「吾不見震風之能動輿噴也」。

(81) 金鈴散玉華 『雲笈七籤』卷四八神杖法「微祝曰、五色流煥、朱衣金鈴」。『登眞隱訣』卷上「手執流金鈴」、注「流金鈴即火鈴也」。『雲笈七籤』卷六·三洞「後傳玉文、付上相青童君、封於玉華宮」。

(82) 九垓 司馬相如「封禪文」(『文選』卷四八)「大漢之德、上暢九垓、下沂八埏」、李善注「孟康曰、暢、達也、垓、重也」。

(83) 借問求道子 郭璞「遊仙詩」七首之二(『文選』卷二二)「借問此何誰、云是鬼谷子。釋玄光「辯惑論」(『弘明集』卷八)「又其方術、穢濁不清、乃扣齒爲天鼓、咽唾爲醴泉、馬屎爲靈薪、老鼠爲芝藥、資此求道、焉能得乎」。

(84) 養眞收太和 『莊子』人間世郭象注「夫唯外其知以養眞」。『眞誥』卷一七葉二表「夫心與治、遊乎太和」。

(85) 霄映朗八方 『靈寶洞玄自然九天生神章經』洞元化應聲天生神章第六(『雲笈七籤』卷一六)「應聲無色界、霄映冠十方」。

- (86) 丹雲 『雲笈七籤』卷八五景霄真人「便祝曰、丹雲迴霄、來降我房」。
- (87) 靈風 『雲笈七籤』卷二二朝禮訣法「靈風揚香、綠霞吐津」。
- (88) 鼓翮乘素綱 『真誥』卷三葉一〇表「玉蓋陰七景、鼓翮霄上浮」。「上清大洞真經」卷三肺中六真章「解帶玉映室、乘素入四明」。
- (89) 竦眄 『真誥』卷三葉一〇表「竦眄撫明眞」。
- (90) 綠蓋入協晨 『雲笈七籤』卷四一太素真人隱朝禮願上仙法「心祝曰、…時乘黃晨綠蓋龍輶、上詣紫庭」。「太平御覽」卷六七四理所「(上清經)又曰、協晨虛觀、峻層之室、太上大道君閑居處也」。
- (91) 上朝太虛皇 『登眞隱訣』卷下「祝曰、…七玄披散、上朝帝廬」。「真誥」卷一四葉一九表「玄君來行、人其誰知、在元炁爲元君、在玄宮爲玄師、在南辰爲南極老人、在太虛爲太虛真人、在南嶽爲赤松子、此乃天帝四眞人之師、太一之友」。
- (92) 玉寶剖鳳腦 『雲笈七籤』卷四二存大洞真經三十九眞法「北宴上清、列爲玉寶」。「真誥」卷六葉二裏「龍胎隱鳴、虎沫鳳腦」。
- (93) 藥漿 張衡「西京賦」(『文選』卷二)「屑瓊藥以朝飧、必性命之可度」、李善注「三輔故事曰、武帝作銅露盤、承天露、和玉屑飲之、欲以求仙」。
- (94) 雲鈞 『雲笈七籤』卷三〇大洞迴風混合帝一之法「玄金雲鈞、流徹太和」。
- (95) 琅琅 司馬相如「子虛賦」(『文選』卷七)「礪石相擊、礪礪礪」。
- (96) 錦旌 陶弘景「水仙賦」「安期奉棗、王母送桃、錦旌麗日、羽衣拂霄」。
- (97) 紫煙 『雲笈七籤』卷九六太微天帝君讚大有妙經頌「丹暉映雲庭、紫煙光玉林」。
- (98) 未兆 『老子』第六章「其安易持、其未兆易謀」。
- (99) 靈化順氣翔 『洞玄靈寶定觀經』注「雲笈七籤」卷一七「靈者神也、在天曰靈、寶者珍也、在地曰寶、天有靈化、神用不測、則廣覆無邊」。「阮籍」詠懷詩「十七首之二」(『文選』卷三三)「三妃遊江濱、逍遙順風翔」。
- (100) 臭味 『左傳』襄公八年「季武子曰、誰敢哉、今譬於草木、寡君在君、君之臭味也」。
- (101) 榮辱 『莊子』則陽「榮辱立、然後覩所病」、注「各自得則無榮辱、得失紛紜、故榮辱立、榮辱立、則夸其所謂辱而歧其所謂榮矣」。
- (102) 紫軒 『雲笈七籤』卷四一朝禮九天魂魄帝君求仙上法「蒼龍朱鳳、策轡紫軒」。
- (103) 神光煥七靈 『太上飛行九神玉經』(『雲笈七籤』卷二〇)「是以神光轉灼、玄監萬生、傍行越位、以告災祥」。「清靈真人裴君傳」(『雲笈七籤』卷一〇五)「遂與君共乘飛龍之車、西到六嶺」。

之門、八絡之丘、協晨之宮、八景之城、登七靈之臺、坐太和之殿。『眞誥』卷四葉四表「彈璫北寒臺、七靈暉紫霞」。

(104) 三燭 『上清後聖道君列紀』「將欲見聖君之遊行也、…華光交煥、三燭合明」。

(105) 空洞 『眞誥』卷四葉七裏「縱心空同津、總轡策朱軒」。

(106) 觸節 『眞誥』卷四葉八裏「玄數自相求、觸節皆有音」。

(107) 織女 『史記』卷二七天官書「婺女、其北織女、織女、天女孫也」。

(108) 匏瓜 『史記』卷二七天官書「匏瓜、有青黑星守之、魚鹽貴」。

(109) 晏寢 潘岳「關中詩」(『文選』卷二〇)「天子是矜、旰食晏寢」。

(110) 太寂 『眞誥』卷一四葉一二裏「諸葛武侯昔建碑銘德於季主墓前、碑讀末曰、玄漠太寂、混合陰陽、天地交泮、萬品滋彰」。

(111) 金姿 『雲笈七籤』卷四一朝太素三元君「金姿曜九霞、玉質躍寒庭」。

(112) 慘慘無聊生 『毛詩』大雅抑「昊天孔昭、我生靡樂、視爾夢夢、我心慘慘」、『楚辭』九思逢尤「心煩憤兮意無聊」。

(113) 東林 『眞誥』卷一八葉九表「先生自寄神炁、投景東林」。

遺滯悒、賴窮行德、不亦甚佳乎、不患德之不報、所患種福之不多

耳、此一行則似乎福田也、萬事云云、盡可觸類矣。

十二月三日、雲林右英夫人告。

右一條有楊書、又有一本小異。

穆惶恐言、仁愛之至、猥惠新詩、雲藻綺絡、金聲玉粲、誠翰林之奇秀、華錦之盛肆也、義類淵微、仰覽無射、佩之丹心、奉以周旋、功德淺陋、冥報已重、福田之喻、敢不自勵、憑託微猷、情若山海、動靜啓悟、望垂矜錄、許穆惶恐言。

詣雲林右英夫人机前。(此即答遺滯悒書也、有自記草存)

凝り固まっていたいやしい氣持ちを捨て、困窮状態の中で徳の實踐につとめるのは、なんとすばらしいことではありませんか。徳が報われないことを氣に病んではなりません。氣に病むべきは福の種を多く播けないことなのです。この行はいかにも福田となることでしょう。諸事萬端、何事もこうでなければなりません。

十二月三日、雲林右英夫人のお告げ。

右の一條は楊羲の書がある。また少々異同のある別のテキストがある。

穆、恐れながら申し上げます。この上もなき仁愛、忝くも新作の

詩歌を賜りました。雲のあやなす文藻は美しく連なり、金玉のよ  
うな音と輝き、まことに文壇の最高峰、錦繡のみごとな陳列と申せ  
ます。内容は奥深くて微妙、仰ぎみて厭きることがありません。こ  
れを衷心にとどめて、有難くふみ行うことと致します。それがしの  
功德は淺薄でつまらないものに、幽冥の報いは甚大でござい  
ます。福田のお諭しをいただきましたからには、どうして勵まずに  
おられましょう。よき謀り事をたのみとすること、私の心は山のご  
とく高く海のごとく深うございます。何事につけ開悟せられ、哀れ  
に思ひ召されて目をおかけ下さいますように。許穆、恐れながら申  
し上げます。

雲林右英夫人の御前に。へこれは、凝り固まっていたいやしい氣持ち  
を捨てようにとのお諭しに答えた書簡である。自分で書いた下書  
きが残っている

- (1) 徳之不報 『論語』憲問「以直報怨、以德報徳」。
- (2) 種福 『上清大洞眞經』卷五結中青炁君章「種福九天外、拔  
尸地門下」。
- (3) 福田 『無上祕要』卷七四啓志願品「欲修道結緣賢聖、當奉  
行大戒、廣建福田、弘始功德、…右出洞玄請問經」。
- (4) 萬事云云 『老子』第十六章「夫物芸芸、各復歸其根」、『眞

誥』卷一八葉一一表「萬物云云、亦何益哉」。

(5) 雲藻 孫綽「蘭亭詩」「攜筆落雲藻、微言剖纖毫」。

(6) 金聲玉粲 『孟子』萬章下「孔子之謂集大成、集大成者、金  
聲而玉振之也、金聲也者、始條理也、玉振之也者、終條理也」。

(7) 冥報 陶淵明「乞食詩」「銜戢知何謝、冥報以相貽」。

(8) 微猷 『毛詩』小雅角弓「君子有微猷、小人與屬」。

青童大君常吟詠曰、「欲殖滅度根、當拔生死栽、沈吟墮九泉、但  
坐惜形骸」。

太虛真人常吟詠曰、「觀神載形時、亦如車從馬、車敗馬奔亡、牽  
連一時假、哀世莫識此、但是惜風火、種罪天網上、受毒地獄下」。

西城真人王君常吟詠曰、「神爲度形舟、薄岸當別去、形非神常宅、  
神非形常載、徘徊生死輪、但苦心猶豫」。

小有真人王君常吟詠曰、「失道從死津、三魂迷生道、生生日已遠、  
死死日已早、悲哉苦痛容、根華已顛倒、起就零落生、焉知反枯老」。

以去月秋分日、於瑤臺大會、四君各吟此言、以和玄鈞廣韶之絃聲

也。〈十月告云去月、如似是九月<sup>(5)</sup>南〉「閑」、秋分必在八月、則去月  
自爲通乎耳

十月十五日、右英夫人説此令疏。

右五條有豫書。

- (1) この詩、『雲笈七籤』卷九六青童大君常吟詠に見える。
- (2) この詩、『雲笈七籤』卷九六太虛真人常吟詠に見える。
- (3) この詩、『雲笈七籤』卷九六西城真人王君常吟詠に見える。
- (4) この詩、『雲笈七籤』卷九六小有真人王君常吟詠に見える。
- (5) 餘本が「南」を「閑」に作るのに従う。

青童大君が常々吟詠される詩。

煩惱を滅し悟りに至るための大本を植え付けたければ、<sup>(1)</sup>

生死という苗木を引き抜かなければならぬ。<sup>(2)</sup>

ぐずぐずと決斷できずに地の底に落ちて行くのは、<sup>(3)</sup>

これぞひとえに肉體を惜しむから。<sup>(4)</sup>

太虛真人が常々吟詠される詩。

精神が肉體に乗っかって<sup>(5)</sup>いる時の有様は、

あたかも車が馬の後に付き従っているようなもの。

車が壊れれば馬は逃げ去り、<sup>(6)</sup>

繋ぎ合わされているのは一時の假の姿。<sup>(7)</sup>

世俗の者どもがこの理を知らず、

ただ風火四大に執着しているのが哀れ。

罪の種を天理の網の上に播けば、<sup>(8)</sup>

苦しみの毒を地獄の下で受けるのだ。<sup>(9)</sup>

西城真人王君が常々吟詠される詩。<sup>(10)</sup>

精神は肉體を彼岸に渡す舟、<sup>(11)</sup>

岸に着けば別れねばならぬ。<sup>(12)</sup>

肉體は精神の永遠の住み家にはあらず、<sup>(13)</sup>

精神は肉體の永遠の乗物にはあらず。

生死の輪の中を徘徊し、<sup>(14)</sup>

心がぐずぐずと決心が着かぬのがやりきれぬ。<sup>(15)</sup>

小有真人王君が常々吟詠される詩。

道を失って死への渡し場を通れば、<sup>(16)</sup>

靈魂は生者の道を見失う。<sup>(17)</sup>

生の世界は日一日と遠退き、<sup>(18)</sup>

死の世界が日一日と駆け寄って来る。

なんと悲しいことよ、その苦痛に喘ぐ姿は、

根と華とが逆さまになってしまっている。<sup>(19)</sup>

零落<sup>(20)</sup>の生に向かって歩を進めるならば、

どうして枯れ老いたものを若返らせることが分かるうか。

去ぬる月の秋分の日、神仙たちが大勢瑤臺<sup>(21)</sup>に集い、四君が各々

この詩を朗唱して、玄鈞廣韶の樂の音に唱和された。<sup>(22)</sup>へ十月のお告

げの中で「去ぬる月」と言っているから、九月中のことのようでも

あるが、秋分は必ず八月中にあるとすれば、「去ぬる月」というのも

自ずとはっきりしているのではなからうか

十月十五日に右英夫人がこのことをお話しになって書きつけさせ

られた。

右の五條は許掾の書がある。

(1) 減度 『肇論』涅槃無名論「經稱有餘涅槃無餘涅槃者、秦言

無爲、亦名減度、…減度者、言其大患永滅、超度四流、斯蓋是

鏡像之所歸、絕稱之幽宅也」。

(2) 當拔生死栽 『淨土論註』「還相者生彼土已、得奢摩他毘婆

舍那、方便力成就、廻入生死稠林、教化一切衆生、共向佛道、  
若往若還、皆爲拔衆生、渡生死海」。

(3) 沈吟墮九泉 『楚辭』「九思」悼亂「意欲兮沈吟、迫日兮黃

昏」、王逸注「意且欲遲望」。木華「海賦」(『文選』卷二二)「燼

炭重燼、吹炯九泉」、李善注「言火之光下照九泉、地有九重、

故曰九泉」。

(4) 形骸 『莊子』德充符「申徒嘉曰、…吾與夫子遊十九年矣、

而未嘗知吾兀者也、今子與我遊於形骸之內、而子索我於形骸之

外、不亦過乎」。

(5) 載形 『養性延命錄』卷上「大有經曰、或疑者云、始同起於

無外、終受氣於陰陽、載形魄於天地、資生長於食息」。

(6) 奔亡 丘遲「與陳伯之書」(『文選』卷四三)「如何一旦爲奔

亡之虞、聞鳴鏑而股戰、對穹廬以屈膝、又何劣邪」。

(7) 牽連 『淮南子』要略訓「非循一迹之路、守一隅之指、拘繫

牽連之物而不與世推移也」。『眞誥』卷八葉五表「虞昭爲其兄子

事、文書牽連、身被攝繫方未已、殆欲無理」。

(8) 種罪天網 上 『周氏冥通記』卷一「卿趣欲住世種罪、何爲得

補吾洞中之職」。『老子』第七十三章「天網恢恢、疏而不失」。

(9) 受毒地獄下 『明佛論』(『弘明集』卷二)「行凶於顯、受毒

於幽、又何怪乎」。長阿含「世記經」地獄品「彼有八大地獄、

其一地獄有十六小地獄」。『眞誥』卷一五葉二表注「至於地獄、



所在盡有、不盡一處、泰山河海亦各有焉。

- (10) 西城真人 顏真卿「魏夫人仙壇碑銘」此皆王君昔遇南極夫人西城真人王方平於陽洛山所受之本經也。

- (11) 度形 『無上祕要』卷六六明燈品「祝曰、拔過七祖難、度形還南宮、右出洞真天關三圖七星移度經」

- (12) 薄岸 宋玉「高唐賦」(『文選』卷一九)「勢薄岸而相擊兮、隘交引而卻會」。

- (13) 形非神常宅 『抱朴子』至理「夫有因無而生焉、形須神而立焉、有者無之宮也、形者神之宅也」。都超「奉法要」(『弘明集』

卷一三)「神無常宅、遷化靡停、謂之非身」。

- (14) 生死輪 『注維摩』弟子品「肇曰、生死輪轉、貴賤無常」。「道門經法相承次序」卷一「何爲名死五苦、二入鏤湯沸湧之中、骨肉俱爛、生死輪迴」

- (15) 猶豫 『楚辭』離騷「欲從靈氛之吉占兮、心猶豫而狐疑」。

- (16) 失道從死津 『老子』第三十八章「故失道而後德、失德而後仁、失仁而後義、失義而後禮」。「真誥」卷四葉一四裏「右英告曰、自古及今、死生有津、顯默異會、藏往滅智、與世同之者、皆得道之行也」。

- (17) 生道 『無上祕要』卷四六昇玄戒品「五惡既不住、考對在兆形、永與生道隔、幽魂歿鬼囿」。「真誥」卷七葉一裏「何可握生道以奔於死房」。

- (18) 生生 『老子』第五十章「出生入死、生之徒十有三、死之徒

十有三、人之生動之死地、亦十有三、夫何故、以其生生之厚」。

- (19) 顛倒 『毛詩』齊風東方未明「東方未明、顛倒衣裳」。

- (20) 零落 『楚辭』離騷「惟草木之零落兮、恐美人之遲暮」、王逸注「零落皆墮也、草曰零、木曰落」。

- (21) 瑤臺 『楚辭』離騷「望瑤臺之偃蹇兮、見有娥之佚女」。「上清道類事相」卷三寶臺品「又(登真隱訣)云、崑崙瑤臺、西王母之宮、所謂西瑤上臺、天真祕文盡在其中」。

- (22) 玄鈞廣韶 『太上飛行九晨玉經』「凡行玉清之道、出則諸天侍軒、前導鳳歌、後從玄鈞、六師啓路、飛龍翼轅」。「真誥」

卷四葉八表「虛景盤瓊軒、玄鈞作鳳歌」。「真誥」卷一八葉一三裏注「謂鈞天廣樂上清之曲也」。

① 四矚曜明空、朱軒飛靈丘、玉蓋蔭七景、鼓翮霄上浮、九音朗紫空、

玉瑤洞太無、宴詠三辰宮、唱嘯呼我儔、不覺椿已來、豈知二景流、

佳人雖兼忘、而未放百憂、長林眞可靜、巖中多自娛。

十月十七日、雲林夫人作、與許侯。

② 左把玉華蓋、飛景躡七元、三辰煥紫暉、竦眄撫明眞、變踊期須臾、

四面皆已神、靈發無涯際、歎思上清文、何事生橫涂、令爾感不專、

〔陰〕〔烏禁反〕〔胸〕〔烏賀反、此應作暗啞、言其速也〕〔夫去〕〔失  
玄〕機、不覺年歲分。

十月十八日、紫微夫人作。

右二篇有楊書。

(1) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊真人許長史詩  
に見える。

(2) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。

(3) 『雲笈七籤』が「夫去」を「失玄」に作るのに従う。

四本の旗指物は明るい空に照り輝き、  
朱色の車は靈丘の上を飛ぶ。<sup>(1)</sup>

玉の華蓋は日月星辰の光を遮り、<sup>(2)</sup>

翼を打ち鳴らして大空の上に浮かぶ。

九音の樂は紫空に朗々と鳴りわたり、

玉璫の音は太無の世界に響きわたる。<sup>(3)</sup>

三辰の宮殿に憩うて朗詠し、

歌い嘯いてはわが友がらを呼びましよう。<sup>(4)</sup>

もはや萬椿の齡にまで達したことに氣づかぬほど、

日月が流れ去って時間が過ぎて行くことなど分かりはしません。

佳き人は何物にもとらわれない境地に達したとはいえ、

まださまざまな憂い<sup>(5)</sup>を捨て去ったわけではありません。

深い森はまことに閑靜、

巖の中には樂しみが澤山あります。

十月十七日、雲林夫人が作って許侯に與えられた。

左手に玉の華蓋を握り、

景を飛ばして北斗七星を蹈む。<sup>(6)</sup>

日月星辰が紫色の輝きを放つ中、

つまだち望んで明眞の館を巡る。

さまざまにステップを変えながらしばし待てば、

あたりはもう神仙ばかり。

靈妙な働きの發動には限界などはないのだから、<sup>(7)</sup>

つとめて上清經を思うがよいでしょう。<sup>(8)</sup>

一體どうして横道を生みだして、

そなたの心を散漫にさせるのですか。

〔陰〕〔烏禁の反〕とか〔胸〕〔烏賀の反。これはきつと「暗啞」

であろう。その速やかなことを意味する〕とか言う間に神仙となる

きっかけを失って、知らぬうちに年月が去ってしまうことでしょう。

十月十八日、紫微夫人の作。

右の二篇は楊羲の書がある。

(1) 朱軒飛靈丘 『後漢書』列傳三六陳忠傳「忠上疏曰、…陛下

以不得親奉孝德皇園廟、比遣中使致敬甘陵、朱軒軒馬、相望道路、可謂孝至矣。『漢武帝內傳』「其次藥有…蒙山白鳳之肺、靈丘蒼鸞之血」。

(2) 玉蓋隆七景 『魏書』靈徵志下「肅宗正光三年六月、并州靜

林寺僧在陽邑城西橡谷掘藥、得玉璧五珪十印一玉柱一玉蓋一、竝以獻。『無上祕要』卷一六衆聖本迹品下「其日遣上仙玉蓋周行天下、有學仙行道、朝禮諸天、燒香誦經、即奏名四天、刻錄簡籍」。同卷九六玉清品上「修行八年、勿失一節、真人給玉童八人、思真感會、真人降形、致七景之興、飛行玉清」。

(3) 玉璣洞太無 葛玄「老子道德經序」「老君體自然而然、生乎太無之先、起乎無因、經歷天地、終始不可稱載、終乎無終、窮乎無窮、極乎無極、故無極也。『無上祕要』卷九五昇紫晨品「上皇先生於是靈耀暉姿、金容暢頤、…嘯朗太無、玉音激籟、虛唱飛歌、八響應會、…右出洞真神州七變儼天經」。

(4) 我儔 嵇康「述志詩」「悠悠非我儔、□步應俗宜」。

(5) 百憂 『毛詩』王風兔爰「我生之後、逢此百憂」。

(6) 飛景 『抱朴子』暢玄「高不可登、深不可測、乘流光、策飛景、凌六虛、貫涵溶、出乎無上、入乎無下」。

(7) 無涯際 『真誥』卷四葉六裏「高仙宴太真、清唱無涯際」。

(8) 歎思 『後漢書』明帝紀「永平三年…秋八月…壬申晦、日有蝕之、詔曰、…雖夙夜勤思、而智能不逮」。

① 北登玄真闕、攜手結高羅、香煙散八景、玄風鼓絳波、仰超琅園津、俯眇霄陵阿、玉簫雲上唱、鳳鳴洞九遐、乘氣浮太空、曷爲躡山河、金節命羽靈、徵兵折萬魔、齊挹二晨暉、千椿方嬰牙、喪眞投兢室、不解可奈何。

② 仰眇太霞宮、金閣曜紫清、華房映太素、四軒皆朱瓊、擲輪空同津、總轡儼綠駟、玉華飛雲蓋、西妃運錦旌、翻然濁塵涯、儵忽佳人庭、宿感應期降、所招已在冥、乘風奏霄晨、共酣丹琳醴、公侯徒眇眇、安知眞人靈。

右二篇十月二十日授。〈亦應是右英喻長史也〉  
右二篇有楊書。

(1) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人呪楊真人許長史詩に見える。

(2) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人呪楊真人許長史詩に見える。

北の方、玄眞の門に上り、  
手を取りあつて高き雲の網を結ぶ<sup>(1)</sup>。

香わしい煙は八色の光を散じ、  
玄妙な風は絳<sup>あか</sup>き波を立てる。

振り仰いで瑣園の渡し場を越え、  
下方には霄陵の丘を眺めやる。

玉簫の音は雲の上に奏でられ、  
鳳の鳴き聲は世界のはてまで響き渡る。

雲氣に乗って大空に浮かべば、  
どうして山河を蹈み越える必要などありませんか。

黄金の節杖を振って神仙たちに下知し、  
神兵を募っては萬の魔性のものを打ち倒す。

ともに日月の光を汲み取れば、  
千年の椿も赤子の生え始めの齒と同じようなもの。

眞の道を失<sup>(8)</sup>つて争いの世界に身を投ずれば、  
もはやどうすべきか分からない。

振り仰いで太霞の宮を眺めれば、  
黄金の閣が紫清の空に輝いています。

華麗なる房屋は太素の宮に照りほえ、  
四方の軒はどれも朱色の瓊玉。

車をぼっかり開けた空間の渡し場に投げ出し、  
手綱をひきしめて緑の幌車を舞わせば、

玉華の童子は雲の蓋を飛ばし、  
西妃は錦の旗を運らす。

汚れた世界の岸邊でひらりと身を翻せば、  
忽ちそこは佳き人の家の庭。

遙か昔からのほたらきかけによって時期の到來に應じて降<sup>(11)</sup>って來  
ましたが、

こうして呼び寄せられたのも冥々の定め。  
風に乗って大空に樂を奏で、

ともに丹い琳玉の甕の美酒を飲みましょう。  
王侯貴族などちっぽけな存在、

どうして眞人の靈妙さが分かりましょうや。

右の二篇は十月二十日に授けられた。へこれもきつと右英夫人が許長史を諭したのであらう

右の二篇は楊羲の書がある。

- (1) 高羅 嵇康「贈秀才詩」「雲網塞四區、高羅正參差」。
- (2) 玄風 『眞誥』卷六葉一三表「昔玄風泯絕、埃氣彌氛」。
- (3) 鳳鳴 『世說新語』賞譽「張華見楮陶、語陸平原曰、君兄弟龍躍雲津、顧彥先鳳鳴朝陽、謂東南之寶已盡、不意復見楮生」。
- (4) 金節 梁簡文帝「九日侍皇太子樂遊苑詩」(『藝文類聚』卷四)「露點金節、霜沈玉璣」。
- (5) 萬魔 『元始無量度人上品妙經四注』卷二「敢有干試、巨遏上眞」、嚴東注「萬魔藏形、百鬼豈敢當拒」。
- (6) 二晨 『雲笈七籤』卷一〇一「上清高聖太上玉晨大道君紀」「上清高聖太上大道君者、蓋二晨之精氣、九慶之紫煙」。
- (7) 千椿 『無上祕要』卷二〇仙歌品「萬劫爲一契、千椿未始離」。
- (8) 喪眞 嵇康「太師箴」「下逮德衰、大道沈淪、智惠日用、漸私其親、懼物乖離、擘□□仁、利巧愈競、繁禮屢陳、刑教爭施、天性喪眞」、『眞誥』卷八葉一表「然多勞多事、多念多端、所以損神喪眞、擾競三關」。
- (9) 金閣曜紫清 鮑照「舞鶴賦」(『文選』卷一四)「唳清響於丹

墀、舞飛容於金閣。」「上清金眞玉光八景飛經」「仍微呪曰、徘徊神輦、流暎紫清。」「眞誥」卷一二葉二表「騁逸松期、回輪紫清」。

- (10) 華房 『元始無量度人上品妙經四注』卷三「上遊上清、出入華房」、嚴東注「上清紫微宮也、紫微在玉清之上、華房者太極宮、宮有青華門、裏有曲房也」。
- (11) 朱瓊 『無上祕要』卷二九「三十二天讚頌品」清明何童天頌「紫林翠南阜、飄風振朱瓊」。
- (12) 雲蓋 郭璞「遊仙詩」(『藝文類聚』卷六)「鱗裳逐電曜、雲蓋隨風廻」。
- (13) 西妃 『清虛眞人王君內傳』(『雲笈七籤』卷一〇六)「於是龍騰雲崖、飛鳳鳴嘯、靈歌九眞、雅吟空無、玉華作唱、西妃折腰」。
- (14) 宿感 『上清太上黃素四四方經』「凡精試密向、耽味玄眞、清齋若至、感慕神仙、忽自遇此三品之經而不師受者、其人皆玄會宿感、列籍帝鄉、眞人有密授、應得此經」。
- (15) 霄晨 『上清金眞玉光八景飛經』「仍微呪曰、豁落招靈、身无稽延、得乘飛景、上晏霄晨。」「眞誥」卷四葉三裏「轡景登霄晨、遊宴滄浪宮」。
- (16) 公侯 『毛詩』周南兔置「赳赳武夫、公侯好仇」。

車馬雖重、爲路人所略、推分任運、有以招之、不必吝也、杯子誠小、還爲童史所偷、故疾而惜之、今冥鑒卽擒、蓋所以懼惡而善者別矣、今雖嘿然不言、小人足知靈驗、有訓在其中、非直區區、若此小而不能坦也、謹白。

呈雲林右英夫人。

十一月十九日。〈此所答右英授事、事今不存〉

穆惶恐言、沈染鄙俗、流浪塵昧、罪與年長、愆隨日積、幸遭玄運、靈啓其會、披散氛霧、朗然達觀、眞靈清秀、竝垂戒悟、猥辱文翰、華藻成林、金聲玉振、規矩有章、父子凡微、無以堪荷、夙興策勵、不敢怠惰、顒顒傾注、言不自暢、穆惶恐言。〈此亦是答右英詩、不審的是何詩、亦似不存〉

右二條長史自書本。

車馬はずっしり重いものではありませんが、路傍の人に奪われることがあります。おのれが分を計り運命に委ねていて、そのような結果を招いたのであれば、必ずしも惜しいとは思いません。杯は誠に小さな物ですが、やはり召使に盗まれました。もとよりそのことを

憎みますし、残念でなりません。今、神のお見通しで即刻捕えられたのは、思うに悪人を恐れさせ、善人を選り分けるためでございます。今、黙って何も漏らしはしませんが、私めは靈驗の中に教訓が含まれていることを知ることができます。こせこせとしているだけではないのです。このようなつまらぬことにも平靜ではいられないのです。謹んで申し上げます。

雲林右英夫人に差し出したもの。

十一月十九日。〈これは右英夫人の誥授に對する返事である。誥授は今に残っていない〉

穆<sup>そが</sup>、恐れながら申し上げます。それがし世俗にどつぷりと漬かり染まり、穢れと蒙昧の中に流浪して、罪は年ごとに増長し、過ちは日ごとに堆積しております。幸いにも玄妙な運命に出會い、靈妙な啓示をいただくことができて、身のまわりに立ちこめた霧を開き拂い、はつきりとすべてを悟ることができました。眞靈がたは清くすぐれていて、いずれも訓戒をお授け下さいました。また、忝くもお文まで頂戴して、そのすばらしいお言葉は林のごとく、金の音色に玉の響き、かっきりとした中にもあやがあります。われわれ親子は取るに足らぬつまらぬもの、とてもお諭しを受ける資格はありませんが、つとに起きて自らを勵まし、決して怠るようなことは致しません。心からお慕い申し上げ、心を傾けておりますが、十分に言葉を盡く

することができません。<sup>それ</sup>穆、恐れながら申し上げます。へこれもまた右英夫人の詩に答えたものである。ただ、どの詩に對するものかは明らかではない。<sup>(6)</sup>詩はやはり残っていないようである。

右の二條は許長史の自書のテキスト。

(1) 推分任運 『晉書』卷六五王導傳「及劉隗用事、導漸見疏遠、

任眞推分、澹如也、有識咸稱導善處興廢焉。」「宋書」卷八五王景文傳「貴高有危殆之懼、身賤有溝壑之憂、張單雙災、木雁兩失、有心於避禍、不如無心於任運」。

(2) 靈驗 孫綽「遊天台山賦」(『文選』卷一一)「觀靈驗而遂徂、忽乎吾之將行」。

(3) 鄙俗 『後漢書』列傳三〇上班彪傳「武帝時、司馬遷著史記、自太初以後、闕而不錄、後好事者頗或綴集時事、然多鄙俗、不足踵繼其書」。

(4) 塵昧 『眞誥』卷七葉五表「生染迷俗、沈溺塵昧」。

(5) 靈啓其會 張華「太康六年三月三日後園會詩」(『古詩紀』卷二二)「靈啓其願、邀願在茲、予以表情、爰著斯詩」。

(6) 不審的是何詩 『周氏冥通記』卷一注「但不知三師的是何者」。

① 靈谷秀瀾榮、藏身栖巖京、被褐均袞龍、帶索齊玉鳴、形磬幽遼裏、擲神太霞庭、霄上有陞賢、空中有眞聲、抑我曲晨飛、案此綠軒軒、下觀八度內、俯歎風塵繁、解脫遺波浪、登此眇眇清、擾兢三津竭、奔馳割爾齡。

十二月一日夜、南嶽夫人作、與許長史。

飛輪高晨臺、控轡玄壘隅、手攜紫皇袂、儵歛八風驅、玉華翼綠幃、青裙扇翠裾、冠軒煥崔嵬、珮玲帶月珠、薄入風塵中、塞鼻逃當塗、臭腥彫我氣、百痾令心殂、何不飄然起、蕭蕭步太虛。十二月一日夜、方丈左臺昭靈李夫人作、與許玉斧。

清晨捐絳霞、總氣霄上遊、徊軒躡曲波、遂覩世人憂、辭旨蔚然起、不散三秀嶼、何若巡玄鄉、撫璫爲爾娛、君安有有際、我願有中無。右英作此。

駕景遊賢良、促轡東園下。  
右英吟此道。

咀嚼玄句、柔音蔚暢、曲夾適宣、辭喻標朗、欽欽之詠、有由然也、玄宗以安、我其會矣。

十二月十四日、雲林夫人作、與長史。〈此所答長史之詩、詩今不存〉

右五篇有楊書。

（1）この詩、『雲笈七籤』卷九九南嶽夫人作與許長史に見える。

靈妙な谷に美しい波が花咲き、  
身を潜めて岩々の間に住まいする。

粗末な衣服を着ていても皇帝の盛装と變わることなく、  
繩の帶も佩の鳴る玉帶に等しい。

身體はかそけさの中にわだかまっています、  
精神は神々の宮居に投げ出している。

天上には天帝のもとに侍る賢者たちがおり、  
空の中にこそ眞人の歌聲がおこる。

私の曲震の乗物の飛行をゆるやかにし、  
この緑の馬車の速度を抑える。

下に人間世界の中を眺めやると、  
俗塵に纏いつかれた人々が嘆かわしい。

抜け出して憂き世のしがらみを忘れ、

この渺々たる清らかな世界に上っていらつしゃい。

心を騒がせれば体内のエネルギーは枯れはて、

あくせくと駆けまわればあなたの壽命は削られるのです。

十二月一日の夜、南嶽夫人が作って許長史に與えられた。

馬車を高晨の宮殿のたかどのまで駆けらせ、

玄壚の川の傍で馬足をひかえ、

紫皇の袂を手にとっている、

忽ち八風が吹き來った。

玉華の乙女は緑の帳を持ち上げ、

青いスカートに翠の裾が翻った。

立派に威儀を正した人々がきら星のごとく、

さらさらと鳴る玉帯には月珠をさげている。

いささか俗塵の中に入ってはみましたが、

鼻を塞いで官僚世界から逃げ出しました。

生臭い臭氣は私の体内の神氣を傷つけ、

多くの病は心を損ないます。

なぜあなたはすっぱりと立ち上がり、

さびさびと太虚の中を歩まぬのですか。

十二月一日の夜、方丈左臺の昭靈李夫人が作って許玉斧に與えら



れた。

清らかな朝に絳<sup>(14)</sup>霞を集め、

氣を取りまとして天上に遊行しました。

馬車を廻らせ奥深い流れを渡った時、

俗世の人が憂えているのを見たのでした。

申し聞かせる言葉はもことも湧き出し、<sup>(15)</sup>

三つの秀でし峰のあたりを離れません。

(そのように憂えているよりも) 玄なる世界を巡られて、<sup>(16)</sup>

雲璈の樂器を鳴らしてあなたの楽しみとする方がずっとすばらし

いではありませんか。

あなたは有を有とする世界に安んじていますが、<sup>(17)</sup>

私は有の内の無に遊ぶことを願っているのです。

右英夫人がこの詩を作られた。

景の馬車に乗ってすぐれた人々のもとに遊び、<sup>(18)</sup>

東の農園のあたりで車の速度を速めましよう。<sup>(19)</sup>

右英夫人がこの詩を吟じて言われた。

奥深い詩句を味わえば、のびやかな音調が豊かに備わっており、<sup>(20)</sup>

詩句の變化も有効に施されて、言わんとする内容も明らかです。心<sup>(21)</sup>

をこめた作品ができましたのには、しかるべき理由があるのです。

あなたが奥深い道の根本に安らがれる時、私も一緒にいるでしょう。<sup>(22)</sup>

十二月十四日、雲林夫人が作って許長史に與えられたへこれは許

長史が作った詩に答えたものである。許長史の詩は今は残っていない

い。

右の五篇は楊羲の書がある。

(1) 藏身 『太上飛行九神玉經』(『雲笈七籤』卷二〇)「若有玄

名九天、得知帝眞內諱、知者則能隱形藏身、脩行其道、則飛升

九門之內也」。

(2) 被褐均袞龍 『老子』第七十章「是以聖人被褐懷玉」。班固

「東都賦」(『文選』卷一)「至乎永平之際、重熙而累洽、盛三

雍之上儀、脩袞龍之法服」。

(3) 帶索齊玉鳴 『列子』天瑞「孔子遊於太山、見榮啓期行乎郕

之野、鹿裘帶索、鼓琴而歌」。「漢書」禮樂志「郊祀歌」天地「展

詩應律銷玉鳴、函宮吐角激徵清」。

(4) 曲晨 『眞誥』卷五葉四裏「仙道有曲晨飛蓋、御之體自飛」。

(5) 眇眇 『眞誥』卷四葉四表「玄清眇眇觀、落景出東溟」。

(6) 奔馳 『鹽鐵論』刑德「執轡非其人、則馬奔馳」。

- (7) 控轡 『呂氏春秋』審分「王良之所以使馬者、約審之以控其轡、而四馬莫敢不盡力」。
- (8) 紫皇袂 『眞誥』卷三葉一六表「三元起折腰、紫皇揮袂讚」。
- (9) 綠幃 『抱朴子』釋滯「夫寵貴不能動其心、極富不能移其好、以芳林爲臺榭、峻岫爲大廈、翠蘭爲網牀、綠葉爲幃幕」。
- (10) 青裙扇翠裾 『太上飛行九眞玉經』(『雲笈七籤』卷二〇)「龍衣羽服、錦帔青裾、駕乘八景、浮遊九玄」。唐の用例ではあるが、于武陵「長信宮詩一」「坐聽南宮樂、涼風搖翠裾」。
- (11) 崔嵬 『毛詩』周南卷耳「陟彼崔嵬、我馬虺隤」。
- (12) 塞鼻逃當塗 『世說新語』紕漏「王敦初尙主、如廁、見漆箱盛乾栗、本以塞鼻、王謂廁上亦下果、食遂至盡」。『眞誥』卷四葉六表「紛紛當塗中、孰能步生津」。
- (13) 百痾 『眞誥』卷七葉一三裏「學道者常不能慎事、尙自致百痾、歸咎於神靈」。『黃庭內景經』務成子注敘(『雲笈七籤』卷一一)「若脫履淹沔之者、沐浴盥漱、燒香於左、讀經一過、百痾除也」。
- (14) 清晨 『眞誥』卷九葉一〇裏「清晨按天馬、來詣太眞家」。
- (15) 辭旨蔚然起 『眞誥』卷七葉一二表「又宜辭詣保命定錄二君、辭旨當令如南嶽夫人」。同卷八葉一四表「謝家一門、唐承之世、繁林蔚然、甚可欣也」。
- (16) 玄鄉 『太一帝君太丹隱書』(『雲笈七籤』卷四四)「太一之精、起於太清、…治在六合、周旋絳宮、下達洞門、上到玄鄉」。
- (17) 撫璫 『漢武帝內傳』「撫璫命衆女、詠發感中和」。
- (18) 有有際 『眞誥』卷一三葉一一裏「張玄賓者、定襄人也、此人善能論空無、乃談士、常執本無理云、無者、大有之宅、小有所以生焉、積小有以養小無、見大有以本大無、有有亦無無焉、無無亦有有焉」。
- (19) 駕景遊賢良 『眞誥』卷四葉六裏「駕景眄六虛、思與佳人遊」。
- (20) 促轡 皇甫謐「釋勸論」(『晉書』卷五一皇甫謐傳)「若其義和促轡、大火西積、臨川恨晚、將復何階」。
- (21) 玄句 謝靈運「辨宗論」(『廣弘明集』卷一八)「或謂因權以通、或學而非悟爾、爲玄句徒設、無關於胸情焉」。
- (22) 曲夾 『眞誥』卷一四葉三表「自有石牀石榻、曲夾長短、障隔分別、有如刻成」。
- (23) 辭喻 孫綽「喻道論」(『弘明集』卷三)「若窮迷而不遷者、非辭喻之所感」。
- (24) 玄宗 『太清金液神丹經』(『雲笈七籤』卷六五)「若夫神化之趣、要妙之言、無理之至理、不然之大然、已備載於玄宗、非一毫之所宜也」。

該清道難、通幽妙達、許侯其人也、方將曜靈方丘、騰躍暉霞、身飛九天、作則羣真、師傳金闕、撫<sup>(1)</sup>極<sup>(1)</sup>「拯」種人、其德仁以融、其教整以和、可謂天秀標韻、爲後民之圓匠也、斧子乃潛晨密煥、秀霄空上、託心玄宅、神栖入領、心標寂刃、歸形太初、志割姻親於內外、寄幽會於隱觀矣、雖自思入庇重岫、穎翳雲暉、故叛父也、若父愚可也、交當同編雲札、列名靈簡、運會相遇、何以陳之耶、

昔薛旅字季和、往學眞道於鍾山北阿、經七試而不過、卽長里薛公之弟也、不過者、由淫妖失位、吝鄙內滯、石性不迴、致敗其試耳、然其人好慈和篤、又心愛嘯音鳳響及玄絃之彈、是故虛唱凝神、微聲感魂、神不遂落、由好嘯唱願鳳鳴之故矣、長里先生、燕代人、周武王時人也、先生比乞之於太上、太上故使生、<sup>(3)</sup>「繫」<sup>(3)</sup>「謂應作繼字」肇阿之陰運、致欲其諺微釋滯、<sup>(3)</sup>「於」<sup>(3)</sup>「令」染練新暉、速升虛之超、長里君之願也、若「由」<sup>(3)</sup>「謂應作猶字」怨波不激、淫吝「由」<sup>(3)</sup>「謂應作愈字」出、雖百過試之、故亦昔之薛旅耶、師宗相期、拂飾盡性、苟能其事、我亦罕勞、賢者之舉、此復宜詳、密告由來宿命之始、想有「已」<sup>(3)</sup>「應作以字」悟也、

燕氣內果外柔、沈德樂景、故其人聞北風則心悲、親啓曜則懷泰、思駿驟以慕聘、嘉柔順以變蔚、彼人之心、曷曾不爾乎、此則本鄉之風氣、首丘之內感也、苟能信之、君其諧矣、如其「雍」<sup>(3)</sup>「謂應作壅字」吝秉欲、丹絳不暢、靈人攜手而空反、高友歛袂而迴晏、神氣不

眇其宅、寂通不鼓其目、命矣夫、固可悲耶。〈長里之弟、本燕代人、故此稱其<sup>(4)</sup>「谷」<sup>(4)</sup>「俗」氣、以喻長<sup>(3)</sup>「皮」<sup>(3)</sup>「史」之心也〉

十二月十六日夜、右英告。

右二篇有楊書。

(1) 「極」は「拯」の誤りであらう。

(2) これ以下、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊真人許長史

詩の序に略引される。

(3) 俞本が「今」を「令」に作るのに従う。

(4) 俞本が「谷」を「俗」に作るのに従う。

(5) 俞本が「皮」を「史」に作るのに従う。

道の困難さをはっきりと見極め、奥深い靈妙な領域に通達しているのは、許侯（許長史）こそその人です。必ずや方丘において靈の輝かしさをあらわし、身を躍らせて照り映える霞の上に昇り、九天にあまがけつて眞人たちの模範となり、金闕聖君の補佐役をつとめ、種民たちを救済することでしょう。その徳は仁であつて融通無碍、その教化は整つていて和やか、天上のすぐれた人々の中にあつても

ひとときわ抜きん出、後世の民の圓滿な師匠であると言えましよう。  
 斧子(許玉斧)とはいえば、その輝かしさを秘め隠して、天上世界に抜きん出、心を奥深い住みかに託し、精神を住まわせるべく嶺に入り、心を静寂な刃として研ぎ澄まし、肉體は元始の世界に歸したのです。その志すところは、血縁や親しい者たちを内面においても外形においてもふり捨て、神秘なものとの感應をこの世の背後にあるものへの凝視に託しているのです。自ら望んで重なる峰々の中に姿を隠し、そのすぐれた才能を雲の輝きの中に隠そうとするのですが、しかし父親に背いたことには變わりがありません。もし父親が愚かなのであれば、それでもよいでしょう。しかし二人はやがて同じく天上の名札に記され、その名が神仙たちの簡書にならばはずです。<sup>(8)</sup>運命が結び合はせる時、顔を合はせることになりましようが、その時、どのように説明をするのでしうか。

昔、薛旅、字は季和という者がおり、眞仙の道を學ぶため鍾山の北の山かげに出かけましたが、七回試験を受けても通りませんでした。<sup>(11)</sup>この薛旅は長里薛公の弟なのです。彼が試験に通らなかつたのは、淫佚にしてその位にふさわしくなく、けちんぼでいやしい心が内に凝り固まっております、石のように頑固な性格は變えられず、そのため試験に失敗することとなつたのです。ただ彼は、恵み深く温厚で、加えて心に嘯の聲と鳳凰の鳴聲と玄弦を弾ずることを好んでいましたので、實體を持たぬ聲は精神を凝結させ、玄弦のすぐれ

た響きは魂に感應し、精神が失われることがありますでした。これは嘯の聲を愛し鳳凰の鳴聲を慕つた結果なのです。長里先生は燕代の地の人で、周の武王の時代の人です。先生は近ごろ太上に薛旅のことを願ひ出て、太上はそれ故、薛旅を生まれ變わらせました。あなたは肇阿(許肇)の冥々の運命をひき「繫」へきつと「繼」の字であらういであるので、微妙なものを見極め、凝り固まつたものを除き去り、新鮮な輝きの中で肉體を洗練し、すみやかに天空に昇れるようにしてやろうと思ひ召されるのでして、これは長里君が弟のために願つたところでもあります。それでありながら、「由」へきつと「猶」の字であらうお罪の意識がたかぶらず、欲深くけちな行動が「由」へきつと「愈」の字であらうるようであれば、たとえ百度試験を受けても、昔の薛旅となんら變わらぬではありませんか。教え導く者たちが期待しているのは、虚飾を拂いのけてありのままの本性を盡くすことであつて、それができさえすれば、私も苦勞が少くなるのです。立派な者として推擧されることについて、この點をさらによく考えられるべきです。密かに由つて來たるころの宿命の始まりについてお知らせしました。「已」へきつと「以」の字であらう悟られることもありましよう。

燕の地の氣風は、内心は果敢でもうわべは柔らかく、徳に沈潜し明るい光を喜びます。ですからその地の人は、北風の音を聞けば心が悲しみ、春の光を見れば心が安らぎ、俊馬を思つてはそれを駆け

らせたいとの思いを募らせ、從順さをたつとんで滞つたものを變化させることを喜ぶのです。<sup>(23)</sup>かの地の人の心は、こうでないものはないのです。これがその故郷の風氣であり、狐が死ぬ時に、古樂の丘に頭を向けるような内心の感應なのです。もしこのことを信じられるなら、あなたは資格にびつたりかゝつたことになります。しかしもし、けちくささに「雍」<sup>さまた</sup>へきつと「壅」の字であらうげられ欲を手放すことができず、内心の純粹さが十分に發揮されぬならば、神靈たちは手を攜えて空しく歸つて行き、すぐれた友人たちも手をこまねいてもどつてしまい、神祕な氣が宿るべきところへ訪れて來ることもなく、靜寂な世界との感通が目撃されることもないのです。<sup>(24)</sup>それが運命というもの、何と悲しいことではありませんか。〈長里先生の弟は、もともと燕代の地の人であった。それ故、ここにその土地の風俗風氣を述べて、許長史の心を論したのである〉

十二月十六日の夜、右英夫人のお告げ。

右の二篇は楊羲の書がある。

- (1) 暉霞 蕭道成「塞客吟」(「南齊書」卷二八蘇侃傳)「青關望斷、白日西斜、恬源靚霧、龍首暉霞」。

- (2) 羣眞 『太和眞人傳』(「雲笈七籤」卷一〇四)「或與羣眞衆

仙驂龍馭鳳、策空駕虛、雲馳電邁、出有入無、分形散影、處處遊集」。

- (3) 金闕、種人 『上清後聖道君列紀』「爰有紫微上眞天帝玉清君、遣八景瓊輿來迎聖君、以登上清宮、…受書爲上清金闕後聖帝君、…其後甲申之歲已前已後、種善人、除殘民、…到壬辰之年三月六日、聖君來下、光臨於兆民矣、…於焉滅惡人、已於水火、存慈善、已爲種民、…但此玄文靈術、藏於上清之宮金闕之中、少有見篇目者耳」。

- (4) 後民 『尚書』召誥「越厥後王後民、茲服厥命」。

- (5) 玄宅 高明二法師答李交州森難佛不見形事(「弘明集」卷一)「自有棲志玄宅、下操淵達、愈明一生若朝露、辯三世之虛」。「眞誥」卷七葉一表「當使羣衆靡干於玄宅、哀念冥擾於絳津也」。

- (6) 太初 『列子』天瑞「太初者、氣之始也、太始者、形之始也、太素者、質之始也」。

- (7) 幽會 梁武帝「上雲樂」方丈曲(「樂府詩集」卷五一)「金書發幽會、碧簡吐玄門」。

- (8) 靈簡 『無上祕要』卷三一遇經宿分品「自无太一靈簡、三元金名、司命隱符、五老紫籍、雖受天炁而生、皆不得聞見至道、…右出洞眞太丹隱書經」。

- (9) 運會 盧湛「贈劉琨一首并書」(「文選」卷二五)「嘗自思惟、

因緣運會、得蒙接事」。『無上祕要』卷三一遇經宿分品「若有宿緣、遭遇明師、玄挺運會、應得此文、剋成上仙、…右出洞眞太霄琅書瓊文經」。

- (10) 眞道 謝鎮之「書與顧道士」(『弘明集』卷六)「原夫眞道唯一、法亦不二、今權說有三殊、引而同歸。『眞誥』卷六葉一四表「所以眞道不可對求、要言不可偶聽也」。

- (11) 經七試不過 『神仙傳』張道陵傳に「七試」のことが見える。

- (12) 長里薛公 『眞誥』卷四葉一三裏「策龍上造、浮煙三清、實眞仙之領袖、友長里之先生、必當封牧種邑、守伯仙京」。同卷五葉一二表「人生有骨錄、必有篤志、道使之然、若如青光先生谷希子南嶽松子長里先生墨羽之徒、皆爲太極眞人所友」。

- (13) 鳳響 『眞誥』卷一三葉一六表「卓卓先生、…玉迹東映、鳳響西彰」。

- (14) 太上 『眞誥』卷五葉一裏「太上者、道之子孫、審道之本、洞道之根、是以爲上清眞人、爲老君之師」、注「此即謂太上高聖玉晨大道君也、爲太極左眞人中央黃老君之師」。

- (15) 肇阿 『眞誥』卷一二葉三表「亦如子七世祖父許肇字子阿者、有賑死之仁、拯飢之德、故令雲陰流後、陰功垂澤」。

- (16) 釋滯 釋道恆「釋駁論」(『弘明集』卷六)「或敷演微言、散幽釋滯」。

- (17) 染練 『雲笈七籤』卷四四紫書存思元父玄母訣「三合五離、

混化二元、氣凝成神、神變合魂、胎養九天、保固生門、陰精玄絳、陶灌形源、練質染氣、受化自然」。

- (18) 升虛 『抱朴子』論仙「按仙經云、上士舉形昇虛、謂之天仙」。『眞誥』卷一四葉一七裏「出處嘿語、肥遁山林、以遊仙爲樂、以升虛爲威」。

- (19) 淫吝 『眞誥』卷三葉一七表「淫吝所以喪基、鄙滯所以伐德」。

- (20) 師宗 『無上祕要』卷三四師資品「託身林阜、守情忍色、恭禮師宗、勞弗厭極、苦志篤勵、…右出洞玄法輪經」。

- (21) 賢者之舉 『眞誥』卷四葉一裏「賢者之舉、可不察耶」。

- (22) 聞北風則心悲 「古詩十九首」(『文選』卷二九)「行行重行行、與君生別離、…胡馬依北風、越鳥巢南枝」、注「韓詩外傳曰、詩曰、代馬依北風、飛鳥棲故巢、皆不忘本之謂也」。

- (23) 嘉柔順以變蔚 『周易』坤象傳「柔順利貞、君子攸行」。同革上九象傳「君子豹變、其文蔚也」。

- (24) 首丘 『禮記』檀弓上「古之人有言曰、狐死正丘首、仁也」。

- (25) 神氣 『眞誥』卷一〇葉一九表「又不得言語大呼喚、令人神氣勞損」。

- (26) 寂通 『眞誥』卷一六葉八表「寂通寄興感、玄炁攝動音」。

太元眞人

雲林右英王夫人

南嶽紫虛元君

九華眞妃

清靈眞人

紫陽眞人

桐柏眞人

昭靈李夫人

右八人。

十二月十七日夜。

① 方諸宮東華上房靈妃歌曲

紫桂植瑤園、朱華聲悽悽、月宮生藥淵、日中有瓊池、左拔員靈曜、  
右掣丹霞暉、流金煥絳庭、八景絕煙迴、綠蓋浮明朗、控節命太微、  
鳳精董華顏、琳腴充長肌、<sup>②</sup>「飢」、控晨揖太素、乘欵翔玉階、吐納  
六靈氣、玉嬪把巾隨、彈璫南雲扇、香風鼓錦披、叩商百獸舞、六天  
攝神威、儵欵億萬椿、齡紀鬱巍巍、小鮮未烹鼎、言我巖下悲。<sup>③</sup>按  
楊君記云、「東方赤氣中有言曰、『小鮮未烹鼎、言我巖下悲』、  
當以此事路啓司命、故答稱此詩、仍及後篇也」

④ 太微玄清左夫人北渚宮中歌曲

鬱謁非眞虛、太无爲我館、玄公豈有懷、縈蒙孤所難、落鳳控紫霞、

矯轡登晨岸、寂寂無濠涯、暉暉空中觀、隱芝秀鳳丘、逡巡瑤林畔、  
龍胎嬰爾形、八瓊迴素旦、琅華繁玉宮、綺葩凌巖梁、鵬扇絕億領、  
撫翮扶霄翰、西庭命長歌、雲璈乘虛彈、八風纏綠宇、縈煙豁然散、  
靈童擲流金、太微啓<sup>③</sup>「壁」案、三元起折腰、紫皇揮袂讀、朗朗  
扇景曜、曄曄長庚煥、超軼竦明刃、下盼使我惋、顧哀地仙輩、何爲栖  
林澗。

十二月十七日夜、太元眞人司命君書出此詩云、「是青童宮中內房  
曲、恆吟讀此和神」。<sup>④</sup>其夜衆眞降集、唯有此書存、餘悉不顯、後丁  
卯年論擬分事、亦是十二月十七日、恐偶同耳、此前一事不應是卯年  
也

右三條有楊書。

- (1) この歌、『雲笈七籤』卷九六讚頌歌に見える。
- (2) 俞本が「肌」を「飢」に作るのに従う。
- (3) 『眞誥』卷一七葉五の引用に従って衍字とみなす。
- (4) この歌、『雲笈七籤』卷九七太微玄清左夫人歌に見える。
- (5) 俞本が「壁」を「壁」に作るのに従う。

太元眞人

雲林右英王夫人

南嶽紫虛元君

九華眞妃

清靈眞人

紫陽眞人

桐柏眞人

昭靈李夫人

右八人。

十二月十七日の夜。

方諸宮東華上房靈妃の歌曲

紫の桂<sup>(1)</sup>は瑤玉の園に植わり、

朱い花<sup>(2)</sup>はさやさやと音をたてる。

月宮<sup>(3)</sup>には花しべの淵ができ、

太陽の中には瓊玉の池<sup>(4)</sup>がある。

私は左手で圓く靈妙な日光<sup>(5)</sup>をとり、

右手で丹い霞<sup>(6)</sup>の輝きをひっぱり、

流金の鈴の光は絳い宮庭に輝き、

八景の車はもやをふりきって廻る。

緑の車蓋は明るい空に浮かび、

符節に手をかけて太微君<sup>(7)</sup>に命令する。

鳳の精は華やいた顔<sup>(8)</sup>を若返らせ、

琳玉の肉は長い飢えを充たす<sup>(9)</sup>。

そこで曲晨の車のスピードをおさえて太素君にご挨拶し、

つむじ風に乗って玉のきざしに飛んで行く<sup>(10)</sup>。

六靈<sup>(11)</sup>の氣を呼吸すると、

玉のごとき女官が手巾を持って後に従う。

雲璈の樂器を鳴らせば南の雲がふわりふわりと翻り、

香わしい風が錦のうちかけをばたばたと打つ<sup>(12)</sup>。

商の音の鐘をたたけば百獸が舞い踊り<sup>(13)</sup>、

六天もその神威をおさめる<sup>(14)</sup>。

忽ちにして何億萬年もの時がたっても、

私の齡はいつまでも盛ん。

小魚のようなつまらぬ身は鼎では煮てもらえず<sup>(15)</sup>、

そこで私は山中の岩の下で悲しむばかり。

〈按ずるに、楊君のノートには、「東方の赤氣の中で、『小魚のよう  
うなつまらぬ身は鼎では煮てもらえず、そこで私は山中の岩の下で  
悲しむばかり』と詠じた者がいたというが、きっとこのことを司

命君にはかり、それでこの詩を答えとして詠じ、なおそのうえ、後  
の一篇に言い及んだのであらう〉



太微玄清左夫人の北渟宮中の歌曲

もやもやとたちこめて<sup>(17)</sup>いるのは眞の空虚ではありません、

太無の世界こそわが館なのです。

玄公などに心をかけることはありません、

惑いや迷妄こそが私の苦難なのです。

降下する鳳は紫の霞の中でスビードをおさえ、

手綱をひかえて玉晨の岸の上に登ると、

そこはひっそりとしてはてしなくひろがり、

輝かしい空中の眺め。

隱芝<sup>(18)</sup>は鳳の舞う丘<sup>(19)</sup>にのび、

車は瑤玉<sup>(19)</sup>の林のあたりでたちもとおる。

龍胎<sup>(20)</sup>の仙薬はあなたの姿を幼児に變え、

八瓊<sup>(21)</sup>の丹薬は生まれたばかりの頃にもどす。

琅玉<sup>(22)</sup>の花が玉宮に咲き誇り、

美しい花びらが岩の上ところせましと照り映える。

大鵬は何億もの嶺々を飛びこえ、

翼を羽ばたかせて空高く舞い上がる。

西の宮庭では長歌<sup>(23)</sup>するように命じ、

雲璈<sup>(24)</sup>を虚空に浮かびながら弾く。

すると八方からの風が緑の宮居にまわりつき、

集まっていたもやもかからりと散じた。

靈童<sup>(25)</sup>は流金の鈴をうち振り、

太微君は玉璧の机を捧げ、

三元君は立ちあがって腰をまげ、

紫皇はたもとを振って讃歎<sup>(26)</sup>する。

明るく光がきらめき、

金星がきらきらと輝く<sup>(27)</sup>。

その天空を飛ぶ車は明るい刃のようならめきを發し、

下方を眺めると私を嘆き悲しませる。

かわいそうなのは地仙<sup>(28)</sup>の連中、

どうして林中の谷川のほとりに住んでいるのでしょうか。

十二月十七日の夜、太元真人司命君がこの詩を書きだし、「青童

宮中の内房の曲で、いつもこの曲を吟じ讀えて心をなごませている」

と言われた。へその夜、多くの眞人たちが降り集まったが、ただこ

の書きつけが残っているだけで、ほかはすべて不明である。後、丁

卯の年（太和二年、三六七）に（三許の）すぐれた資質を論じた

のも十二月十七日であるが、恐らくは偶然の一致であろう。ここ

の一段は卯の年であるはずはない。

右の三條は楊羲の書がある。

- (1) 紫桂 『拾遺記』卷一顯頊「閼河之北有紫桂成林、其實如棗、羣仙餌焉」。
- (2) 朱華 曹植「公讌詩」(『文選』卷二〇)「秋蘭被長坂、朱華冒綠池」。「三洞珠囊」卷四神丹仙藥名品「文始內傳云、老子與關令東遊、登日窟常陽之山、掇扶桑之丹楨、散若林之朱華」。
- (3) 月宮 『雲笈七籤』卷八釋三十九章經「第三十章、種年祚於日氣之中、植三命於月宮之庭」。
- (4) 瓊池 張融「海賦」(『南齊書』卷四一「張融傳」)「瓊池玉壑、珠岫瑯岑、合日開夜、舒月解陰」。
- (5) 員靈 『雲笈七籤』卷四一沐浴吉日「洞玄二十四生圖經云、天河灌東井、石景水母精、圓光拂靈曜、玄暉瑩高明」。
- (6) 丹霞 『真誥』卷四葉三裏「綵雲繞丹霞、靈謁散八空」。
- (7) 太微 『雲笈七籤』卷八釋三十九章經「第五章、太微天帝君曰、…此皆太微之所館、天帝之玉宇也、…第八章、太微小童負五圖於帝側、絳宮真人承五符於胎尊」。
- (8) 華顏 陸機「贈紀士」「脩姱協姝麗、華顏婉如玉」。「三洞珠囊」卷八相好品「靈寶三部八景二十四相在中分者、…二十者華顏玉質」。
- (9) 充長肌 『真誥』卷三葉三表「咀嚼充長肌」。
- (10) 玉階 班固「西都賦」(『文選』卷一)「於是玄墀鉅砌、玉階彤庭」。
- (11) 六靈 『中山玉櫃服氣經』(『雲笈七籤』卷六〇)「百神守衛、六靈潛護」、注「六靈者、眼耳鼻舌身意、亦謂之六識」。
- (12) 彈璫 『真誥』卷四葉四表「彈璫北寒臺、七靈暉紫霞」。
- (13) 叩商百獸舞 『尚書』舜典「夔曰、於、予擊石拊石、百獸率舞」。
- (14) 六天攝神威 『真誥』卷一七葉一二裏「六天攝威、消滅魔氣」。
- (15) 小鮮未烹鼎 『老子』第六十章「治大國、若烹小鮮、以道莅天下、其鬼不神」。
- (16) 楊君記 『真誥』卷一七葉五表「東方有赤氣之內、有詠言曰、小鮮未烹鼎、言我巖下悲」、注「此是東華宮中歌詩之辭」。同「風伯不搖條、…讀書如此」、注「此是存洞房三眞事、并前條竝楊所自記所感聞之事也」。
- (17) 鬱謁 『真誥』卷一〇葉二表「藹鬱紫空、鍊形保全」。
- (18) 隱芝 『黃庭內景經』中池章第五(『雲笈七籤』卷一一)「隱芝翳鬱自相扶」、注「按內外神芝訣云、五藏之液爲內芝、內芝則隱芝也」。「真誥」卷五葉一五裏「若得太極隱芝服之、便爲左右仙公及真人矣」。
- (19) 瑤林 陸雲「九愍」紆思「懷瑤林之珍秀、握蘭野之芳香」。
- (20) 龍胎 『漢武帝內傳』「其次藥有八光太和、班龍黑胎、文虎白沫、出于西丘」。梁簡文帝「七勵」(『文苑英華』卷三五)「桂臺石瓊、龍胎鳳肺、四膳八珍、五肉七菜」。

- (21) 八瓊 『黃庭內景經』肝氣章第三十三『雲笈七籤』卷一二  
「唯待九轉八瓊丹」、注「八瓊、丹砂雄黃雌黃空青硫黃雲母戎鹽硝石等物、是也」。
- (22) 玉宮 『雲笈七籤』卷八釋三十九章經「第二十六章、玉宮者、是得道符籙之所在也」。
- (23) 長歌 張衡「西京賦」(『文選』卷二)「女娥坐而長歌、聲清暢而蜚蛇」。
- (24) 雲璈乘虛彈 『眞誥』卷七葉一表「雲璈虛彈乎空軒也」。
- (25) 靈童 『無上祕要』卷一五衆聖本迹品中「金母封其西靈玉妃之號、卽命九光靈童、披霜羅之縕、出靈寶眞文白帝一篇、以授皇妃、…右出洞眞外國放品經」。
- (26) 揮袂 曹植「七啓」(『文選』卷三四)「揮袂則九野生風、慷慨則氣成虹蜺」。
- (27) 曄曄長庚煥 班固「西都賦」(『文選』卷一)「蘭茝發色、曄曄猗猗」、李善注「說文曰、曄、草木白華貌」。『史記』天官書「察日行以處位太白」、索隱「韓詩云、太白晨出東方爲啓明、昏見西方爲長庚」。
- (28) 地仙 『抱朴子』論仙「按仙經云、上士學形昇虛、謂之天仙、中士遊於名山、謂之地仙、下士先死後蛻、謂之尸解仙」。
- (29) 林澗 『宋書』卷九三戴顓傳「山北有竹林精舍、林澗甚美、顓憩于此澗」。

- (30) 論挺分事… 『眞誥』卷四葉九表注「從此後竝似是丁卯年中授書、此事皆論三許挺分也」。同卷四葉一三表「太和二年歲在丁卯、十二月十七日夜、太元眞人司命君告穆」以下がこれに當る。

「玄玄卽排起」、注之曰、

「故玄玄以八風爲關」(『纂』篇、天地爲隄防、四海爲甕盎、九州爲糝糠、積之以萬殊、蒸之以陰陽、其陶鑄也、充隆炊累、剛柔清濁、象類不同、呼吸吐合」。

「恭伯榮」、注之曰、

「九絕獸、神禽也、在乎羣猛之中、猾狡乎激奇之際、千年不足極其變、萬殊不足適其內、日月不足照其肩、八澤不足遊其足、清雲爲卑、九垓爲淺、八宏爲小、四極爲近、變動無常、恆入之芥子之內、玉晨之玉寶、太微之威神矣」。此二條是釋『神虎隱文』中語、不知何眞所告、又無日月、是兩手同書」

- (1) 『眞誥』卷一七葉一表に「關」を「橐」に作るのに従う。

「玄玄卽排起」<sup>(1)</sup>。これに注して言う、

「かくて玄玄は八方の風をふいごとし、天地を土手とし、四海を水がめとし、九州を秕糠<sup>(3)</sup>とし、さまざまの異なったものを積み上げ、陰陽の氣で蒸しあげる。それが萬物を造り出す時には、ぐつぐつと沸き立って、剛と柔、清と濁など異なった性質に分かれ、それら形象種類の同じでないものを、息を吸ったり吐いたりして合成するのである」<sup>(3)</sup>。

「恭伯榮」<sup>(6)</sup>。これに注して言う、

「九絶獸は神獸である。もろもろの猛獸の中にあつて、激動の時には猛りたつ。千年という長い時間もその變化を極め盡くすには十分でなく、何萬もの異なった姿もその内實にびったりかなうには十分でない。日月の明るい光もその肩を照らすには十分でなく、八澤の廣大さもその足を遊ばせるには十分でない。(この獸にとつては) 空高い清雲も低く、九重にも重なつた天も薄つべらいもの、廣大な八紘の世界も小さく、天地四方のはてたる四極も近い。絶えず變動して定まつた姿はないが、普段は芥子粒の中に入っている。玉晨世界の玉寶<sup>(9)</sup>、太微世界の威神<sup>(10)</sup>である」。(この二條は、『神虎隱文』の中の語を注釋したもので、どの眞人が告げられたものか分からない。また日付もなく、筆跡の異なる二人が一緒に書いている)

(1) 玄玄卽排起 『太上神虎隱文』「玄玄那排起」。『洞眞太上說智慧消魔眞經』卷二入定品「玄玄卽排起」。『眞誥』卷一七葉一

表「玄玄卽排起、…太微之威神矣」。『靈寶洞玄自然九天生神章經』無想無結無愛天生神章第九(『雲笈七籤』卷一六)「無結固無情、玄玄虛中澄」。

(2) 藁籥 『老子』第五章「天地之間、其猶藁籥乎」。

(3) 秕糠 『莊子』逍遙遊「是其塵垢秕糠、將猶陶鑄堯舜者也、孰肯以物爲事」。

(4) 炊累 『莊子』在宥「神動而天隨、從容無爲而萬物炊累焉」、釋文「司馬云、炊累猶動升也、向郭云、如塵埃之自動也」。

(5) 呼吸吐合 『莊子』刻意「吹陶呼吸、吐故納新、熊經鳥申、爲壽而已矣」。

(6) 恭伯榮 『眞誥』卷一七葉一裏「恭柏榮」。『太上神虎隱文』「彈調赫栢榮」。『洞眞太上說智慧消魔眞經』卷二入定品「彈調赫栢榮」。

(7) 八澤 『淮南子』墜形訓「九州之外、乃有八殞之外、而有八紘、亦方千里」。

(8) 變動無常 『周易』繫辭傳下「易之爲書也不可遠、爲道也屢遷、變動不居、周流六虛、上下無常、剛柔相易」。

(9) 玉晨之玉寶 『太上飛行九神玉經』(『雲笈七籤』卷二〇)「微

祝曰、天妃九星、凝氣結真、七曜纏絡、號曰玉晨」。『真誥』卷

一〇葉一二表「得錄上皇、謹奏玉晨」。『漢書』郊祀志「上自幸

河東之明年正月、鳳皇集般祔、於所集處得玉寶、起步壽宮、乃  
下詔赦天下」。

(10) 威神 揚雄「甘泉賦」(『文選』卷七)「配帝居之縣圃兮、象  
泰壹之威神」。

君惶恐言、仁德流映、高蔭彌綸、每貽翰音、恩逮繡綺、旨諭有威  
恆之順、宗期則玄霄之會、雖欽願榮崇、欣想靈誥、竊懼熠燿之近暉、  
不可參二景之遠麗、嚶彼之小宿、難以則七元之靈觀、尊卑殊方、高  
下異位、俯仰自失、罔知所據、凡善誘者勤其切磋、忠愛者憂其怠惰、  
大易所以乾乾、仲尼所以發歎於不倦者也、自奉教以來、洗心自勵、  
沐浴思新、其勸獎也、標明得道之妙致、其檢戒也、陳宿命之本迹、  
淫吝所以喪基、鄙滯所以伐德、雖盧醫之貢針艾、扁鵲之獻藥石、無  
以喻也、子張存聖教於紳帶、西董佩章紱以自矯、蓋以外戒內、以義  
規心、仰銜清訓、謹書之丹懷、藏之六腑、奉以周旋、弗敢失墜、庶  
五難解凍於爐門、七試飄靜於淵谷、方將逍遙東山、考室龍林、靈構  
蕭蕭、丘園沖深、庭延雲駕之奇友、堂列羽服之上真、句金錫五芝之  
寶、滄浪施長年之珍、(期)「斯」實夙夜之乃願、信誓不敢誣於神明

者也、唯少鑒之、君惶恐言。(此長史答右英前七月二十八日喻詩世珍  
芬馥交者、并酬前書論薛旅事、猶恐是十二月申)  
右此一篇、長史令乙寫。

(1) 俞本が「期」を「斯」に作るのに従う。

某君、恐れながら申し上げます。あなたの仁徳は光り輝き、氣高  
い御恩恵はあまねく世をおおっております。いつもお手紙をいただ  
くたびに、蒙った御恩が心にまつわって離れません。以前の御教示  
には(私との間の)易の威の卦と恆の卦の象徴するような感應の順  
當さが説かれてあり、教え導く者として期待しているのは玄妙な雲  
氣の中での交會だとありました。謹んで山のように尊いお姿を見る  
ことを願ひ、すばらしいお告げをぜひ聞きたいものと思ひますけれ  
ども、ひそかに恐れるのは、螢のちっぽけな光のような私は、遠く  
天に懸かっている日月の光のようなあなたと交わることはできず、  
かすかなあの星屑(5)のような私は、北斗七星のすばらしい姿のような  
あなたと仲間となるのは難しかろうということです。二人の尊卑は  
あり方が異なり、高下の位は異なります。おのれを見下しあなたを  
仰ぎ見ては茫然自失し、身の置き所も分かりません。そもそも誘い

上手の者は、人が切磋琢磨<sup>(6)</sup>磨するよう心を盡くし、忠愛の心の者は、人が怠惰<sup>(7)</sup>なのを憂えます。『易經』に乾乾としてつとめ勵むとあるゆえん、孔子が倦まず人に教えることに感慨を發したゆえんです<sup>(8)</sup>。お教えを奉じてよりこのかた、心を洗い清めて自らを勵まし、沐浴して一新をはかろうと思ってきました。あなたは私を獎勵しようとして、道を得ることのすばらしい境地をはっきりお示し下さり、戒めようとて、宿命の基つくところを述べ、度をこしたけちくさは根本を失うゆえん、凝り固まったいやしさは徳を損うゆえんであると教えられました。盧國の名醫が針灸を施し<sup>(9)</sup>、扁鵲が藥石を獻じたこととて、いっこうにたとえとはなりません。子張は聖人の教えを大帶に書きとめ<sup>(10)</sup>、西門豹と董安于は皮繩と弓弦をそれぞれ身に着けて自分を矯正しましたが、思うに、外面でもっておのれの内面を戒め、正義でもって心を規制したのです。私もあなたのすぐれた教訓をうけたまわったからには、謹んでこれを丹心に書き記し、六腑の中にしまいこみ、これにのっとって行動し、ふみ外すようなことは決して致しません。(こうすれば)五つの困難は爐の前で水が融けるごとく消え失せ、七度の試験もつむじ風が深い谷で靜まるごとく順調に通るのではないかと期待しています。今や私は東山にぶらりと出かけ、龍林に居室を構えようと思います。その靈妙な建物<sup>(11)</sup>はさびさびとしており、丘園はからりと奥深く、庭には雲に乗ってやって来るすばらしい友人たちを招き、座敷には羽服<sup>(12)</sup>を着た上眞たちが居な

らび、句曲金壇は五芝の寶を賜わり<sup>(13)</sup>、滄浪山は長生の珍寶<sup>(14)</sup>を下さることでしょう。これこそ實に朝晩すっと思ひ續けている願ひであつて、嘘いつわりなく心に誓つて神明をあなどったりは致しません。どうか少しく見そなわし賜わらんことを。某君<sup>(15)</sup>、恐れながら申し上げます。へこれは許長史が右英夫人の以前の七月二十八日のお諭しの詩、「世にも珍らかな馥郁たる交わり」で始まるものに答え<sup>(16)</sup>、かつ前の手紙の薛旅を論じた事に應えたもので、やはり恐らく十二月中のものであらう。

右のこの一篇は、許長史が某乙に書寫させた。

- (1) 翰音 『周易』中孚上九「翰音登于天、貞凶」、注「翰、高飛也、飛音者、音飛而實不從之謂也」。
- (2) 旨諭有威恆之順 『眞話』卷一葉一四裏「同目威恆象、高唱爲爾因」。同卷二葉一八裏「威恆當象順、攜手同衾帶」。
- (3) 宗期則玄霄之會 『眞話』卷二葉一八表「世珍芬馥交、道宗玄霄會」。同卷三葉四表「鳴絃玄霄顛、吟嘯運八氣」。同卷三葉一四表「師宗相期、拂飾盡性」。
- (4) 熠燿 『毛詩』幽風東山「熠燿宵行」、毛傳「熠燿、燐也、燐、螢火也」。

- (5) 嚶彼『毛詩』召南小星「嚶彼小星、三五在東」、毛傳「嚶、微貌、小星、衆無名者」。
- (6) 切磋『毛詩』衛風淇奥「有匪君子、如切如磋、如琢如磨」。
- (7) 大易所以乾乾『周易』乾九三「君子終日乾乾、夕惕若厲、无咎」。
- (8) 仲尼所以發歎於不倦者也『論語』述而「子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉」。
- (9) 伐德『毛詩』小雅賓之初筵「既醉而出、竝受其福、醉而不出、是謂伐德」。
- (10) 盧醫 唐楊玄操「難經序」「黃庭八十一難經者、斯乃渤海秦越人之所作也、…以其與軒轅時扁鵲相類、仍號之爲扁鵲、又家於盧國、因命之曰盧醫」。
- (11) 子張存聖教於紳帶『論語』衛靈公「子張問行、子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣、言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉、…子張書諸紳」。
- (12) 西董佩韋絃以自矯『韓非子』觀行「西門豹之性急、故佩韋以緩己、董安于之心緩、故佩絃以自急」。
- (13) 靈構『眞誥』卷一三葉一八裏「宅無乃生有、在有則還空、靈構不待匠、虛形自成功」。
- (14) 羽服『抱朴子』論仙「馬皇乘龍而行、子晉躬御白鶴、或鱗身蛇軀、或金車羽服、乃可得知耳」。

- (15) 句金、五芝『眞誥』卷一三葉二裏「句曲山、秦時名爲句金之壇、以洞天内有金壇百丈、因以致名也」。同卷一二葉一三表「況三秀之靈阿、五芝所播植」。孫綽「遊天台山賦」(『文選』卷一一)「八桂森挺以凌霜、五芝含秀而晨敷」、李善注「神農本草經曰、…赤芝一名丹芝、黃芝一名金芝、白芝一名玉芝、黑芝一名玄芝、紫芝一名木芝、馮衍顯志賦曰、食五芝之茂英」。
- (16) 長年之珍『眞誥』卷六葉三裏「乃可加以五雲水桂、…竝養生之具、將可以長年矣」。
- (17) 此長史答右英…『眞誥』卷二葉一八表に見える。
- (18) 并酬前書論薛旅事『眞誥』卷三葉一三裏に見える。
- 眞誥卷之四  
運象篇第四

仙道寂寂、尋之亦使人不勸也、況復求之於無涯耶、假令東山忽有石髓磐結、紫芝映林、夜光燦爛、燕胎曜峯、靈津肆顯、衆眞羅吟、人人往者皆得撥玄華而揖玉腴、對天仙以散想也、將必相與把臂太虛、駕絡慶雲矣、未審子當「<sup>1</sup>刀」赴、此二日暫遊山澤不、將故以官私自切、不獲一果耶、今之所以爲懈難者、蓋闇推於有無之間耳、以

無期我、我亦無也、空中有眞、子不覩之、不可謂罕彷彿矣、所望在於不褻褻耳、二日可不果、何時能屈駕看金陵乎。

十一月二十九日夜、定録君告許侯。

豈能割目前之近滯、慕難成之遠功耶、若故栖情丘林、憑託京畿者、觀金陵以偶想、將任意於吾子、勿謂我無方從無以鑒矣、心單則試不昞、神苦則教不生、賢者之舉、可不察耶。

保命君告。

右二條楊書、斯告實至言矣。

(1) 俞本が「刀」を「力」に作るのに従う。

眞誥卷之四

運象篇第四

仙道はひっそりと寂まり、それを探求しようとしても、仙道の方から人々に誘いをかけはせぬ。ましてや無際限の世界に追求するのであるから、なおさらである。もし東山に、ふと石髓<sup>(1)</sup>がとぐろを巻

いたように凝結し、紫芝<sup>(2)</sup>が林を照らし、夜光芝が明々と光り、燕胎芝が峰に輝き、靈津<sup>(4)</sup>が止めどもなく流れ出、眞人たちがならんで歌うということにでもなれば、そこに赴く人々は、みな玄妙な華を摘んで玉の脂を酌み取り、天仙<sup>(3)</sup>に向かって思いを晴らすことができるのであり、きつとお互いに虚空で腕を取りあい、瑞雲<sup>(6)</sup>を乗物とするであらう。ところでそなたはつとめて赴き、この二日にしばし山澤に遊べるかな。それとも、あい變わらず宮仕えや私事に追いまくられて、一度の實現すらできないのか。今、怠けて行き惱んでいるわけは、有と無の際をはっきり推し測れないからであらう。そなたが無の立場で私に期待するなら、私もやはり無の立場で應じるのだ。空の中にこそ眞實があるのに、そなたが見ないだけのこと。さながらに見えてこないというわけはあるまい。望みたいのは、袴の裾をからげて世俗の濁流を歩んだりしないことだ。二日に實現できないのであれば、いつになったらわざわざ車を走らせて金陵<sup>(9)</sup>を見に行くことができるか。

十一月二十九日の夜、定録君の許侯へのお告げ。

(そなたは) 目前の淺はかな滯りを除いて、成就し難い遠大な行いを慕うことができるか。<sup>(10)</sup> もし、あい變わらず心を山林に住まわせつつも身を都に託している者が、金陵を眺めて(仙人と)連れあいになりたいたいと思うのは、それはそなたの勝手というものが、私に



そなたを見抜く手立てがないなどと思つてはならぬ。心が疲れはてていては試験で目をかけてもらえず、精神が苦しんでいては教えは生じない。賢者として推擧されたことを、考えてみなくてよいであらうか。<sup>(12)</sup>

保命君のお告げ。

右の二條は楊羲の書。このお告げはまことに最上の言葉である。

(1) 石髓 『眞誥』卷一四葉一七表「周穆王北造崑崙之阿、親飲絳山石髓、食玉樹之實」。『雲笈七籤』卷七九晉鮑靚施用法「諸

入山採八石象石腦流丹珠飛節黃子石髓桂英芝草諸神藥、自无五嶽佩之、此仙物終不可得也」。

(2) 紫芝 『眞誥』卷一七葉九表「紫芝被絳巖、四階植琳瑯、紛紛靈華散、晃晃煥神庭」。『神農本草經』草部赤黑青白黃紫芝「紫芝、味甘、溫、主耳聾、利關節、保神、益精氣、堅筋骨、好顏色、久服、輕身、不老延年、一名木芝」。『雲笈七籤』卷一〇〇軒轅本紀「芝英紫芝金芝黑芝五芝草生、皆神仙上藥」。

(3) 夜光煥燭、燕胎曜峯 『茅君內傳』(『太平御覽』卷九八六芝下)「句曲山有神芝五種、第一曰龍仙芝、…第二曰名參成芝、…第三曰燕胎芝、其色紫、形如葵、葉燕象如欲飛狀、光明洞徹、

服一株、拜爲太清龍虎仙君、第四曰名夜光芝、其色青、實正白、如李、夜視其實、如月光照洞一室、服一株爲太清仙官、第五曰玉芝、…」。

(4) 靈津 『眞誥』卷四葉七表「神玉曜靈津、七元煥神扉」。

(5) 天仙 『眞誥』卷九葉二〇裏「青君宮在東華山上、方二百里中、盡天仙上眞宮室也」。

(6) 慶雲 『眞誥』卷四葉五裏「慶雲纏丹爐、練玉飛八瓊」。

(7) 未審子當力赴、此二日暫遊山澤不 『眞誥』卷一一葉一三表「又常以二日登山、延迎請祝、自然得見吾也、誠之至矣、…三月十八日、十二月二日、東卿司命君、是其日上要總眞王君、太虛眞人、東海青童、合會於句曲之山、游看洞室、好道者欲求神仙、宜預齋戒、待此日、登山請乞、篤志心誠者、三君自即見之、抽引令前、授以要道、以入洞門、辟兵水之災、見太平聖君」。またその部分の注参照。

(8) 褰裳 『眞誥』卷一葉一四表「振衣塵滓際、褰裳步濁波」。

(9) 金陵 『眞誥』卷一一葉一表「金陵者、洞虛之膏腴、句曲之地肺也、…句曲山源、曲而有所容、故號爲句容里、過江一百五十里、訪索即得、江水之東、金陵之左右間小澤、澤東有句曲之山、是也」、注「此蓋呼秣陵之金陵、非地肺之金陵矣」。

(10) 豈能割目前之近滯、慕難成之遠功耶 『抱朴子』至理「自非受命應仙、窮理獨見、…瘠身名之親疏、悼過隙之電速者、豈能

棄交修餘、抑遺嗜好、割目下之近欲、修難成之遠功哉」。

(11) 偶想 『眞詰』卷三葉五裏「未覩若人遊、偶想安得康」。

(12) 賢者之舉、可不察耶 『眞詰』卷三葉一四表「賢者之舉、此復宜詳」。

奉十一月二十九日告、「得道者以其能排却衆累、直面而進、於是百度自淨、衆務雲散、該其優者、不足爲勞、披于艱者、可以表心、正月中必有龜山客來東山、至時〔渠〕〔此應作詎字〕可不一力乎」、奉覽高命、欣然無量、始入此月、公私艱掇、未獲從心、〔命〕〔使〕〔此本是今暫字、後人改作命使〕到京、往反計日、還便沐浴、躬詣朝拜、不失此月、若吉日未過、願垂告敕。

又告、「賢者之舉、復宜詳之」、昔未受上道之前、有欲索側人意、有稱說堪陶獎者、受隱書之後、此計都冥也。〔此下有兩字被竊、又齊行剪去、後似復更有語、此論賢者之舉、似仍是前書上紙、而復酬十一月二十九日告、此告今不存、前十一月二十九日告語不同、又云正月龜山客來事、如此復酬後定錄告、亦可是右英書中兼有此語耳、記不具存、難用顯證〕

右二篇長史自書本。

十一月二十九日の次のお告げをいただきました。「仙道の體得者はもろもろのしがらみを捨て去り、まっすぐに進むことができるからこそ、それでよろずの事柄は自然に清淨になり、もろもろの雜務は雲散するのだ。すぐれた資質を備えている者は苦勞するまでもないが、困難にまといつかれている者はその心を表すことができない。ところで、正月の内に、必ず龜山の賓客（西王母）が東山に降來される。その時になれば、〔渠〕〔これはきつと〕「詎」の字であらうして努力して赴かなくてよからうか。このお言い付けを拜見致しまして、限りなく喜んでおります。今月に入ってから、公事私事ともに止めるわけにいかず、思い通りにすることができません。〔命〕〔使〕〔これは本來、「今暫」の字であったが、後人が改めて「命使」にした〕く都に出かけますが、往復にさして日はかかりません。もどればすぐに沐浴し、自ら拜謁に參ります。今月の内に間に合います。もし吉日がまだ過ぎていないのであれば、どうかお告げを垂れ賜いますように。

また、「賢者として推舉されたことについて、もっと詳しく考えるべきだ」とのこと。昔、上道を授かっていなかった頃は、人に求めようとする心があり、陶冶、勸獎にたえる男だと自慢することも

ありましたが、隱書を授かってからは、そのような思いはすっかり影を潜めました。へこの後に二字があつて塗りつぶされており、さらにこの行で切り取られている。この後にさらに言葉があつたようである。ここでは、賢者として推擧されたことについて論じている。やはり、前の書簡の前半部<sup>(3)</sup>のようであるが、しかも十一月二十九日のお告げに答えている。このお告げは今に残つておらず、前の十一月二十九日のお告げは言葉が違つてゐる。また、正月に龜山の賓客が降來することを言っている。そうであれば、さらに後の定録君のお告げに答えていることになる。右英夫人の書簡の中に、兼ねてこのような言葉があつたのかも知れない。記録が完全には残つていないので、はつきり證明することは難かしい。

右の二篇は許長史が自ら書寫したテキスト。

(1) 有龜山客來東山 『眞誥』卷一二葉一二裏「正月二十三日、

東宮上人來看洞中、時或有龜山賓共集、高會眞仙之日、寧可暫登伏龍之鄉、以禮拜於靈岫邪、可示許侯令知之、」注「此亦應是中君、仍前十二月一日言也、東宮上人即青童君、龜山賓即西王母」。

(2) 朝拜 『眞誥』卷五葉七裏「家奉佛道、朝朝朝拜叩頭、求乞

長生」。

(3) 前書上紙 「前書」とは卷三末尾の書簡を指す。

(4) 前十一月二十九日告 『眞誥』卷四葉一表「仙道寂寂、…十一月二十九日夜、定録君告許侯」を指す。

…右定録君所道使疏」の部分であらう。

(5) 後定録告 『眞誥』卷一二葉一二表「華陽中事、當更示爾、

正月二十三日、東宮上人來看洞中、時或有龜山賓共集、高會眞仙之日、寧可暫登伏龍之鄉、以禮拜於靈岫邪、可示許侯令知之、

令勸者勸其事、耽其玄微耳、慎者亦觸類而作也、學道之難、不可書矣、有恥鄙之心者、於道亦遼乎、灌秉然後可貴耳、賢者之舉、自更始爾、今且當內忘。

右紫微夫人道此言。へ此是紫微見長史答右英道賢者之舉事、故復酬此語也、長史婦亡後更欲納妾、而修七元家事、最是所禁、故屢有及之」

手筆何其落落、盧醫之喻、復有韋絃之功、解凍爐門、其旨乃佳、當實心在此濟矣。

定録告。へ此是中君見長史答右英書、復賞讀之也」

心已至也、不復須詣山也、每空懷以向眞、單誠以汎道者、雖欲不教、其可得乎、瞻赴山澤、乃更餘事耳、要都無懷者、實使人悵然、今可停也。

十二月一日夜、定錄告許侯。〈尋此語、復似酬到京不得來事、事相關涉不可領〉

正月二十七日、將不能暫詣欲營宅處耶、龜山眞人似當其日來、未眞至齋者、自可無彷彿、且欲令彼見我乎。

正月十四日保命告。〈案此告極似前所疑事、所以翻覆難解也、從此正月起至後、竝是入丙寅年中事〉

右五條有楊書。

勤勉な人には、自分の務めにいそしみつつ玄妙なる境地を楽しむようにさせます。謹み深い人にも、事あるごとにやる氣を起こさせます。仙道を學ぶ困難は書き盡くせませんが、恥づべくいやしむべき心を抱えている者は、仙道にほど遠いでしょう。執着を洗いそそいでこそ始めて立派なのです。賢者として推擧されることは、自ずと一からやり直します。今はとりあえず、心の内をからっぽにしながらいい。

右は紫微夫人がこれを言われたもの。〈これは紫微夫人が、右英夫人が賢者としての推擧を語ったのに對する許長史の答えを見て、その言葉に應えたのである。長史は、妻の死後、あらためて妾を納れたいと思ひながら、しかも飛步七元家の法を修めようとした。これは仙道では最も禁じられていることなので、しばしばそのことに言及するのである〉

そなたの手筆は何とすばらしいことだろう。盧國の醫者のたとえ、また、皮ひもと弓弦の效能、五つの困難が爐の前で氷のごとく融けるようになどなど、その趣旨は何ともすばらしい。實の心がここにおいて成就するに違いない。

定錄君のお告げ。〈これは、定錄中君が許長史が右英夫人に答えた書簡を見て、またさらに賞賛したのである〉

そなたの心はすでに申し分ない。もはや山に出かける必要はない。いつも胸中をからっぽにして眞理に向かい、ひたむきな氣持で仙道に身をまかせる者は、教えまいとしてもできるものではない。山澤を望んでそこに赴こうとするのは、かえって餘計なことに過ぎぬ。要するに、まるつきりその氣のない者が、本當に私を憂えさせるのだ。今は中止してもよろしい。

十二月一日の夜、定錄君の許侯へのお告げ。〈考えてみるに、こ

の言葉もやはり都に出かけて、やって来られないことについてやり取りをしているようであるが、事柄が關係しているのかどうかはつかめない

正月の二十七日に、住まいを營もうと思つているところにしばらく出かけるわけにはいかぬのか。龜山の眞人がその日にやって来れるようだが、まだ眞に潔齋するに至つていない者には、自ずと（眞人が）さながらに見えることはないかも知れぬ。ひとまず、かの眞人に自分を見てもらいたくはないのか。

正月十四日、保命君のお告げ。〔按ずるに、このお告げ（の内容）は、前のところで疑問とされていた事柄にそっくりである。それで相手の理解のゆかぬ點を繰り返しているのである。この正月から後は、いずれも丙寅の年（太和元年、三六六）になつてからの事柄である〕

右の五條は楊羲の書がある。

（1）七元家事 『眞誥』卷五葉三表「君曰、仙道有飛步七元天綱之經、在世」。同卷一三葉一二裏「咸陽樂長治、東卿司命君鄉里人、…晚從中嶽李先生受道、行七元法、得仙」。同卷二〇葉

一裏「昔有陳雷者、東陽人、…兼得長史自步七元星圖」。  
（2）營宅處 『眞誥』卷一三葉一六裏「許長史今所營屋宅、對東面有小山」。

（3）前所疑事 卷四葉一裏の定録君のお告げを指す。

（1）樂景登霄晨、遊宴滄浪宮、綵雲繞丹霞、靈藹散八空、上眞吟瓊室、高仙歌琳房、九鳳唱朱籟、虛節錯羽鐘、交頸金庭內、結我冥中朋、俱挹玉醴津、儵歛已嬰童、云何當路躡、愆痾隨日崇。

二月九日夜、雲林作。

（2）晨遊太素宮、控輶觀玉河、夕宴鬱絕宇、朝採圓景華、彈璫北寒臺、七靈暉紫霞、濟濟高仙舉、紛紛塵中羅、盤桓囂謫內、愆累不當多。二月十六日、右英作。

（3）玄清眇眇觀、落景出東渟、願得絕塵友、蕭蕭罕世營。吟此再三。

右三篇有楊書。

(1) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人嘯楊真人許長史詩に見える。

(2) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人嘯楊真人許長史詩に見える。

(3) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。

光の乗物に手綱をつけて大空に昇り、

滄浪宮で宴遊すれば、<sup>(1)</sup>

五彩の雲は丹い霞をめぐり、<sup>(2)</sup>

不思議なもやは八方の天空に散り廣がる。

上眞たちは瓊玉の宮室で歌を口ずさみ、<sup>(3)</sup>

高貴な仙人たちは琳玉の小部屋で歌を唱う。<sup>(4)</sup>

九羽の鳳は朱色の笛に唱和し、<sup>(5)</sup>

うつろな節の音が羽の音階の鐘の響きに混ざる。

黄金の庭園の中で首を交えて、<sup>(6)</sup>

私との幽冥の契りを結びましょう。

あいともに玉の甘酒の河をすくって飲めば、

たちまちの内にはや童児の姿。

どうして官界の中にうずくまり、<sup>(7)</sup>

罪と病を日に日に昂じさせることがありましょう。<sup>(8)</sup>

二月九日の夜、雲林右英夫人の作。

夜明けに太素宮に遊び、<sup>(9)</sup>

車の速度を落として玉の河を眺めましょう。

夕べには鬱絶山の館で安らぎ、

朝には圓い光輪の花を摘みましょう。<sup>(10)</sup>

北寒の臺で雲璈を打ち鳴らせば、<sup>(11)</sup>

七星の精靈は紫の霞にきらりと輝く。

濟々たる高貴な仙人たちの舉措、<sup>(12)</sup>

俗塵の網の中は紛々。<sup>(13)</sup>

騒がしい(俗世界の)もやの内にくすぐず留まっていると、<sup>(14)</sup>

罪やわずらいも澤山だとは考えなくなってしまうことでしょう。

二月十六日、右英夫人の作。

深く澄みわたった大空からの遙かな眺め、<sup>(15)</sup>

光の乗物を降下させて現れ出たるは東海の八桴山。<sup>(16)</sup>

俗塵を絶ちきった友を得たいものだ、<sup>(17)</sup>

さびさびとして世俗に煩わされることのない友を。

これを再三吟詠された。

右の三篇は楊羲の書がある。

- (1) 遊宴 向秀「思舊賦」(『文選』卷一六)「追思曩昔遊宴之好、感音而歎」。
- (2) 綵雲 『真誥』卷一八葉一三表「仍仰看見彩雲如虹氣狀」。
- (3) 瓊室 『真誥』卷一六葉七表「鳴鈴仙階、轉軒瓊室者、…」。
- (4) 高仙歌琳房 『真誥』卷九葉二一裏「大方諸宮、青君常治處也、其上人皆天真高仙」。同卷九葉一五表「登玉霄琳房、四眄天下」。
- (5) 九鳳唱朱籟 『真誥』卷一三葉一〇表「九鳳唱朝陽」。
- (6) 交頸 『莊子』馬蹄「夫馬陸居則食草飲水、喜則交頸相靡、怒則分背相踶」。
- (7) 當路 『史記』卷七〇張儀傳「子始與蘇秦善、今秦已當路、子何不往游、以求通子之願」。
- (8) 愆痾 『真誥』卷七葉一裏「復使愆痾填籍、憂哀塞抱」。
- (9) 太素宮 『真誥』卷九葉一四裏「謹啓太上大道高虛玉晨太素紫宮八靈三元君、…」。
- (10) 圓景 『真誥』卷一三葉一〇表「圓景煥明霞、九鳳唱朝陽」。
- (11) 北寒臺 『真誥』卷四葉八裏「俱遊北寒臺、神風開爾襟」。
- (12) 濟濟 『毛詩』大雅文王「濟濟多士、文王以寧」、毛傳「濟濟、多威儀也」。

- (13) 紛紛 宋玉「神女賦」序(『文選』卷一九)「精神悅忽、若有所喜、紛紛擾擾、未知何意」、張銑注「紛紛擾擾、神志陵亂兒」。
  - (14) 盤桓 『周易』屯初九「盤桓、利居貞」。
  - (15) 玄清 『雲笈七籤』卷二五奔辰飛登五星法「白皇者、西方之上眞、太素之尊皇、出入玄清、與皇初道君爲友也」。
  - (16) 東渟 『雲笈七籤』卷一〇四太極眞人傳「老君與尹先生、於東海八渟山、召太帝、集群眞、天下山川洞室仙人、不遠而至」。また『真誥』卷一四葉一九裏「八停山高五千里」以下を參照。
  - (17) 絕塵 范曄「逸民傳論」(『文選』卷五〇)「蓋錄其絕塵不及同夫作者、列之此篇」、劉良注「絕塵、謂絕塵離俗、往而不反者」。
- ① 靈人隱玄峯、眞神輶雲采、玄唱非無期、妙應自有待、豈謂虛空寂、至韻故常在、攜襟登羽宮、同宴廣寒裏、借問朋人誰、所存唯玉子、卓雲虛之駿、抗翻於空同之上、斯人矣、豈不長揖南面、永謝千乘乎。紫微詩、及詠此。
- ② 駕風騁雲輶、晨登太渟丘、絳津連岑振、清波鼓浚流、步空觀九緯、八剛③「綱」皆已遊、暫宴三金秀、來觀建志儔、勸解不相淹、是以積百憂。

二月三十日夜、右英作。

④ 褰裳濟綠河、遂見扶桑公、高會太林墟、寢宴玄華宮、信道苟淳篤、何不栖東峯。

紫微夫人歌此。

⑤ 陵波越滄浪、忽然造金山、四顧終日遊、罕我雲中人。

右英吟此。

⑥ 控景始暉津、飛颿登上清、雲臺鬱絳綦、闔闔秀玉城、晨風鼓丹霞、朱煙灑金庭、綠藥粲玄峯、紫霞巖下生、慶雲纏丹爐、練玉飛八瓊、晏昞廣寒宮、萬椿愈童嬰、龍旂啓靈電、虎旗徵朱兵、高真迴九曜、洞觀均潛明、誰能步幽道、尋我無窮齡。

紫微夫人作。

⑦ 紫闕構虛上、玄館衝絕纈、琳琅敷靈囿、華生結瓊瑤、騁駟滄浪津、八風激雲韶、披羽扇北翳、握節鳴金簫、鳳籟和千鍾、西童歌晨朝、心豁虛無外、神襟何朗寥、迴儼太空嶺、六氣運重幽、我塗豈能尋、使爾不終彫。

右英夫人作。

⑧ 翳謁紫微館、鬱臺散景纈、鸞唱華蓋間、鳳鈞導龍輶、八狼攜絳旌、素虎吹角簫、雲勃爲靈宮、來適塵中翼、解轡佳人寢、同烝自相招、尋宗須臾頃、萬齡乃一朝、椿期會足衰、劫往豈足遼、眞眞乃相目、莫令心徂形、側交反、虛刀揮至空、鄙滯五神愁。

右紫微作。

⑨ 朝啓東晨暉、飛駟越滄淵、山波振青涯、八風扇玄煙、迴昞易遷房、有懷眞感人、三金可遊盤、東岑宜永甄、紛紛當塗中、孰能步生津。

⑩ 飄颻八霞嶺、徘徊飛晨蓋、紫駟騰太空、〔麗〕〔矚〕昞九虛外、玉簫激景雲、靈煙絕幽藹、高仙宴太眞、清唱無涯際、去來山嶽庭、何事有待邁。

四月十四日、紫微夫人作。

⑪ 玄波振滄濤、洪津鼓萬流、駕景昞六虛、思與佳人遊、妙唱不我對、清音與誰投、雲中騁瓊輪、何爲塵中趨。

右同夕右英夫人吟歌此曲。

⑫ 松柏生玄嶺、鬱爲寒林桀、藥葩盛嚴水、未肯懼白雪、亂世幽重岫、巡生道常潔、飛此逸轡輪、投彼遐人轍、公侯可去來、何爲不能絕。

右右英作。



神玉曜靈津、七元煥神扉、靈遷方寸裏、一躍登太微、妙音乘和唱、

高會亦有機、齊此天人眄、協彼晨景飛、總轡六合外、寧有傾與危。

四月二十三日夜、紫微夫人作。

玄感妙象外、和聲自相招、靈雲鬱紫晨、蘭風扇綠輶、上眞宴瓊臺、  
邈爲地仙標、所期貴遠邁、故能秀穎翹、翫彼八素翰、道成初不遑、  
人事胡可豫、使爾形氣銷。

四月二十七日夜、南嶽夫人作。

右十二篇有楊書、又雜掾寫。

(1) この段、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。

(2) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊眞人許長史詩  
に見える。

(3) 『雲笈七籤』が「剛」を「綱」に作るのに従う。

(4) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。

(5) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊眞人許長史詩  
に見える。

(6) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。

(7) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊眞人許長史詩

に見える。

(8) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。

(9) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。

(10) 俞本が「麗」を「矚」に作るのに従う。

(11) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊眞人許長史詩  
に見える。

(12) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊眞人許長史詩  
に見える。

(13) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。

靈人たちは不思議な峰<sup>(1)</sup>に隠れ、

神仙<sup>(2)</sup>たちは雲の光彩の中に身をくらましている。

不思議な歌聲が起くるのは必ずその時があり、

不思議な出来事の應現は期待に違わない。

虚空<sup>(3)</sup>は寂まりかえっているばかりだと言えましようか、

至上の響き<sup>(5)</sup>はもともと常にそこに在るのです。

襟を攜えて羽人の宮殿に登り、

ともに廣寒宮<sup>(7)</sup>で安らぎましよう。

仲間は誰かと問われれば、

心にあるのはただ玉子<sup>(9)</sup>(許玉斧)。

雲居<sup>(10)</sup>を翔ける駿馬を高く昇らせ、ぽっかり開けた空間の上に高く羽はたきましよう。この人は南面の君主に深々と頭を下げて暇ごいし、千乗の位の殿様と永遠のお別れをしないことがありましようか。紫微夫人の詩。またこれを口ずさまれた。

風を御して雲の車を驅けらせ、  
明け方、太淳の丘に登れば、  
絳<sup>(11)</sup>いさぎ波は峰に連なつて打ち寄せ、  
清らかな波は急流の上でぶつかりあっている。<sup>(11)</sup>  
虚空を歩み九緯<sup>(12)</sup>(北斗九星)を眺めつつ、  
八綱をすべて経めぐつて、  
しばし三つの黄金の峰<sup>(13)</sup>に安らぐと、  
志を立てた仲間たちを眺めにやつて來たのです。<sup>(14)</sup>  
勤勉と怠惰とは互いに補いがつきません、  
だからこそ千々の憂いが積み重なるのです。  
二月三十日の夜、右英夫人の作。

裳裾をからげて緑の河を渡り、  
かくて扶桑公<sup>(15)</sup>に見え、  
太林の丘に盛大に集い、  
玄華の宮殿で憩いましよう。

道を信ずることがもし篤い<sup>(16)</sup>のなら、  
どうして東山の峰に住まわないのですか。  
紫微夫人がこれを歌われた。

波を凌いで滄浪山を越え、  
たちまちにして黄金の山<sup>(18)</sup>に到着。  
四方を振り返りつつ終日飛びまわったが、  
わが雲中の人(許長史)は見あたらない。  
右英夫人がこれを吟じられた。

光の車を始暉<sup>(20)</sup>の岸に停め、  
つむじ風を飛ばして上清の天に舞い上がる。  
雲の臺<sup>(21)</sup>はこんもりと高く聳え、  
天門は玉城にそそり立つ。<sup>(22)</sup>  
夜明けの風<sup>(23)</sup>が丹い霞を打ち、  
朱い煙が金庭に降り注ぐ。  
緑の花しべは玄嶺に輝き、  
紫の華が巖の下に咲いている。  
めでたき雲が煉丹の爐をつつみ、  
玉から練成されるのは八瓊飛精。  
安らかに廣寒の宮を眺めやると、

萬年の椿の齡もいよいよ赤子のようなもの。

龍の旗で靈妙なる電雷の道を打ち開き、

虎の旗で朱兵を呼び集める。

高貴な眞人たちは日月と七星を廻り、

すべてを洞觀しながら均しく輝きをひそめる。

この幽冥の道を歩み、

わが無窮の齡を尋ねあてる者は誰かいませんか。

紫微夫人の作。

紫の城闕が虚空に構えられ、

玄妙の館がつむじ風の中にそそり立つ。

琳玉や琅玉が靈なる園一面に敷きつめられ、

華が咲いて瓊玉や瑤玉の實を結ぶ。

車を滄浪の岸に馳せると、

八風が雲間の音楽を高鳴らせる。

羽をひろげて北天を蓋う華蓋を翻し、

節を手にとって黄金の簫を吹く。

鳳の笛は多くの鐘の音に調和し、

西童たちが夜明けに歌を唱う。

心は虚無の外にからりと開け、

心の内はなんと明るく静かなことよ。

大空の嶺をぐるぐると舞い、

六氣はその奥深い所をめぐる。

わが道を尋ねてくれることはできませんか、

あなたをして生命を終わらせることはありません。

右英夫人の作。

もやの中にかすむ紫微の館、

こんもりと聳える臺は光とつむじ風を發散する。

鸞が華蓋の間に歌い、

鳳の歌聲が龍の車を先導する。

八匹の狼が絳い旗を攜え、

白虎が角笛を吹き鳴らす。

雲が湧き起こって靈宮にそそぎ、

塵穢にまみれた喧騒の俗世に降下する。

住き人の屋敷で手綱を解き、

氣をとにもするものが自然と招きあうのです。

大本を尋ねるのはわずかな時間、

萬年の齡もなんと一朝のよう。

萬齡の椿も必ずしおれようし、

一劫が過ぎ去る時間もさして遼遠なものではない。

眞を抱く者同士が互に見つめあうと、

心を沮喪(沮喪)〈側交の反〉させることはありません。

(すべてを切り解く) 虚刀を至空に揮いましょう。

凝り固まっていたいやしさが五神を悩ますのですから。

右は紫微夫人の作。

夜明けとともに東の空の輝きを開き、

車を飛ばして滄浪の淵を越える。

山のような波が青い岸邊に打ちよせ、

八風は玄き煙雲を翻す。

易遷の部屋を見やれば、

しみじみとまことに人を感動させる。

三つの黄金の嶺はぶらぶら遊ぶのにふさわしく、

東の嶺は永えに際立つのです。

ごたごたとした俗界の中にあつては、

誰も生命の渡しを渡りすることはできないでしょう。

天空のはてなる八霞の嶺をただよい、

あちらこちらと曲晨の飛蓋を飛ばす。

紫の車は大空にかけ騰り、

九虚の天のさらにその外を眺めやろう。

玉簫は光の雲に激しく響き、

靈妙なる煙はこの上もなく小暗い。

高貴な仙人たちが太眞の宮に安らぎ、

清らかな歌聲は無限に廣がる。

さあ、山中の神庭にいらっしゃい、

どうして有待のままで過ごしたりするのですか。

四月十四日、紫微夫人の作。

黒い波と青い波とがぶつかり合い、

波の逆巻く岸にあらゆる流れがこだまする。

光の車に乗って上下四方の天空を眺めやると、

佳き人と一緒にあればとの思いがつる。

妙なる歌を唱っても私にこたえてくれるものではなく、

清らかな音色も誰のために奏でればよいのでしょうか。

雲の中に瓊玉の車を走らせなさい、

どうして俗塵の世界の中ばかりを走りまわるのですか。

右は同日の夕べに右英夫人がこの曲を吟じ歌われた。

松や柏が玄妙なる嶺に生え、

鬱蒼として寒々とした林中に際立つ。

よもぎの花びらが張りつめた氷の中で咲き誇り、

白雪を恐れる様子もない。

亂れた俗世の中、山中深く身を潜め、

生命の流れに従ってゆくあり方は常に清潔。

この自在の車を飛翔させて、

あの遙かなる神人たちの後を追う。

王侯貴族の地位など常なきもの、

どうしてそのようなものへの執着を斷ち切ってしまえないのです

か。

右は右英夫人の作。

神聖なる玉が靈津を照らし、

北斗七星は神仙の宮殿の扉を輝かす。

神仙への變化は心の中のこと、

一とびで太微宮へ登り着く。

妙なる音楽が調和して奏でられるように、

神仙との盛大なる會合にもやはりその契機があるのです。

この天人の眺めと一つになり、

かの光の車の飛翔に合わせましよう。

手綱を宇宙の外にさばけば、

何の危ういこともありません。

四月二十三日の夜、紫微夫人の作。

妙なる現象を超えた世界で不思議に感應すれば、

二人の調和した聲が互いに招きあう。

靈妙なる雲が紫晨をこんもりと包みこみ、

蘭のかおりの香わしい風が緑の車にそよぐ。

瓊玉の樓臺で安らぐ上眞は、

地仙たちの遙かなる目標なのです。

目指すところは遠大高邁であるのが最も大切、

そうしてこそ卓越した存在となり得ましょう。

かの八素の經典を愛誦すれば、

仙道の成就是決して長い道のりではありません。

俗世の雑事などにどうしてかかずらってよいものでしょうか、

あなたの肉體を消耗させるだけ。

四月二十七日の夜、南嶽夫人の作。

右の十二篇は楊羲の書があり、また許掾の寫しがまじっている。

(1) 玄峯 『眞誥』卷四葉五表「朱煙灑金庭、綠藥榮玄峯」。

(2) 眞神 『雲笈七籤』卷四三存思三洞法「子能行之、眞神見形、玉女可使」。

- (3) 妙應 『雲笈七籤』卷四六祕要訣法雜法第二十五「凡道士登齋入室、忽有靈感妙應、當有吉祥之夢、皆道之欲成兆」。
- (4) 虛空 『晉書』天文志上「日月衆星、自然浮生虛空之中」。
- (5) 至韻 『淮南子』說林訓「至味不嫌、至言不文、至樂不笑、至音不叫」。
- (6) 登羽宮 『雲笈七籤』卷四二存大洞真經三十九真法「世世入仙堂、玄玄登羽宮」。
- (7) 廣寒 『真誥』卷一三葉二表「其第三等、地下主者之高者、便得出入仙人之堂寢、遊行神州之鄉、出館易遷董初二府、入晏東華上臺、受學化形、濯景易氣、十二年氣攝神魂、十五年神束藏魄、三十年棺中骨還附神氣、四十年平復如生人、還遊人間、五十年位補仙官、六十年得遊廣寒、百年得入昆盈之宮」。『上清黃庭內景經』口爲章第三(『雲笈七籤』卷一一)「審能修之登廣寒」、注「廣寒、北方仙宮之名、又云山名、亦曰廣霞、洞真經云、冬至之日、月伏於廣寒之宮、其時育養月魂於廣寒之池、天人採青華之林條、以拂日月光也」。
- (8) 朋人 『晉書』卷四一魏舒傳「(魏舒)累遷後將軍鍾毓長史、毓每與參佐射、舒常爲畫籌而已、後遇朋人不足、以舒滿數」。
- (9) 玉子 『真誥』卷四葉一四表「於焉玉子、採此雙辰、遂開上道、允得妙門、…右說道許玉斧所得之分」。
- (10) 雲虛 『登真隱訣』卷中「體象五星、行常如跚空」、注「行步若在雲虛之中、非如履斗乘綱也」。
- (11) 清波鼓淩流 『楚辭』哀時命「蛟龍潛於旋淵兮、身不挂於罔羅、知貪餌而近死兮、不如下游乎清波」。『史記』河渠書「河湯湯兮激滌淩、北渡汚兮淩流難」。
- (12) 九緯 『雲笈七籤』卷二五昇斗法「太上丹靈、玄光鸞煥、九緯啓璇、暉氣澄散、紫晨幽燭」。
- (13) 三金 『真誥』卷四葉六表「三金可遊盤、東岑宜永甄」。
- (14) 建志 『真誥』卷一二葉二表「子建志有年、今因以反子昔旨耳」。
- (15) 扶桑公 『真誥』卷一四葉一九裏「八淳山高五千里、周巾七千里、與滄浪方山相連比、其下有碧水之海、…在滄浪山之東北、蓬萊山之東南」、注「此即扶桑大帝所居也」。
- (16) 信道荀淳篤 『真誥』卷六葉八裏「又曰、念道、行道、信道、遂得信根」。『後漢書』列傳六九下許慎傳「許慎字叔重、汝南召陵人也、性淳篤、少博學經籍」。
- (17) 陵波 『楚辭』哀時命「勢不能凌波以徑度兮、又無羽翼而高翔」。
- (18) 金山 『無上祕要』卷四「東方有三蓋山、三霍山、三台山、二金山、竝名山、句曲卽金壇之一」。
- (19) 四顧 『莊子』養生主「提刀而立、爲之四顧、爲之躊躇、滿志、善刀而藏之」。

(20) 始暉 『真誥』卷九葉二四裏「扶晨始暉生、紫雲映玄阿」。『雲笈七籤』卷二一後四天「東華真人呼日爲紫曜明、亦名圓珠、亦謂始暉、亦謂太明」。

(21) 雲臺鬱我我 『雲笈七籤』卷四道教相承次第錄「謹按雲臺治中內錄言、太上老君傳授雲臺正治官圖、治山竈鼎等、得四十一代相承、具人名代數如後、第一代老君、…再下平蓋山、授張陵爲雲臺治火芝火仙之經。張衡『西京賦』(『文選』卷二)「清淵洋洋、神山峩峩」、薛綜注「峩峩、高大也」。

(22) 閭闔秀玉城 『楚辭』離騷「吾令帝閭開關兮、倚閭闔而望予」、王逸注「閭闔、天門也」。『元始上真衆仙記』「扶桑大帝住在碧海之中、宅地四面竝方三萬里、上有太真宮碧玉城」。

(23) 晨風 潘岳「懷舊賦」(『文選』卷一六)「晨風淒以激冷、夕雪暘以掩路」。

(24) 龍旂啓靈電、虎旗徵朱兵 『雲笈七籤』卷九六王母贈魏夫人歌「龍裙拂霄漢、虎旂攝朱兵」。

(25) 高眞迴九曜 『周氏冥通記』卷二「仰攜高眞士、凌空馭綠輶」。『雲笈七籤』卷二三求月中丹光夫人法「呪曰、…金仙內映、八素四明、九曜降氣、上仙高靈」。

(26) 洞觀 『雲笈七籤』卷五〇金闕帝君三元眞一經訣「得吾三經、即能乘雲、上昇太清、洞觀無窮、遊宴紫庭、微哉深矣」。

(27) 無窮 『莊子』齊物論「樞始得其環中、以應無窮、是亦一无窮、非亦一无窮也」。

(28) 紫闕 『雲笈七籤』卷五二·五辰行事訣「夜半清靜、坐臥任意、臨目視存太白星在玉璫紫闕、…祝曰、高元紫闕、中有五神」。

(29) 玄館衝絕綱 『雲笈七籤』卷八九經告「安非告曰、衝風繁激、將不能伐君之正性、絕聰勃鬱、焉能迴己之清淳、爾乃空冲自吟、虛心待神、營攝百絕、棲澄至眞、當使憂累靡干於玄宅、哀念莫撓於絳津」。

(30) 靈囿 『雲笈七籤』卷四靈寶經目序「上則損辱於靈囿、下則恥累於學者」。

(31) 雲韶 『真誥』卷七葉二裏「衆藻集而龍章成、羣聲會而雲韶諧、辛酸備則嘉味和耳」、注「中候夫人答、此二辭乃出抱朴子外篇博喻中」。

(32) 虛無 『莊子』刻意「夫恬淡寂寞、虛无无爲、此天地之平、而道德之質也、…虛无恬淡、乃合天德」。

(33) 神襟 謝朓「齊敬皇后哀策文」(『文選』卷五八)「睿問川流、神襟蘭郁」。

(34) 重幽 『真誥』卷一八葉一〇裏「聞弟遠造上法、偶眞重幽」。

(35) 素虎 『太元真人東嶽上卿司命眞君傳』(『雲笈七籤』卷一〇四)「今故報盈以斑龍之輿、素虎之輶、盈浮晏太空、飛輪帝庭」。

(36) 靈宮 何晏「景福殿賦」(『文選』卷一一)「清風萃而成響、朝日曜而增鮮、雖崑崙之靈宮、將何以乎侈施」。

- (37) 解轡 謝惠連「三月三日曲水集詩」〔《藝文類聚》卷四〕「解轡優崇丘、藉草繞廻壑」。
- (38) 同炁 『真誥』卷七葉二裏「二月三十日夜、南嶽夫人告許長史、可以示同炁而墮惑者」〔《周氏冥通記》卷一〕「卿勸吾言、勿示世中悠悠之人、山中同炁、知之無嫌」。
- (39) 尋宗 慧遠「沙門不敬王者論」〔《弘明集》卷五〕「故知超化表以尋宗、則理深而義篤、照泰息以語仁、則功未而惠淺」。
- (40) 五神 『雲笈七籤』卷三〇帝一混合三五立法「五因者、是五神也、三道者、是三眞也、夫五神、天之魂、三眞、道之炁」〔《真誥》卷五葉一〇裏「君曰、當存五神於體、五神者、謂兩手兩足頭是也」〕〔《登眞隱訣》卷中「叩齒當臨目、存見五藏具五神、自然存也」〕同卷下「其髮腦眼鼻舌五神長短、皆竊用上景中法」。
- (41) 飛軒 『真誥』卷四葉八裏「飛軒出西華、總轡忽來尋」。
- (42) 玄煙 『雲笈七籤』卷一〇二太微天帝君紀「紫度炎光神玄變經云、…玄煙流靄、丹暉纏絡」。
- (43) 易遷房 『真誥』卷一二葉一四表「洞中有易遷館含眞臺、皆宮名也、…此二宮盡女子之宮也」。
- (44) 遊盤 潘岳「西征賦」〔《文選》卷一〇〕「厭紫極之閑敞、甘微行以遊盤」。
- (45) 飄飄 『三國志』卷三四先主甘皇后傳「大行皇帝存時、篤義垂恩、念皇思夫人神柩在遠飄飄、特遣使者奉迎」。
- (46) 九虛 『太上飛行九神玉經』〔《雲笈七籤》卷二〇〕「上棲九虛、下翔天淵、自號玉皇、九天極眞」。
- (47) 幽謁 左思「蜀都賦」〔《文選》卷四〕「梗枿幽謁於谷底、松柏蒼鬱於山峯」。
- (48) 高仙 『大洞眞經』第三十六章「玉眞萬華宮、高仙藏帝經」〔《道教義樞》卷一位業義「小乘仙有九品、一者上仙、二者高仙、三者大仙、四者神仙、五者玄仙、六者眞仙、七者天仙、八者靈仙、九者至仙」〕。
- (49) 清唱 陸機「文賦」〔《文選》卷一七〕「譬偏絃之獨張、含清唱而靡應」。
- (50) 玄波 『雲笈七籤』卷九六太上智慧洞玄經頌「靈仙乘慶霄、駕龍躡玄波」〔習鑿齒「與釋道安書」〔《弘明集》卷二二〕「雨甘露於豐草、植栴檀於江湄、則如來之教、復崇於今日、玄波逸響、重蕩徂於一代矣」〕。
- (51) 六虛 『周易』繫辭傳下「易之爲書也不可遠、爲道也屢遷、變動不居、周流六虛」。
- (52) 妙唱 『太清金液神丹經』〔《雲笈七籤》卷六五〕「大哉妙唱、可謂神矣、言理之極、弗可尚也」。
- (53) 清音 『清虛真人王君內傳』〔《雲笈七籤》卷一〇六〕「於是西城真人笑而答曰、道君今何清音之不妙、曲問之陋碎哉」。
- (54) 瓊輪 『雲笈七籤』卷三〇大洞廻風混合帝一之法「中央玄一、



：賓我入八景、廻駕瓊輪、仰升九天、白日飛仙。

(55) 松柏生玄嶺 郭璞「遊仙詩」(『文選』卷二一)「寒露拂陵茗、

女蘿辭松柏。」「雲笈七籤」卷八〇洞玄靈寶三部八景二十四住圖

「靈嶽鬱嵯峨、翠阜凌景霄、五芝秀玄嶺、仙草茂霜條」。

(56) 寒林 陸機「歎逝賦」(『文選』卷一六)「步寒林以悵惻、翫

春翹而有思」。

(57) 妙音 郭璞「遊仙詩」(『文選』卷二一)「姮娥揚妙音、洪崖

領其頤」。

(58) 天人 『莊子』天下「不離於宗、謂之天人、不離於精、謂之

神人、不離於眞、謂之至人」。

(59) 六合外 『莊子』齊物論「六合之外、聖人存而不論、六合之

內、聖人論而不議」。

(60) 玄感妙象外 傅亮「爲宋公修張良廟教」(『文選』卷三六)「風

雲玄感、蔚爲帝師。」「元始無量度人上品妙經四注」卷一「元始

天尊當說是經、周回十過、以召十方、始當詣坐」、李少微注「故

洞神經云、妙象无形、應感有體」。

(61) 和聲 『左傳』昭公二十一年「則和於物、物和則嘉成、故和

聲入於耳而藏於心」。

(62) 靈雲 『雲笈七籤』卷四二存大洞眞經三十九眞法「靈雲始分、

白氣鬱素、混會九玄、三五流布」。

(63) 蘭風 「伯益」(『宋書』樂志四)「蘭風發芳氣、闔世同其芬」。

(64) 八素翰 『登眞隱訣』(『太平御覽』卷六七二)「八素之經是

聖君以白素之繒八色之彩筆自書也」。

(65) 人事 成公綏「嘯賦」(『文選』卷一八)「逸羣公子、體奇好

異、傲世忘榮、絕棄人事」。

(66) 形氣 『列子』湯問「雖然形氣異也、性鈞已、無相易已、生

皆全已、分皆足已」。

① 清淨願東山、蔭景栖靈穴、悄悄閑庭處、翳蒼青林密、圓曜映南軒、

朱鳳扇幽室、拱袂閑房內、相期啓妙術、寥朗遠想玄、蕭條神心逸。

閏月三日夜、右英作、示許長史。〈案晉曆、丙寅年閏四月也〉

右有楊書、又掾寫。

(1) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊眞人許長史詩  
に見える。

清淨な氣持でひとえに東山に思いをかけ、  
人知れず靈妙な洞窟に隠れ住もう。

安らかに静かな庭はひっそりと静まり、

こんもりと緑の林は茂っている。

圓い太陽が南の軒を照らし、

朱い鳳は小暗い部屋に羽ばたく。

袖をとりあうのは静かな部屋の中、

二人してすばらしい方術を始めましょう。

心は虚にして遠き思ひは玄妙、

ひっそりとして精神と心とは自在。

閏月三日の夜、右英夫人がお作りになり、許長史に示された。〈晉の曆を案するに、丙寅の年の閏四月である〉

右は楊羲の書があり、また許掾の寫しがある。

(1) 情情 『左傳』昭公十二年「對曰、能、其詩曰、祈招之情情、

式昭德音」、杜注「情情、安和貌、式、用也、昭、明也」。

(2) 翳蒼 張華「鷦鷯賦」(『文選』卷一三)「翳蒼蒙籠、是焉游集」。

(3) 朱鳳 『元始無量度人上品妙經四注』卷二「參駕朱鳳五色玄龍」、嚴東注「參、雜也、雜駕朱雀鳳凰五色之龍白虎玄武也」。

(4) 閑房 何劭「雜詩」(『文選』卷二九)「閑房來清氣、廣庭發暉素」。

(5) 妙術 陸機「漏刻賦」(『初學記』卷二五)「信探頤之妙術、

雖天神其若靈」。

(6) 寥朗 孫綽「遊天台山賦」(『文選』卷一一)「恣心目之寥朗、任緩步之從容」、李善注「寥朗、謂心虛目明也」。

(7) 蕭條 『淮南子』齊俗訓「故蕭條者形之君、而寂寞者音之主也」、注「蕭條、深靜也、微音生於寂漠」。

縱心空同津、總轡策朱駟、佳人來何遲、道德何時成。《吟此道》

有心許斧子、言當採五芝、芝草不必得、汝亦不能來、汝來當可得、

芝草與汝食。

〈此兩得及來、竝戲作吳音〉

右英吟此。

右二篇有楊書。

(1) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊真人許長史詩に見える。

(2) この詩、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人授楊真人許長史詩に見える。

心を空同の岸に放ち、

手綱をさばいて朱い車を鞭打ち走らせる。

佳き人はやって来るのがどうして遅いのでしょうか、

道と徳は何時になれば成就できるのでしょう。

《此を吟じて言われた》

心ばせも目出たい許玉斧よ、

さあ、五種の芝を採りましょう。

芝草はきつと得られるとは限らず、

あなたもここへやって来られるとは限りません。

でも、あなたがやって来れば芝草はきつと得られるはず、

芝草をあなたと一緒に食べましょう。《この二つの「得」と「来」

の字は、みな戯れに吳音でやってみたもの》

右英夫人がこれを吟じられた。

右の二篇は楊羲の書がある。

之、是以萬物莫不尊道而貴徳。

(2) 芝草 魏武帝詞「駕六龍」(『宋書』樂志三)「乃到王母臺、

金階玉爲堂、芝草生殿旁」。

(3) 吳音 『宋書』卷八一顧琛傳「先是、宋世江東貴達者、會稽

孔季恭、季恭子靈符、吳興丘淵之及琛、吳音不變」。

(1) 八塗會無宗、乘運觀鸞羅、化浮塵中際、解衿有道家、騁煙忽未傾、

攜眞造靈阿、虛景盤瓊軒、玄鈞作鳳歌、適路無軌滯、神音儼雲波、

齊德秀玉京、何用世間多。

授書畢、又吟良久、而復授令書此詩、似不與書上相連也。

(2) 似不與書上相連也。

(3) 坦夷觀天真、去累縱衆情、體寂廢機駟、崇有則攝生、焉得齊物子、

委運任所經。

右中候夫人作。

(4) 薄宴塵飄領、代謝緣還歸、奚識靈劫期、顧盼令人悲。

紫微夫人作。

右三篇有掾書。

(1) 道德 『老子』第五十一章「道生之、徳畜之、物形之、勢成

- (1) この詩、『雲笈七籤』卷九七中候王夫人詩に見える。  
(2) この句、陶弘景の注記と見なす。  
(3) この詩、『雲笈七籤』卷九七中候王夫人詩に見える。  
(4) この詩、『雲笈七籤』卷九七紫微王夫人詩に見える。

八つの道は根源の無と一つになり、  
運りゆくままに喧騒の俗世の網を眺めやる。

姿を變えて俗塵の中にただよい、

道を體得した者の家で襟をゆるめてくつろぐ。

煙雲を馳せてたちまちのうちに、

眞人と手を攜えて靈山の山かげにたどり着く。

虚空の光が瓊玉の殿宇に日だまりをつくり、

玄妙なる調べは鳳の歌となる。

行手には道を遮るものはなく、

神仙の音楽が雲の波を踊らせる。

(眞人と) 同じような徳をもって玉晨の都で卓越すれば、

人間世界で重視するものなど何の役にも立たないでしょう。

誥授して書きとらせると、また吟じられた。しばらくして、再度

誥授して次の詩を書きとらせられた。へ先に書きとらせたものとは

つながらないようである

心を平穩にして天真を眺めやり、

わずらいを除き<sup>(5)</sup>雑念を解き放つのです。

寂滅を體して言葉<sup>(6)</sup>を捨て去り、

有を大切にすれば生命が養われよう。

どうかして彼我の對立をひとしく見<sup>(7)</sup>

運命のなすがままに身を委ねるそのような人を見つけたいもので  
す。

右は中候夫人の作。

塵風の吹きすさぶ嶺の上にいささか安らいではいるものの、

次々にいれ代わるのは仙界へともどって行くからです。

靈妙なる劫の時間の中の會合は誰にも分からず、

振り返ってみれば悲しくさせるばかり。

紫微夫人の作。

右の三篇は許掾の書がある。

(1) 無宗 『真話』卷一三葉一二表注「此論空無之理、乃殊得無宗、而玄玄固難可曲覈矣」。

(2) 瓊軒 『太上飛行九晨玉經』(『雲笈七籤』卷二〇)「身乘天機、飛步瓊軒」。

(3) 雲波 『大洞真經』第三十四章「太一景中立、司命攝萬精、汎然雲波之間、寂眇泥丸城」。玄光「辯惑論」(『弘明集』卷八)「昔秦皇漢武不獲輕身、使徐福公孫遠冥雲波、祈候通仙、影響無陳」。

(4) 玉京 『無上祕要』卷四・三界品「太極真人曰、夫修飛行三界之道、…自然得起三界、遊宴玉京、飛行十方」。同「靈寶玄都玉京山處於上天之中心、右出洞玄玉訣經」。『元始無量度人上品妙經四注』卷一「斯經尊妙、獨步玉京」、李少微注「本相經云、大羅天上有玉京之山、无根而生、據空而停、其中有紫微上宮、辟方三十萬里、金樓玉臺、七寶光飾、玉室上有三十六所、方圓八千里、眞文大字滿在其中」。『大洞真經』第五章「龍山秀玉京、金房耐明霞」。

(5) 去累 張衡「思玄賦」(『文選』卷一五)「何道眞之滓粹兮、去穢累而飄經」。

(6) 機駟 『周易』繫辭傳上「言行、君子之樞機」。『論語』顏淵「子貢曰、惜乎、夫子之說君子也、駟不及舌」。

(7) 齊物子 『莊子』齊物論、篇題郭注「夫自是而非彼、美已而

惡人、物莫不皆然、然故是非雖異、而彼我均也」。

(8) 代謝 『淮南子』俶眞訓「二者代謝舛馳、各樂其成形」、注「代、更也、謝、敝也」。

(9) 顧盼 『列子』力命「窮年不相顧盼、自以時之適也」。

(1) 林振須類感、雲蔚待龍吟、玄數自相求、觸節皆有音、飛軒出西華、總轡忽來尋、八遐非無娛、同詠理自欽、悼此四羅內、百憂常在心、俱遊北寒臺、神風開爾襟。

六月二十三日夜、南極夫人作。

(2) 登軒發東華、扇欵舞太玄、飛轡騰九萬、八落亦已均、暫眇山水際、窈窕靈嶽間、同風自齊氣、道合理亦親、龍芝永遐齡、內觀攝天眞、東(岑)(岑)(岑)「謂應作岑字」可長淨、何爲物所纏。

六月二十三日夜、中候夫人作。

右三篇有楊書、又掾寫。

(1) この詩、『雲笈七籤』卷九七南極王夫人授楊羲詩に見える。

(2) この詩、『雲笈七籤』卷九七中候王夫人詩に見える。

(3) 俞本が「岑」を「岑」に作るのに従う。

林は騒いで同類の心が互いに感應するのを待ちうけ、  
雲は湧いて龍が吟ずる聲を待ち望む。<sup>(1)</sup>

玄妙な運命の者同士が自然に求め合い、  
おりふしごとくに音信となる。

車を飛翔させて西華宮を出發、

手綱をさばいてたちまちのうちに尋ね來たる。

世界のはてには<sup>(2)</sup>樂しみがないわけではないが、  
ともに歌ってこそ自ずと心が浮き立つのです。

悲しいことよ、俗世の四方の綱の中で、

千々の憂いを常に心に抱きつづけているとは。

ともに北寒の樓臺に遊べば、

<sup>(3)</sup>神風があなたの胸中を解き放つてくれましょう。

六月二十三日の夜、南極夫人の作。

車に乗りこんで東華宮を出發、

つむじ風に翻って太玄の空に舞い上がる。

手綱を飛ばせて九萬里も上昇すれば、<sup>(4)</sup>

八方のはてもはや區別がなくなつて一つになる。

しばし眺めやるのは山水の際、  
深奥なる靈嶽の閑。<sup>(1)</sup>

風をともにすれば自ずと氣は通じ、

道が一つとなると二人の理法も近くなる。

龍芝を食んで永遠の齡を得、<sup>(2)</sup>

内觀の法によつて天眞を養いましょう。

東の「岑」へきつと「岑」の字であろう)では永えに清淨である  
ことができ、

俗世のしがらみからみとられることはありません。

六月二十三日の夜、中候夫人の作。

右の二篇は楊羲の書があり、また許掾の寫しがある。

(1) 雲蔚待龍吟 王逸「魯靈光殿賦」(『文選』卷一一)「霞駭雲

蔚、若陰若陽。張衡「歸田賦」(『文選』一五)「爾乃龍吟方澤、

虎嘯山丘」、李善注「春秋元命苞曰、杓星高則羣龍吟、淮南子

曰、龍吟而景雲至、虎嘯而谷風發」。

(2) 八遐 『雲笈七籤』卷九六吳王夫差書「永仙方寸內、八遐無  
易難」。

(3) 神風 『雲笈七籤』卷四二存大洞眞經三十九眞法「七祖斷玄

滯、身得乘神風、徘徊三清上、和樂返嬰童。」

(4) 騰九萬 『莊子』逍遙遊「鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九萬里。」

(5) 窈窕 『毛詩』周南關雎「窈窕淑女、君子好逑」、毛傳「窈窕、幽閒也。」

(6) 龍芝永遐齡 『茅君內傳』(『太平御覽』卷九八六)「句曲山上有神芝五種、第一曰龍仙芝、似交龍之相負、服之爲太極仙卿。」  
『雲笈七籤』卷三七說雜齋法「三洞奉道科云、…立秋爲遐齡齋、秋分爲謝罪齋」。

五月十二日、中君喻書。〈此九字題卷外、從此後竝似是丁卯年中授書此、事皆論三許挺分也〉

阿映遂能絕志山林、懃心道味、淨神注精、研澄虛鏡、玄渟獨冥、子栖偶眞、乃翁道遠之疇匹、姜伯眞之徒也、服先挹〔夜〕〔液〕、卒獲其益、亦至事也、昔又入在臨海赤山中、赤山一名燒山、遇良友王世龍趙道玄傳太初者、此數子始以晉建興元年渡江、入東山中學道耳、竝與相見、數人之業皆勝於映矣、映遂師世龍、授解東之道、修反行之法、服玉液、朝腦精、二三年中、面有光華、還顏反少、極爲成道、但恨其所稟不饒、不得高品之通耳、於是司命敕吾舉之、使奏聞上宮、移名東方諸、署爲地仙、時三官都禁左郎遺典柄侯周魴主非使者嚴白

虎來於赤山中、卽欲執之以去、且詰其罪狀、吾時禁〔牙〕(謂應作訝字)、又乃馳啓司命、司命卽遣中候李邊握火鈴而來、呵攝之、於是魴及白虎乃走去耳、李邊未來之時、映懼怖失膽、亦喪氣矣、亦賴龔幼節李開林助映爲答對、亦幾至敗也、自無此二人及其師王世龍、亦早惡矣、魴〔詰〕(謂應作詰字)之亦有實、映答對亦可可、三官出丹簡罪簿、各執一通而問映云、

「夫欲學道慕生、上隸眞人、玄心栖逸、恭誠高靈者、當得世功相及、禍惡不遭、陰德流根、仁心上逮、乃可步眞索仙、度名青府耳、云何父手殺謝弓、且亂逆三光、又許朝斬李圻之頭、以代蔡扶之級、又走斬射潘泰等、支解鈴下曹表等、水沈湯雲之尸、火燒徐昂之骸、絞殺桓整、剝割振噲、酷害虐暴刑〔攬〕(謂應作濫字)四十有三、張皇訟冤、事在上帝、禍戾山積、善功無一、又汝本屬事帛家之道、血食生民、逋愆宿責、列在三官、而越幸網脫、奉隸眞氣、父子一家各事師主、同生乖戾、不共祭酒、罪咎之太、陰考方加、有如此積罪、亦無仙者、當可得欺太上之曹、使汝得名刊不死之紫錄耶、汝其無對者、有司必執也、」

映自強長嘯、振褐撫髮、爾乃整氣屏口、叱吒而答曰、

「大道不親、唯善是與、天地無心、隨德乃矜、是以坂泉流血、無違龍髯之舉、三苗丹野、〔逐〕(謂應作逐字)鹿絳草、豈妨大聖靈化高通上達耶、吾七世父許子阿者、積仁著德、陰和鳥獸、遇凶荒之年、人民飢饉、加之疫癘、百遺一口、阿乃施散家財、拯其衆庶、親營方藥、

勲勞外舍、臨人之喪、如失其親、救人之患、如己之疾、已死之命、懸於阿手、窮垂之身、撫之如子、度脫凶年、賴阿而全者、四百八人、仁德不〔隙〕〔謂應作墜字〕、後當鍾我等、是以功書上帝、德刊靈閣、使我祖根流宗澤、蔭光後緒、故使垂條結華、生而好仙、應得度世者五人、登升者三人、錄名太上、策簡青宮、豈是爾輩所可豫乎、言畢、魴等豁然而笑、遵至而去矣、此意雖復是世龍之助、吾亦壯其辭也、於是即得度名東宮、當爲仙之中者、然其身中自宿有陰罪未了處、已日就補復、解謝太上、行當受書署者也、蓋爾不復受考於三官、已定名於不死之錄矣、

今已移在竹葉山中、或名此山爲蓋竹山、山之東面、兩隣西上、其中有石井橋、橋之北小道直入、其間有六叢杉樹、樹之左右三百步有小石深室、室前有流泉水、映與三人共止其中、此辰年當自暫出還人食詭、亦欲暫還鄉里山之近處、令其家兄弟見之者也、臨時自當令其弟知之所在、乃又寄謝令弟子勲之、若欲至竹葉山索映、亦即得相見竹葉山東上石橋、橋之北小道甚徑易、勿從南山上山、南道絕險、竹葉山中仙人陳仲林許道居尹林子趙叔道、此四人竝以漢末來入此山、叔道已得爲下真人、仲林大試過過、行復去、此是竹葉山中舊仙人也、其王世龍趙道玄傳太初許映或名遠遊、適來四年耳。

右從五月十二日至此、竝揚書受旨本。

(1) 俞本が「夜」を「液」に作るのに従う。

五月十二日、茅中君が諭して書かせられた。〔五月十二日中君諭書〕のこの九字は卷物の外側に題されている。これ以後はならびに丁卯の年(太和二年、三六七)に授けて書きとらせられたようだ。すべて三許のすぐれた資質<sup>(1)</sup>について論じている。

阿映<sup>(2)</sup>(許邁)はけなげにも山林の中で俗世に對する志を絶ち、仙道の境地に心を專<sup>(3)</sup>にし、精神を清らかにし精力を傾注し、心の鏡を研ぎすませ、幽玄な場所<sup>(4)</sup>で一人安らぎ、孤獨な侘び住まいの中で眞仙を相手にしている。まさに翁道遠<sup>(5)</sup>の同輩、姜伯眞<sup>(6)</sup>のともがらである。氣を服し玉液を汲みとり、ついにその成果を得たのも、すばらしいことである。その昔、また臨海の赤山に入り、赤山は燒山ともいうのだが、良友の王世龍<sup>(7)</sup>・趙道玄<sup>(8)</sup>・傳太初<sup>(9)</sup>らに出會った。これら數人は、もともと晉の建興元年(三一三)に江南に渡って東山に入り、仙道を學んでいた。いづれとも會つてみたところ、これら數人の修行はいずれも映より勝っていた。映はかくて王世龍に師事し、解束の道を授かり、反行の法を實修し、玉液を服し、腦精宮に朝拜した<sup>(10)</sup>。二三年の間に、顔はつやつやと輝き、童顔に若返り、あつさり<sup>(11)</sup>と仙道を成就した。しかし残念ながら、資質が豊かなものではなかったのだ。(仙界における)高品に通達することはできなかったのだ。そ



こで司命君は私に言いつけて彼を推舉させ、上宮に奏聞し、東方の方諸に名籍を移し、地仙に署せしめられた。その時、三官都禁左郎<sup>(11)</sup>は典柄侯の周魴<sup>(12)</sup>と主非使者の嚴白虎を派遣して赤山に來させ、ただちに映を逮捕して連れ去ろうとし、そのうえ罪狀を詰問した。私はその時「牙」<sup>(13)</sup>へきつと「訝」の字であろうに制止し、またあたふたと駆けつけて司命君に申し上げた。司命君はただちに中侯の李遵<sup>(14)</sup>を派遣され、火鈴<sup>(15)</sup>を握ってやってくる、叱りつけてちぢみあがらせた。そこで周魴と嚴白虎は走り去ったのだ。李遵がまだやって來ない時、映は恐怖に震え膽を失い、血の氣もなかった。また幸い龔幼節<sup>(16)</sup>と李開林が映が答辯するのを助けてはくれたが、それでも危うく敗れそうになった。彼ら二人と師の王世龍がいなかったなら、もっと早くに事態は惡化していたであろう。周魴の「詰」へきつと「詰」の字であろう。問も根據があり、映の答辯もなかなかのものだった。三官の使者は丹簡の罪簿を取り出し、それぞれ一通ずつを手にして映に詰問して言った。

「そもそも仙道を學び長生を慕って、眞人のもとに身を置き、玄妙な心を俗世の遙かなたに棲まわせ、高靈の神人に恭しく誠を盡くそうとする者は、先祖代々の善功がわが身に波及し、禍惡に邂逅することもなく、陰徳が根底に流れ、仁心が先代に及ぶことができる、初めて眞仙を尋ね求め、青府に名前を登録することができるのだ。どうしてお前の父親は謝弓を手にかけて殺し、おまけに三光に<sup>(18)</sup>

反逆したのだ。また(叔父の)許朝<sup>(19)</sup>は、李玘の頭を斬って蔡扶の首級とすげかえ、また駆けまわって潘棊たちを斬り殺したり射殺したりし、鈴下<sup>(20)</sup>の曹表たちを八つ裂きにし、湯雲の屍を水中に沈め、徐昂の死骸を火の中で焼き、桓整を絞殺し、振噲を切り刻むといった冷酷な振舞い、暴虐な仕打ち、「攪」<sup>(21)</sup>へきつと「濫」の字であろうな處刑は、あわせて四十三にものぼる。これらの者からの冤罪であるとの老大な訴えが天帝のもとにあり、罪狀が山積し、善功は一つとしてない。またお前の家は、帛家の道につかえて生命あるものを血食<sup>(22)</sup>し、償いのついていない罪の負債は三官のもとに列記されている。

しかるに運よく天の網の目をくぐり抜けて眞人の氣のもとに所屬し、父子一家がめいめい勝手に師主につかえ、兄弟が互いに背きあって同じ祭酒につかえていない。これだけの大きな罪過に對し、冥界の懲罰<sup>(23)</sup>が今ここに加えられるのだ。このような積罪があつて、仙人となる者はいない。どうして太上の役所を欺くことができ、お前の名前を不死の紫錄<sup>(24)</sup>に刻ませることなどできようか。お前に返答がなければ、係りの者が必らず逮捕するぞ。

映は氣を強くもってひゅーと長く息を吐き、褐衣を振るわし髪をなで、そのうえで呼吸を調えて口を開き、叱りつけるような口調で答辯した。

「大道はえこひいきせず、ただ善人にのみ味方し、天地は無心で、徳のある者を憐れまれるのだ。だから、(黃帝は)阪泉を血の海と<sup>(28)</sup>

化しながら龍のひげにつかまって昇仙することができたのであり、  
 (舜は)三苗と戦って原野を赤く染め、(黃帝は)「逐」へきつと「逐」  
 の字であろう。鹿で戦って草を血に染めても、大聖が靈妙に變化し  
 て高通上達するのを妨げはしなかったのだ。私の七世の祖父たる許  
 子阿は、仁を積み徳を著らかにし、ひそかに鳥獸とも仲よくし、凶  
 荒の年に人々が飢饉におちいり、そのうえ疫病が蔓延し、百人中わ  
 ずか一人しか生き残れないような事態に際會したおりに、子阿はな  
 んと家財を投げうって多くの人々を救済し、自分で藥石を調合して、  
 收容所<sup>(33)</sup>でかいがいしく立ち働いた。他人の葬儀に參列しても、まる  
 で肉親を失ったかのようにであり、他人の病を救うにあたつては、ま  
 るで自分が病氣にかかったかのようにであった。生命果てた者は子阿  
 の厄介になり、のたれ死にしそうな者をわが子同然にいたわった。  
 凶年をくぐりぬけ、子阿のお蔭で生命を全うした者は四百八人にも  
 のぼった。その仁徳は失「隊」へきつと「墜」の字であろう。せず、  
 後にきつとわれらのところに集まるはずなのだ。だから、その善功  
 が上帝のもとに記録され、その徳が靈閣に刻まれ、わが祖先の根源  
 から流れ出る大きな恩澤が後世の子孫を包み輝かせるのだ。かくし  
 て、枝を垂らせて華を結ぶように、生まれつき仙道を好ませること  
 になり、俗世から度脱するはずの者は五人、登仙して仙宮に昇るは  
 ずの者は三人、その名前が太上に登録され、青宮に文書が整えられ  
 ることとなったのだ。お前たちにちよっかいの出せるようなことで

はないのだ」。

そう言いおわると、周魴たちはからからと高笑いし、李邊がやっ  
 て來たので去っていった。この答辯の趣意は王世龍の援助があつた  
 とはいえ、私もまた彼の言葉を愉快だと感じた。そこでただちに名  
 前を東宮に移すことがかない、きつと仙の中品となることであろう。  
 しかしながら、その身中にはもともと宿世からの陰罪でまだけりが  
 着いていないところがありはしたが、すでに日々に修復につとめ、  
 太上に申し開きをしたので、いづれ辭令を授かつて任命されること  
 であろう。つまり、もはや三官において懲罰を受けることはなく、  
 すでに不死の紫録に確かに名前が記されたのである。

今はすでに(地仙として)竹葉山に移った。この山は蓋竹山<sup>(36)</sup>とも  
 いう。山の東面に二つの隴があつて西の方にせり上がり、そこに石  
 井橋がある。橋の北に小道がまっすぐに入っており、そのあたりに  
 六本の叢生した杉の樹がある。樹のあたりから三百歩のところの小  
 さな奥深い石室があり、この石室の前に流泉水がある。映は三人と  
 一緒にこの石室の中に住んでいる。今度の辰の年(戊辰、太和三年、  
 三六八)にはきつとしばらく人間界にもどつて捧げ物の食事を食べ  
 るであろう<sup>(37)</sup>。しばらく郷里の山の近所にもどらせ、その家の兄弟た  
 ちに會わせたくもあるのだ。その時には弟に所在を知らせ、さらに  
 そのうえ、通知して弟の子に勵むようにさせよう。もし竹葉山にや  
 つて來て映を探索したければ、ただちに面會できるであろう。竹葉

山の東の山上には石橋があり、橋の北の小道はたいそう通りやすい。南側からは山に登らないように。山の南の道はとても険しい。竹葉山中の仙人の陳仲林・許道居・尹林子・趙叔道<sup>39</sup>、これら四人はいずれも漢末にこの山にやって来た。趙叔道はすでに下真人となることででき、陳仲林は大試にやっと合格し、やがて僊去するであろう。これらは竹葉山の古參の仙人たちである。王世龍・趙道玄・傅太初と許映、あるいは遠遊ともいうのは、山に來てから四年が経っただけだ。

右、「五月十二日」からこまでは、いずれも楊羲の書で、教えを授かったテキスト。

- (1) 三許挺分 『眞誥』卷二〇葉八表「長史名諡字思玄、…雖外混俗務、而內修真學、密授教記、遵行上道、挺分所得、乃爲上清真人、爵登侯伯、位編卿司、治仙佐治、助聖牧民」。
- (2) 阿映 『雲笈七籤』卷一〇六許邁真人傳を參照。
- (3) 翁道遠 『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「翁道遠」。
- (4) 姜伯眞 『眞誥』卷五葉一一表「昔有姜伯眞者、學在猛山中、行道採藥、奄值仙人、仙人使平倚日中、其影偏、仙人曰、子知仙道之貴、而篤志學之、而不知心不正之爲失、因教之如此、後遂得道」注「定錄目許先生云、姜伯眞之徒、不知卽此姜不」同

卷一三葉七裏「罡山東北有穴、通大句曲南之方山之南穴、姜伯眞數在此山上取石腦、石腦在方山北穴下、繁陽子昔亦取服」『眞靈位業圖』第六左位地仙散位「姜伯眞」。

- (5) 臨海赤山中、赤山一名燒山 『眞誥』卷一四葉一〇表「赤水山中學道者朱孺子、吳末入山、服菊花及朮餌、後遇西歸子、從乞度世、西歸子授以要言、入室存泥丸法、三十年、遂能致雲雨於洞房中、今年八月五日、西王母遣迎、卽日乘五色雲車登天、今在積石臺」注「赤水山云在鄞縣南十里、從楠谿口入三百里、山正赤、週廻五十里、高千餘丈、如此則應是臨海永嘉東北名赤巖者也、許先生所住赤山、一名燒山、卽此」。
- (6) 王世龍 『眞誥』卷一八葉一〇表注「此則王世龍等所受服玉液諸法也」『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「王世龍」注「許遠遊師」。
- (7) 趙道玄、傅太初 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「趙道玄、傅太初」注「遠遊之交」。
- (8) 反行之法 『太上飛行九晨玉經』反行法を參照。
- (9) 朝腦精 『登眞隱訣』卷上「丹田上一寸爲玄丹宮」注「一名玄丹腦精泥丸玄宮、有中黃太一眞君居之」。
- (10) 還顏反少 『登眞隱訣』卷上「又數存咽赤氣、使人顏色反少、色如童子、此不死之道」。
- (11) 三官都禁左郎 『眞靈位業圖』第七左位「三官都禁左郎齊桓公」、

注「姓姜名小白」。

- (12) 典柄侯周魴 『三國志』卷六〇周魴傳。『真誥』卷一五葉八表「蓋郎范明遷補典柄侯」、注「：范明唯前漢有范明友、恐非是此人、又誥試許先生者、稱典柄侯周魴、主非吏者嚴白虎、尋典柄侯、猶應是典柄、呼之脫到爾、周〈訪〉「魴」字子魚、吳郡陽羨人、周處父也、仕吳爲鄱陽太守、甚有威惠、嚴白虎者、吳郡人也、以孫策時入山聚衆、策討之、乃散奔餘杭死、弟名興、亦勇健、策僞與會、乃戟刺殺之爾」。『真靈位業圖』第七右位「典柄侯范明、周魴」、注「字子魚、主察試」。

- (13) 主非使者嚴白虎 『三國志』卷四六孫破虜討逆傳。『真靈位業圖』第七右位「主非使者嚴白虎」、注「吳時人、爲孫策所殺」。
- (14) 中侯李遵 『真誥』卷八葉二表注「李中侯名遵、即撰茅三君傳者」。

- (15) 火鈴 『真誥』卷六葉二裏「上帝獻紫軒之重躍、太眞錫流金之火鈴」。『上清黃庭內景經』膽部章第十四「雲笈七籤」卷一「龍旂橫天擲火鈴」、注「膽、青龍之色、旂旛、威戰之具也、火鈴者、膽邊肉珠之象也、怒則奮張、故言擲也」。

- (16) 龔幼節、李開林 『真靈位業圖』第六右位地仙散位「龔幼節、李開林」、注「遠遊代對者」。

- (17) 三官出丹簡罪簿 『元始無量度人上品妙經四注』卷二「上解祖考、億劫種親」、李少微注「每三官考錄、因子孫有大功、玉帝

即爲上解億劫祖考一切種親、度生諸天也」。『上清黃庭內景經』仙入章第二十八「雲笈七籤」卷一二「玉書絳簡赤丹文」。

- (18) 三光 『真誥』卷七葉一三表「許玉斧思愆補過、舉家端等受恩、是永觀三光、受命更生、謹辭」。『上清黃庭內景經』黃庭章第四注「雲笈七籤」卷一一「道機經云、天有三光日月星、人有三寶三丹田」。

- (19) 許朝：『真誥』卷七葉六表を參照。

- (20) 鈴下 『漢官儀』「太常駕四馬、主簿、前車八乘、有鈴下侍閣辟車騎吏五百等員」。

- (21) 張皇 『尚書』康王之誥「張皇六師、無壞我高祖寡命」。

- (22) 帛家之道 『周氏冥通記』卷一「觀卿俗意未豁、羣塵易迷、何以苟縱於七魄、而拘制於三魂、實由卿素履帛家之事、此輩小物、亟稱其功而惑人意」、注「周家本事俗神禱、俗稱是帛家道、許先生被試時亦云爾」。

- (23) 血食生民 『抱朴子』道意「又諸妖道百餘種、皆煞生血食、獨有李家道無爲爲小差」。

- (24) 宿責 『玄都律文』百藥律「不負宿債爲一藥」。

- (25) 陰考 『雲笈七籤』卷三七說雜齋法「今日吉辰、八節開陳、陽罪陰考、絕滅九陰」。

- (26) 不死之紫錄 『雲笈七籤』卷八三存心中赤氣去三尸法「經曰、常念心中出赤氣上行通喉嚨、以意閉之於泥丸、爲之不止、三尸

自去、長生久視、司命刻名、著不死之紫籙也」。

(27) 大道不親 『老子』第七十九章「天道無親、常與善人」。

(28) 天地無心 劉琨「答盧諶詩」(『文選』卷二五)「天地無心、萬物同塗」。

(29) 坂泉流血 『史記』五帝本紀「(軒轅)以與炎帝戰於阪泉之野、三戰、然後得其志」。

(30) 三苗丹野 『史記』五帝本紀「三苗在江淮荊州數爲亂、於是舜歸而言於帝、請流共工於幽陵、以變北狄、遷三苗於三危、以變西戎、四皐而天下咸服」。

(31) 涿鹿絳草 『史記』五帝本紀「於是黃帝乃徵師諸侯、與蚩尤戰於涿鹿之野、遂禽殺蚩尤、而諸侯咸尊軒轅爲天子、代神農氏、是爲黃帝」。

(32) 吾七世父許子阿者 『眞誥』卷二〇葉五表「眞誥云、長史七世祖肇字子阿、有振惠之功、今檢譜、七世祖名敬字鴻卿、後漢安帝時爲光祿、順帝永建元年拜司徒、名字與眞誥不同、未詳所以舛異、安帝永初二年三年大饑、斗米二千文、人相食、若所救活四百八人、必應在此時也」。同卷一二葉三表「亦如子七世祖父許肇字子阿者、有賑死之仁、拯飢之德、故令雲陰流後、陰功垂澤、是以今得有好尚仙眞之心者、亦有由而然也、物皆有因會、非徒爾而得之者矣」。同卷一六葉五裏「許肇今爲東明公右帥晨、帥晨之任、如世閒中書監」、注「許肇字子阿、卽長史七代祖司

徒敬也、雖有賑救之功、而非陰德、故未蒙受化、既福流後葉、方使上拔、然後爲九宮之仙耳、此帥晨之官、四明亦竝應有之」。

(33) 外舍 『眞誥』卷九葉一四表「至於世閒符水祝漱、外舍之近術、皆莫比於此方也」。

(34) 度世者五人、登升者三人 『眞誥』卷二〇葉一三表「度世者五人」、注「虎牙、黃民、榮弟、大娘、小娘、尋虎牙云、遂得不死、過度壬辰、必是度世之限、其餘無迹顯出、黃民傳奉經業、道育亡、有異徵、恐或預例、其二人亦可更在後世子孫、若必以七世爲限、則靈眞之子、寔鍾斯慶」。同「登升者三人」、注「先生、長史、掾也」。

(35) 解謝 『論衡』解除「世閒繕治宅舍、鑿地掘土、功成作畢、解謝土神、名曰解土」。

(36) 蓋竹山 『眞誥』卷一二葉三表「問葛玄、玄善於變幻、而拙於用身、今正得不可死而已、非僊人也、初在長山、近入蓋竹、亦能乘虎使鬼、無所不至、但幾於未得受職耳」。

(37) 當自暫出還人食詭 『眞誥』卷一八葉一一裏注。

(38) 寄謝 唐的用例ではあるが、白居易「讀史詩」「山林少羈鞅、世路多艱阻、寄謝伐檀人、慎勿嗟窮處」。

(39) 陳仲林、許道居、尹林子、趙叔道 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「陳仲林、道君、趙叔道」、注「三人、蓋竹山中眞人」。

(40) 大試適過 『眞誥』卷五葉五裏「君曰、仙道十二試皆過而授

此經、此十二事大試也、皆太極真人臨見之、可不慎哉。

納納長者、蔚蔚內明、撥于昔累、非復故形、變扇澡鍊、得道之情、和挹神心、仰秀雲靈、傾觀晨景、德音蘭馨、方及十載、季〔璋〕〔謂應作偉字〕舉名、每事勗焉、勿復不精。

太和二年歲在丁卯、十二月十七日夜、太元真人司命君告穆、到丙子年爲十年矣、時當七十二也、到亥子年、神化變鍊、子年始餘十年。

蕭條斧子、和心凝靜、道无雖妙、乘之亦整、澄形丹空、擢標霄領、其神以暉、其光將穎、實侍〔辰〕〔謂應作晨字〕之高舉、谷子之羅〔鼎〕〔此古鼎字〕、可謂秀落衆望、縈淳之仙才、又當勸進德修業、淡然虛眇。

十二月十七日夜、太元真人司命君告玉斧。〔祖司徒府辟掾不赴、隱在本縣茅山五年、此十六字榮弟後所注、其公府辟似妄也〕

淵奇體道、解幽達精、虛中受物、柔德順貞、慈寬博採、聞道必行、逍遙飛步、啓誠坦平、策龍上造、浮煙三清、實眞仙之領袖、友長里之先生、必當封牧種邑、守伯仙京、傳佐上德、列書絳名。

右說道許長史所得限分。〔爾時護軍長史、此六字亦榮弟所注〕

瑋灼清暉、潛光翳眞、二景落鋒、飛霞流纈、於焉玉子、採此雙辰、遂開上道、允得妙門、儀璘洞煥、玉標玄金、登名五宮、懸書七元、寔迭域之併羅、爲上清之卿君、是子內和感虛託眞情專之所致、亦南人雲軫之必駕、三元景輦之攜遊也。〔此云迭域、卽谷希子也、與前司命所答谷子之羅鼎事同〕

右說道許玉斧所得之分。〔此前後二右字下說字、出長史書云右清靈眞人說云云、而楊君書無此四字、當是于時楊向長史口道是裴君也〕

此是道成勸至受書之時、初所舉定目之名也、亦得道齋詣之分限矣。〔侍〕〔侍〕而替者、得來必無從矣、當共實此。

右五條有楊書長史寫兩本。

〔一〕 俞本が「侍」を「侍」に作るのに従う。

しつとりとした長者、  
内にこもる心の輝き。  
昔のわずらいを除き去り、  
もはやもとの姿ではない。

變化し舞い上り身を清め鍊成し、  
道の眞情をつかんだ。

神の心をおだやかにくみ取り、  
上はすぐれた雲の上に秀でる。

朝の光を眺めやると、

德音は蘭の香りのようだ。

十年がたったならば、

季「瑋」<sup>(3)</sup>きつと「偉」の字であらうはその名を推舉するであらう。

何事にも努力をかさね、

もはや精ならざることなかれ。

太和二年、丁卯の歲（三六七）の十二月十七日の夜、太元眞人司命君の許穆へのお告げ。丙子の年（太元元年、三七六）に至ると十年である。その時、七十二歳になる。<sup>(4)</sup>亥か子の年に至ると神靈の變化があるはずで、子の年にやつとぎりぎり十年ということになる。

もの靜かな玉斧は、心を調和させて安らかな状態にいる。道の氣<sup>(5)</sup>は奥深いものではあるが、それに乗ることもちゃんとうまくゆく。丹い虚空で身體を清め、空高く聳える峰でその存在を際立たせることができよう。その心は輝き、その輝かしさは抜きん出ている。まことに侍帝「辰」<sup>(6)</sup>へきつと「晨」の字であらうにふさわしいすぐ

れた候補者であり、谷希子<sup>(7)</sup>と同列の「鼎」<sup>(8)</sup>へこれは「鼎」の古い字である。抜きん出て多くの人々の期待を集め、紫河や八淳山に住まう仙人の才能の主と言えよう。さらにこのうえとも、つとめて徳に進み修業を積み、世俗の欲をきっぱりと断つべきである。

十二月十七日の夜、太元眞人司命君の許玉斧へのお告げ。へ祖父は司徒府から掾として辟召されたが赴任せず、當縣の茅山に五年間隠棲した（「祖司徒府辟掾不赴、隱在本縣茅山五年」）。この十六字は、許榮弟が後で注記したものであり、三公府が召したというのではたためようである。

不可思議の境地に身をひそめて道を體得し、奥深い道理を明らかにして純粹な世界に通達する。心をからっぽにして外物を受け入れ、徳をしなやかにして正しきに従う。慈愛深く寛大にあらゆるものを取り入れ、道を聞けば必ず實行する。<sup>(10)</sup>ゆつたりとして飛歩の法を行い、心をおだやかにして眞心をつくす。龍に鞭打って天上の世界へ昇り、三清の世界<sup>(11)</sup>でもやに浮かぶことができよう。あなたはまことに眞仙の指導者、長里先生の友人となり、きつと種民の村の長に封ぜられて、仙界の都の長官となり、上徳の天帝を補佐し、その名は仙界の絳い名簿<sup>(12)</sup>に登録されるに違いない。

右は許長史が授かるであろう定められた分際について説いたもの。へその時、護軍長史であった（「爾時護軍長史」）。この六字も、

許榮弟が注記したものである

玉のような光が澄んで輝いているが、その輝きを奥にひそめ、眞の道の内深く隠している。日と月の二つが光を投げかけ、空を飛ぶ霞が流れて身にまつわる。そんな中で玉斧は、この日と月の精を探り、そして仙界への道を開き進んで、まことに玄妙な世界の門に到達できるのである。鬱儀と結璘はあくまでも明るく輝き、玉のように抜きん出、玄妙な黄金のようだ。その名は五帝の宮殿に登録され、北斗七星に文書が懸けられるであろう。まことに迭域と肩を並べ、上清宮の大臣となるだろう。それは、あなたの心が調和して虚なる道と感應し、眞の世界にすべてを委ねようと専心した結果であり、あなたは南嶽夫人の雲の車にきつと乗り、三元君の光の車で一緒に旅をするだろう。へこで迭域と言っているのは、谷希子のことである。先に司命君が、谷希子と同列の大臣と答えたのと同じことである。

右は許玉斧が得るであろう分際について説いたもの。へこの前後二箇所の「右」の字の下に「説」の字は、許長史の書に「右清靈眞人説云云」とあるのによるもので、楊君の書にはこの四字「清靈眞人」はない。きつとこの時、楊君が許長史に向かつて、これは裴君（のお告げ）であると口づてで述べたからに違いない。

これは仙道が成就し、眞心がかなって辭令を授かる時に、最初に所定のリストに列擧される名位である。かつまた、仙道を體得して仙界に攜えてゆく定められた分際でもある。定められた分際を頼みにして修行を怠る者は、仙界に來ようにも手だてがないのだ。皆このことを心に留めておくべきである。

右の五條は楊羲の書と許長史の寫しの二種のテキストがある。

(1) 納納 『楚辭』九歎「衣納納而掩露」、王逸注「納納、濡濕兒也」。

(2) 内明 『三國志』武帝紀注「皇甫謐逸士傳曰、汝南王儁字子文、儁爲人外靜而内明」。

(3) 季偉 『晉書』卷八〇許邁傳「許邁字叔玄、一名映、丹楊句容人也、…時南海太守鮑靚隱跡潛遁、人莫之知、邁乃往候之、探其至要、父母尚存、未忍違親、謂餘杭懸壺山近延陵之茅山、是洞庭西門、潛通五嶽、陳安世茅季偉常所遊處、於是立精舍於懸壺、而往來茅嶺之洞室」。

(4) 時當七十二也 『眞話』卷二〇葉八裏「按泰和二年丁卯歲、司命所告云、丙子年當去、時年七十二、此則永興二年乙丑生、太元元年去也、而譜云、孝武寧康元年去世、年七十一、此爲泰



安二年癸亥生、爲多二年、今以眞爲正、注「顯云、寧康元年、七十二、又非也」。

(5) 道炁 『雲笈七籤』卷四三存思三洞法「學者存眞、階漸昇進、進退在形、出入在道、道氣玄妙、纖毫必應」。

(6) 侍晨 『眞靈位業圖』第二右位「侍帝晨右仙公許君」、注「長史子、諱翻」。

(7) 谷子 『眞誥』卷五葉一二表「若如青光先生谷希子南嶽松子長里先生墨羽之徒、皆爲太極眞人所友、或爲太上天帝所念者、與雲駕龍以迎之」。「眞靈位業圖」第二左位「八玄仙伯右仙公谷君」。

(8) 縈渟 張衡「思玄賦」(『文選』卷一五)「瞻崑崙之巍巍兮、臨縈河之洋洋」。「眞誥」卷一四葉一九裏「八溟山高五千里、周帀七千里、與滄浪方山相連比、其下有碧水之海」。

(9) 進德修業 『周易』乾文言傳「子曰、君子進德修業」。

(10) 聞道必行 『老子』第四十一章「上士聞道、勤而行之」。

(11) 三清 『靈寶洞玄自然九天生神章經』(『雲笈七籤』卷一六)「所以能愛其形、保其神、貴其炁、固其根、終不死壞、而得神仙、骨肉同飛、上登三清、是與三炁合德、九炁齊并也」。「道門經法相承次序」卷上「三元者、…大洞迹別、出爲化主、治在三清境、其三清境者、玉清上清太清是也、亦名三天、其三天者、清微天禹餘天大赤天是也」。「洞玄靈寶三洞奉道科戒營始」卷一「科

曰、夫三清上境及十洲五嶽諸名山、或洞天并太空中皆有聖人治處、或結氣爲樓閣堂殿、或聚雲成臺榭宮房、或處星辰日月之門、或居煙雲霞霄之內」。「道教義樞」卷二「三洞義」(但知洞眞法天寶君住玉清境、洞玄法靈寶君住上清境、洞神法神寶君住太清境、故太上蒼元上錄經云、三清者、玉清上清太清也)。

(12) 護軍長史 『眞誥』卷二〇葉八表「長史名謚、…出爲餘姚令、入爲尚書郎、郡中正、護軍長史、給事中、散騎常侍」。

(13) 妙門 『老子』第一章「玄之又玄、衆妙之門」。

(14) 儀璘 『眞誥』卷一八葉一二表「泰和三年五月、行奔二景道、注「此則儀璘之法、雖已有抄事、未見大經」。「上清黃庭內景經」高奔章第二十六(『雲笈七籤』卷一二)「鬱儀結璘善相保」、注「鬱儀、奔日之仙、結璘、奔月之仙、同聲相應、同氣相求、故二仙來相保持也」。

(15) 五宮 『登眞隱訣』卷上「其玄丹宮經、亦眞官司命君之要言、四宮之領宗矣、…凡合五宮之道、行乎世上、有眞名者遭值之矣、自非骨相挺命、不聞此言也、…又有太皇宮、太上君后居之、此四宮皆雌眞一也、…」注「前五宮、其神皆男、故謂雄一、此四宮皆女、是爲雌一、凡上清太微中之九宮、則有眞君居之、故人頭亦設此位以相應耳」。「大洞眞經」第三十二章「大洞玉經曰、太玄九炁上、烟迴太暉間、神光秀空峯、五道煥三天、駕景登絕霄、乘風蕩滯神、中一日運珠、理心入清閑、混合三五宮、累變

億萬千、伐絕胞樹生、四斷血尸根、七祖散積結、反華黑幽玄。

(16) 併羅 『眞誥』卷一六葉七表「恨未使得與玄眞併羅、同晏垺壙」。

保命告云、「許子遂能委形冥化、從張鎮南之夜解也、所以養魂太陰、藏魄于地、四靈守精、五老保藏、復十六年、殆覩我於東華矣、既適潛暢、莫覺不眞」。〈許子卽是掾也、按張係師爲鎮南將軍、建安二十一年亡、葬鄴東、後四十四年、至魏甘露四年、遇水棺開、見尸如生、出著牀上、因舉塵尾覆面、大笑咤又亡、仍更殯葬、其外書事迹略如此、未審夜解當用何法、依如許掾、似非劒杖也〉

① 右英告曰、「自古及今、死生有津、顯默異會、藏往滅智、與世同之者、皆得道之行也、若夫瓊丹一御、九華三飛、雲液晨酣、流黃徘徊、仰咽金漿、咀嚼玉蕊者、立便控景登空、玄升太微也、自世事乖玄、斯業未就、便當暫履太陰、潛生冥鄉、外身棄質、養胎虛宅、陶氣絕籥、受精玄漠、故改容於三陰之館、童顏於九鍊之戶、然後知神仙爲奇、死而不亡、去來之事、理之深也」。

南人告云、「得道去世、或顯或隱、託體遺迹、道之隱也、或有再酣瓊精而叩棺、一服刀圭而尸爛、鹿皮公吞玉華而流蟲出戶、仇季子

咽金液而鼻聞百里、黃帝火九鼎於荆山、尙有橋嶺之墓、季主服雲散以潛升、猶頭足異處、墨<sup>(2)</sup>「秋」咽虹丹以投水、寧生服石腦而赴火、務光剪韭以入清冷之淵、柏成納氣而腸胃三腐、諸如此比、不可勝記、微乎、得道趣舍之迹無常矣」。〈南人卽南眞人<sup>(3)</sup>「夫人」也、此諸仙人出諸傳記、而事迹有參差不同者〉

保命又云、「既適潛暢、莫覺不眞、如此之指、非眞尸也」。

右四條有長史書。

(1) この段、『雲笈七籤』卷九八雲林右英夫人嘔揚眞人許長史詩序に見える。

(2) 俞本が「秋」を「狄」に作るのに従う。

(3) 俞本が「人夫」を「夫人」に作るのに従う。

保命君が告げて言われた。「許子は結局、身體を幽冥の變化に委ねて、張鎮南(張魯)の夜解に従うであらう。だから、太陰で魂を養い、地下に魄をおさめ、四つの靈獸が精氣を守り、五老が五臟を保存して、十六年後には、東華宮で私と會えるのだ。ひそかに運命

が開けているのだから、嘘だと考えてはならない」。(6) 許子とは許掾である。按ずるに、張係師は鎮南將軍になって、建安二十一年(二一六)に死に、鄴の東に埋葬された。その四十四年後、魏の甘露四年(二五九)になって水害で棺が開き、死體はまるで生きているかのようにであった。出して牀の上に置くと、塵尾を取りあげて顔を隠し、大聲で笑って聲をたてると、また死んでしまった。そこであらためて埋葬した。世間の書物に記されている彼の事迹はあらまし以上のようであって、夜戸解するのどんな方法を使つたのかは分からない。許掾のようだとすれば、劍や杖によつたのではないようである。(7)

右英夫人が告げて言われた。「昔から今に至るまで、生と死との間には渡し場があつて、願界と冥界は一緒になれないのです。過去の事柄を心に深くおさめてさかしらを滅し、世間の人と同じ行動をとるのは、いづれも仙道を體得しようとする行いなのです。八瓊の丹藥を一たび服用し、九華丹を三たび鍊成し、朝に雲液を飲んで、流黃を服してぶらぶら歩き、金漿をあおり、玉の花しべをかみしめるような者は、たちどころに光の車を馭して空に上り、遙か太微宮まで昇って行くのです。世事のために玄妙な世界からかけ離れ、このような修業がまだ成就されていないからには、ひとまずしばらく太陰へ行き、冥界に生命を深くひそめ、肉體を忘却し形質を捨て、

虛無の世界で胎を養い、とてつもないふいごで氣を吹きこまれ、玄冥茫漠たる世界から精神を受けるべきです。だから、三陰の館で姿を變え、九練の屋敷で童子のように若返り、そのうえで、神仙がすばらしいのは死んでも滅びないからであり、死と生の道理は奥深いものであることが分かるのです」。

南人が告げて言われた。「仙道を體得してこの世から去るのには、目に見えるものもあれば目に見えないものもあり、肉體を何かに託して痕跡を残すのは、仙道の目に見えないやり方です。また、玉のエキスを二度飲んで棺をたたいた者や、藥を一匙飲んで死體が腐爛した例もあります。鹿皮公は玉の精華を飲んで蟲が戸外に流れ出した(17)、仇季子は金液を飲んで腐臭が百里の遠くまで漂いました。(18) 黃帝は荆山の麓で九鼎を鑄造したが、やはり橋山の墓があり、司馬季主は雲散を服用してひそかに昇天したが、頭と足とは別々になつて(21)いる。墨狄は虹丹を飲んで入水したし、寧生は石腦を服用して火にとびこんだ。(22) 務光は韭を攝取して清冷の淵に入つたし、柏成は氣を體内に取り入れて胃腸が三度腐爛した。(23) こういったもろもろの例は枚舉にいとまがありません。奥深いことです、道を體得することのあり方に一定のきまりのないことは」。(南人とは南眞(南嶽)夫人のことである。これらの仙人たちはいくつかの傳記に見えるが、その事迹にはさまざまの出入りがある)

保命君はまた言われた。「ひそかに運命が開けているのだから、嘘だと考えてはならない。このようなのは、本當の尸解者ではないのだ」。

右の四條は許長史の書がある。

(1) 委形冥化 『莊子』知北遊「舜曰、吾身非吾有也、孰有之哉、

曰、是天地之委形也。』『魏書』高祖紀論「時以文明攝事、優游恭己、玄覽獨得、著自不言、神契所標、固以符於冥化」。

(2) 從張鎮南之夜解 『眞誥』卷二〇葉一〇表注「又眞誥云、從張鎮南之夜解、而未審張解之法」。

(3) 養魂太陰、藏魄于地 『雲笈七籤』卷五二・五辰行事訣「三景保守、令我得眞、養魂制魄、乘飄飛仙」。『紫陽真人內傳』「或白日尸解、過死太陰、然後乃下仙之次也」。

(4) 四靈守精、五老保藏 『雲笈七籤』卷五二・二十四神行事訣「下景八神、散景化靈、紫煙鬱生、含元守精、魂魄以安、眞氣以寧」。『眞誥』卷九葉一六裏「五老九眞、皆守體門、黃閣神師、紫戶將軍、把鉞搖鈴、消滅惡津、反凶成吉、生死無緣」。『雲笈七籤』卷八五景霄真人「高聖帝君告景霄真人曰、欲刻名玄紀迴

天九霄解形之法、當以五月五日上合之時、沐浴清齋、正中入室、燒香北向九拜朝禮玉天畢、北向叩齒十二通、思齋室之內、中有丹雲、煥爛於一室之內、存五老仙伯在丹雲之中、披飛青之帔、冠通天玉冠、手執青文之錄」。

(5) 十六年 『眞誥』卷一八葉三裏「見斧云、酉年學、戌年當歸、戌年道炁當行天下、云從戌年當受法」、注「此一條是據去後所記、據記是庚午(三七〇)年去、此戌年即應癸酉甲戌年、受法者是就其真人受經二奔之道、十一年成眞、故定錄云、復十六年、乃視我於東華者也」。

(6) 張係師爲鎮南將軍 玄光『辯惑論』解廚墓門不仁之極第三(『弘明集』卷八)注「又天師係師嗣師及三女師、此是張魯自稱美也」。『三國志』卷八張魯傳「張魯字公祺、沛國豐人也、建安二十一年、太祖入南鄭、甚嘉之、又以魯本有善意、遣人慰喻、魯盡將家出、太祖逆拜魯鎮南將軍、待以客禮、封閬中侯、邑萬戶」。

(7) 劍杖 『雲笈七籤』卷八五太極真人遺帶散「凡尸解者、皆寄一物而後去、或刀或劍或竹或杖」。

(8) 藏往滅智、與世同之 『周易』繫辭傳上「聖人以此洗心、退藏於密、吉凶與民同患、神以知來、知以藏往」。

(9) 瓊丹 『上清黃庭內景經』肝氣章第三十三(『雲笈七籤』卷一二)「唯待九轉八瓊丹」、注「八瓊、丹砂雄黃雌黃空青硫黃雲母戎鹽消石等物是也」。

- (10) 九華 『真誥』卷一四葉九裏「剡小白山中有學道者趙廣信、作九華丹、丹成一服」。
- (11) 雲液 『抱朴子』仙藥「又雲母有五種、五色並具而多白者名雲液、宜以秋服之」。
- (12) 冥鄉 『真誥』卷一六葉七裏「疇昔入冥鄉、順駕應靈招」。
- (13) 外身 『老子』第七章「後其身而身先、外其身而身存」。
- (14) 玄漠 『真誥』卷一四葉一二裏「碑讚末曰、玄漠太寂、混合陰陽」。
- (15) 九練 『雲笈七籤』卷一〇二總真主錄紀「行經神州空洞之山、遇太一真人戴先生受帝君九練之方」。
- (16) 耐瓊精而叩棺 『真誥』卷一四葉一六裏「漱龍胎而死訣、飲瓊精而叩棺者、先師王西城及趙伯玄劉子先是也」、注「王君昔用劍解、非龍胎諸丹、恐瓊精即是曲晨耳」。
- (17) 服刀圭而尸爛 『真誥』卷一四葉一七表「挹九轉而尸梟、吞〈乃〉『刀』圭而蟲流、司馬季主寧仲君燕昭王王子晉是也」、注「桐柏亦用劍解、當是此吞刀圭者、非九轉也」。
- (18) 鹿皮公吞玉華而流蟲出 『真靈位業圖』第四右位「鹿皮公」。
- 『列仙傳』卷下鹿皮公を参照。『韓非子』二柄「桓公蟲流出戶而不葬」。同十過「身死三月不收、蟲出於戶、故桓公之兵、橫行天下」。
- 『雲笈七籤』卷四二存大洞真經三十九章法「引玉華三咽止、便讀玉經」。
- (19) 仇季子咽金液而臭聞百里 『真靈位業圖』第四右位「仇季子」。
- 『真誥』卷一四葉一六裏「而不知高丘子時以尸解、入六景山、後服金液之末、又受服琅玕華於中山、方復託死、乃入玄州、受書爲中嶽真人、于今在也」。
- 『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)七十二福地「第三十五金精山」、注「在虔州虔化縣、仇季子治之」。
- (20) 黃帝火九鼎於荆山、尚有橋領之墓 『真靈位業圖』第三左位「玄圃真人軒轅黃帝」。
- 『史記』封禪書「(公孫)卿曰、黃帝采首山銅、鑄鼎於荆山下、鼎既成、有龍垂胡頰下迎黃帝、黃帝上騎、羣臣後宮從上者七十餘人、龍乃上去、上議曰、古者先振兵澤旅、然後封禪、乃遂北巡朔方、勒兵十餘萬、還祭黃帝冢、橋山、釋兵須如、上曰、吾聞黃帝不死、今有冢、何也、或對曰、黃帝已僊上天、羣臣葬其衣冠」。
- 『雲笈七籤』卷一〇〇軒轅本紀「黃帝修興封禪禮畢、采首山之銅、將鑄九鼎於荆山之下、以象太一於雍州。また、『真誥』卷一四葉一七裏。
- (21) 季主服雲散以潛升、猶頭足異處 『真靈位業圖』第三右位「司馬季主」、注「受西靈子都劍解之道」。
- 『真誥』卷一四葉一二裏「司馬季主後入委羽山石室大有宮中、受石精金光藏景化形法於西靈子都、西靈子都者、太玄仙女也、季主臨去之際、託形枕席、爲代己之像、墓在蜀郡成都升盤山之南」、注「真誥云、季主咽虹液、而頭足異處、劍經註云、吞刀圭而蟲流、今東卿說云、

託形枕席、爲代己之像、似當是作錄形靈丸兵解去也、漢史既不顯其終、无以別測其事也。

(22) 墨狄咽虹丹以投水 『眞靈位業圖』第四左位「墨翟」、注「宋

人、水解」。『眞誥』卷一四葉一六裏「服金丹而告終者、臧延甫張子房墨狄子是也」。同卷一〇葉一三裏「唐覽今在華山、得虹丹法、合服得不死」。同卷一四葉二表「呂子華者、山陽人也、陰君弟子、已服虹丹之液、而未讀內經」。

(23) 寧生服石腦而赴火 『眞靈位業圖』第四左位「寧封」。『列仙

傳』寧封子「寧封子者、黃帝時人也、世傳爲黃帝陶正、…封子積火自燒、而隨煙氣上下、視其灰燼、猶有其骨、時人共葬於寧北山中」。『眞誥』卷一三葉七裏「石腦在方山北穴下、繁陽子昔亦取服、此北崱山中亦有此物、石腦故如石、但小斑色而輕耳、所在有之、服此、時時使人發熱、又使人不渴」。

(24) 務光剪蓬以入清冷之淵 『眞靈位業圖』第六右位地仙散位「務

光」。『列仙傳』務光「務光者、夏時人也、耳長七寸、好琴、服蒲萐根、…遂負石自沈于蓼水」。『莊子』讓王「舜以天下讓其友北人无擇、…因自投清冷之淵」。

(25) 柏成納氣而腸胃三腐 『眞靈位業圖』第三左位「柏成子高」、

注「湯時退耕、修步綱之道」。『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二七)七十二福地「第五十大面山」、注「在益州成都縣、屬仙人柏成子治之」。同卷一〇一・三天君列紀「上清真人總仙大司馬

長生法師主三天君、姓柏成、諱欽生、字芝高、乃中皇時人、歲在東維之際、誕于北水中山栢林之下、夫名爲欽生者、以母感日華而懷孕、年九歲求長生之道」。

人死、必視其形、如生人、皆尸解也、視足不青、皮不皺者、亦尸解也、要目光不毀、無異生人、亦尸解也、頭髮盡脫而失形骨者、皆尸解也、白日尸解自是仙、非尸解之例也。

右一條、甲手書寫。

(1) この段、『太清金液神氣經』卷下に見える。

人が死んだら、必ずその體を見なさい。<sup>(1)</sup> 生きている人のようであれば、いずれも尸解である。足を見て青黒くなく、皮膚に皺がないのも、尸解である。眼光に衰えがなく、生きている人と變わらないのも、尸解である。頭髮がすっかり抜け落ちて、人體のかたちをとどめないのは、すべて尸解である。白日尸解は自ずから昇仙であつて、これは尸解の一般の例には入らない。

右の一條は某甲の筆の書寫。

(1) 人死必視其形：『眞誥』卷一六葉一二表「臨終之日、視其

形、如生人之肉、脫死之時、尸不强直、足指不青、手足不皺者、

謂之先有德行、自然得尸解者也」。

若其人暫死適太陰、權過三官者、肉既灰爛、血沈脈散者、而猶五

藏自生、白骨如玉、七魄營侍、三魂守宅、三元權息、太神內閉、或

三十年二十年、或十年三年、隨意而出、當生之時、即更收血育肉、

生津成液、復質成形、乃勝於昔未死之容也、眞人鍊形於太陰、易貌

於三官者、此之謂也、天帝曰、「太陰鍊身形、勝服九轉丹、形容端

且嚴、面色似靈雲、上登太極闕、受書爲眞人」。

趙成子死後五六年、後人晚山行、見此死尸在石室中、肉朽骨在、

又見腹中五藏自生如故、液血纏裹於內、紫包結絡於外。

夫得道之士、暫遊於太陰者、太乙守尸、三魂營骨、七魄衛肉、胎

靈〔掾〕〔錄〕氣。

右三條是長史抄寫九眞經後服五石腴事。

(1) この段、『雲笈七籤』卷七四太上巨勝腴煮五石英法、および

卷八六太陰鍊形に見える。

(2) 俞本が「掾」を「錄」に作るのに従う。

もし人がしばらく死後に太陰へ行き、かりに三官に立ち寄れば、

肉體はぼろぼろに腐爛し、血液は流れなくなり、脈はなくなつてい

ても、五臟は自然に生きており、白骨は玉のようであり、七魄は側

において活動を續け、三魂はその場所を守り、三元の神がしばらく休

息して、太神が内に閉じこもる。三十年か二十年たつと、あるいは

十年か三年たつと、自由に出て来て、生まれる時にはあらためて血

を吸収して肉を育成し、津液がつくられて肉體が再生する。それは

昔の死ぬ前の姿より遙かに立派である。眞人は太陰で肉體を鍊成し、

三官で姿を變えるというのは、このことである。天帝が言われた。

「太陰で肉體を鍊成するのは九轉の丹藥を服用するのよりまさつて

おり、姿は端正でかついかめしく、顔の色は靈妙な雲のようである。

上昇して太極の宮門に登り、辭令を授かつて眞人となる」。

趙成子が死んで五、六年後に、後の人が夜に山中を歩いていて、

彼の死體が石室にあるのを見つけた。肉は朽ちて骨だけが残っていた。また腹の中に五臓がまるで生前と同じように自然と生きており、津液や血液が五臓の内をめぐり、紫色の膜が五臓の外をおおっているのが見えた。

そもそも仙道を體得した人は、死後しばらく太陰に出かけると、太乙が死體を守り、三魂が骨を養い、七魄が肉を衛り、胎靈が氣をとりまとめるのである。

右の三條は、許長史が『九眞經』<sup>(7)</sup>の末尾の五石腴を服用する事を書き寫したもの。

(1) 五藏自生 『雲笈七籤』卷四三思修九宮法「鍊灌七魄、和柔三魂、神靈奉衛、使我飛仙、五藏自生、還白童顏」。

(2) 七魄、三魂 『抱朴子』地眞「欲得通神、當金水分形、形分則自見其身中之三魂七魄、而天靈地祇、皆可接見、山川之神、皆可使役也」。

(3) 九轉丹 『抱朴子』金丹「一轉之丹、服之三年得仙、…九轉之丹、服之三日得仙」。『眞誥』卷五葉四表「君曰、仙道有九轉神丹、服之化爲白鶴」。

(4) 趙成子死後五六年… 『雲笈七籤』卷七四太上巨勝腴養五石英法、同卷八六趙成子を參照。

(5) 太乙守尸 『眞誥』卷一〇葉二〇裏「太一鎮生、三炁合眞、…令魂魄保守、長生神仙」。『雲笈七籤』卷八五太一守尸「若趙成子之類、皆名著紫府、籍在丹臺、是得三官太一守尸而不泯也」。

(6) 胎靈 『上清黃庭內景經』上有章第二(『雲笈七籤』卷一一)「上有魂靈下關元」、注「魂、魂魄也、靈、胎靈也、魂在肝、魄在肺、胎靈在脾」。

(7) 九眞經 『眞誥』卷五葉二表「君曰、道有九眞中經、老君之祕言也、在世」。

(8) 五石腴 『眞誥』卷二葉一三裏「五公石腴、彼體所便」。

其用他藥得尸解、非是用靈丸之化者、皆不得反故郷、三官執之也、有死而更生者、有頭斷已死、乃從一旁出者、有未歛而失尸骸者、有人形猶在而無復骨者、有衣在形去者、有髮脫而失形者、白日去謂之上尸解、夜半去謂之下尸解、向曉向暮之際、而謂之地下主者也。右一條是掾抄寫劔經後論尸解事。

(1) この段、『雲笈七籤』卷八四尸解次第事迹法度に見える。



他の仙藥を服用して尸解をとげ、靈丸を服用して仙化したの<sup>(1)</sup>ではない者は、すべて故郷にもどることができず、三官に捕えられるのである。死んであらたに生き返った者、首を切られて死んだのに傍らからあらわれ出た者、納棺前に死體がなくなってしまう者、人間の姿はまだあるのに骨かもはなくなってしまう者、服だけが残って肉體はなくなってしまう者、髪の毛が抜け落ちて残ったが肉體はなくなってしまった者など、さまざまである。白晝に世を去るのを上尸解<sup>(2)</sup>と言い、夜中に世を去るのを下尸解<sup>(3)</sup>と言い、明け方や日暮れ時に世を去るのは地下主者<sup>(4)</sup>と云うのである。

右の一條は、許掾が『劍經』<sup>(5)</sup>の末尾の尸解についての議論を書き寫したもの。

(1) 靈丸之化 『眞誥』卷一四葉一三裏注「尋此四人、竝是用靈丸雜解之道。『雲笈七籤』卷八五太極真人飛仙寶劍上經敍「夫尸解者、尸形之化也、本眞之鍊蛻也、…又云、以錄形靈丸塗火炭、則他人見形而燒死、謂之火解、以一丸和水而飲之、抱木而臥、則他人見已傷死於空室中、謂之兵解、凡百縱任、即不得還故邑也、當變姓名易容貌爾、昔有人作此法、入林慮山、積三年而復

還家也、夫修下尸解者、皆不得反望故郷、此謂上解之道、名配紫簡、三官不得復闕其閒隙、豈妄以死加之也」。

(2) 地下主者 『眞誥』卷二三葉一表「地下主者、復有三等」以下を參照。

(3) 劍經 『眞誥』卷一四葉一三表注「劍經註云、吞刀圭而蟲流」。同一八葉裏「右此三條、皆出掾寫劍經中、經非可輕見」。